

街はふるさと

坂口安吾

青空文庫

深夜の宴

一

「ア。記代子さん」

熱海駅の改札口をでようとする人波にもまれながら、放二はすれちがう人々の中に記代子の姿をみとめて、小さな叫び声をのんだ。

記代子は、彼がみとめる先に、彼に気付いていたようだ。

けれども、視線がふれると、記代子は目を白くして、ふりむいた。そして人ごみの流れに没してしまった。

放二は深くこだわらなかった。記代子が熱海に来ていたことに不思議はない。これから彼が訪ねようとする大庭長平を、彼女も訪ねてきたのだ。なぜなら、長平は記代子の叔父だから。

長平の常宿は幻水荘である。彼は京都から上京のたびに、まず熱海に二三泊する。戦争中の將軍連が戦線から帰還参内するときのオキマリに似ているから、文士仲間や雑誌記者は、彼の上京を大庭將軍参内と称している。その熱海着の報告をうけとるのは放二のつとめる雑誌社だ。長平のキモイリでできた雑誌社である。放二は長平係りの記者で、上京中の日程をくみ、雑用をたすのである。

しかし、長平の口添えで、姪の記代子が入社してからは、上京中の長平のうしろに、男女二名のカバン持ちが、影のように添うことになった。

「いま記代子が帰ったところだよ」

「ええ。駅で、お見かけしました」

「どうして一しよに来なかったの？」

「ちよツとほかへ回る用がありましたので」

と、放二はさりげなく答えた。長平の問いかけに深い意味があらうとは思わなかったからである。長平は人のことにはセンサクしない男である。ところが、ちよツと、目が光った。

「記代子は、君が来ないうちに帰るのだと言って、いそいでいたぜ」

「ハア」

「何かあったのかい？」

放二は口をつぐんだ。そして、考えた。思い当ることはあったが、意外でもあった。

昨夜、社がひけて、二人は一しよに家路についた。新宿は二人が別々の方向へ岐^{わか}れる地点だ。そこで下車してお茶をのんだが、記代子は放二のアパートまで送って行くとはいだした。

放二はその場では逆らわなかったが、駅の地下道へくると、

「ぼく、あなたをお送りします。ぼくが送っていただくなんて、アベコベですから」

放二は他意のない微笑をうかべ、記代子のプラットフォームの方へ進もうとすると、

「いいの！」

記代子がカン高い声でさえぎった。おしとめるように立ちはだかったが、顔の血の気がひいている。ひきつつている。

「さよなら」

と言いつてると、ふりむいて、去ってしまった。

そんな出来事が昨夜あった。しかし、それぐらいのことで今日もまだ腹を立てていると

は思われない。一しよに熱海へ来る筈だったが、三時間待っても記代子がこない。急用ができたのだろうと放二は思った。そして、熱海駅ですれちがった時にも、何か都合があるのだらうと思い、汽車の時間があるので急いで行ってしまったのだらうと、なんのコダワリもなく考えていた。

二

「一しよに熱海へくるはずでしたけど、東京駅でお会いできなかったのです。ぼくが時刻をまちがえてお待ちしていたのでしょう。三時間待って、熱海へいたら、帰られる記代子さんとすれちがったのです」

こだわるイワレがあろうとは思われないから、放二は思った通りのことを言った。しかし長平は意外に冷めたく、とりあわなかった。

「記代子は君に会いたくないと言っていたのだよ」

「ハア」

「君たち二人の私事に強いてふれたいとも思わないが、同じ社の仲間同士反目しても、つ

まらん話さ。とりわけぼくに親しい御両氏が睨み合つてたんじゃ、ぼくも助からんからな」
「ええ」

たかが放二をアパートまで送ってくれるというのを拒絶したぐらいのことで、記代子がそんなに腹を立てゝいるというのは意外である。しかし、今までのことを思うと、思い当ることもあつた。

記代子は放二のアパートを見たがつていたが、放二はいつも言を左右にして、近寄せないようにしていた。見せて悪い秘密でもないが、見せない方が無難に相違ない。軽いイワレがあつてのことだ。

いつか二人そろつて鎌倉の作家のところへ原稿をもらいに行つて、御馳走になつたことがある。のめない酒をすすめられて、二人はかなり酔つた。わりと早くイトマを告げたのだが、鎌倉のことで、新宿へついた時には、記代子の市電がなくなつていた。

「放二さんに泊めていただくわ」

記代子は安心しきつていた。

「ええ」

放二はさからわなかつたが、中央線には乗らなかつた。記代子を散歩にさそつて、夜の

明けるまで、神宮外苑をグルグル歩きまわっていたのである。始電がうごきだして、新宿駅で別れたとき、疲れきって、物を言う力もなかった。

そのときも、記代子は怒った。数日間、放二に話しかけなかった。

深夜から夜の明けるまで外苑を歩かされたのだから、怒るのもムリがないと思っていた。しかし昨夜はそれほどのことではない。けれども、怒っているとすれば、アパートを見せないせいだ。

そんなことで怒られるとは、放二は悲しいことだった。

「君は奥さんがあるのかい」

「は？」

放二はビツクリして顔をあげたが、

「いいえ」

長平を見つめて、答えた。

澄んだ目だ。弱々しい目だが、正しい心と、よく躰けられた情操がみなぎっている。こんな澄みきった目の青年を疑るなんて、オレもどうかしているなと長平は内々苦笑した。

「記代子がそんなことを疑っているらしいのでね」

長平は笑った。

「どうも、娘がき。人に女房があるかないか氣に病むなんて、怪^けしからん話だね」

三

しかし長平は笑ってすまずワケにもいかなかった。

「君は御両親がなかったのだね」

「ええ。一人ぼっちです。ぼくは棄て子なんです。ぼくの名も、拾って育ててくれた人がつけてくれたのです。養父母は三月十日の空襲で死にました」

その来歴はかねて長平もきき知っていた。しかし、何度きいても、解せないのだ。放二は心も情操も正しいように、容貌風姿も貴公子であった。拾われて育てられた棄て子が、そして、終戦後は孤児となり苦学して私大の文科をでたという荒波にもまれ通した子供が、なんのヒネクレた翳もなく、若年にして長者の温容を宿しているというのがわからない。

記代子も戦災で父母を失っていた。それ以後は叔父の長平がひきとって、親代りに育てたのである。

記代子を勤めにだしたとき、放二と愛し合うようになっても悪くはない、むしろ期待するような気持があった。それぐらい放二の人柄を愛していた。

しかし記代子の観察も、女らしくて面白い。放二は人の着古したものを貰いうけて身につけていたが、それを整然と着こなして、人に不快を与えない。天性の礼節が一挙一動に行きとどいているせいでもある。けれどもシサイを見ると、いかがわしいところがあつた。今もつて、すりへつてイビツな軍靴をはいている。何十ぺんツギをあてたか分らぬような、雑巾のような靴下をはいている。

はじめて見た人は、当節の貴公子はタケノコだから、と、かえって痛々しく思うかも知れないが、毎日見なれている者には気にかかることであつた。

放二の慎み深い気質では、自分の破れ靴下が気にかかるのは当然で、訪問先で坐り様がいかにも窮屈そうなのは、靴下を隠すようにしているせいだ。

放二の給料は年齢のわりに多かつたし、長平から貰う手当もあるので、靴や靴下が買えないほど窮迫するイワレがなかった。

誰も見てやる人のない孤児のせいだ、と記代子は考える。これは温い見方であつた。

しかし、腹が立つと、冷めたくアベコベに考える。孤児で独身の放二は誰の生活を見て

やる必要もないのである。青年たちはお酒で貧乏しているが、放二はお酒も好きではない。それなのに、靴や靴下をかうお金まで何に使っているのだろうか？

そこで記代子は結論する。女がいるのだ、と。悪い女と秘密の家庭を持っているのだ。何年間もドタ靴や破れ靴下をはかせておくような悪い女と。

長平は記代子の見方にも道理があると考えた。彼が与える手当だけでも世間並の生活はできるはずだ。タシナミのよい放二が、なぜドタ靴や破れ靴下を新調することができないのだろう。

「娘の感覚は特殊なものがあるよ。ねえ、北川君。何かしら嗅ぎつけたことがなければ、君に細君があるなんて疑ぐりやしないぜ。奴め、何を嗅ぎつけたのだろうか？」

「はア」

放二はみんな長平に語ろうと思った。記代子にもれるかも知れないが、知られて困るようなことでもないのだ。

四

「べつに秘密にしていたワケじゃないのです。男の友達はみんな知ってることなんです。女の子には、知られていけなくはありませんが、柄のよいことではありませんから」

「なんだい、それは？」

「ときどき、女たちが遊びにくるのです」

放二は微笑している。長平はそれを素直にうけとった。女たち。放二は「たち」と云つたはずだ。なにか意味があるに相違ない。

「女たち、ね」

「ええ。泊りにくるのです」

「女たちがかい」

「ええ。パンパンです」

長平もちよつと二の句がつかない。この青年からパンパンという言葉を引きいても、全然不釣合いで、架空の話をきかされているようである。パンパンが遊びにくる。泊って行く。アベコベだ。しかし、戦後派の神話的な現実が実存しているかも知れないので、長平も思ひ余った。

「君、パンパンと同棲しているのかい」

「いいえ。ときどき泊りにくるのです。あの子たちは自分の住居がありませんから。間借りしている子もありますが、宿なしの子もいるんです。お客があるときは一しよにホテルへ泊りますが、アブレると眠る家がないのです」

「どうして君のところへ泊りにくるの」

「マーケットで、自然、知りあつたのです。ぼくのアパートはマーケットの真裏ですから」「日本も変つたもんだね」

「ハア」

長平の無量の感慨は放二には通じなかった。この青年にはその現実があるだけだ。素直に、そして、たぶんマジメに、彼は生きていくだけだろう。

「君、地回りかい」

放二はクスリと笑つただけである。

「地回りに、なぐられないかい」

「まだそんな経験はありません」

二人の会話は重点がずれているようだ。放二にとっては、なんでもない平凡な生活のようであつた。

「先生。いちど遊びにいらして下さい。パンパンたち、御紹介します」

「変った子がいるの？」

「べつに変つてもいませんけど、簡単にイレズミを落すクスリができれば、喜ぶでしょうね。はやまって彫つて、新しい恋人ができるたびに後悔してるんです」

「君も恋人かい」

「いいえ」

放二はアツサリ否定して、話をつづけた。

「一人だけ、先生が興味をお持ちになるかも知れません。この子のことで、男が三人死んでいます。外国人も。殺したのも、殺されたのも、自殺したのかもしれませんが、みんな、ピストル。そして、三ツの場合ともこの子の目の前で行われたのです」

「妖婦なのかい」

「いいえ。無邪気な子です。まだ十九、可愛い顔をしています」

放二の言葉は淡々として、つかみどころがない。きいただけでは、父兄がわが子を語っているようで、長平はくすぐつたいような変な気持だ。すると、放二の言葉がつづいて、

「いちど見てごらんになりませんか。美しいとお思ひになるかも知れません」

五

数日後、二人は中央線の某駅で降りた。零時ごろである。銀座と新宿の梯子酒のあとだ。のめない放二は二三杯のビールで耳まで真ッ赤であった。

マーケットで、放二は一軒のオデン屋をのぞいた。四十がらみのオヤジが帰り支度をしていた。

「オジサン。おしまいですか」

「ヤア。いいゴキゲンですね。オデンにしますか」

「ええ。お酒と。持って帰りたいのです。お客様がいますから。こちら、大庭先生です」

「ヤ。それは、それは。お噂は毎日北川さんからうかがっております」

「オジサンも、いっしょに、いかが」

「そうですか。じゃ、そうさせていただきますでしょう」

オヤジは戸締りをして、酒ビンや売れ残りの食べ物類を包んだ大きな荷物を両手にぶら

さげて出てきた。

放二のアパートはマーケットの隣であつた。暗い入口でガヤガヤやっていると、管理室の扉があいて、やせた男が現れた。

「北川さん。こまるよ。あんたは承知で、自分の部屋をパンパン宿にさせておくのかね」

「ハ。すみません。ヤエちゃんが気分が悪いそうですから、苦しかったら、やすんでいるようにと、カギを渡しといたんです」

「気分が悪いッて？ 笑わしちやア、いけないよ。あんたの留守に、お客をくわえこんで商売してるじゃないか」

さすがに意外だつたらしく、放二は声をのんで、うなだれた。

「私や、あんたに部屋をかしてるが、パンパンにかしてるんじゃないんだ。パンパン宿にかすんなら、貸し様があらアね」

「北川さんは神様みたいな人ですよ。悪気があつてじゃないんだから、カンニンしてあげて下さいな」

と、オデン屋のオヤジがとりなした。

放二の連れが、いつもの若い連中でなく、年配の長平たちだから、管理人も意外だった

らしい。ジロジロと三人を眺めまわしたあげく、だまったまま、ふりむいて、ひっこんでしまった。

「あんなに言うことないね。このアパートにや、パンパンもいるんだ。みんな店をひらいてらアな」

「ぼくの部屋代が滞りがちだからです」

と、放二は苦笑してオヤジにだけ聞えるように言ったが、耳の鋭い長平は、状況判断を加算して、ききとることができた。

世間の激浪に損われた跡がミジンも見えない貴公子のようなこの青年に、彼の過去がすべてそうであつたように、現在も冷酷無情な現実がヒシヒシとりまいていることを、はじめて長平は知ることができた。それを在るがまま受けいれて、彼の毅然たる魂は損われたことがないようだ。青年の後姿から光がさすようなのを長平は感じた。

階段を上がると、女が一人、たたずんでいた。放二はそれを認めると、微笑して、

「ア。カズちゃん。ぼくの部屋に、ヤエちゃんのお客がいるの？」

「いいえ。とつくに、帰させました。兄さん。すみません」

女は泣いているようだった。

六

部屋には二人の娘がいた。眼を泣きはらしている方がヤエ子である。壁にもたれて本を読んでいるのがルミ子。三人の男をピストルで死なせたのが、この子であつた。

一同が部屋へはいると、ヤエ子は顔をそむけた。ルミ子は一同をチラと一べツしただけで、本を読みつづけた。

二人よりも、年長らしいカズ子は、荒々しい声で、

「ヤエちゃん。なんとか、おツしやいよ。私たちがそんな女だと思われていいの」

ヤエ子はそむけた顔をうごかさなかつた。

「いいんだよ。すんじやつたことだから」

と、放二がなだめると、カズ子は一そう不キゲンになった。

「私がヤエちゃんに代つて兄さんにあやまってあげなければならぬと思つていたのに、私がヤエちゃんを叱つて、兄さんになだめられる始末じゃないの。変な風にさせるわね、あんたは」

「もう、いいよ」

「よかないわ。二度と再びいたしません、ぐらいのことは云ってもらいたいわね」

ヤエ子はようやく正面を向いて、うつむいて、つぶやいた。

「魔がさしたのよ」

「あんだ。自分のことを、そんな風に言うの？」

「ホテルへさそったけど、ショートタイムだからって、言うんです。私、お金がほしかったんです。部屋のない女だと思われたくなかったから」

それまで人々に無関心のルミ子が、ようやく本から目を放して、つぶやいた。

「そんな時が、あるもんだわね。みすぼらしく思われたくない時がね。ヤエちゃん、目でその人が好きだったのよ。わかるわね」

かすかに笑って、又、本を読みはじめた。

ヤエ子は坐りなおして、手をついて、

「兄さん。すみません」

すぐ立ちあがって、部屋の外へ駆けだそうとした。

戸口で、待ちかまえたように抱きとめたのは、オデン屋のオヤジである。

「よし、よし。それで、すんだんだ。すみません、と一言いいさえすれば、水に流そうと思つて、みなさん待ちかねていたのさ。誰だつて、魔がさすことがあらアな」

そしてヤエ子の背をさすりながら、部屋の中央へ押しだすようにしながら、

「むつかしい本を読んでもるなア。女子大学生のアルバイトじゃないかつて、男に言われなかったかい。二三日中にこのドアを叩くね。北川さんが顔をだすと、アレ、部屋がちがつた。失礼ですが、アルバイトの女子大生はどの部屋でしょう」

「オジさん。お酒の支度しましょう」

「アツ。そう、そう」

オヤジは酒肴の支度をはじめ。カズ子はヤエ子をうながして手伝つたが、ルミ子は本から目を放そうとしなかった。

「こちらは大庭先生です」

と放二が一同に披露すると、ルミ子は目をあげて、ニツコリした。

「当つたわ。そうだろうと思つていたわ」

「本から目も放さずにかい」

オデン屋のオヤジがひやかすと、

「そこが職業の手練なのよ」

とルミ子はカラカラ笑った。

七

酒宴はそう長くはつづかなかった。女たちは食べるだけで、酒をのまなかったし、男たちは量をすごして、開宴前から疲れていたから。

「もう、かえろうツと。ごちそうさま」

ルミ子が立ちかけた。彼女だけが、このアパートに自分の一室をもっていた。ルミ子が立ちかけたので、オデン屋のオヤジも腰をうかして、

「オヤ。二時ちかいね。私も帰らなきゃ」

「お疲れでしょう。ザコネなさらない」

と、放二がさそつたが、

「カアチャンが心配するからね」

立ちあがつて帰りかけたルミ子は、オデン屋が腰をうかしての会話に、ふと気がついた

らしく、

「オジサン。私んどこへ泊ってかない。安くまけとくわ」

「商売熱心な子だね。親類筋を口説いちゃいけないよ。これだからマーケットは物騒だつて、ウチの力アチャンが心配するはずだ」

ルミ子はものうそうに笑った。深く澄んだ目だ。こんどは長平をジツと見つめて、

「じゃア、先生、泊って下さらない」

澄んではいるが、瞳の奥に濃色のカーテンが垂れているように思われた。そして両手を後背にくみ、首をまげて、背延びをした。長平が冗談のツモリでいると、放二が言葉を添えて、

「先生。ルミちゃんの部屋へお泊りになつてはいかがですか。ここは、ぼくたち、ザコネですから。ルミちゃんがお茶をひいてて、ちようどよい都合でした」

彼らにとっては、なんでもない事らしかった。

長平もこだわらぬ方がいいと思つたから、彼もさりげなく、言つた。

「そうだね。それじゃ、ルミちゃんどこへ泊ることにしよう」

「うれしい」

ルミ子は長平の頭上からおいかぶさって接吻した。そんなことも何でもないことらしく、誰もなんとも言わなかった。

「お部屋があるって、いいわねえ。こんなところで、お客ひろえるんだもの」

「すみません。でも、これがはじめてね。兄さんのお友達、お金もつてたこと一度もないわ。あべこべにタバコまきあげるわね」

「貯金通帳見せろ、おごれよ、なんてね。兄さんのお友達、哀れだよ」

「若いのは、ダメだ。お金もつてるの泥棒だけ」

ルミ子は笑った。彼女は現実からつかんだものをソックリ身につけて、それ以外のことに関心がないようだった。

「先生は疲れてらっしゃるから、お部屋の用意してあげたら」と放二にうながされて、

「アツ、そう。大事なお客様だ。めぐりあいに変テコだから、カッコウがつかないや」

ルミ子は自分の部屋へ急ごうとして、笑いながらふりむいて、

「オジサンに、兄さんに、先生か。男がみんな居るみたいだ」

「弟も、オトウサンもあるわよ」

「そんなの、男じゃないや」
と呟きながら立ち去った。

八

ルミ子の部屋にはチャブダイが一つあるだけで、ほかに家具も、目ぼしい品物もなかった。部屋の隅に日記帳が一冊ころがっていた。

「いくらだい。宿泊料は」

「半額にまけとくわ。千円」

長平はポケットからむきだしの札束をつかみだして、二千円やった。

「さすがに先生はお金持ね。あの子たちにも、いくらか、あげてよ」

長平はもう二千円やった。

ルミ子はそれをつかんで部屋を去ったが、まもなく二人の女が一しよにきて礼を言った。

「おかげで明日は支那ソバたべて、映画が見られるわ」

カズ子が言った。年のせいもあるが、この子は世帯じみていた。そして、

「お部屋があると、もつと稼げるんだけど。アア、自分の部屋がほしい」と云つて立ち去つた。

二人の友達が去ると、ルミ子はようやく自分の時間がもどつてきたように、くつろいで、自分の部屋が、アア欲しい、なんて、インチキ云うわね、カズちゃん

「どうして？」

「その気になれば持てるにきまつてるわ、お部屋ぐらいはね。その気持がないのよ」

「宿なしの方が気楽というわけだな」

「兄さんにもたれて、あまえてるのよ」

「北川にかい」

「ええ。今夜は二人しかいなかったけど、ほんと五人いるの。アブレると、五人泊りこんじゃうわよ」

「なるほど。貧乏するわけだな、五人も面倒みてやるんじや」

「そうよ。ほんとね、カズちゃんたち、時々アブレたつて、兄さんの給料の倍ぐらい、稼いでるわね。みんなムダづかいしちゃうから、ダメね。兄さんを当^{あて}にして、その日の食費もつかつちやつたりしてね。でも、仕方がないわね。甘える人が欲しいんだから。誰だ

ってね」

この娘は、自分だけのモノサシでハッキリと人生の構図をつくっている。自分の体験をモノサシにして。めざましいほど断定的な直線で構図されているのである。まるで八十の隠者のように。

その構図は、肯定的で、楽天的であつた。しかし彼女は自分が隠者に似ていることを自覚してはいないだろう。

「兄さんのドタ靴、ひどいわね。雑巾のような靴下。買ってあげるわけにもいかないし」「どうして?」

「カズちゃんたちだって、買ってあげたいと思つてるのよ。でも、してあげてはいけないの。誰がきめたわけでもないけどね。この集団の本能的な嗅覚なのよ。誰かが禁を犯すでしょう。この集団はメチャク。最後の日だわ。兄さんは誰のものでもないけないのよ」

数え年十九の隠者は、ここで又カラカラと笑つて、

「これは、しかし、集団人の節度によるんじゃないわ、大半は兄さんの気質の産物よ」
あどけなくて、明るい顔だ。ルミ子はホッと息をして、微笑した。

「でもね、先生。私たちのせいで、兄さんがドタ靴はかされてるんじゃないわ。元兇がい

るのよ。凄い女ギャングが」

九

「ドタ靴の元兇がね？」

「ええ。先生、知らない？ その人」

「女ギャングをね。知らないな」

「婦人記者よ」

長平の胸は騒いだ。まさか記代子ではないだろう、と思い直したが、人生ばかりは、どこで何がどうモツレているか、見当がつかないものだ。

「なんて名の人だい」

「姓名は何てツたツけな。私、いちど、見かけただけ。三十一の大年増よ。背が高くって、姿はすばらしいわ。立派な服装してるわ」

「わかった。梶せつ子という人だろう」

「そう、そう。それ」

梶せつ子なら原稿依頼に来たことがある。はじめての時は、たしかに放二がつれてきたのである。つれてくる先に、放二の口添えがあつて、恩人の娘だというようなことを言っていた。せつ子は「放二さん」となれなれしく呼んで、いかにも幼い時からの知りあいという風であつたが、長平は人の私事をセンサクしないタチだから、そこまでしか知らなかった。

せつ子は家庭雑誌の記者で、長平の書く雑誌と性質がちがつていたから、一度は義理で書いたが、その後はことわることにしたため、自然せつ子の訪れも絶えていた。

「梶せつ子がドタ靴の元兇だつてのは、どういうワケだい」

「お金つきこんでるから」

「どうして？」

「十年前から兄さんが思いつめた人ですつて」

「北川がそう言ったのかい」

「いいえ。兄さんのお友達の人。でも、公然たる事実よ。兄さんの顔に書いてあるわ」

「知らなかったな。そんなことが、あるのかなア」

「若い者ツて、年長の人に心の悩みを打ちあけないもんよ」

と、数え年十九の隠者は体験をヒレキして、夢見るような、あどけない目をした。

「アベコベねえ。リュウとした凄いやうなミナリの女が、ドタ靴の男のなけなしの給料を貢がせるんだから」

そして、又、こうつけたした。

「そんなものだわ、人生は。妙なもののね。私たちだって、男を喜ばすために稼ぐ気持ちになることもあるわ。好きになっちゃったら、ハタからはミジメなものね」

「君も経験があるのかい」

「私は、ないわ。でもね。男の人をダメにしたことがあったわ。私はね、なんでもないと思ってるうち、そんな風になったの」

この子のために三人の男が死んでるという、それを長平は思いましたが、ルミ子の澄んだ目になんのかゲリも見えなかった。

長平は朝早く目をさました。ルミ子はよく眠っている。目をさます気配もなかった。

部屋の片隅にころがっているルミ子の日記帳をとりあげて、ひらいてみると、誰々にタテカエいくら、誰々からカリ、誰々から返金。日記の文章はどこにもなくて毎日の記事は貸借のメモだけだった。

その日の午^{ひる}には、長平自身の女のこと、ヤツカイな会見があるのである。放二のような無垢な青年に女出入りの交渉などさせたくないの、不便を忍んで長平ひとりで捌いてきたが、今日からは放二にも手伝ってもらうことにしようかと長平は考えた。

恋にあらず

一

正午ごろ、長平は放二をつれて、銀座の中華料理店へ行った。

すしおくれて、青木音次郎がきた。若いのに一クセありそうなカバン持ちをつれている。

「この選挙に立たされそうでね。郷里の有志にしつこく推されてるんだ。青年層の七割まで棄権するそうでね。ぼくがでると、その半分ぼくに入れる、まア、棄権防止さ」

いきなり、こう云つて、高笑いした。

長平は呆れて旧友をうちながめた。おろしたてのギャバジンの背広をきている。当節、新調の背広は目立つものだ。彼のは二十代がきくような明るい紺の、ピンとはった肩には仕掛けがありそうな、シヨオウインドウの洋服と向い合っているようだった。

終戦まで私大の教師をしていたころは、書齋の虫のようにジミな男であつたが、そのころの面影はどこにもない。

「君」

と、青木は連れの青年に、

「それから、君も」

と、放二にもよびかけてカラカラ笑つて、

「銘々のカバン持ちには、中座してもらいましょう。話のすむまで。御馳走には手をつけないから、安心したまえ」

長平はムラムラと不快がこみあげた。

「ぼくにはカバン持ちはいないよ。この北川君とぼくの間には秘密がないのだ。小説を書くこと以外は北川君にやつてもらふのだから。北川君にきかれてこまる話なら、ぼくも聞

くのはオコトワリだ」

「まあ、君。そういったもんじやないさ。ねえ」

長平の鋭い語気も、青木には、扱いなれている、というようだった。ちよつとひるんだようだが、すぐカラカラと放二の方に笑いかけて、

「誰にだつてナイシヨ話はあるものさ。ねえ、北川君。オトツツアンのナイシヨ話なんてものは、^{せがれ}倅はききたくないやね。倅にしたつて、自分のナイシヨ話はオヤジにきかせたくないだろうしさ。ねえ」

放二はそれには答えなかつたが、椅子から立つて、長平に、

「ぼく、別室へ参ります」

「いけないな。ここに居たまえ」

長平は制した。

「中座してもらうぐらいなら、君をここへ連れてきやしないさ。話をみんなきいてもらつて、君の判断をきいてみたいと思つたからさ。坐りなさい」

青木はあきらめた。そして自分のカバン持ちだけ立ち去らせた。

「君もガンコな人だね。ナイシヨ話なんてものも風流じやないか。え？」

「君の態度を軽薄だと思わないのかい？ 立候補なんてこと考えるようになって、そんな風になるもんかねえ。今日の話は、君にとつては重大なことはずだが、君がそんな態度なら、ぼくはオツキアイはおことわりだ」

長平は我慢できなくなつて、吐きだした。それだけのワケがあつてのことだ。

青木はにわかにおし黙つて考えこんだ。静かに手をのばして、ビールをぬいて、みんなのコップについて、

「乾杯」

呟いて、グツと飲みほした。

「いや、どうも。ぼくもね。苦しかった。しかし、それもすんで、バカになったのさ」
青白く冴えた顔に苦笑がうかんだ。

二

「礼子がお訪ねしたそうだけど、お会いできなかったって残念がついていたよ」

青木はさりげなく切りだした。落ちつきをとりもどしてガサツなところはなくなつてい

たが、昔のなんの衞いもなかった書齋人の青木の面影とはどこかしら違ったものだ。

しかし、長平は、自分の受け取り方がヒネクれているせいかも知れないと自戒した。

第一、青木の言葉をどう受けとつていいのか、どんな返答をしていいのか、と迷っているのだ。礼子は京都の長平を三度訪ねてきたが、いつも居留守を使って会わなかった。そんなことも、どこまで答えていいかわからない。自分に後暗いところがあるからではなく、青木の心中がはかりかねたからである。

礼子は青木の細君だった。今は鎌倉の実家に別居しているが、別居だか、離婚だか、そのへんのところも分らない。

終戦後二年ほどして、長平は礼子から美文の甘ったるい手紙をもらった。三度四度と重なったが、もともと小説家志望だった礼子が、終戦後の全国的に発情期的な雰囲気、年にもめげず宿念の志望を煽られての筆のすさびだろうと、軽く考えて返事もせず打ちすてていた。

同じころ、良人の青木は書齋をでて事業にのりだし、鉾山開発だの、当時流行の出版だのと手広くやりだし、出版のことでは時々長平を京都まで訪ねていた。

青木は長平と会うたび、礼子から呉々くれぐれもよろしくとのことだったよ、とか、上京の節

はぜひ泊りにきてくれと頼まれたよ、などと付け加えるのが例であったが、あるとき、

「礼子の奴、君に手紙をさしあげたのに返事がないと云って不思議がつてるんだ。君の手もとに届かないんじゃないかなんて心配してたぜ」

「いや、もらつてる。だがね。文筆商売の人間は筆不精で、実用記事以外書けないから、時候見舞の返事は書けないのだよ」

と答えておいた。

それから半月もたたないうちに、礼子から激情のこもった手紙がきて、今までの手紙は奥さんが握りつぶしてお手許に届かなかったと思つていたが、読んでいて返事をくれないのはひどい。十年ほど前、自分たちの新婚のころ、新居見舞にいらして、はじめてお会いした時から、あなたの存在が私にとっては秘密な尊いものであつたし、私の存在があなたにとって同じものであつたはずだ、というようなことが書いてあつた。

意外千万な手紙で、長平は相手にしなかった。彼は文面の裏側に、青木夫妻のちよつとした不和を読み、ヒステリーのひとつの仕業と解釈した。

ところが、一夜、酔つ払つた青木が長平を訪ねてきた。ちやうど長平は上京のため出発のところ、玄関で力チ合つたのだ。

青木はひどく酔っていて、

「君には時間がないし、ぼくは酔っ払ってるし、残念ながら、今夜は話ができない。ぼくの一生の大事なんだが、一日上京を延ばさないか」

と、クドクドとからみついたが、長平はとりあわずに上京した。

それから半月とたたないうちだ。

礼子から、青木と別れて実家へ帰った。自分の思いはあなたでイッパイだという意味の長々しい美文の手紙が長平にとどいた。

一日おくれて、青木から、事業のヤリクリがなくなつたから、五十万円貸してくれ、自殺一歩手前で歯をくいしばってる云々、という走り書がまいこんだ。

三

長平は礼子の恋文と、青木の借金状と、二通ならべて、異様な思いに悩んだものだ。

二つの手紙が時を同うして舞いこんだのは、偶然だろうか、夫婦談合の手筋の狂いからだろうか、と。ナレアイの離婚というのは悪意に解しすぎるようだが、根の深い別居だと

も思われない。ちょツとした不和のハズミだろうと考えた。仲のよい夫婦だったのだ。

しかし、二人の別居と、借金の申込みと、無関係なのだろうか。どう考えても、この結論がつかない。ともかく、愉快ならざることではあった。

礼子はその後十通ほどの一通は一通ごとに露骨な恋文を長平に送ったが、返事がないので、三度、京都まで訪ねてきた。長平は居留守をつかって会わなかった。真にうけかねて、バカらしくもあつたし、恋を語るような甘い気持が一切なかったからである。

礼子の弟という若い中学教師がわざわざ京都の長平を訪れたこともある。この時は上京中で会えなかったが、あとで手紙で、姉の気持が哀れだから何とかしてくれないか、何とかすべきだ、と、当然その義務があるような叱るような文面だった。姉を一方的に信じている実の弟だからムリもなかう、と、長平は気にしなかった。

ところが、青木夫妻の親友で、長平にも旧友の海野という史学者が、上洛のついでに長平を訪ねて、

「青木夫人礼子さんが別居して鎌倉の実家にいるが、ぼくも鎌倉だから時々会うが、金に困って、気の毒な状態だね。君から、なんとかしてやれないだろうか」

「なんとかって、どんなことを。そして、何かしなければならぬワケが、ぼくにあるの

かい」

海野はムツとした様子だが、親友のために私憤を殺しているらしく、にわかに物分りのよい顔をして、

「実は青木が、これは又、猛烈な四苦八苦なんだよ。あらゆる事業がおもわしくない」

「手広くやりすぎたのだよ。戦後のバカ景気がいつまで続くわけがないということを、ずいぶん云ったんだが、うけつけようもしないのだから」

「それで、君から、百万ぐらい都合してやれないかね」

長平は呆れて旧友をうちながめた。海野に悪意はないのである。彼は書齋人の一徹で、何か一方的に思いこんでいるのである。

一日か二日ばかりで言葉をつくして説明すれば、半分ぐらい説得できるかも知れないが、そうまでして、この単純に思いこんだ書齋人を説得する根気もなかった。

「その話なら、うちきりにしよう。君は事情を知らないのだし、ぼくも君のために事情を説明したいとは思わない。第三者が介入すべきことではないよ。話があれば、青木とぼくが直接するにかぎるのだから」

と、それ以上、ふれさせなかった。

しかし、それがキツカケとなつて、この上京中に、青木と会うことになつたのである。長平の気持は複雑であつた。しかし、青木はそれ以上にも複雑で、悲しさに打ちひしがれているのかも知れない。ただ虚勢だけで持ちこたえているのかも知れなかつた。

長平はその青木をいたわるべきだと思ひながら、なんとなく不快であり、万事につけて腑に落ちなかつた。

四

青木と礼子の別居が、どの程度のものであるか、それすらも見当がつかなかつた。現に二人はその後も会つてゐるに相違ない。なぜなら、礼子は長平を訪ねたが会えなくて残念がつてゐた、と青木が云つてゐるのだから。

「そう。そんなことがあつたね。せつかく京都まで訪ねて来られたそうだが、あいにく上京中で会えなかつたよ」

長平は、こう答えるまでに甚しく迷つたのである。礼子が三度訪れたこと、居留守をつかつて会わなかつたこと、それをハッキリ云うべきではないかと迷つた。自分の態度をハ

ツクリ示すことは、相手のハッキリした態度を要求することでもあるからだ。

しかし、青木夫妻の別居が決定的なものだとすると、いかにも礼子が哀れであるし、二人を突き放している自分が、思いあがつたようで、イヤでもあつた。

「一度、礼子に会つてやつてくれないか」

青木の言葉は静かであつた。それを受けとる長平の気持は複雑だ。

「君からそんなことを頼まれると、ぼくは、迷いもするし、ヒガミもする。また、疑いもするし、怒りたくもなるよ。そう思わないかい？ 君は？」

長平は返答を待ったが、答えがなかった。そこで、言葉をつづけて、

「ぼくは礼子さんに一度だけ返事を書いたことがあつたよ。別居したという手紙をもらった時だね。こんな返事だ。夫婦喧嘩だけでは足りないのですか。ぼくはあなた方二人が誰よりも愛し合つた夫婦だつたことを知っています。一度そうであつた者は、それ以上のものを探す必要はありません。どこにもそれ以上のものはないから。あなた方お二方の生活がつまらなければ、そのほかの誰の生活もつまらないのです。みんな諦めているだけです。元の枝へ急がれんことを。ザツとこんな手紙だつたね。しかし、この手紙は出さなかつたよ。なぜなら、まだ出さないうちに、君からの借金の手紙が来たからだ。ぼくはインネン

をつけられているような気がした。そして君たちのことは二度と考えてみるのもイヤになったのさ」

ツツモタセのインネンを、と云わんばかりであつたが、青木はそれが気にならないのか、まるで念頭にかからぬ様子で、

「あのときは取り乱して、失礼したね。金詰りで、四苦八苦の時だから。みすみすモウケが分っているのに、それが出来ないのさ。鉱石を駅まで十里の山^{やまみち}径を運びださなきゃならないのさ。その運賃で赤字なのだ。鉱石をきりだしてるのは海岸なんだぜ。港をつくりや、もうかるのさ。大きな港じゃないんだ。百トン積み的小船を横づけにするだけでタクサンなんだからね。いくらでもない工費なんだが、その工面がつかないのさ。ぼくの数年はその苦闘史さ。こんど立候補するのも、そうする以外に築港を完成する手がないからだよ」

青木は再びカラカラと高笑いした。まるで立候補の抱負と高笑いをきかせるために会見しているかのように、その時だけは生き生きと見えるのだった。

また長平はちょツとむかついて、

「話の本筋にふれないかね」

「まアさ。ぼくの夢だつて、きいてくれよ。数年の苦闘史をね。受難史だよ。仕事は外れる。女房は逃げる。来る時には一とまとめに来やがるからなア。なんど首をくくりたくなつたか知れないよ」

青木はまたカラカラと笑つた。そして、

「ナア。長平さん。ビールをのもうよ」

にわかにグニャ／＼と構えをくずして、なれなれしくビールをさした。

五

長平はなるべく腹を立てないようにと、自制するのに努力した。

「受難史はいずれ承ることにして、別居のテンマツをきかせたまえ。もつとも、君が語りたくなければ、ぼくの方はこれ幸いで、ききたいと思つてゐるわけではないがね」

「まアさ。長さんは相変らず堅苦しいね。それで女にもてるんだから。アツハツハツ」
ひとしきり笑いたてて、真顔にかへつた。

「だからさ。礼子に会つてやつてくれよ」

「なぜ」

「礼子がそれを語る適任者だからさ。ぼくなどの出る幕じゃないよ。礼子が君に語るであろう切々たる胸のうちが、全てを語つて余すところなしさ」

思いがけない言葉だから、まさか本心ではなかうと疑った。

しかし苦笑のひいた青木の顔は、打ちひしがれたように蒼ざめている。いったい本気なのか、と長平は呆れた。

「実は、礼子がくることになつてゐるのだがね」

「ここへかい」

「いや、喫茶店で待つてゐる。もう来てゐるだろうよ。会つてやつてくれよ」

「どうして君は会わせたがるんだい」

「ジャケンなことを言う人だねえ。会つてやつたつて、いゝじゃないか」

カンジンなどところへくると、青木は返答の急所をはずす。彼の氣の弱さだと長平は考えるが、策謀と受けとれぬこともない。

嫌いでもない女房に逃げられたという。逃げた原因はほかの男に氣が移つたせいだと女房自身言明している。

当の男が、逃げられた亭主の前に現にいるのだ。そして、一方的に気が移ったからと云って、離婚の責任を男に押しつけられては困るし、それぐらいの常識は誰しも持つのが当然だが、この御夫婦に限って妙に押しつけがましいのが腑に落ちない、と男が亭主にきいているのだ。

ところが亭主はまるで謎々をたのしむように、わざと正体をぼかして、じらしているのである。

長平は不愉快だったが、しかし自分のことが原因で夫婦別れをしたと云う以上は、一方的に押しつけられたものでも、オレの知ったことかと突き放すこともできない。

「君。もつと素直に話せないのか」

と、長平が態度に窮して、つい懇願的になると、青木もこたえたらしく、

「すまん。実に、バカなんだ。ぼくは、ね。女房のことでも悩んだが、しかし、金の悩みにくらべれば、微々たるものさ。女のことと死ぬなんて、まだ花ある人生ですよ。ぼくみたい、金々々、金ゆえに首くくりを何年何ヶ月思いつめた人間というものは、これはもう首をくくる先に骨の皮の餓鬼なんだ。逆さにふつても鼻血もでないなんて、昔の奴は、無慙なことを、いとカンタンに云いやがるよ」

「書齋へ戻るのが賢明だと思うがな。昔のようにさ。たった五年前の昔だ。礼子さんも事業家からは逃げだしたが、書齋の君のところへは戻るだろうと、ぼくは思うよ」

「まあさ。小人には君子の道を説いても、ムダなものだよ」

青木はわざとらしく爽やかに高笑いして、

「ぼくじゃなくて、女の小人に道を説いてやってくれ。彼女は救われるかも知れないからさ。なぜなら、汚れが少いから。ぼくは今もなお最も多く彼女を尊敬しているよ」

六

青木に別れて、二人は銀座裏のバーへ行った。長平の二十年来の行きつけの店だ。二階になじみのバーテンが寝泊りしていて二人を迎えてくれたが、営業は夜だけだから、昼は人のくる気づかいがない。

薄暗いなかでジンヒーズをつくってもらって飲んでみると、ノックの音がした。

放二が錠を外して扉をあけると、青木が礼子を案内してきて、じゃア、また六時に、と、自分はそそくさ姿を消した。

この会見のあとで、長平はもう一度青木に会わなければならないのである。宵の六時にもう一度と青木はきかないのである。

「ここで、みんな話をすますわけにはいかないのかい」

長平は面倒がつてたのんだのだが、

「いちど、その前に、礼子に会ってやってくれよ。それからぼくは君に会って、胸の中をきいてもらいたいのだ」

青木はそう頼んで、きかなかった。そして六時の会見は、長平のきくなれない、豪勢らしい料亭が指定されていた。

礼子は一別以来の尋常な挨拶を終ると、放二の方にチラと目をやって、

「こちら、北川さん？」

「そうです。在京中は形影相伴う血族ですから、お心置きなく」

青木が放二のことを説明しておいたのだろうと思うから、長平は氣にとめず、答えたが、実際は、意外千万な意味があった。しかし、そのときは、わからなかった。

営業前の薄暗い酒場というものは、坐り場所に窮するような落付かないものだが、礼子
はむしろそうでもなく悠々と見まわして、

「ここ、カフェーというんでしょうか？ バーですか。キャバレーですか」

「バーというんでしょうね。定義は知りませんが、洋酒を最も安直にのませるところです」
「女給さんは？」

「おります」

一方的に思いつめて、そのために離婚までして、手紙では事足らず、遠く京都まで三度もムダ足を運んでひるまない礼子。ひたむきに思いまどって何の余裕もないかと思えば、長平よりも落ちつきはらって、静かに四囲を見まわしている。そして、究理の学徒がするような冷静な態度でくだらぬ質問をしている。礼義とか外交手腕じゃないようだ。余裕がありすぎるから、余裕のない世界を弄び、たのしんでいるのじゃないか、と長平は疑りたくなるのであった。

礼子の知識慾はまだつゞいて、

「バーの繁昌はお酒の良し悪しですか、女給さんの良し悪しですか」

「そうですね。お酒の良し悪しと答えると女給は怒るだろうな。しかし、女給の良し悪しと答えてもバーテンは腹を立てないだろう。してみると、女給のせいだ。なア、エーさん」
「へッ。お酒と女の良し悪しのため。こう言ってくれなきや、アタシといえども怒ります」

よ」

バーテンは口をへの字に曲げてニヤリとして、

「酒道地におちたり。バーもカフェーも知らないどこかの貴夫人とき。バーに於てランデブーとは、乱世さ。ギョツですよ。先生」

氣がよくて一徹のバーテンは礼子が氣に入らないらしく、皮肉った。下賤のものには手をふれたことのないような礼子の態度は、この社会から異端視されるに相違ない。

七

「あなた方の離婚のテンマツについては、青木君が語ってくれませんか分りませんが、お二方を知るべくが公平に判断して、青木君は書齋へ戻り、礼子さんは書齋の青木君のもとへ戻るべきではないでしょうか」

礼子に一方的に心境を語られ迫られてはたまらないから、長平の方から、こう切りだした。礼子の一方的な情熱を拒否する意味も含まれている。

極度に私事にわたる会見に放二を同席させて非礼をかえりみないのも、そのためだ。差

向いで一方的な情熱を押しつけられては捌きに窮する。非礼も承知、身勝手も承知であるが、礼義にかなって、ぬきさしならぬハメになるには及ぶまい。

礼子に会うのは五年ぶりだが、童女のような面影が今も残って、三十四という年には見えない。美人というほどでもないが、清楚で、みずみずしい肉感もある。懐剣を胸にひめた古武士の娘の格と色気がしのばれる。

こうして警戒に警戒を重ねたアゲクの会見でも、会えば目を惹かれるものがあるのだ。してみると、そんな警戒もなく会っていたころは、見る目に礼賛の翳がかくれもなかったかも知れず、別して青木のもとで酔っ払ったりしたときには、目尻を下げて、礼子の氣持に訴えるような卑しい色ごのみを露出したに相違ない。

瘦せて小さなからだをキツと身がまえて、いつもリンリンと気魄をはりつめているようだが、どこかに、何かが抜けたような、けだるさがひそんでいる。それがないと、氣位のバカ高い奥方の典型で、可愛げなどの感じられないリリしさだが、童女めく痴呆さが色気をつくっている。しかし総じて悪童には煙たいような奥方だ。

長平は自分の話し方が軽薄だったので、礼子が敵意を見せたのかと思った。なぜなら彼には答えずに、チラと目を光らせて、放二に向って話しかけたからである。

「北川さんとおツしやいますわね」

「ええ」

「北川……放二さん？」

「そうです」

放二もいぶかしそうであつたが次の問いは唐突だつた。しかし礼子の声は静かで、
「梶せつ子さん。御遠縁とか、そうでしたわね」

「ええ。血のツナガリはありませんが、親同志が親しかつたのです。同窓ですか」

「私の？」

「ええ」

「同級生？」

「え？ 同窓ですか」

「フフ」

放二は他意なく応答しているが、見ている長平はイライラした。奥歯にもののはさまつた、じらされる不快さだ。青木もそうだつたがと考へ、夫婦は悪い癖が似るものだ、別居なんて、たいがいには、止すがいゝや、と思うのだ。

「同じ学校の卒業生ですか」

長平がたまりかねて放二にかわって大声できくと、

「あら。大庭さんまで。同級ときいては下さらないわね。私、そんな婆さんかしら。あの方は、おいくつ？」

「満ですと、二十九です」

礼子は素直にうなずいて、

「女の五ツは男の十以上に当るらしいわ」

と、つぶやいたが、それにつけたして、事もなげに言った。

「梶せつ子さんは、青木の新しい恋人なんです」

八

長平は事の意外に驚いたが、青木や礼子には同情がもてず、放二の気持が切なかうと、気の毒に思った。しかし放二の表情から感情の変化はよみとれなかった。

長平は放二への同情を礼子への攻撃にかえて、

「すると、青木君に新しい恋人ができたので、あなた方は別居されたんですね」

「あら。そんな。青木の恋愛は最近のことですわ。私たちが別居したのは、去年の早春でしたわ」

じゃア、よけいなことは言わないことさ、と長平は顔にそう語らせて、

「早晩そんなことも起るでしょうよ。別居しているうちには、ね。しかし、北川君も知らないことを知ってるようじゃ、あなたも青木君が気がかりなんでしょう。元の枝へ急ぐべし。しかし、その恋愛を北川君が知らないようじゃ、あなたの思いすごしでしょう」

「あら。私、よろこんでるんです。青木に新しい恋人ができて」

「青木君からそんな報告がきたんですか。新しい恋人ができたから喜んでくれッて」

「まさか」

「じゃア、大きなお世話じゃありませんか。人の色話はよしでしょうよ。もつとも、口惜しい、というのなら、ま、ごもつとも、合槌ぐらいうつ気持にはなれますがね」

「私、ホツとしましたのよ。どなたか見てあげなければ、青木は淋しくって、やってけない人なんです」

礼子は言いはった。強情なところはなくて、素直でシミジミした述懐のようだった。

別れた妻としてはそうあるべきかも知れないが、長平の気持には、ひっかかった。要するに言わない方がよい性質のキザな文句だ。

礼子は長平のヒガミ根性にはとりあわず、放二に向って、

「梶せつ子さんて、どんな方？ 物ごとをテキパキ手際よく処理なさる方？ そして、それが容姿にあらわれて、スラリと、小牛ぐらいも大きくてユツタリとしたペルシャ犬のような方かしら」

「そうかも知れません。ペルシャ犬は知りませんが」

「義理人情に負けない方。しかし、どつちかと云えば、あたたかい感じ。表面はね。姐御肌、いえ、女社長タイプというのね。あわれみ深いんだわ。恋人をあわれむけど、愛せない方。恋人は愛犬。そして、本物の犬はお嫌いでしょう、その方」

「それでもありません。ぼくには弱々しい人に見えます。仕事に身を託して、孤独と悲哀をようやくせきとめておられるようです」

「そうでしょか」

礼子はクスクス笑って、

「知らない方のことを、私がなんですけど、三十女はそんなに詩的じゃありませんわ」

皮肉なところはミジンもなかった。むしろ親愛の情とイタワリをこめて、礼子是这样言っているのだ。

してみると、梶せつ子と放二の特別な關係を知らないのかな、と長平は思った。少年期からただ一人のせつ子を思いつめて成人した孤児の放二。それを知ってる礼子なら、皮肉の色は隠せなからう。

礼子の洞察によると、放二の立場も青木同様、スラリと小牛ほどもユツタリした女の愛犬というわけだ。どうやらこの觀察は当たっているな、と長平は思った。

九

「梶せつ子のごことが御心配なら、それを北川君に問いたただすのは筋違いですよ。センサクの鋭鋒はあげて夫君に向けらるべきものですよ。青木君も、あなたを忘れかねているのですよ。今もって最も尊敬していると云いましたね。亭主と女房の關係においてはメツタに使わぬ言葉ですが、十年もつれそつて、別居して、いまだに最も等敬してるといふんですから、おだやかならん表現ですね。なにをか云わんや」

礼子はそれに答えずに、考えこんだ。

顔をあげて、長平の目を見つめたが、

「私、どうすれば、よろしいのでしょうか」

ジツと見つめて、視線は放れない。屁理窟ではごまかされませんと、礼子の気魄が語っている。しかし、こんな気魄というものは、いわば非常時的なもので、平時の心がこれをマトモに相手にすると、無用な傷もつくらねばならない。一方的な気魄よりは、空論の方が、まだマシだ。長平は空々しく、

「御自分で、おきめなさい」

いと簡単に突ツばねる。

そんな言葉は相手にしません、と礼子の全身の気魄も語っている。

一段と、たたみこんで、

「私が無用な存在だとおツしやって下されば、私は死にます」

視線は益々放れない。

しかし、長平も、たじろがなかった。

「会話というものは、急所にピンとふれていなくては、こまるものです。ぼくたちの場合、

急所がどこにあるか、先ずそれを考えようではありませんか。急所はずれのキワドイ文句を述べ合つたんじや、カケアイ漫才じやありませんか」

まさしく茶番にほかならない。かほどの茶番を自覚しない礼子のリリしき、高慢さが、長平をいらだたせた。

「あなたとぼくのオツキアイの上で、ぼくの一存で、あなたの生死が左右できるようなイワレがあつたでしょうか。かりにも一人の生死にかかわることであれば、ぼくも責任をもちたいと思いますが、イワレなく責任をもつわけにはいきません。あなたは健全な常識を身につけた方でしたが、かりに立場をかえて、あなたがよその男から、同じことを持ちかけられた場合を考えていただきたいと思います」

「非常識は承知いたしております。ですが、ただ御返事をいただくだけでよろしいのですが、それも御迷惑でしょうか」

「それがですよ。返事の仕様のない場合も、あるものですよ。一方の感情がたかぶりすぎて、非常事態宣言の線を突破しているときには、平時の安眠にふける庶民の魂は、ついて行けないのが自然です。たとえば、です。夜道にオイハギにやられつつある男が、たまたま通りかかった人に、助けをよびかけます。これに対して、よびかけられた方は返事の仕

様がありませんよ。余は武術のタシナミもなく、非力であるから、助きたい気持もあるが、兇器をもてるオイハギに立ちむかつて汝を助ける力量はないと自覚している。余としては、侠気と生命慾との差引勘定にしたがつて、余の行動を決せざるを得ない。よつて余は汝を見すてて逃げ去るであらうが、汝これを諒せよ。こう事をわけて返答してもいられませんよ。あなたの場合も、これに類する場合です」

こんな屁理窟を言いながら、礼子の言い方があんまり身勝手に非常識だから、イライラしながら、妙にさしせまつた色気にもむせたりした。

十

礼子はながく無言である。

別居のイキサツはまだ何一ツきいていないが、きいたところで、どうなるう。もう会見は終るべきだ、と長平は思つた。

「ぼくの年齢になると——あながち年齢のせいではないかも知れませんが、恋愛なんて、もう面倒くさくてダメなんです。浮気の虫は衰えを見せませんが、恋に生きぬくなんて気

持はもはや毛頭ありません」

長平は一方的に心境を語りはじめた。礼子の一方的な愛情の押しつけに対するシメククの返答としてであつた。

「女房に満足してゐる亭主はいないですよ。世界中の女をテストして女房を選ぶわけじやなし、かりに偶然世界一の女房に當つた男がいても、よその花に憧れるのは自然の情ですから。そこで、正直によりよき恋人をもとめると、次々と、棺桶にねむるまでキリがありません。おまけに人間の愛慕の激情というものは、いくつの年齢になつても、初恋と同じだけ逆上のなもので、この感情に身をまかせると、仙人でもそうなる。そのくせ、短時間で例外なくさめます。又、新しくやらねばならぬ。精神病の発作と同じものですよ」

無礼、軽薄な言辞だと長平は自ら思つた。人の目にさぞイヤらしく見えるだろうと思つたが、気にしなかつた。一時も早くこの茶番を終らねばならぬ。その思いだけだつた。

「恋に生き、恋に死ぬのも立派かも知れません。しかし、ケチンボーが食う物も食わず、お金をためて、貯金通帳をだきしめながら、栄養失調で生涯の幕をとじる。バカさ加減も、立派さも、恋の勇士と同じことですよ。要するに、思想と実践の問題かな。しかしですね。万事面倒くさくつて、やる気がないというのも、結局同じようなものです。これを不純だ

の墮落だのというべきではありません。面倒くさいということも、一つの思想であり、よって何もしないということも実践であり、バカさ加減も同じなら、立派さも同じことさ。ただ、否定的だというだけのことです」

否定的なものを肯定的なものと同列におくのも身勝手な話だが、長平は気にかけない。目的のために手段をえらばず。格言は便利なものだ。使い方でどうにでもなり、格言を楯に使うと、あらゆる矛盾をしのぐことができる。

茶番の幕をおろせばいいのだ。

「あなたと青木君はむつまじい一対でしたよ。どんな似合いの一対もあれが限度で、あれ以上ではありません。あなたが今後いかほど探しても、所詮、青い鳥ですよ。最初に捨てたものが最高のものであったと悟るだけです。万人がそうだというのはありません。初恋、必ずしも、真の恋ならず。初恋の一対でも、ずいぶん離婚して然るべきようなのがあるものですが、あなたの方の場合はそうではないのです。最初のもものが最高のものでしたよ。あなたが今後恋愛遍歴をしてみると、この真実が分るのですが、そのためにムダな遍歴をなさることもないでしょう。ぼくのバカな一生が、そう教えてくれるのです。バカの代表が身をもつて証した事実を利用するのが、利巧者の生き方ですよ」

長平がこう結んで、幕をおろしたツモリになりかけると、無言をやぶって、礼子がきいた。

「私が押しつけがましく甘えたりして、あなたに御迷惑をおかけしなかった場合、それでも青木と私が幸福な一対とおっしゃったでしょうか」

十一

「それはもう、ぼくの立場がどうあろうとも、あなた方が幸福な一対であったという判断には、変りがありません。難を云えば、平凡だったかも知れません。けれども、これは当事者の心事に同情しすぎての判断で、第三者の公平な目でみると、夫婦生活の平凡さは賀すべく珍重すべきことかも知れず、概して幸福な一対というものはその一生が平凡な性質のものでしょうよ」

長平は、又、つけたして、

「幸いにして、今回は、一挙に平凡をくつがえす大地震があつたじゃありませんか。もとの平凡へ戻るための調節作用だったと解釈するのが賢明でしょうよ。今度は耐震耐火建築

にしろという暗示でもあります。夫婦生活の自壊調節作用はこの家庭にもあることで、この程度の大地震も、そう珍しいものじゃありません。幸福な一對に限って、時に大紛争を起しがちなものです。ここに哀れをとどめたのはぼくで、御二方が元の平穩へ戻るための地ならし道具に使われたようなものですが、あなた方が元々通りの幸福におちついて下されば、ぼくも道具のお役にたつて満足、けっしてインネンはつけません」

長平がバカのように高笑いをしたので、礼子もその場に見切りをつけた。

思いきりよく立ち上って、

「おいそがしくてらッしやるのに、時間をさいていただいて、ありがとうございました。私、青木と会う約束がごいますので、失礼させていただきますが、今夕、青木とお会いなさるんでしょうか」

「ええ。その約束はしております」

「でしたら、そのあとで、も一度、お目にかからせていたゞきたいと思えますけど」
「もうお話することもないようですが」

礼子はクスリと笑って、

「ムリですわ。そんな。男と女の話ですもの、差向いて、きいて下さらなくちゃ」

全身に媚がこもった。

長平の方が思わず目をそらして、

「じゃア、青木君と三人で」

「ええ、青木となら、かまいません」

「じゃア、ぼくたちの話が終るころ、七時ごろにでも、いらして下さい」

礼子は去った。

去る前にもらした礼子の媚が、長平の頭のシンにからみついて放れない。毒にあてられたようだ。長平の血に浮気の虫が多すぎるせいだが、浮気の血が騒ぎたつても陽気にならない時もある。長平の心はふさぎ、にがりきるばかりであった。

「君、ぼくに代つて青木夫妻に会ってくれ」

と、彼は放二にたのんだ。

「ぼくの気持は、きいての通り、あれで全部だよ。君の一存で、自由に捌いてきてくれたまえ」

「お気持だけはお伝えしてきます。ですが、一存で捌きはつけかねますが」

「今夜一夜の間に合せの捌きだよ。あとは、どうなろうと、かまやしないさ。こんなバカ

バカしい話はもうタクサン」

長平はふと梶せつ子に思いつき、放二をやるのは、いけないかな、と考えたが、放二の澄んだ落付きを思うと、自分以上の老成した大人が感じられ、すべての不安は無用に見えた。

「ギョですよ。先生。ギョギョッ」

バーテンは腹をかかえて大笑い。

「ビール二本のみますよ。罰金。冗談じゃないよ。銀座の女給だって、あんなハデな口説かれ方はしないね。バカバカしい」

金の泥沼

青木は放二の話をきき終り、長平が来ないことをたしかめると、うなだれて、蒼ざめたぶちのめされて、ゆがんだ顔からは、あえぐようにしか声がでないらしく、

「わがこと、終れり」

よくききとれない声であった。しかし、努力して顔をやわらげ、

「ぼくの顔に書いてあるだろ。お金を借りたかったんだ。百万ほど」

フツと溜息をもらして、

「ここの勘定も、実は長平さんを当てにしていたのさ。こうなると、お酒もノドを通らないね」

「ここの勘定ぐらいでしたら、ぼく、おたてかえ致しておきます」

「え？ 君、そんなお金持かい」

「大庭先生からお預りしたお金ですけど、事情を申上げれば了解して下さいと思います」

「君、どれぐらい、預ってる？」

青木は卑しげな顔色を隠さなかった。もう、泥沼へおちたんだ。藁一本、にがすものか。ノドからでも手をだしてみせる、という毒々しい決意が露骨であった。

しかしそれを見つめる放二の目はむしろいたわりの翳がさした。

「ここの勘定だけになさっては」

放二は言葉を探していたが、

「ちよツとの水で早魃はどうしようもありません。生活原理を変えなければ。ぼく自身、早魃のさなかで考えついたことなんですけど」

青木は驚いて青年を見つめた。

青年は目をふせて、一語ずつ探すように、静かに語っている。あらゆるものに未知な、あらゆる汚れに未知な青年の口から、大らかな言葉が高鳴りひびくのがフシギである。

「君、お金に困ったことなんか、ないだろう」

「そうでもありません」

放二の返事にはこだわりがない。しかし青木はそれを素直にうけとりかねて、

「君、ぼくを嘲笑っているのだろう。金の泥沼に落ちこんだ餓鬼をね」

「そんなことはありません」

「早魃はちよツとの水じや救われないツて、それが、なにさ。金の泥沼は、そんなものじやないんだよ。金の世界は、その日ぐらしのものさ。一日の当てがありや、又、なんとかなる。攻略し、退却し、又、攻略し、まさに絶えざる戦場だよ。まだ、あんたには分らな

い。分らなくて、しあわせなのさ」

しかし、この青年に敵意はもてなかった。

「君はやさしい心をもってるんだ。そして、ぼくをいたわってくれたんだ。な、そうだろう。ついでに、甘えさせてくれよ」

青木は泣きたいような気持だった。

「長平さんはオレに百万かさないかな。君、たのんでくれよ。二百万でも、三百万でも、五百万でも、多いほど。なア、君。ぼくのノドからは手がでているんだよ」

冗談めかしても、気持は必死になる。それが顔をゆがめた。

「君がもうけさせてくれ、ば割り前をだす。もうけの半分君にやる。百万なら五十万。二百万なら百万。なア、君。半分だぜ。こんな割り前をだしてもとは、金欲しやの一念きわまれり。鬼の心境さ」

襖が静かに開いた。姿を現したのは礼子であつた。

顔の冷めたさは、すべてをきいたと語っていた。

青木は礼子のひややかな顔にもおじけなかった。

「ま、お坐りなさい。ぼくの昔の奥さん」

彼はかえってふてぶてしく笑って、

「あんたも、ぼくも、見事にふられたよ。長平さんに。彼氏は来てくれないツてさ」

悪党じみて見せるほかに手がなかった。

「ま、一献いきましよう。なに、お会計は心配しなさんな。北川さんが、ひきうけてくれるとき。こちらの奥さん、ぼくのフトコロにコーヒーをのむ金もないの御存知なのさ。奥さんだって、帰りの電車賃しかないんだからね。ぼくの方じや、車代も長平さんからタカルつもりだったんだが、身代りだから、北川さん、覚悟してくれよ」

「大庭さんはお見えにならないんですか」

「あんたほどの麗人の口説も空しく終りけりというわけさ」

青木の意志ではなかったのに、目に憎しみがこもる。心の窓はかくしきれない。それをまぎらして笑ってみても、悲しさがしみのこるばかりである。

「なア、北川さん。人間は一手狂うと妙なことをやるものさ。この奥さんが大庭君を思い

つめて離婚すると云いだす。折しもぼくは八方金づまりで大庭君に救援をもとめようという時き。二つは別個の行きがかりだが、これが重なると変な話さ。ぼくも考えて、変だと思いましたがよ。まるで女房売るから金よこせみたいじゃないか。けれども、そう思いつくと、妙なものさ。変なグアイだから、やりぬけ、やりぬけ、とね。なんとなく悪党らしい血もたかぶるし、負けじ魂もたかぶるしね。いつのまにやら、女房の代金をとる計算にきめているのだ。今だって、そうだけ。女房はごらんの通りふられてくるし、大庭君は買わないつもりらしいが、ぼくは今でも売りつけるハラさ。是が非でも取引しようというわけさ」

「悪党ぶるのは、よして。私まで気が変になりそうよ。お金の必要なのは分っていますが、誤解をうけるような言い方は慎しむ方がよろしいのです」

「誰が誤解するだろう？ どう誤解したって、ぼくの本心より汚く考えようはないじゃないか。ぼくは金の餓鬼なんだ。これが人間のギリ／＼の最低線さ。借りられるものは、みんな借りまくってやる。なに、ひつたくるんだ。かたるんだよ。かたるだけ、かたりつくして、残ったのが、大庭君だけさ」

「私も大庭さんにあなたの窮状を訴えてさしあげたいと思っています」

「奥さんや。ぼくたちの心の持ち方は、どうも、変だ。不自然ですよ。本心にピッタリしないところがあると思うな。ぼくたちは味方ぶりすぎやしないか。不当に憐れみたがつてるよ。ねえ、奥さんや。ぼくは君を売る。君もぼくを売りたいまえ。めいめいが自分だけの血路をひらいて逃げ落ちようや」

しかし青木は目に憐れみをこめて、

「なア、奥さんや。あんたは大庭君にふられちゃこまるじゃないか。しッかりやツとくれよ。君自身の血路のためにさ」

すると礼子に生き生きと色気がこもった。

「大庭さんは私を愛しています。盲目的に。あの方は私のトリコなのよ」

あんまり自信に溢れているので、放二は目を疑ったが、青木は多くの物思いに混乱した。礼子はさらに生き生きと断言した。

「大庭さんは、もう、私から逃げることはできないのよ。クモの巣にかかったのです」

「あなたの梶せつ子さんは、どう？ うまく、いってますか」

礼子が、かわって、青木を見下していた。青木が威勢を見せたときは、ありあり虚勢が見えすいていたが、礼子には、それがなかった。心底から落ちつきはらっているようである。

「そう。実は、そのことでね」

青木は素直にうけて、

「長平さんから百万ふんどくってやろうというのも、そのことなんだ。築港の金もある。選挙費もある。鉾山の経費もある。これは開店休業中だがね。金のいることばかりさ。とても一とまとめには出来ツこないから、まず金なる木を植えようというわけさ。梶せつ子と共同事業をやる手筈なのだ。銀座裏にかりる店の交渉もついてる。階下が小さなバアで、二階が事務室さ。事務室では、出版とアチラ製品のヤミ売買などやる予定でね。実は、長平さんには、本の出版もさせてもらいたいと思ってるのさ。夜はバーテンもやりますよ。そのために、是が非でも金がいる」

礼子は放二に向って、

「梶さんから、それらしい話おききですか」

「ぼく三週間ほどお目にかかっていませんので、何もおききしておりません」

放二は青木の存在すら初耳だから、まったく知らなかった。

「ですが、あすお会いする約束ですので、そのお話をうけたまわるかも知れません」

「え？ 君が、あす、梶さんに会うって？」

青木はおどろいて、顔色を改めて、

「君は、どうして、あの人と……」

「北川さんと梶さんは、親同志親戚以上に親しくしていらした方」

礼子の言葉は信じられないという青木の顔色であった。

「君、いつ、その約束したの」

詰問はするどい。放二の静かな態度はいさゝかも乱れなかった。

「速達をいただいたのです」

「いつ？」

「昨日の午前中でした」

「発信は、どこ？」

「そこまで調べませんでした」

「その速達、見せてくれない？」

「いま持っておりません」

放二は静かに答えたが、実は胸のポケットに在るのである。

青木は解せないらしく、思い沈んでいたが、

「社用で大阪へ行ってるはずだ。五日前にたつたんだが、まだ二三日は戻らぬ予定ときいていたが」

「たぶん旅先からだろうと思います」

「あす、どこで会うの」

「ぼくの社へ来て下さるのです。いつとは云えないが、夕方までに必ず行くから、外出中は行先を書残して出るように、と。そんな文面からも、旅先からの便りのような気がします」

みんな放二のデマカセであつたが、誰がこの高潔な、気品あふるる青年が嘘をつくと思ひられよう。

ところが、青木は疑つた。

「君はぼくを警戒してるね」

「なぜでしょうか」

「君はぼくの信じていたことを信じさせるように努力してるじゃないか。余はナレをスパイと見たり」

こう叫んで、カラカラ笑った。冷めたい汗がしたたるような蒼ざめた顔で。

「君は梶さんのチゴサンかい」

青木のカンは鋭い。

四

「じゃア、明日一日中、ぼくを君の社へ詰めさせてくれよ。梶さんの訪れを待つために」

「ええ。どうぞ」

梶せつ子は放二の社へは訪ねて来ない。別の所で会う約束だから、放二はこだわらなかつた。

「それから、大庭君にも会わせてもらいたいのだ。是が非でも、たのむよ。拝みます。この通り」

「お気持はおつたえしますが、先生の御返事はぼくには分りかねます」

「大庭君はいつまで東京にいるの」

「あと三四日で、お帰りです」

「なア、北川さん。ぼくは、もう、今夜は君のソバから離れないぜ。君のうちへ泊めてくれたまえ。それがいけなかったら、ぼくの宿へ泊ってくれたまえ。もう、こうなったら、はなすものか。君こそは、わがイノチの綱ですよ。君またワレに憐れみを寄せたまえ」

青木は必死であつた。

放二はうなずいて、

「ぼくのアパートでよろしかったら。おかまいはできませんが」

「ありがたい。実に、君は心のやさしい人ですよ。君の善良な魂すらも疑るような、ぼくの泥まみれの根性をあわれんでくれたまえ。ぼくは容赦なく君にあまえるよ。君あるによつて今夕の勘定を救われ、君あるによつて明日に希望を託し得。いつもギリギリの戦場、最後の線に立てられてさ。敗残兵の自覚がもてないところが哀れでもあり、ミソでもあるというわけらしいな」

青木は安心したらしく、酒をたてつづけに呷りだした。

「北川さん。ちょッと」

礼子は放二を廊下へよびだして、

「大庭さんのお宿は、どこ」

きびしくせまる態度である。

「定宿はありますけれど、そこへお泊りとは限りません」

「定宿はどこですか」

「ぼくの一存で申上げるわけにいかないのです。先生のお仕事をまもるのが、ぼくの任務ですから」

礼子の全身に媚があふれたち、そして、礼子はとりすまして笑った。

「私は、何者？ あなたは、ご存じ？ あまりに激しすぎる愛は否定的に現れます。なぜなら、罪の意識をとまなうから。大庭さんは十年間、私を思いつづけていらしたのです。そして、あまりにも激しすぎた愛でした」

勝利に酔った人のようだ。同じ人が、同じ日のうちに、うちひしがれた姿で長平に向い、生死をきめる返答を与えよと叫んでいたとは、あまり距りすぎた現実である。

この女は、何者？ 言われなくとも、この場の当然な疑問であった。狂人？ 色情狂か

な、と思わざるを得なかったほどである。

「私は十年間、大庭さんにとっては、心の太陽でした。しかし、罪の意識は太陽に叛かせもするのです。その歪みをただすためには、私が身を落してさしあげなければなりません。使徒は受難しなければならぬのです。福音と真理のために」

大袈裟すぎるので、放二はふきだすところであつた。

「大庭さんのお宿おツしやい！」

「それも受難の宿命かと思ひますが」

と、放二は思わずクスリと笑つて答えると、礼子は澄んだ静かな声で、

「私というものを失つては、大庭さんがお気の毒とは思ひませんか」

その自信は、使徒の安定を示しているようにも思われた。

五

放二は廊下で礼子に別れて部屋へ戻つた。青木はそれと察したらしく、
「あの奥さんは？」

「いまお帰りになりました」

「君をよびだしたのは、お金を貸してくれというのだろう」

「いゝえ、そんな話はありませんでした」

「え？　ほんとかい？」

青木は慌てて立ち上って、

「君、すまないが、千円かしてくれ。あの奥さんはお金を持ちやいないんだ。鎌倉へ帰るぐらいの電車賃はあるらしいが、明日のお小遣いも、生活費だって、持ちやいないんだから。君、助けてやってくれよ。たのむ」

青木は放二から千円札をうけとると、酔顔をいかめしくこわばらして、足もとをふみしめながら、急ぎ去った。

異様な関係にある夫婦らしいが、前後を通算して、放二は悪い感情をうけなかった。

青木の別れた妻によせるいたわりは、目を覆いたいほど、いたましい。金の泥沼に落ちこめば、誰しも餓鬼であり、憑かれた妄者になるものだ。そのような妄者にとっては、夫婦関係も、愛情も、支離メツレツになるだろう。泥沼のフチに立ちかけて踏みとどまっている放二には、その切なさが他人のものではなかった。

それにしても、得体の知れないのは、大庭に対する礼子の感情であつた。どこまでが本当だか見当のつけようがなかった。

虚栄、又は、うぬぼれというのだろうか。それとも本心からの信念だろうか。

「私というものを失つて、大庭さんがお気の毒とは思いませんか」

と、心安らかに言い放つた礼子は、天使のように邪念ないものに見えたのである。

しかし放二の責任感はその以上に安定しており、礼子の数々の執拗な努力も、長平の宿をききだすことは不可能であつた。

礼子はついにあきらめると、

「いまにお分りになつてよ」

ニツコリ笑つて言いすて、いとアツサリと立ち去つてしまった。去るにのぞんで、にわかに風に舞い去る花びらのように軽かつたので、放二はわが目をいぶかる思いにうたれもしたが、そこから解答をひき出すことは不可能であつた。

青木は二十分かいた時間をかけて戻つてきて、

「駅の近くまで追つかけて、それでも姿をつかまえることができたよ。今夜はしみるように酒が恋しい。もう三十分ほど、つきあつてくれたまえ」

と、残った酒を独酌で呷った。やがてポケットから包みを取り出して、

「奥さん、お金をうけとらないんだ。無理にすすめたら、君に差上げてくれといって、これを買ってしまったんだよ。ネクタイと靴下だがね。奥さん、一文の収入もないくせに。

お金に詰っていることでは、ぼくと変りがないはずなんだ。それでも虚勢をはるという根拠が分らないな。金銭は恋の比にあらず」

青木は考えこんだが、

「君をよびだして何をたのんだの？ 長平さんに会わせてくれろって？」

「宿をおききでした。お教えできませんでしたけど」

青木は思いあまつた様子で、呟いた。

「女は現実派でありすぎるから、きわどい時ほど夢を弄ぶことができるのさ。オレだったら、恋人に云うよ。金をくれって。金で買ってくれって。ぼくは決意をかため、覚悟して、そう切りだすんだ。女ときたら、決意しなくともそれが本心だから、ギリギリのとき、夢みたいなこと、やらかすんだよ。女は全然嘘つきなのさ」

放二のアパートでは、ヤエ子が熱をだして寝こんでいた。

ゆうべの酒の残りをとりだして青木にのませていると、昨夜のカズ子に代って、フジ子という娘が顔をだして、

「こんばんは。兄さん、泊めてね。私だけ、アブレちゃったのよ」

「私もさ」

そう云って、その後から姿を現したのは、ルミ子であった。

「嘘つきね。いま、お客を送りだしたとこななのよ。ほら、なアさんという人」

「アッ。あの人、まだきてるの？」

それまで無言で寝たままのヤエ子がモツクリ首をもたげて、

「すごいわねえ。ルミちゃん。あんた、また、殺しちゃうのね。ああ、四人目だ」

「人ぎきの悪いこと言うわね。熱病やみの幻覚だ」

ルミ子は面白くもなさそうに薄笑いした。

「だって、あの人、死んだ人の片割れじゃないの。あんなことのあとで、また来るなんて、死神がついてるわよ。ヤミ屋も食えなくなつたし、強盗でもやってんだろ」

「幻想がよくつづくわねえ」

「ピストルぶツ放すんなら、私の居ない日にしておくれ」

ヤエ子は叫んで、にわかにフトンをひツかぶったが、ルミ子は薄笑いをうかべながらフトンをまくつてのぞきこみ、

「アドルム、おのみ」

「うるさいッ」

フトンをひツたくつて、もぐりこんでしまった。

青木はここへくる道々、放二から彼のアパートのあらましのことをきいてきたので、彼女らの素姓については察しがついたが、放二とのツナガリについては、雲をつかむようである。したたか酔つてもいた。

「君の奥さんは、どの人なんだい」

青木の声が高かったので、ヤエ子が再びモックリとフトンから首を起して、

「あの人よ」

ルミ子を指して、イライラと叫んだ。

「怒るわよ」

ルミ子はちょっと鋭い目でにらんだ。

放二は頃合と察して、

「ルミちゃん。今夜、この方を泊めてあげられる？」

「ええ。どうぞ」

ルミ子は苦笑して、

「昨日も、今日も、か。なんだか、変ね。フジちゃんに悪くないの」

「アタイは浮浪者だもん」

フジ子はアツサリ辞退した。

放二が二千円さしだと、ルミ子はためらって、

「あら。兄さんからなの」

「この方のお金、お預りしてるんです」

「そう」

「君の奥さんじゃないんだね」

と、青木は念を押して、

「不倫も怖るるところにあらずだがね。ルミちゃんか。よろしく、たのむ。可愛がってお

くれ。オレにも死神がついてるのかも知れねえや。しかし、君は美人だなア、ほんとに、奥さんじゃないんだね」

「アイ・アム・パンパン」

「メルベエイヤン！」

青木はフラフラ立上って、オイデ、オイデをしているルミ子を追いながら、

「北川さんや。梶せつ子女史にナイショ、ナイショだよ。そうでもないか。地獄の門は、とツくに通りこしていたんだっけな。こんどくぐる門、どこの門」

ルミ子の目が光った。

七

「あんだ、梶せつ子さんの旦那さんなの」

まずルミ子は問いただした。

男を送りだしたままのフトンが敷きつ放してある。青木は服のままその上へひっくりかえって、頭をかかえて、

「え？ なに？ 君、異様な質問を発したようだね。なんだって？」

「アンタノオクサン、カジ・セツコ！」

ルミ子は節をつけた。

「君よ知るや梶せつ子」

青木も唄の文句で起き上って、

「え？ なぜ知ってるの。梶せつ子を」

「あんたの方が変だわね。梶せつ子にナイシヨ、ナイシヨって、なんのことなの。それがハッキリしなければ、この門は通行止め」

「ハツハ。はからざりけり。とんだシヤレだったね。しかし、ぼくはシヤレたわけじゃなかったのさ。ぼくのくぐったのは、地獄の門。こんどくぐる門、どこの門。地獄の次の門てのがあるのだろうかと悲しくって呟いたんだが、地獄の次の門てのは、ここの中に在ったのかね」

「ここすぎて悲しみの門か」

「え？ 君はダンテを読んだの」

「喫茶店の広告文さ。門という店のね」

「なるほど。君には人のイノチをとるものが、そなわっているのかも知れないな」

青木はしみじみ呟いた。

「仲よくしようよ。オレもイノチをすてる時は、ここへくるかも知れないぜ。そのときは、どこの門もふさがつてゐるんだ。ここの門だけ開いてゐるような気がするな」

礼子の門も、梶せつ子の門も、みんな閉じてゐるだろう。地獄の門も、悲しみの門も、とじてゐる。ここは何で門だろう？

死の門？ イノチの門？ いや、もっと茫漠としたものだ。雑沓のあしおと跣音だけのような、いつもザワザワと跣音だけがくぐる門。無関心、無の門。

せつない思いがこみあげた。

「オレが何者かツてことを、君がきくことはないだろうがね。君だけが、誰より知つてゐるはずじゃないか、オレが誰かということをさ。跣音にすぎないですよ。ザワザワと群れて通りすぎて行くその一つの跣音にすぎんじゃないですか」

ルミ子は青木のニヒリズムの相手にはならず、ネマキに着代えながら、詩集を朗読するように、

「跣音に戸籍を問えば、跣音の答えて曰く……それから？」

「ここだけは戸籍のいらないところだろう」

「ここで死んでごらん。警察が私にきくのは、登音の戸籍だけ。ほかのことは何もきかない」

「なるほどね。わかった。君こそは、全世界の、全人類の、検視人かね。戸籍の総元締めというわけかい」

「エンマ様の出店らしいわね」

「登音の答えて曰く、か」

青木は、また、ねころんで頭をかかえた。

「梶せつ子女史は、ぼくと共同事業の相棒さ。ぼくと共に出資者の一人でもあり、事業経営の最高首脳者でもあるわけさ。ところがね。ぼくの集金がうまくいかないのね、ぼくはクビになりそうなんだ。すッぽかして行方をくらまし、ぼくに会ってくれなかったり」

青木は切なくなつて言葉をきつたが、気持をとりなおして、

「さ。登音の戸籍はすんだよ。なぜ君が梶せつ子を知ってるのか、それを答えてくれる番だぜ」

八

「あんだ、兄さんのお友だち？　でも、なさそうね。会社の人？　社長さん？　文士？　画家？　お医者さん？　悲劇俳優？」

矢つぎばやに列挙して、ルミ子は苦笑をもらした。

「みんな当らなかつたようだね。あんだ、なんなのよ」

「さつき申上げた通りの者さ」

「兄さんの、なんなのよ」

「今日はじめて会った親友さ。梶せつ子に会えるように手引きをたのんだ次第でね」

「どこで会ったの？　飲み屋？」

「街頭でタバコの火をかりて、モシモシあなた梶せつ子さん知ってますか、なんてことはないでしょう」

「じゃア、飲み屋で、酔っ払って、泣いてたのね。あんだぐらいの年配の人、酔っ払うと、ムヤミに大きなことを言つてバカ笑いするもんね。あんだみたいに、メソメソするのは例外よ」

「葬式の登音なんだな」

ルミ子はタバコを一本ぬいて火をつけた。

「なんだい。煙を吹いてるんじゃないか。すうもんだぜ、タバコは」

「すうのはキライ。むせるから。ぼんやり考えごとをするとき、タバコふかすのよ」

「一本おくれ」

「あんた、立派なミナリしてるけど、お金ないのね。さっきの二千円も、あんたのお金じゃないでしょう」

「御説の通りさ。礼装乞食というんだな。電車賃まで北川君にオンブしているのさ」

「酔ッ払い！」

ルミ子は小さく吐きすてるように叫んだが、顔にはなんの表情もなく、悠々とタバコをふかしていたが、

「梶せつ子って、兄さんの世界中でたった一人の女なのよ。十年昔から、思いつめて成人したのよ。凄腕の大姐御らしいけどね。兄さんには、小鳩か天使のようにしか見えないらしいわね」

しばらく無心に煙の行方を見つめてから、

「毛皮やウールの最高級の流行服を身につけてね。首輪、耳輪、腕輪もつけてるのよ。四、五十万のものを身につけてるらしいわね。それでいて兄さんの乏しいサラリーからお小遣いたかるのよ。兄さんのドタ靴とボロボロの靴下見たでしょう。姐御にたかられてしまうから、靴下一足買うことができないのよ。あんたも、似てるわよ。どうも、ミナリのパリツとしたのは、変な世渡りしてるらしいわね」

こう言ったが、咎める表情が浮かんだ様子も見えない。のんびり、チビチビとタバコをふかしている。

「君たちにとって、兄さんはなんに当る人なんだい」

「私たちは人間の屑というのかも知れないな。でも、あんたたちほど変な世渡りしていないよ。兄さんにタカルような根性だけはないわね。すがっているのよ。屑だもの。すがらずに生きられないわ。兄さんは私たちの大きな大きなママ。心のふるさとよ」

なんの変った様子もなく、静かに立ち上って、二千円をぶら下げて、

「ひとりで、おやすみ。泊めてあげるから。兄さんのお金じゃ、私たちのからだは買えないくツてよ」

立ち去ろうとするのを、青木はよびかけて、

「許してくれ。兄さんにも、あやまってくれよ。一晚ほつといってもらうと、ぼくも助かるよ。泣いて、泣きあかしたいのだ」

「例外中の例外」

ルミ子は軽くギョという顔をして、扉の外へ消えた。

記念日

一

午後二時半。小田原から、東京行急行にのりこむ。

熱海、湯河原、小田原のあたりは、温泉へ執筆旅行の文士と、それを追っかける編集者がきりもなく往復しているところで、危険地帯であった。

文士も編集者もたいがい秘密のアイビキぐらいやってる人種であるから、平気のような

ものであるが、見られた者だけが噂にのぼるから、見られるとバカをみる。だからアベツクで出かけるようなことはなく、別の汽車で出て、別々に帰ると言うやり方である。

せつ子もその手を用いて大過なくやってきたが、今度だけは勝手がちがう。

宇賀神^{うがじん}芳則は右翼団体の顧問格の策士で、陰謀にかけては天才的な男であるが、一面、

大変な露出狂で、どんな秘密も洗いざらいペラペラ喋りまくっているように見える。

実際は、喋りまくっているのは、どうでもいいようなことで、大事の陰謀は決して喋っていないのである。小事について露出狂的であるところが、大事な秘密をさとられない秘訣であるのかも知れない。

宇賀神のところへは各党の政治家が出入りしてゴキゲンをとりむすび、金をもらっている。彼の手からバラまかれる金は、門外漢には想像もつかないほどの巨額であるが、どんな方法で、どれくらいの収入があるのだから、誰も見当がつかないのである。いろんな臆測はとんでいるが、正体をつかんだものはいない。

せつ子は宇賀神の寵を得て、これが二度目のアイビキだから、時日も浅いが、その収入の内幕については、てんで見当がつかなかった。しかし変に気を回すと、彼の鋭い直感にふれて、せつかくの寵を失うから、その方面には風馬牛にもしているのである。

ところが、情事のこととなると、全然露出狂である。人前でも戯れかねない有様であるから、別々にアイビキの地へ赴くような配慮などは念頭においたこともない。

せつ子もこれには困ったが、この金の蔓は放せない。是が非でもと今生の決意をかためて乗りだした仕事だから、今までの名が醜聞によつて汚されるのを怖れてはいられなかった。

それでも一応の配慮はこらして、長崎始発の東京行急行を選んだ。

湘南電車というのができて、新装置の二等車がつき、同時に二等運賃も安くなったから、文士はみんなこれにのる。編集者も過労を怖れてこの二等を利用するものが少くないから、二等車も安心はできない。

しかし長崎始発の急行といえば、東海道の急行の中ではローカルに属するもので、温泉帰りの利用すべき性質のものではなからう。こう考えて選んだのである。

せつかくの胸算用は大当外れ、大失敗に終ってしまった。

小田原で二等車にのりこむ。ヨウ、と立ち上った男が酔顔を真ッ赤にそめて近づいて、

「おせツちゃん。箱根に雲隠れの巻か。ヤ、これは失礼」

ペコンと宇賀神に挨拶して、ひッこんだ。せつ子の雑誌の編集次長の河内であった。宇

賀神のもとへ一しよに訪問記事をとりでかけた男で、ソモソモのナレソメを一挙に見ぬく唯一の人物だから始末がわるい。悪い車に乗りあわしたと後姿を目で追うと、ヤ、居る、居る。

女流作家の呉竹しのぶ。このお喋りにかかつては、一夜のうちにジャーナリズムへ筒抜けとなろう。も一人は放二の雑誌の編集長の穂積であった。悪いのばかりが乗り合わせていた。

二

「え？　そうか。あんときの、あんたの同僚かア。覚えてる」

宇賀神は河内を思い出して、膝をうつて、

「退屈しのぎに、いいなあ。よんでこいよ」

「ダメ。ジャーナリストはうるさいから。すぐ評判がたってしまうわ」

「オ。やってる。オバアチャンも飲んでるわ。オ。キュツと一息にやりおったなア。ワア、酔っ払ってる。面白れえな。あのオバアチャンは、どなたかいな」

「呉竹しのぶ」

「ワア、面白れえ。よんでこいよ。あっちへ行こうか」

「いけません。私は面白くないんです。文士だのジャーナリストって、酔っ払うとダラシがなくって、礼義知らずなのよ」

「オレとおんなじだなア」

「ダメですよ。こちら側へお座んなさいね。ききわけがなくツちや、いけないのよ。私のお酌で、お酒めしあがれ」

箱根まで迎えにきたカバン持ちが気をきかせて、ウイスキーをとりだす。

宇賀神は素直に座席をかえて、キゲンよくウイスキーをなめている。気まぐれな思いつきを言いたてるが、実際は言いたるのが面白いだけで、やる気はない。神経は鋭利で、見かけと反対に、こまかく気のまわる男だから、無意味なツキアイは神経が疲れるばかりで、退屈しのぎにはならないのである。

宇賀神はウイスキーはちよつとでやめて、すぐ居眠りをはじめた。

午後四時に東京駅へつく。宇賀神は迎えの車でいずれへか立ち去り、せつ子も車をひろって、銀座の社へ六日ぶりに戻った。

せつ子が箱根へ行つたのと前後して、大庭長平が上京している。長平の出版は某社に独占されているが、せつ子は新しく自分がやるはずの出版社で、この出版権をそっくり握ってしまいたいのである。

速達で云つてあるから、せつ子の社で放二が待つてゐるはずだ。先に河内が歸つてゐるから、社内にはすでに噂がとんでるだろうが、せつ子はハラをきめたから、平静を失わなかつた。

何も怖れることはない。むしろ晴れがましいガイセンだった。銀座がせつ子を迎えてゐる。

せつ子のカバンの中には、現金と小切手とで五百万円はいつてゐるのだ。数日中に、もう五百万円もらえることになっていた。思いがけない大成功であつた。にわかになんてトントン拍子に、思いのまま自由自在に延びて行くような氣持がする。

せつ子が編集室へ戻ると、もう、室内には殆ど居残つた人影がない。酔つ払つて寄り道してゐるのか、河内の姿も見えなかつた。

見廻したが、放二の姿が見当らない。フシギだ。彼女の命令を忘れることはないはずなのだ。

自分のデスクの前へくると、ゴチャ／＼つみあげた本の陰から、明るい笑顔の娘がスツと立って、

「梶さんでいらっしやいますか」

「ええ。そう。あなたは？」

「私、北川放二さんの代りに、お待ちしていました。大庭記代子でございます」

「ア。あなたなの。大庭先生の姪御さんは」

「ええ。この御手紙に用件が書いてあるそうです。御返事をいたゞいてくるように仰有つてましたの」

と、手紙を渡した。

三

放二からの手紙は、青木のことであつた。せつ子が来るものと思つて、朝からズツと放二の社に詰めきつてゐることが書かれていた。

せつ子は忘れていた男のことを思いだして、ちょツと不快を覚えたが、気にかけるほど

のことではない。

せつ子はこれまでに青木から八十万円ほど出させている。自分で二百万都合するから、青木には三百万都合して、と頼んだ。五百万耳がそろわなくとも仕事に着手できるが、八十万じゃ、着どころか、事務室もかりられない。

宇賀神の方がトントントン拍子にいつてるから、青木はもう用のない存在であった。ただ苛立たしいのは、忘れた男、用のない男が、なんの因果か、放二と仲よくしていることだ。せつ子は手紙をよみおえて、

「青木さんには私が帰京したことナイショにしてほしいわ。二三日帰京が ok くれるツて電話があつたことにして」

「小ツちやな雑誌社でしょう。応接室も社長室もないんですの。編集も業務も小ツちやな一室にゴチャまぜ。青木さんの目の前に電話があるんですから、こんな電話がありましたツて、ちよツと云いかねると思います」

なかなか、こまかく気がつくな、と、記代子を見るせつ子の目に微笑がこもった。

いかにも当りまえなお嬢さんタイプの娘である。難もないが、目を惹く特長もない。社会見学に働いてみるのも悪くはないが、当りまえの奥さんに落ちつく以外に手のなさそう

な娘である。

さつきから、せつ子の頭にひらめいているのは、記代子を放二のお嫁さんに、ということだった。悪くない方法だ。

出版事業をやることになれば、放二にはイの一番に手伝ってもらわなければならないが、すると、宇賀神のことも当然放二に知れてしまう。知られて困ることもないのだが、放二に家庭のある方が無難には相違ない。

「じゃア、あなたが社へ戻って十分ぐらいすぎたころ、誰かに電話かけさせましょうね。旅先から知らせがきて、放二さんに伝言があつたから、と、そう云ってもらったら、よろしいでしょう」

「ええ。じゃア、五時か、五時ちょっとすぎたころ」

「ええ。それでね、青木さんをまいちやつて、あなたと放二さんとお二人で、マルセイユへきてちょうだい。スペシャルのフランス料理ごちそうするわ」

せつ子は一目で、記代子が自分に好感をいだいたことを見ぬいていた。万事都合よくいつているのだ。

「今日は私の記念日なのよ。とても嬉しいことがあつたのよ。たぶん、私の生涯の記念日

になると思うわ。第一回の記念日に、あなた方と祝杯をあげるのは、因縁ね。きっと、重
大な意味があるのよ。お食事のとき、記念日のわけ、話しましょうね。飛びきりのフラン
ス料理たべながら」

「まあ、素敵ね」

「青木さんは、うまくまいてちょうだいね。そんなこと、できそう？」

「ええ、カンタンよ。私たちアベックで散歩したいんですからと云ったら、その場で退散
しちゃうでしょう」

記代子はクスクス笑って、あからんだ。

せつ子は記代子を送りだして、あれでも女は女なんだと、バカバカしい気持になるので
あつた。

四

記代子はかなり巧みに芝居を演じた。小娘としては出来すぎたほど過不足なくやったつ
もりであつたが、青木の鋭いカンをごまかすことは不可能であつた。

青木は記代子の想定どおり、アベック戦法に撃退されて二人に別れを告げたが、ただちに尾行をはじめた。

青木のカンは鋭かったが、しかしカン違いもやっていた。せつ子の帰京がおくれたことは真にうけたのである。

「この娘は長平さんの姪だというからな」

と、彼は内心せせら笑った。

「オレをまいて、長平さんと会いに行こうという寸法か。笑わせちゃアいけないよ。オレの目の黒いうちは、どんなに落ちぶれても、お前さん方若い者に」

二人がマルセイユへはいつたのを見とどけると、青木は三十分、店の傍に見張っていた。大庭長平が先にきているはずはない。おくれて来ると見てとって、待ちかまえていたのである。これが失敗のもと。二人のあとからすぐはいれば、せつ子の姿を認めることができたかも知れなかった。

三十分待つてもこないの、扉を排して、はい。敬^{うやうや}々しく近づくボーイに目もくれず、まずサロンをゆつくり見廻したが、二人の姿も、長平の姿も見えない。スペシャル・ルームにひッこんでいるのだ。

「小説家の大庭長平さんのお部屋へ案内していただきたい」

「大庭さんとおツしやる方ですか」

「そう。五十がらみのデップリした西郷さんのような大男だよ」

「ちよツと分りかねますが」

「三人づれだよ。はじめ西郷さんが待つてるところへ、美青年と美少女がアベックで訪ねてきたはずさ。しらべてみたまえ」

ボーイは他の数人の同僚たちに訊いてまわったのち、

「大庭さんとおツしやるお客様は本日はお見えになっておりません」

インギン丁重である。さてはボーイにいたるまで堅く口どめに及んでいるのかと、青木は察しがよすぎて、

「ヤ。失敬。デップリした洋服の西郷さんに、よろしく」

と、ひきさがった。こう警戒嚴重では、単身では手が廻らない。明日はカバン持ちの戸田を助手に使って、放二の社に張りこませてやろう。放二のアパートも分っているのだし、今、あせることはない。

青木は自分の宿屋へ戻ってきた。戸田は彼の指令をうけて別方面の金策にとび廻ったは

ずだが、その戦果はどうだろうか、部屋へはいると、待っていたのは、戸田ではなくて、礼子であつた。

「やア。あなたか。戸田君は？」

礼子は答えずに、チラと目を部屋の隅の机の方へやった。青木がそこを目で追うと、彼のカバンにいれておく書類が、机の上につきあげてある。戸田がそれを掻きまわす必要はなかつたはずだが、と、近よつて見ると、鉛筆で走り書の紙片がのつかつていた。

青木はそれを執りあげた。

「しばらく月給もいただきませんので、代りにいただいて行きます」

しらべて見ると、カバンと、身の廻りのものがなくなつていた。いまや、着のみ着のままだ。急場をしのぐものと云えば、腕にまいたロンジンぐらいのものであつた。

五

青木は泣き顔をかみほぐすのに長い手間はかからなかつた。貧乏もここまでくると、気も強くなる。不意打ちの意外さをのぞけば、さしたる被害でもなかつた。

「刀おれ矢つきたり、かね。しかしゲンコと竹槍はあるらしいや。今や追いつめられたる日本軍ですよ。しかし、原子バクダンにしては、小さすぎたな」

と、せせら笑った。

「でも、こまるでしょう」

「こまっているのは、いつもの話さ。今さら、こまることはないやね」

「いいえ。こまる、とおっしゃい」

「ハツハ。あなたも貧乏人だから、この心境はわかるはずだがな。焼石に水ツて云うでしょうがね。アレですよ。今のぼくには、十円から百万円までは同じゼロですよ。貧乏人にとつては、必要とする金額まではゼロなんだね。お金持みたいに、借金を貯金するわけにはいかないらしいよ」

「でも、あるものが、なくなれば、こまるでしょう」

「焼石に水はマイナスの場合にも当てはまるらしいね」

「こまるとおっしゃい。おっしゃらなければダメなんです」

礼子の顔は怒りにひきしまった。

「あなたは虚勢のために自滅しているのよ。虚勢のために、真実を見ることができないの

です」

「ハッハ。それは、あなたも同じことでしょう」

青木はくすぐったそうに笑って、

「あなたは貧乏すらも自覚しようとしないうだね。それは、そもそも虚勢以外の何ものですか」

礼子はあきらめた。そして、涙がにじんだ。憎しみがあふれて、たえがなくなった涙であつた。

礼子のハンドバッグには九万五千円ほどの金があつた。持ち物の殆ど全部を売り払つて得た金である。どう使うという目的は定まっていなかったが、最後の軍資金である。戦うための金だ。そして、これを使い果しても戦果がなければ、最後の覚悟を定める時であつた。

礼子は青木の不在の部屋を訪れて、戸田の置き残した手紙をよみ、青木のあまりの窮状に、自分の窮状を忘れた。彼を窮地から救うために、最後の軍資金の半分をさいてやろうと考えていたのである。

その思いが切なすぎて、礼子の怒りがかりたてられた。

「北川さんから千円おかりしなかったのが虚勢だとおっしゃるのですか。虚勢ではありません」

せん。覚悟です。覚悟があるからです。でも、どんな覚悟だか、私も知らないのですけど、ね。誰だって、本当に覚悟をきめたときは、どんな覚悟だか知らないものなのよ。あなたには覚悟の切なさもお分りでないのよ」

礼子はハンドバッグをかかえて立ちあがった。

青木はその激しさに見とれていたが、

「それはいけないよ。覚悟ほど人生をあやましめるものはないからな」

「あやまるのが人生なのです」

礼子は言いすてて、立ち去った。

しばらくして、青木は後を追うために、フツと立ちかけたが、ためらって、坐りこんだ。しばしボンヤリしていたが、

「その覚悟なら、オレの無二の友だちなのだ。お前さんも、とうとう、そうなのかな」
彼は顔をおうて、泣いていた。

せつ子は放二と記代子に新しくおこすはずの出版事業の抱負をきかせた。

宇賀神の噂は明日にも二人の耳にとどくだろうが、わざとそれを隠して、

「金主のことではいろいろのデマがとぶでしょうけど、デマを利用する方が賢明なのよ。

あなた方も、当分はデマを信用してちょうだい。ただね、私には数千万円うごかす力があるのよ。これだけは、真実。ひょつとすると、一億ぐらいまで、ジャン／＼資金がおろせるのよ。すばらしい記念日でしょう」

これだけはカケネなしの本音であつた。全身から歓喜があふれでるほど、快感がたまわっているのだ。

「さア、のんで。放二さん。記代子さんもよ。なんとか祝辞おツしやいよ。あなた方」
せつ子の浮きたつ様を放二はまぶしそうにうけとめて笑った。

「あんまり幸福そうですから、不安になるんです」

「幸福すぎちゃアいけないの？」

「それに越したことはないのですけど、マサカの時を考えて、程々にしておくことが大切だろうと思うのです」

「ずいぶんジミだわね。あなた、いくつになつたの」

「ぼくは無邪気になれないのです」

「からかわれてるみたいね。坊やにませたことを云われるのは、変なものだわよ」

目で同意をもとめると、記代子も笑って、こたえた。そのキツカケを捉えて、せつ子は話題を変えて、

「わが社の出版計画の一つに大庭先生の全集を考えてるのですけど、どうかしら。放二さんが引きうけて下さるなら、出版部長におむかえしたいのよ。記代子さんにもよ。お力添え、おたのみするわ。お二人をわが社の幹部社員におむかえするつもりよ」

放二はしばらく返事につまっていたが、

「先生と出版書肆とのツナガリには古い来歴があるらしくて、ぼくなどにはその片鱗も分っておりません。ぼくの力では、先生に原稿をお依頼するのも容易ではないのですから、全集出版のことなどは、とても力が及びかねると思います」

すると記代子がさえぎって、

「でも私たちから、お願いしてみることはできてよ。お願いもしないうちから、そうときめてしまうのは、弱気すぎやしないこと。私、断然、お願いしてあげるわ」

「素敵なこと。放二さんには、あなたのような明朗なリーダーが必要なのね。さもないと

ハムレットになりかねないわ。記代子さんが現れて下さったから、大安心よ」

放二は深く澄んだ目で、せつ子を見つめていたが、

「ぼくたちには本当のことを教えて下さい。青木さんも金主の一人ではないのでしょうか。共同経営のようにかがってましたが」

「ちがいます」

せつ子はきびしく否定して、

「あの方の話は止しましょう。私がまちがっていたのです。あの方の境遇に同情したことが。事業に同情は禁物なの。心を鬼にしなければいけないのね。忘れたいことを思いださせてはいけませんよ」

「そのために青木さんは自殺なさるかも知れません」

「事業に同情は禁物なのです」

せつ子の目に断乎たる命令の火焰がもえ狂った。放二はそれを正視して、素直にうなずいた。

せつ子はただちに反省した。放二に威圧を加える様を記代子に見せるのは得策ではない。心のひろい才姉サンぶりを見せて、小娘の信頼を勝ちうることが大切である。

せつ子はニツコリ笑って、

「私はね。この事業にイノチをうちこむのよ。私はそんなふうになれついた女ですから。記代子さんは良妻賢母になれついた方。結婚までの社会見学に働いてみる程度の軽い気持ちでなければいけないのよ。人はそれぞれの持ち前によって生き方を変えなければならぬのね。私のように、世間並の奥さんにおさまるには、鼻ツ柱が強すぎるし、芸術家の素質はなし、中途半端なのよ。女としては、中途半端はこまるものだわね。女らしさを殺さなければ、生きぬけないらしいからよ」

実際はその反対だ。男に伍して生きぬくためには、最大限に女の素質を生かすことが必要なものだ。

男というものは、自分の生活の足場のために必要なものであるから、己れは常に男たちには魅惑的な存在でなければならず、秘密のヴェールにつつまれていなければならぬ。

己れに近づく男は、己れの主人の如くであるか、己れが主人の如くであるか、そのいず

れかで、対等のものは近づくことを許されない。

それがせつ子の生き方であつた。恋愛というムダで病的な感傷を自分の人生から切りすてていた。女の魅力というものは、恋愛のような初歩的なものではないし、女の生きがいも、そのように初歩的なものではない。

せつ子は二人の小鹿に、慈母のようなやさしい眼差しをおくって、

「私はね。たとえば、大庭長平全集を計画するでしょう。こうときめたら、コンリンザイ、しりぞかないわ。賭というものはね、たいがい損するときまったものですよ。でも、誰かしら、賭に勝つてゐる人がいるのよ。きわめて限られた少数の人だけがね。算数的には、やらない方が無難なものよ。無難といえ、サラリーマンの生活にかぎるわね。事業というのは、賭なんです。こうときめたら、おりてはダメよ。算数的には不可能きわるものなんです。それを承知でやりぬくのが、賭というものです。一か八かじゃないのね。いつも、一。最後の時まで、一にはつたら、一だけ」

大庭長平全集ぐらい、あなた方がダメだと思つても、私はやってみせる。恋愛はふられた以上ひきさがらなくてはならないが、事業にふられることはない。こつちが、おりさえしなければ。土足にかけられ、ふみにじられても、最後にモノにすれば勝つのである。

せつ子の慈母の眼差しには、そんな決意は毛筋ほどもうかがえなかった。

「大庭長平全集にはった以上は、おりませんからね」

と、せつ子はニツコリして、

「私、出版社長の肩書で、あなた方の次には大庭先生を御招待したいと思うのよ。その機会をつくってちょうだいね。功を急いでるわけではないのです。私は何年間でもおりないから。ただ記念日の第二日目の宴会までにね」

せつ子の慈母の眼差しに変化はなかったが、二人に拒絶を許さなかった。

「ねえ。大庭先生の滞在日程をのばしても、私の宴会に出席して下さるようお願いして下さいね」

二人は、あかるく、うなずいた。

第二の宴

一

翌朝、放二と記代子は新宿駅で待ち合せて、社へでる前に、長平の宿を訪ねた。せつ子の依頼を果たすためであった。

「梶女史、数千万円を握るに至ったかね」

長平は自分でも意外なほどの好奇心を起した。

昨夜、長平のもとへ、呉竹しのぶと穂積らが遊びにきたのである。彼らは東海道の汽車の中から、ひきつゞいて酔っ払っていた。そして、車中で見かけた宇賀神とせつ子の話をきかせた。

それをきいた時には、なんだ、そんな女なのか、と、長平は梶せつ子を軽く見くびっただけであった。まだしも、宇賀神という人物の方に興をかられたほどである。戦争という御時世中にも金に縁のなかった右翼策師が、敗戦後に至って巨億の富をにぎり、民主政府の裏側に君臨しているというのが皮肉である。

しかし、放二の話から、思い合してみると、宇賀神のフトコロからなら数千万円はでもかも知れぬ。まんざら架空の駄ボウではないようだから、長平は数千万円という金額の大

きさに驚いて、せつ子を見直した。

むらむらと好奇心が頭をもたげたが、

「青木がにわかに数千万もうけたわけじゃアなかろうね」

わざと、こう、きいてみる。

「ええ。青木さんではないそうです」

「すると、青木の立場はどうなるのだろう」

「たぶんクビだろうと、御自身が仰有ってました」

「御自身で、青木がかい」

「そうです」

「クビになる金主もあるのかね」

金主の男は電車賃にも事欠いてドタ靴の若者にたかっているというのに、被護者の女は他の男からやすやすと数千万せしめるに至ったという。是非善悪はとにかくとして、ちょっと痛快なエネルギーを感じさせられる。

長平はせつ子に会ってみたいと思つた。そこで、

「よろしい。梶さんの招待にはよろこんで応じましょう。しかし、ひとつ注文があるのだ

が、君たちは遠慮してくれないかな。ぼく一人だけの招待にしてもらいたいのさ。人前ではきけないような質問もするだろうから」

放二はうなずいて、

「梶さんも先生だけの招待をむしろ喜ばれるだろうと思います。ですが」

放二は長平を正視して、

「先生。先入主をおもちになつては、いけないと思います」

「先入主って？　どんな？」

「たとえば、梶さんが、俗で、世間師で、性格の強い人だというような」

「むろん、会つてみなければ、わからないさ。正体が知りたいから、会つてみたいのさ」

放二は目に肯定をあらわしたが、まだそれだけでは充分でないというように、

「青木さんは梶さんに見すてられると自殺なさるかと思われます。そんな予感がするので。それを梶さんに伝えましたら、事業に同情は禁物だと仰有ったのです」

澄みきつた少年の目が冷たく生死を語っているので妙だった。

「青木さんは、まだ、なにか、甘えてるんじゃないでしょうか。梶さんは、甘えることも、甘やかすことも、できない人です。最も弱い動物は他の動物を信じることができません。」

自分を信じることもできませんが、しかし、自殺もできません。ただ、生きるだけで必死だろうと思います」

長平は、もう分つたと手をふる代りに、鉛色の目玉をむいて、ソッポをむいた。

二

長平がせつ子の招待を承諾したので、二人は安心して辞去した。記代子はそこから出勤し、放二は報告のために、せつ子の社へ立ちよった。

もしや青木が待ち伏せていてはと、放二はビルの裏口からはいった。そんな配慮を忘れなかったが、放二は裏をかかれたことを知らなかった。

青木は戦後の出版景気に当てこんで、最近まで雑誌社もやってきたので、編集者の生態については知るところがあつた。彼らは社へでる前に作家を廻つて用をたし午すぎるところ顔をだす。一二時間ブラブラして、又、原稿の依頼や催促にでかけてしもう。それは朝寝と早びけの言訳にも便利である。

放二は要心しているし、口が堅いから、彼をつかまえて、たのんでみても、長平の宿を

教えてくれる見込みはない。

そこで早朝から放二のアパートの陰に身を隠して待ちぶせた。出勤前に長平を訪ねて用をたす公算大なりと見たからである。

果して放二は新宿で記代子と待ち合して、社へは行かずに、とある屋敷の門をくぐった。旅館ではない。ちょツとした閑静な小庭があつて、妾宅か、隠居家のような構えだ。

これを長平の住居と見てとつたから、しばらくたつて放二と記代子が立ち帰るのには目もくれず、やりすごして、門をくぐった。

「大庭長平先生にお目にかかりたいのですが」

と当てずツぽうに言ってみると、

「大庭さんは茶室におすまいですよ。庭から廻つて下さい」

やつぱり、そうだ。青木はホツと、目がくらんだが、こうまでして、なんのための努力だか、わけが分らない。長平が金を貸してくれるとは思っていないのだ。ただ、意地だ。なんの意地だか、それも分らない。長平は自分にかかわれていると思うかも知れないが、オレがオレをからかっているだけなのさ。待望の隠れ家をつきとめて、こみあげてくるのは絶望だけである。

しかし、青木は威勢よく庭をまわって、わざと窓から首を突ツこんで、

「ヤ。いる、いる。こんちは。長平さん」

「ヤ。君か」

「不意打ち、御容赦。天をかけ、地をくぐり、習い覚えた忍術が種切れになるところで、
ようやく、つきとめました、ハイ」

「ま、あがりたまえ」

「なんでもないような顔をして、こまった人だね。歓迎はしていないかも知れないが、イ
マイマしいというお顔には見えないのだからな。意地のわるい人さ」

青木は部屋へあがつて、しきりに汗をふきながら、

「初夏の汗だか、冷汗だか、分らないやね。ときに、ここが、東京の別荘ですか」

「なんでも、いいや」

「妾宅かな」

「君にききたいと思っていたが」と、長平は好奇心にはずんだ顔で青木を見つめた。

「君と梶せつ子との関係は、金銭上のものだけかい。それとも、男女の関係もあるのかい
？」

青木はせせら笑って、

「曰くあるらしき質問だね。聞き捨てならぬ語気ありと見ましたが、いかが？」
言葉はふざけているが、青木の目に真剣なものがこもった。

三

「君の神経は何製てんだろう。鉄筋コンクリート製かも知れないな。ねえ、長平さん。そうだろう。それで小説も書くんだからな。まんざらコンクリート出来でもないらしき、セシサイなる悲劇をね」

青木は苦笑して、喋りづづけた。

「梶せつ子とオレの関係がどうだつて？ あんた、他の中へ石を投げて遊んでいるんじゃないね。オレの身にもなつてくれよ。石が当りや他の蛙は気絶ぐらいしまさあね。イヤ、そうでもないらしいぞ。あんた、薪割りで蛙をザックと斬ろうツてのか。ザックと」
青木の目が光った。しかし、やがて悲しげに目をふせて、苦笑をうかべて、

「イヤ、よそう。コンクリートを押してみたつて、はじまらねえや。ときに、長平さん。」

池の蛙に二百万両かさねえかな」

青木はヤケ気味に、相手を小馬鹿にした風であつた。長平は返事をしなかつた。

「そうだろうな。蛙の顔には小便ときまつてらア。小判を投げちやアくれねえな」

青木は茶室の隅に水道の蛇口のあるのを認めて、ウガイをして顔を洗つた。

「失恋？ ふざけちや、いけませんや。女房に逃げられたつて？ チエツ。埒もない。お金か！ 笑わせるよ。まったく。梶せつ子がオレの何者だつて？ 知つたことか！ ねえ。そうだろう。お金も、女も、つまらないね。ツラツラ観ずれば、そうなんだ。わきまえてるんだよ。わたしは」

しかし顔色をひきしめて、

「だが、長平さんや。さっきのセリフにはたしかに、曰くがあるね。そうだろう。それを聞かせてもらいましょう。蛙の横ツ面に石が当つたんだとさ。白いアゴをつきだして、ひっくりかえるだけが能じやないんだつてさ。池の蛙でもさ。さ、おききしましょう」

ひらき直つた凄味はなかつた。言葉のとぎれ目から、身のこなしの節々から、内心の苦悩が、傷口からの血のように、ふきでている。

長平は無関心に、

「ぼくはね。今夜、梶せつ子に会うよ。まったく、池の中へ石を投げているのだろうよ」
「フン。どこの池にでも石を投げてくる人だよ。ルミ子さんの池にも石を投げてきたんだ
ってね」

「君は素人の山登りなんだな。天候を見て、下山することを忘れているんだ。アッサリ遭
難しちゃア、つまらない話だな」

「往生際はわるいらしいがね」

青木は帽子をつかんで立ち上った。

「可愛い、虫も殺さぬ面相をしてさ。食えないねえ、ちかごろの子供は。あの北川少年の
ことさ。梶せつ子が帰京してるなんて、鵜^うの毛ほども覗かせやしねえや。お仕込みがよろ
しいからな」

苦笑して、ふりむいて、

「じゃア、失敬。今日は退散するが、又、会うぜ。往生際はわるいんだから。京都で、門
前払いは罪でしょう。ねえ、長平さん」

長平は答えなかった。青木が靴をはき終るころ、

「梶せつ子に会っても、ムダだな」

「え？ なぜ？」

「ふ。そうかい。是が非でもかい」

長平はにわかに肚をきめたらしく、

「よろしい。梶せつ子に会えるようにしてあげよう」

「え？ なんだって？」

長平は委細かまわず居室へもどつて、名刺に書いた。

——名刺持参の者に御引見の榮をたまわりたい。梶せつ子様。

「利くか、どうか。関所のニセ手形だよ」

と、青木に渡した。

四

せつ子は応接室へ現れて、青木を認めると目を光らしたが、すぐふりむいて、受付の小女をよんで、

「この名刺の人は、どの方？」

応接室には幾組もの人々が立錫の余地もないほどつめこんで、モウモウたる紫煙をふいている。受付の少女が指したのは、意外にも、青木その人であった。

せつ子はすぐさま肚をきめて、驚いた風もなかった。

「出ましょう」

青木を外へ連れだした。

「大阪旅行が、とても、うまくいったのよ。後援して下さる方が現れてね。独立できることになったの。その代り、大阪へ移住することになるらしいのよ。関西の実業家は太ッ腹で、話がわかって、たのもしいわ。でもね。個人的な後援者がハッキリしてるんじゃないやなくて、ある事業団体が後楯というわけなのよ。青木さんにはお気の毒ですけど、相手が事業団体でしょう。行きがかりがどうあるうとも、他人の共同出資を認めてはくれないのね」

せつ子はデタラメをまくしたてた。無感情に。そして青木を刺し殺すように言葉をきつた。

青木などは頭になかった。この名刺持参の者、と、わざと無記名の紹介状を青木に持たしてよこした大庭長平が憎いのである。御引見の栄をたまわりたいし、と皮肉な敬語の裏に、おごりたかぶったキザなウヌボレが見えすいている。長平への戦闘意識で、頭の中はモウ

モウといっぱいだった。

「成功すれば後援者から独立できるのよ。きつと、成功するわ。なぜって、莫大な援助なのよ。事業の成功率なんて、出だしの資金次第だと思うの。事業の実質的な主権を私が握れたらね。それは夢じゃないでしょう。いいえ、必ず実現してみせる。それも、遠くないうちに。そしたら、あなたにも、どんな約束だって、果してあげられるわ。あなたが私のためにして下さった何十倍の物もね」

思いやりを含めたような言い方をしながら、侮蔑、嘲笑が露骨であつた。

青木の癪は鋭どすぎて、弱すぎる。関所の二セ手形がゲキリンにふれるのも仕方がないな、と、あきらめて、

「大阪の事業団体で、だれ？」

「極秘よ。まだ、いえない。御想像にまかせるわ。銀行屋さんでも、紙屋さんでも、印刷屋さんでも、高利貸でも」

「すると、その中のどれでもないわけだ」

青木のそんな利いた風な言い方ぐらい、厭気ざしたら、我慢のならぬものはない。

「どこかで、休もうよ」

と、青木が云うのに耳もかさず、颯々^{さっさつ}と歩きつづけて、

「大阪と東京を股にかけて、女手ひとつでしょう。身体をもたせるのが、たいへん。でも、死ぬまで、やるの。ほら、ごらんなさい。毎日、ブドウ糖を」

腕の静脈をだして見せた。青木は物欲しさをそそられる代りに、苦笑を返して、

「今からそれじゃア、大成おぼつかないぜ」

「私の雑誌はね。創刊号に七十万刷ります。三号には、百万にして見せるわ。私の欲しいのは、時間だけ。ただ、忙しいの。十分間が一日の休養の全部だわ。これじゃア、大成おぼつかないわね。じゃア、失礼させていただくわ。いずれ、又、ゆっくりね」

せつ子は自動車をとめた。そして、悠々とのりこんだ。他の誰とも人種の違う人のように。

五

「ちよつとドライブしてちようだい。そう。海の香のするあたり。聖路加病院の河岸がい
いわ」

そう運転手に命じて、せつ子はクッションにもたれた。長平の名刺をとりだして見た。名刺持参の者に御引見の榮をたまわいたし。見れば見るほど、底意地のわるさが伝わってくる。破り捨てようとしかけたが、大切に、ハンドバッグへしまいこんだ。名刺を破りずけるぐらい、いつでも、誰でもできることだ。小さな腹いせは、その小さな満足によつて、敗北のシルシにすぎない。そして名刺をしまいこむと、いつからか、あるいは、たぶん昨日からかも知れないが、雄大な新たな自己が生れつゝあることを知って、満足した。

「山手を走つて。議事堂へんね」

そして放二の社へ辿りついたときには、晴れ晴れとした自分を見出すことができた。

「御招待の席を変えたのよ」

せつ子は放二にささやいた。

「築地の疑雨亭という料亭。待合かしら。古風で、渋くツて、それで堂々としていてね。大庭先生がお好きになりそうなウチなのよ。そこへお連れしてちょうだいな。ここに地図があります」

「ハア」

「大庭先生は、どんな芸者が、お好き」

「わかりません」

「美人で、娼婦型で、虫も殺さぬ顔で悪いことをしているような人？」

「どうでしょうか」

「案外、あたりまえの、つまらない美人がお好きなのね」

「さア。見当がつかないのです」

「芸者遊びはなさらないの」

「なさるでしょうが、ぼくはその方面の先生の生活にタッチしたことはありません」

「放二さんはオバカサンね。先輩に接触したら、裏面の生活を見る方が勉強になるわ」

「ぼくは反対だと思うのです」

「どうして？」

「遊ぶときは、誰でも、同じぐらい利巧で、同じぐらいバカだと思うのです」

「マジメの時は？」

「ぼくは、まだ、人生で何が尊いものだか、わからないのです」

「せいぜい、長生きなさい」

せつ子はバカらしくなったが、気持を変えて、

「大庭先生は短気の方？」

「いいえ。むしろ、寛大です」

「しかし、皮肉家ね」

「いいえ。いたわりの心が特に先生の長所だと思います」

「私のこと、どんな風に考えてらっしゃるらしいの？」

「今のところ白紙だろうと思いますが」

放二は考えて、

「ありのままのあなたは、先生の一番近い距離にいる女の方だと思うのですが」

「一番近い距離って、なんのこと」

「魂のふれあう位置です」

別れて去ろうとすると、放二がよびとめた。

「小さな反撥や身構えはいけないと思います。ほんとうの奥底に通じあう道をはばみます」

「なんのこと？」

せつ子の目が光った。名刺の件を知っているのかと思ったのだ。せつ子の鋭い目の色を見ると、放二は、あきらめたように、目をふせた。

せつ子は車をひろって、招待の手筈のために駆けまわった。爽快な闘志がたかぶり、身がひきしまるようである。

六

長平は放二の案内で招待の席へ送りこまれた。通されたのは大広間だが、外はまだ明るいのに、雨戸がしめきつてある。テーブルに面して床の間を背に大きな座布団がたった一枚、主持ち顔にしかれているのは、今夜の客が一人であることを示しているから、長平はドツカとすわる。

はこばれた蒸しタオルで顔をふいているうちに、多くの女たちが出入して、広間のナゲシにはガンドウのような燭台をぶらさげてローソクをともし、テーブルの両側には笠のないうスタンドのような燭台をたててクリスマスの大ローソクをともした。それが終ると電燈を消してしまった。

奇妙に思った長平が何を女たちに問いかけても返事をしてくれない。いそがしく出入している女同志も、言葉を発する者がない。

広間がローソクの明りだけになると、ひきつづいて酒肴がはこばれる。セキを切つて落したようにキリもなく渋滞もない。女たちの出入に一段落がついたときには、長平は多くの芸者にかこまれて、酒をさされていた。一時にワツと、無言の酒肴に襲われたような様であつた。

「先生は洋酒がお好きとうけたまわりましたが、どれがお気に召しましたでしょうか」

芸者はテーブルのかたえから用意の洋酒をとりだして見せる。ジョニーウオーカア。ナポレオンのコニヤック。その他、シャンパン、アブサン、ジン。いずれも然るべき品物らしく、敗戦国で拝まれるのがフシギの品々である。

「コニヤックは珍しいな。十何年ぶりの再会になるだろう。これを、もらいましょう」

「ハイ」

「時に、ローソクは、どうしたわけですか。今日は東京の停電日ですか」

「いいえ。なんのオモテナシもできませんので、趣向したのですけど、先生のお気に召しますか、どうか。開店二日目の記念日なんです」

「このお店は今まで休業ですか」

「いいえ、私自身の開店記念日。大庭先生を招待させていただくのは、身にあまる光栄で

「ございます」

長平は驚いて芸者を見つめた。芸者か、店の女将かと見ちがえたのは道理である。洋髪ではあるが、場所柄では素人とはうけとれぬ和服。五尺五寸にちいかと思われる長身が一きわ目立っていたから、この女の出入には特に目をひかれていたが、これが梶せつ子とは。言葉の様子では、どうも、そうらしい。

「あなたが梶さんでしたか」

「ハイ。どうぞ」

と、せつ子はコニヤックをつぐ。つぎ終ると、

「お気に召すほどのオモテナシはとてもと存じますが、どうぞ、ごゆっくり」

軽く、しかし、丁重に一礼して、すぐ立ち去った。管々くだくだしいことは一切ぬき。ただ存分に遊んでくれという神妙な風情である。そして、軽快な、行き届いたゆかしさがしのばれるような風情である。

せつ子に代って他の芸者たちが交々こもこもさす。酒もあれば、ビールもある。

「いろいろと、そうは、のめないよ」

「これは酔心の生一本だそうですね」

「ほう。日本酒まで珍しいな」

芸者の人数が多すぎて、一々個別的な応対はしてられない。ローソクの明りが薄暗いせいもあるが、多勢に無勢、一々の美醜を念頭にとめるヒマもない。半玉が一人。若い美人も、婆さんも、年増もいるし、洋装も三人いる。

七

長平は酔った。彼はほとんど用心を忘れていた。ニセ手形の件も、それほど気にかけてはいない。何かの反響はあるはずだし、この一風変った趣向も根はそこにあるのかも知れないが、何がとびだしても、成行にまかせて、ただ見ていればよろしいという考えである。やがて少女が座布団をひきずるように現れて、広間の下座正面へ置きすてて去ると、ヤブニラミの妙な男がチヨコくとローソクの影をくぐるようにとびだしてきた。キッチンと坐つて、オジギをする。落語なのである。

詩のようなものの朗読にはじまって、ランランラン、ラララと唄って、賑やかなこと、満座は抱腹絶倒、長平も例外ではない。涙がにじむほど笑い痴れた。しかし、

「こんな顔は珍らしいですなア」

と云つて、落語家が目玉をクルクルやると、薄暗がりというものは、演技と現実が分離して見える。おかしきに変りはないが、この顔で苦勞しました、という因果物的なイタマシサが、見物人の笑いのあとに残るのである。明るい電燈の下とは違う。

落語家が去ると、いつのまに來ていたのか、せつ子が長平に寄りそうように坐つていて、「御多忙の先生はアプレゲールの寄席など御立寄りの機会もあるまいと思ひまして、よんでみました、ガサツで、おきき苦しかったです」

「いいえ。ごらの通り、抱腹絶倒、戦後これほど笑つたことはありません」

「そうですか。では、ほかに二三用意がございますけど、やらせましょうかしら」

「どうぞ。見せて下さい」

「それじゃア、ちいさん」

せつ子に指名されて立ち上つたのは、洋装のうちの一人であつた。

女は十歩ほど歩いて立ちどまり、正面を向くと、体操の予備運動か深呼吸のようなことをやっている。ハハア。これがポーズなのか、と、長平は氣がついて、手品だな、と思つた。しかし、ちがう。降霊術らしい。

苦悶しつつ身もだえるようにしながら、静かに一とまわり、二まわり。すると着ているものが肩と腰の上下二ヶ所からスル／＼おちはじめた。バラリと落ちきる。シュミーズをきていない。ストッキングだけはいているが、モモから上は一糸まとわぬ裸体のようである。はなれているし、薄ぐらいから、ハッキリしないが、そうらしい。

女はこれから沐浴するように、かがみこんで、一方のストッキングをぬぎはじめた。ぬぎおわるとき、軽く片足を後に蹴って、股をチラとのぞかせる。

次には正面を向いて、腰を下す。股をひらいて一方のストッキングもとりはじめた。股をひらいているが、片手がその前後を滑るように動きつづけているから、全裸かどうかはまだ見分けがつかない。

ストッキングもぬいでしまうと寝たり起きたりデンマーク体操のようなことをやって、一反転、立った。それから、唄をくちずさみながら、踊りはじめたのである。

「ありふれたストリップですけど」

と、せつ子がささやいた。

低い変な声。腰のうごき。人マネではあるが、かなり調和がとれて、因果物の域を脱している。

日本人には珍しく柔軟な、程よいふくらみをもった裸体のせいで、相当のエロチシズムであつた。

助平根性をかきたてて、ひどい目にあわせようという魂胆かな、と長平は思った。

八

ストリップの女は踊りながら、燭台を一つ一つ手にとって、吹き消しはじめた。壁面のローソクを消し終ると、テーブルの左右の燭台を吹き消すために長平の後をすりぬけた。片足がゆるやかに長平の頭上をまたいだのである。まごう方もない全裸であつた。そして、次の灯も消え、長平の視界からは、すべてが一瞬にはなれてしまった。広間は真の暗闇。一語を発する者もない。

正面下座からパツと光つた。又、ひとつ。誰かが、懐中電燈をつけたのである。誰だか分らない。懐中電燈は客席の天井をてらしている。二本の光がいりみだれて天井をさわいでいるが、下の方へは降りてこない。照らす人も見えないが、客席の様子も知ることができな

二本の光は天井を交錯しながら、ジリジリと客席の方にすすんでくる。誰かが両手に懷中電燈を握りしめて、こっちへ歩いてくるらしい。

長平の左腕に誰かの手がふれた。軽くさするように這い降りる。そして、長平の手がやわらかい女手に握られた。せつ子の手だ。

長平はされるままになっていた。光の主は客席の前にせまっている。二本の光芒は客席の真上をクルクル狂いみだれている。

客席には微かな音もなく、長平の四囲からなんの気配も感じる事ができなかった。ただ左手が、かるく、あつく、女の手に握られているだけであつた。

色仕掛かな。ローソクの趣向もそのせいかな、と、長平は思った。これから何事が起るのだろう。何かが起るに相違ないが、ただ成行を見ていることだ。握られた手のくすぐつたい感触は彼の酔心持をなまめかしく搔きたてた。

光源は客席の前まで迫つたが、何事も起らない。光はいたずらに天井を駆けめぐり、光源はすでに後退をはじめた。ついに下座のドンツマリへ後退した。光の動きがゆるやかになり、のろのろと天井を這い、光源の真上で止まる。すると、消えた。再び、真の闇。

女の指に力がこもつた。三秒。五秒。グツと握りしめた。いよいよ。長平はつづくもの

を期待したが、握力にはわかに弛んだ。とけたのだ。何秒かの空白ののち、長平は自分の手がすでに誰にも握られていないことをさとした。

ポツと光った。下座がてらされている。新しい光源はアベコベに客席にあつた。

下座の奥手に、何かポーズしているらしい女の素足がてらされている。膝から下しか見えない。光が徐々に上へうごく。股。下腹部。全裸である。さっきの女ではないらしい。のびのびと、上背があるようだ。円錐形にもりあがる乳房。胸から肩の肉づきが豊かである。アゴ。女は両手を後にくみ、仰向けにポーズしていた。全身が光の中にうかんだ。女の手が静かに後をはなれて、同時に顔が正面をむいた。梶せつ子！ せつ子の裸だ！ せつ子の目に微笑がこもった。とたんに光が掻き消えて、せつ子の裸体は暗闇に没してしまつた。

数秒後に、こうこう皎々と電燈がついた。しかし下座の奥手には誰の姿もなかった。

「額縁ショーというんでしようか」

彼にささやく声がある。せつ子である。彼によりそつて、さつきと同じ和服姿で。

長平がおどろくヒマもなく三たび電燈が消えた。再び下座の奥手をてらす者がある。女の脚がてらされている。股へ。下腹部へ。全裸である。小柄で、ふとつた女。せつ子でも

ストリップの女でもない。全身がうつつた。肩と腕に数匹の蛇がまきついていた。

九

蛇姫のショウが終つて、皎々と電燈がついた。蛇姫も洋装の一人であつたらしい。ストリップの女と蛇姫が居なくなつて、洋装は一人になっている。

「皆さん、お酌よ」

せつ子は一同に命じた。

「これからは無礼講よ」

と、せつ子は一同に笑いかけて、

「先生。あとに残つたのは、みんな芸なし猿なんです」

「あら、ひどいわねえ。芸者はあんな柄のわるい、ストリップなんて、できないわよ」

と、婆さん芸者がシナをつくつて長平にナガシ目をくれると、

「お蝶ちゃん。芸者のストリップおやり。浅い川よ。私、三味線ひくわよ、お姐ちやアーン！ 三味線、もつといでえ！」

年増芸者が、たいへんなシャガレ声。

それをきくと、芸者たちの目が光った。たちまち一同がひしめくように、

「そうよ。お蝶ちゃん。浅い川よ。いいわねえ。すごいわねえ。可愛いわねえ。色ッぽいわねえ」

お蝶ちゃんとよばれた可愛い半玉は長平の隣に座をしめていたが、真ッ赤になって、うつむいた。誰に助けをもとめようかと迷ったすえ、おずおずと長平によりそって、訴えるように顔を見あげた。絵からぬけでたような顔。羞恥に真ッ赤に燃えている。切れの長い目に熱気がこもり、感情にうるんでいるのである。

「アラ、色ッぽいわねえ。お蝶ちゃん」

「旦那ア。やけるわよう」

「あの目。たまらないわねえ。男殺しイ。子供のくせに。すえが思いやられるわよう」

キヤツ、キヤツ、と大変なさわぎ。お蝶は耳の附根まで真ッ赤にそまり、コチコチに身動きができなくなつて、長平によりそつたまま、なやましい目を伏せたり、上げたりしている。

「いいわよ。お蝶ちゃん。覚えといで」

と、婆さん芸者はお蝶をにらんでおいて、年増たちに、

「じゃ、あんた方、芸をだしなさい。踊りがいいわ。槍さびがいいわね」

四人の年増が立ちあがる。婆さんが三昧をひこうとすると、洋装の若いのがツと立って、
「私がひくわ」

と三昧線をうけとる。すると年増の一人が、

「そう、そう。夢ちゃんの糸がいいわ」

「ひどいわねえ」

婆さん芸者は怒って睨む。夢子の糸で、婆さんが唄う。四人は踊りはじめた。

すでに長平は感づいていた。踊っている四人の年増は男なのだ。声でも分るし、電燈の下では扮装がハッキリしている。しかし踊りはたしかなものだ。所作がやわらかい。

婆さん芸者は本物の女らしいが、カツラ頭で男らしいところもある。洋装の美人芸者と半玉だけは本物の女であろう。

「あの四人は男娼ですか」

長平がきくと、せつ子はうなずいて、

「ええ。この席には女は一人もおりません」

「え？ 洋装の人は髪の毛が本物でしょう」

「ええ。ですけど、男なんです。お蝶ちゃん」

せつ子は半玉を自分の方に向けさせた。お蝶はうるんだ目でジッと見あげる。せつ子はカツラに手をかける。お蝶は真ッ赤になった。せつ子はスッポリ、カツラをぬいだ。少年であつた。

「別室へ参りましょう」

せつ子は長平の手をとって立つた。

十

そこは数寄屋造りの別棟であつた。温泉風に浴室も附属している。居間に食卓の用意ができて、長平の好きなコニヤックも、ほかの洋酒も、酔心も、とりそろえてあつた。

「お風呂はいかが？」

「それには及びません」

「お寢床もしいてございますから、どうぞ、ごゆっくり」

せつ子は長平にコニヤックをついで、

「先生。のみほして。私にちょうだい」

長平のグラスをうけとり、ついでもらつて、一息にのむ。さしては、もらい、数回つづけて一息にのんだ。せつ子の目の縁はバラ色にそまつた。

「悪趣味の女とお思いでしょう。因果物ばかりお見せして」

「いいえ。たいへん有りがたく思いましたよ。珍しいものを見せてもらつて。ところで、あなたは、どっちのあなた？ 裸のお方かな？ 暗闇で手を握つたお方？」

「どっちが、おすき？」

「梶せつ子さんは、どっちかな」

「二人ともよ。そして、好きなほうよ。どっちも私ですもの。先生。手を握りましょうか」

せつ子は膝をよせて、長平の手をとつた。

「どう？ 覚えてらッしやる。おんなじ？」

「わからないね」

「じゃア、こう」

グツと力をこめてみせた。

「なるほど。それで、わかった」

せつ子は笑って、

「でも、先生。不安を感じませんでしたか」

「どうして？」

「私ね。あとで、男娼の手にすりかえさせようかと思ったんです。はじめの計画は、そうだったの。男娼はよろこぶわ。暗闇で先生に頬ずりしてよ。甜^なめるわよ」

「どうして、そんなことがしたいんです」

「ひどい方」

せつ子は媚をためて睨んだ。

「なぜ青木さんに変な名刺もたせてよこしたんです。イタズラッ児。もっと悪意にとつたわ。でもね。イタズラッ児の仕業と思つて我慢してあげたんです」

「悪意にとつても、かまわんのさ」

「先生は私を悪い女とお思いなんでしょうね」

「そうきめてかかれば、わざわざあなたを見物に来やしないさ」

「私は同情はキライなんです。そして、ジメジメした人情も」

「キライと好きは生涯ハッキリしませんよ」

せつ子は長平の手を両手でとって、グイとにじりよって、大胆に見つめた。

「先生は私のどこがお好きなの」

「今日のあなたは一流だよ」

「ビョツと思いついただけよ」

せつ子は静かに唇をよせて、

「先生は一流ね。なんでも、ヘイチャラなのね。一流でなければダメだわ。青木さんなんか、ダメ」

「一流の人間は三流四流を好むものかも知れないよ」

「じゃア、私は四流のパンパンよ」

せつ子は長平のクビにまいた腕にグイと力をこめて、下へ倒れた。泣声をたてて、唇を押しあて、せつ子は理性を失った別人であった。唇をはなして、

「さっきの裸体は踊子よ。私の裸体は、もっとキレイ。もっとステキだわ」
情熱にふるえて、ウワゴトのようだった。

十一

長平の離京は一週間ほどのびた。せつ子に全集の発行を許すについて、他の出版社との行きがかりから、いろいろ雑用があつたからである。

放二と記代子もせつ子の社で働くことに話がきまつたが、ちようど放二たちの社は経営難で、売れない雑誌を廃刊し、事業を縮小する必要にせまられていたから、この方は面倒がない。渡りに舟と編集長の穂積までせつ子の方へ譲り渡す始末であつた。

いよいよ明日は離京という晩、長平がおそく宿へもどると、茶室に青木が待っていた。

「明日はお帰りだつてね。べつに大した用もないんだが、お名残りおいしいから、ゴキゲン伺いにきたのさ」

相変らずの皮肉な口調であつた。

「一週間、君にも、梶女史にも、北川少年にもお目通りしなかつたから、奴め自殺しやがつたかとお考えかも知れないが、ナニ、ぼくのことなんか爪の垢ほども考えてやしないだろうがさ。ハハ。しかし、お名残り惜しいんだ。純粹にそれだけだよ。恨みを述べればキ

リがないがね」

青木は笑って、

「知ってるんだよ。あの晩、君と梶女史が待合に泊ったことを。ハハ。つけたんだよ。梶女史に会いたくつてき。なにも、あなた、ぼくがどれほど落ちぶれたって、あなた方がシツポリなんとやら、それを突きとめるためにつけるほどケチな根性はもたないさ。ねえ。そうだろう。女房があなたが好きで先刻逃げられたぼくだもの、今更ねえ。だがさ。待合の陰にかくれて一夜をあかして、あなた方がついに御帰館なきことを知らざるを得なかった。ぼくの胸中というものは、甚だ俗ではあるが、万感コモゴモでしたよ」

それを言ってしまうと、青木はかえって晴れ晴れしたようであつた。彼は明るく笑つて、
「それから、ぼくが、どうして生きていたと思う？ いやさ。恨みを述べるわけじゃア、ないですよ。アベコベなんだ。その一夜が、転機なんだよ。万感コモゴモの次に、ホンゼンとして心機一転。それほどでもないが、なんとかしたと思いたまえ。ここ一週間、ミミズみたいに、どこか暗いところを這いずりまわり、のたくりまわってきたがね。実はね。今日は又、君の一筆が所望なんだ」

彼は益々明るく笑いたてて、

「実はね。梶せつ子の新社へ一介のサラリーマンとして採用してもらいたいんだ。恨みも迷いも、すてたんだ。それを捨てるのに、一週間、かかったんだよ。ねえ、君。考えてみれば、ほかに、オレみたいな老骨を拾ってくれる会社はないじゃないか。誇りなんぞ、持つてやしませんよ。生きるには、食わねばならず、食うには、どこかで拾ってもらわざるを得なくなったからですよ。枝葉末節を語ればキリがないが、荒筋はそれだけさ」

「働くポストは」

「門番でも、事務員でも、編集でも。長と名のつくものを望まないよ。女房に逃げられた男が、ふった情婦の店で働くのに御慈悲の長は所を得ていませんよ。まア、当分、考えることを探すわけさ。もし人生に考える価値のあるものが在ったとしたらね」

長平はせつ子に当てて手紙を書いた。青木を使ってくれという依頼の。なぜなら、そのことに不賛成ではなかったから。

「ありがとう。女房が、イヤ、前女房が、銀座のバーで働きだしたよ。今度上京したら寄つてくれよ。たのまれたんだ」

そして青木は立ち去った。

翌朝、長平は東京を去った。

娘ごころ

一

「たまには、つきあえよ」

と、青木が放二をさそつたが、

「でも、校正を急がなければなりませんから」

放二は明るい微笑で応じたが、額や頸には脂汗がういていた。

「残業、又、残業か。ジミな人だな。顔色が悪いぜ。お嬢さんが淋しがっていらッしやるじゃないか。よく働き、よく遊べ、さ。ねえ、記代子さん」

記代子は帰り仕度にかかりきつて、顔もあげず、放二をさそいもしなかった。

「じゃ、お先きに」

二人はそろって先にでた。

せつ子の新社は多忙であつた。けれども雑誌編輯部にくらべれば、出版部は大きにヒマな方だ。放二も、記代子も、青木も、出版部をまかされていた。そして、もと放二たちの編集長の穂積が出版部長であつた。

せつ子はお義理で入社させた連中をみんな出版部へ集めたのである。それは雑誌の編集に特に抱負があつたからで、編集上の見識や才腕を特に見込んだ者でなければ、雑誌部へは入れなかつた。

「青木さん。ビール、のませる？」

「やむをえん」

「たびたび、相すみません」

青木と記代子は、ちかごろ、たいがい、一しよであつた。青木は、そのことで、ほろにがい思いをしていたのである。

記代子は放二を怒っているのだ。なるべく残業するようにして、一しよに遊ぶのを避ける様子があるからである。青木はそれを見かねて、若い二人を仲よく遊ばせてやるために、時々二人をさそつたが、放二はそこから身をひくようにして、青木と記代子二人だけで

一しよに歩くのが自然になった。青木はつとめて放二を誘うようにしたが、記代子は放二を誘わなくなった。

暑気が加わつてから、放二のからだは、めつきり衰えていた。二度、軽く血をはいたことがあつたが、それを誰にも悟られぬようにしていた。

少年時代から病弱で、寝たり起きたりの生活はウンザリするほど重ねてきたが、養父母の仁愛ふかい看護の下で、彼が体得したことは忍耐であつた。

あるとき、放二はオリムピック・マラソン選手の戦記をよんだ。彼らは時々ある地点に於ては、激痛のあまり知覚を失つてしまうのだ。手も足も動かなくなる。放置すれば、倒れる一瞬である。天水桶をみつけて、すがりつく。頭から、かぶっているのだ。又、歩きます。知覚がもどり、彼は走りだしている。苦痛を超える、よろこび。坂がある。果して、駆けあがる力があるだろうか。疑いに負けてはならない。あらゆる苦痛をのりこして、走りつづけなければ勝つことができないのである。

一番健康な人のマラソンと、病人と、よく似ている、と放二は思った。マラソン選手は高熱のウワゴトの状態で走りつづけるのだ。苦痛に耐えて、生きぬき、走りつづけているのは病人だけではないのだ。人生が、そういうものなのである。凡人は途中でおりたり、

落伍してしよう。まだしも病弱な自分は、その宿命として、おりては負けることをさとして。そして、選ばれた優勝選手の心境を理解することもできるし、ややそれに似た日々を体験もしている。

少年の日、放二は病床で、そんなことを考えたことがあった。

二

この夏の暑氣いらい、急速に衰えはじめた放二は、養父母の慈愛の手にみとられていたころとちがって、仕事もあったが、休息すべき部屋がなかった。

早めに戻って休息するのが何よりだったが、寝ていると、彼の部屋をたよりにしている女たちに暗い気持を植えてしよう。病氣と闘っていることを、彼女たちに悟らせてはいけないのである。

最良の方法として選んだのは、ねる時間まで残業していることだった。仕事もたしかに忙しかったが、それを残業にのばしてやると、仕事を半ば休養に中和することもできるのである。

こまるのは、記代子と青木の誘いを拒絶しなければならないことだ。

せつ子は放二と記代子に、二人が当然結婚すべく定められているかのような言い方をした。それが記代子に現れる反応は敏速であつたし、確信的であつた。せつ子の認定を得ていることは、内々叫びをあげなければならないような馴れ馴れしい表現をしても、顔すらも赧^{あか}らめさせない支えになるのであつた。

しかし、放二が彼女の誘いに応じる度数は、三日に一度に、五日に一度になる。そして、青木は好二を誘うが、記代子はもう誘うこともやめてしまい、話しかけることも、なくなつてしまつた。

それでいいのだ、と放二は思うのである。病弱な自分は、結婚には不適な人間だ。相手を不幸にするだけだから。記代子が積極的になるほど、放二は身をひく。ぼくなんか、忘れて下さい。それを説明することはできるが、人生は説明では解決がつかない。放二は説明の代りに身をひいた。そして記代子が離れて行くのを、静かに、しかし、愛情をこめて見送れたかつた。ごきげんよう！ ボン・ボアイヤージュ！ というように。

「若い者は、手間をかけたがるものさ。曲つた方へ、曲つた方へ、歩きたがるんだ」

青木は記代子をひやかした。しかし、若い者だけのことじゃない。自分にしろ、礼子に

しろ、もつと、ひどいようなものだ。

記代子はなぜか顔色を変えた。一息にグラスをのみほして、

「もつと、ちょうだい」

「あんまりハデな飲み方をしないでくれよ。お嬢さんがのびちやうのは、御当人は太平樂かも知れないが、連れの男は、憎まれたり疑られたり、楽じゃないからな」

記代子は、又、一息にほした。

「お代り、ちょうだい」

「よせよ。もう、あんたは六パイだ」

「でましよう」

道へでると、記代子は腕をくみ、肩をよせた。グイグイ押しつける。足はシツカリして、酔つてゐるようにも思われないから、青木は小娘の大胆さに当惑して、

「もう、お帰り。駅まで送るよ」

「イヤ」

「もう、のめやしないよ」

「話があるのよ」

「じゃア、喫茶店で休むか」

「いいえ。歩きながらが、いいの」

記代子は暗い道へ曲りこんだ。

「なぜ、いじめるのよ。なぜ、意地わるするのよ、毎日」

「え？　どんな意地わるしたろうね」

「してるわ。なぜ、放二さんを誘うのよ。毎日、きまつたように」

三

やっぱり子供だな——と青木は思った。放二を思いつめているのだ。それは分りきつたところだが、それをこんな見えすいた言いがかりで表すところが幼い。

青木は笑って、

「お嬢さんや。こまつた人だな。あなたの気持はわかるが、ぼくがいたわってあげる気持も察してくれなくちゃアいけませんよ」

「だから、私をいじめてるじゃないの」

「どうして？」

「男は男同志って、そんなことなの？」

「妙なことを云うね」

「放二さんをいたわって、私をいじめてるのよ。私なんかは、いたわる価値がないのね」

「やれやれ。そうか。お嬢さんを説得するには、言葉の厳密な選択と行き届いた表現が必要なんだな。いいかい。記代子さん。ぼくがいたわってあげているのは、あなたと放二君の、御二方だよ。二人の恋人の一方をいたわることは、他の一方をもいたわることにきまつてるじゃないか」

「私は、どうなつても、かまわないのね」

「やれやれ。どう云つたら、表現が行き届くことになるのだろう」

二人は小さなバアの前を通りかかった。記代子は青木を取りおさえでもするように、腕に力をこめて、押した。

「ここで、休むのよ」

「え？」

そこは礼子の働いているバアだ。記代子に教えたはずはなかったが、知っている様子で

ある。

「こゝに、ぼくの昔の奥さん、働いてるの、知ってるんだね」

記代子は睨んで、答えない。

「誰が教えたの？」

「休みましようツたら」

記代子は身体ごと押した。

「ま、待ってくれ。ぼくの立場を考えてくれよ。修学旅行の女学生が色町をひやかすような気分で、ぼくをオモチャにしてくれるなよ」

「女学生じゃなくツてよ」

「すまん。しかし、な。別れた奥さんがお客さんにサービスするのを見るだけだつて悲しいんだ。あれがふられた亭主だなんて、そんな哀れな顔を見たがっちゃ、いけないよ。それに、今日は、持合せがないのさ。別れた奥さんにたかつて飲むほど、みじめな思いをしたくないんだ。それぐらいなら、泥棒がマシさ。なア、記代子さん。あんた、ぼくが泥棒なみに生きてきたこと、見て、知ってるじゃないか。しかし、別れた奥さんに、たかりたかアないんだよ」

記代子の目にあらわれたのは、軽蔑の色だけだった。

「私がおごるわ」

記代子は強い力で、青木を地下の酒場へひきずりこんだ。客はかなりたてこんでいた。

記代子はいてるソファアヘかけて、

「カクテル、二つ。ジん台の辛いカクテル。それから、礼子さん、よんでね。こちら、礼子さんの昔の旦那様。意気地なしよ」

記代子の態度は、なれていた。そして、見ちがえるほど、大人びていた。

「あなた、この店へ来たことがあるね。前に」

「穂積さんと飲むとき、いつも、ここよ」

そうか、と青木は思った。そして、それを今まで黙っていた記代子、突然それをあばきだした記代子の心を考えた。

四

礼子がカクテルを持って現れた。記代子は軽く会釈して、

「つれてきてあげたの。意気地なしを。入口でふるえてたわ。ほら、蒼ざめてるでしょう」
「や。こんちは。ぼくの昔の奥さん。まさか、ふるえもしないがね。しかし、貧ゆえには、ふるえもするさ。今日は持ち合せがないんでね。まさか昔の奥さんに飲ませてもらいたかないからさ。それで、ふるえましたよ。すると、お嬢さんが、おごるというんでね」

青木は笑いながら、懐時計をはずして、

「明日、うけだしに、くるよ」

「もう、こないで」

礼子は懐時計を押しかえした。そして、記代子に、

「お嬢さんも、バアへいらツしやるの、よくないわ。女のくるところじゃありませんわ。」

大庭先生に叱られますよ」

記代子は別れた夫婦の再会を、好奇の眼差で凝視していた。グラスに手をふれることも忘れて。

礼子の言葉に短い観劇をさえぎられて、いさゝか苦笑してグラスをとりあげたが、
「礼子さん。新しい恋人、みつかつて？」

礼子は興ざめた顔をそむけた。それを見ると、記代子の目は興にもえて、

「女がきちやいけないって、なぜ？ 礼子さんだけは、大人だから？」

「まア、そうよ」

「大人って、どういうこと？」

礼子は顔をそむけて、答えなかった。

「たぶん、恋愛の冒険者だから？ そうでしょう。旦那様をすてたから？ 家庭の殻をとびでたから？ そうでしょう」

「そうよ」

礼子はうるさそうだった。すると記代子の目に生き生きと微笑がこもった。

「子供だわ。礼子さんは。十いくつのお姉さんと思われぬ。女学生のように」

「あら、そう」

「長平叔父さんのどこがお好きなの？ 有名だから？ 才能があるから？ 芸術家だから？ お金持ちだから？ 威張ってるから？ そのほかに、何か、あつて？ 平凡。少女趣味ね」

礼子の目は怒りに燃えたが、記代子は冷静に見返して、目にこもる微笑は微動もしなかった。

「英雄気どりの偉い人、偉い人を崇拜する人、どっちも、きらい。子供たちと同じように、お人よしで、ウヌボレが強いだよ。欠点を見せたがったり、欠点を美点のように見せたがったり、みんな、きらい。偉くない人はウヌボレ屋じゃないから、欠点は隠さなければいけないと思うのよ。それで、いつもお化粧しなければいけないと思うのよ」

記代子はいくらか亢奮して口をつぐんだ。それは言葉の表現が思うようにできないためのようにも見えた。グラスをほして、

「でましよう」

青木をさそって、立ち上った。

「いかほどですの」

「ここは、いいの」

記代子は笑って、

「そんなこと、なんにもならないことよ」

「まア、いいさ。ばくの昔の奥さんの思うようにさせてあげたまえ」

「そのワケがあるの？」

「物事の本当のワケは誰にも分りやしないのさ」

今度は青木が記代子を押しして外へでた。

五

「どうして、お金払わせなかったの？ なぜよ」

外へでても、記代子はきいた。ただごとならぬ面持に、青木は苦笑して、

「つまり、ぼくの昔の奥さん、ぼくをあわれんだのさ。たまに会ったんだ。あわれまれてやらなきや、昔の奥さんのお顔が立たんじやないか。今晚だけのことだから、あなたも我慢して、つきあってくれたまえよ」

「あわれんでもらいたいの」

「彼女があわれみたいのさ。だから、あわれまれてあげなきやいかんじやないか」

「うそよ」

記代子の否定は激しかった。

「うそだの本当だのと争うほどのことじゃアないやね。あなたのお気にさわったとすれば、ぼくがナイトの作法に未熟だったというだけのことさ」

「うそです。私が礼子さんをやりこめたから、あなたは礼子さんをかばってあげたのよ」

「こまったな。どうも、インネンをつけたがるお方だ。なア。記代子さんや。やりこめるツて、あなた、別にやりこめやしないじゃないか」

「いいえ、やりこめたわ」

「どんなふうに？」

「礼子さんは少女趣味よ」

「それは、たぶん、当っていますよ」

「だから、やりこめたじゃないの」

この少女のチグハグな論理の底に、何物があるのだから、青木には見当がつかなかった。

記代子はまだ幼くて平凡な娘だ。しかし彼女なりに礼子を一応観察してはいる。だが、観察の根底にどれだけの心棒があるのか。いったい、なんのために礼子の酒場へ自分をさそいこんだのか、それが青木にはわからなかった。

青木は不キゲンな記代子の肩に手をあてて、慰め顔に、

「なア。記代子さんや。あなた、なぜ、昔の奥さんの店へぼくをつれこんだのさ。ぼくが、あなたをいじめたからかい。あなた、本当に、ぼくがいじめたと思っているの？」

記代子は答えなかった。

あまり沈黙が長いので、ふとその顔をみると、たしかに涙にぬれているのだ。夜の灯のせいではなかった。

青木は放二を思い描いた。それがこの少女の胸をいかに惑乱せしめているであろうか、と。いたましい思いがした。しばらく言葉をかけるのも控えていたが、

「なあ。お嬢さんや。ぼくが毎日きまったように放二さんを誘うのはだね。あなたと放二さんが昔のようにむつまじい一対であれかしと願っているからだよ。あなた方は銀座でも人目をひく一対だった。そのような美術品をまもるのは側近の年寄の義務というものさ。ぼくの善意を素直にうけてくれなくちゃアいけませんよ」

「ひどいわ」

「なぜだろうな。ぼくには、あなたの云うことが分らないよ」

「放二さんは知ってるわ。だから、あなたが誘っても、ついてこないわ」

「なぜ、ついてこないの？」

「私にきらわれてること、知ってるから」

青木が言葉に窮していると、記代子は彼をさえぎるように立ち止って、

「私、子供は、きらいよ。子供なんか、つまんない。私、青木さん、好き。なぜ、察して下さないの」

記代子は青木を見つめていたが、にわかに振りむいて、駈け去った。

六

記代子の気まぐれな感傷だろうと青木は思った。放二によせる胸の思いが、迷路をさまよって出口をふさがれているせいだ。

翌日、青木は深くこだわらず、出社した。記代子の様子にも、ふだんと変りは見えなかった。

午後になると、どの部屋も暑くなる。青木はトイレットへ顔を洗いに行く。いつもの彼の習慣だ。ゆつくり顔を洗って、ふと隣りをみると、水を流して、手を洗うフリをしながら、こツちを見ているのは記代子であった。

「ヤ」

顔をぬらしているから、物を云うことができない。タオルで顔をおさえる。ふき終ると、

視線がかちあった。記代子の目は、食いこむようであった。

「今日、放二さんをさそつたら、承知しない」

言いすてると、すぐふりむいて、立ち去つた。昨夜のように駈け去りはしない。もつと確信にみちて、落ちついた態度であつた。

偶然の出会いではない。青木がトイレットへ立つとき、記代子は部屋にいたのだから。記代子は追つてきたのだ。

青木が部屋へもどると、記代子の姿は見えなかった。

記代子が戻つてきた。

「ライターかして」

笑いながら、青木に云つた。ライターをかりて、自分のデスクへもどり、タバコに火をつけた。イスにもたれて、タバコをふかしている。まもなく、むせびはじめた。タバコをすつたことがないのである。苦笑して、火をもみつづした。

「ハイ。あげましょう」

ピースの箱とライターを青木の方へ投げてよこした。

青木はかなり窮屈な思いにさせられた。記代子の言葉にこだわつたのだ。そして、放二

によけいなことを話しかけた。しかし、帰り仕度をするときには、放二を誘うことができなかった。

「ノドにつかえていたようね。放二さんを誘う言葉が」

記代子はあとでひやかした。

青木は浮いた気持ちにもなれなかった。のむビールのにがさが浸みるばかりである。

酔いがまわると、腹をすえて、

「記代子さんや。長平さんの姪御さんだけのことはあるよ。平凡なお嬢さんのような顔をして、頓狂なカラ騒ぎをやらかす人だ。しかし、とにかく、文学的でありすぎるよ。いかに良き人を思いつめたアゲクにしろさ。痴話喧嘩の果に、ぼくのようなオジイサンを口説くのは、ひどすぎますよ。外国の小説や映画にはありそうだがね。女王だの公爵夫人というようなお方がさ。王様だの公爵と痴話喧嘩のあげくに、奴隷だの黒ン坊に身をまかせて腹イセをするというような話がね。それにしても、ぼくに白羽の矢をたてるというのが、頓狂すぎるというものだ。お嬢さんや。よく、おききよ。あなた方の年頃では、遊びというものを、みんな軽く、同列のものに考えているのだね。しかし、男女の遊びは、別のものですよ。とりかえしがつかないのだからな」

「私は、遊びではないの！」

記代子は叫ぶと、すぐ立上って、大股に歩き去ってしまった。

青木は別の店で焼酎をのんだ。そして宿へもどると、彼の部屋に記代子が待っていた。

七

青木はわざとドツカとアグラをかいで、うちとけてみせて、

「やれやれ。疲れるなア。遊びたい盛りのお嬢さんが退屈して姿を消すまでつきあってあげるの。なんて、逞しい根気だろう。まさしく、面白ずくの一念だね」

「そう？」

「まアさ。あなたは昨日から怒りすぎるよ。もっと平静に話しあいましょう」

「あなたが、怒らせるのよ」

「怒らせるつもりで言ってるんじゃないんだがなア」

「いま、なんて云った？」

「……」

「面白ずくって、なによ。そんなふうには、見えて？ 私、遊んでやしないわ。離婚して、バアで働いて、礼子さん、甘ちゃん。文学的すぎるわ。私も、そんなに見えて？」

これが記代子の本心だろうかと思われた。

記代子の恨みは礼子をめぐり、礼子に比較して自己を主張しているのである。礼子のバアでも、記代子の態度は際だって大人びており、対立的な感情が尖鋭であった。

記代子の意識が礼子をめぐっていることは、青木によせる感情が、放二のせいばかりでなくて、かなり本質的なものであることを表している。そう思っているのだろうかと思われた。

礼子の離婚の原因が、長平のせいだということも、記代子は知っている。そして、礼子を少女趣味だと面罵しているのだ。

それらのことを考えると、記代子は礼子との年齢の差を無視しており、礼子が長平によせる対等の感情で、青木に対して思うように思われた。

してみると……青木は考えた。記代子の愛情の本当の根は、長平にあるのではあるまいか。えてして少女というものは、まず肉親に愛情をもつものだ。どっちにしても、彼自身

が本当の対象だとは思われなかった。

「ぼくの昔の奥さんが長平さんにあこがれて離婚したということ、誰にきいたの？」

「そんなことが知りたいの？」

「なるほど。別に知らなくともいいことらしい。だが、ねえ、お嬢さんや。ぼくの昔の奥さんは、たしかに文学的で、少女趣味ですよ。しかし、あなただってさ。文学的なお嬢さんに相違ないと思うんだね。なぜなら、現世に生きる人間というものは、一応常識というもの、思考の根柢におかなければいけないものですよ。だが、記代子さんは、限られた小さな現実を全部のものにおきかえているね。思考の根が、常識でなくて、あなたを主役にした劇なんだ。夢なんだよ」

「それでいいと思うわ。じゃア、あなたは誰のために生きているのよ。放二さんのためなの？ それとも別れた奥さんのためなの？」

「それは、人生というものは、云うまでもなく自分のためのものさね。しかし、自分の位置、限度というものを心得なければいけませんよ。あなたはツボミのようなお嬢さんだし、ぼくは花びらの散りかけた老いぼれですよ」

「そんなことが理由になるのは、ほかのことがあるせいね。正直に云えないことがあるか

「らよ」

「なア。記代子さん。もっと打ちとけて、茶のみ話をしようよ」

「イヤ」

記代子は立ちあがった。

八

青木は記代子を送つてでた。

「なア。記代子さんや。こんなことで、怒つたり、怒られたり、よそうじやないか。毎日、ノンビリ、コーヒーやビールや焼酎でもので、バカ話をし合つて、たのしく過そうじやないか。そうするうちに、二人の心が通じ合うようになると思うんだがね」

肩を並べて歩きながら、青木は懇願した。つとめて情慾を殺すには、そんな態度をとる以外に仕方がないのだ。そのくせ、立ち去る記代子を立ち去るままに放つておくことができないのは、可憐な記代子に断ちがたいミレンのあるせいだ。

相剋する二つの心を、興ざめた目で見送る以外に手もない。

「なア。よく考えてくれよ。ぼくは叔父さんの友だちなんだぜ。叔父さんというものは、あんたのオヤジの兄弟じゃないか。オヤジだの、オヤジの兄弟なんてものは、あなたの友だちと違わアね。ぼくだって、そうなんだ。ぼくは、あなたにとって、甚だ親切な友だちさ。あなたのオヤジや、オヤジの兄弟のようにね。しかし、本当の友だちというものは、こんなに親切ではないものなんだ。たとえば、若い者同志はね。ここをカンを違にしちゃいけないよ」

「喋るの、よして！　こんど喋ったら、駈けだしちゃう」

「こまったな。ちょつとぐらい、喋らなきゃア、歩きようがないじゃないか」

「うるさいッたら！」

記代子は激しくふりむいて、とびかかるように、手で青木の口を抑えた。青木はハズミをくらって、反射的に防禦の手をあげてしまったが、その小指が記代子の口にふれた。記代子は青木を見つめたが、力いっぱい小指をかんだ。

「痛……」

青木は苦痛にたえようとした。噛まれた指をハシタなくひっこめるのをこらえようと努めていると、記代子は再び、力いっぱい噛んだ。

青木は指が噛みきられたように思ったほどだ。あまりの痛さに茫然として、たたずんだが、記代子にみじめな思いをさせては、と、指の傷をあらためようとせず、ハンケチをとりだして笑いながら脂汗をふいた。

記代子是一部始終を見つめていたが、

「指みせて。どんなになった？」

青い菌型がハッキリついて、血のにじんだところもあった。

「痛かった？」

「うん」

「なぜ痛そうにしまったの？」

「しなかったかい？」

「泣くかわりに、笑ってみせたわ。なぜ、指の怪我をしらべてみようとしなかったの？」

「痛すぎて、ボンヤリしたのさ」

しかし記代子は見ぬいているのだ。青木が記代子をいたわるために、指の怪我すらしなうとしなかったことを。

青木の胸はふくらんだ。

「君、ぼくの指を本当にかみきるツモリじゃなかったの？」

「そうかも知れないわ」

青木は記代子をだきよせて、くちづけした。そして明るい道まで送って、

「ねえ、記代子さん。ぼくたちは毎日たのしい四方山話をしようよ。すると、二人の心が通じあってくるよ」

「ええ」

記代子はニツコリ笑った。そしてスタスタ行ってしまった。

九

青木はいったん宿へもどったが寝つかれなかった。思いたって、放二のアパートへでかけた。

放二はまだ帰っていないから、マーケットのオデン屋で一パイやりながら待つことにした。ここにいると、帰宅の放二をよびとめることができるのである。

「放二さん、いつも帰りがおそいってね」

「ええ。毎晩あたしが店を閉めかけるころにね」

「お酒に酔って？」

「いいえ。ビール一杯で真ッ赤になる人だから、一目で見分けがつくんですが、よくねえなア。とにかく人間、お酒をのんでるうちが花ですぜ。グツタリ疲れきってお帰りでき。お仕事が忙しいんですッてね」

「ぼくは御覧の通りだがね」

「上ッ方はね」

「冗談云ツちゃアいけませんやね。北川君が上役なのさ。年の功で、月給だけは、ぼくがいただいてるらしいがね」

「ヘッへ」

なんとなく来てみたものの、放二に打ちあけて語る性質のものではないようだ。たかが小娘の出来心だ。とまどつて人に相談しなければならぬようなウブな初心者ではないはずであった。

青木がとまどつたのは、彼自身の獣性についてゝあった。そして、彼を獣性にかりたてる複雑な心理についてゝあった。

彼の念頭にひらめく主要な人物は、記代子ではなくて、長平だ。また、礼子であり、せつ子であった。

彼は復讐について考える。これほど簡にして要を得た復讐はない。そこで誘惑は激しいが、復讐というものは、空想された願望の中では人は極端に悪魔的でありうるけれど、現実のものになってみると、そう悪魔的ではありえないものだ。むしろ悪魔と闘う気持が激しくなる。

青木は復讐の激しさや悲しさにとまどった。どうしていゝか、わからない。なにかに縋らなければ、胸の切なさを持ちこたえることができないようであった。

「なア。おっさんや。カストリだのパンパンてものは、妙なものだね。あなた、なんだと
思う？」

「へえ。なんでしよう」

「神様ツてものは、ノドがかわいたり、ゲラゲラ笑ったりするものなんだぜ」

「そんなものですかねえ」

「そんなものなんだよ。すべてが具わったものでもないし、万能でもないのさ。そして、
奴らは——奴らツてのは、神様のことだよ。奴ら、ノドがかわいたって、貴族の食卓へ行

きやしないよ。カストリとパンパンを買いに行くんだ。ぼくみたいだね」

「ハア。あなた、神様だね」

「まア、そうさ。ノドがかわいてるし、ゲラゲラ笑いたいからね。なア、おっさんや。ぼくが北川放二君を信用しないと云ったら、あんた、怒るかい。だってさ。パンパンが彼を神様だの、ふるさとだのツて云いやがんだ。笑わせるな。ノドがかわいたり、ゲラゲラ笑わない奴、信用できるかツてのさ。甘つたれるな。ハッハ。しかしさ。カストリとパンパンは、甘つたれたところがネウチなんだぜ。笑わせやがら」

「笑いなよ。勝手に」

「お前さんなんか、可愛がられたくないんだ。パンパンにもよ。バカヤロー。オレはパンパンに軽蔑されにきたんだ」

十

「なア。放二さん。パンパン街の神様や。笑わせるな。氣どるなツてんだ」

青木はコップを握って、ゆれながら、放二に毒づいた。放二は黙っていた。

オデン屋のオヤジが見かねて、

「良い年をして、くどいよ。いい加減に、よさねえか」

「だまつてろ。チンピラ善人。よつて、たかつて、甘えてやがら。お前さんたちが甘えるツてことは、甜^なめるツてことなんだぜ。お前さんたちが甜めてるものが、ホンモノなのさ。そんなことは、お前さんたちには、わからねえやな。オレはこの街の神様に、放二さんにさ。甘えにきたんだ。だから、ツバをひツかけてるのさ。そんなことは、お前さんに、わからねえのさ。チンピラの宿命だからな」

青木の顔には脂汗とせせら笑いがにじんでいた。

「なア。放二さんや。あんたが、童貞だか、そうでないか、知らないが、とにかく、あんたは、童貞という規格品ですよ。童貞マリヤのメダイユみたいに、パンパンだの淫乱娘の胸に鎖をつけて吊るされているかも知れないが、あんた自身は、生きている何物なんだろうな。人間はノドがかわくと、水をのむんだ。神様だつて、そうなんだぜ。あんたは、ノドがかわいてもジツと我慢するだけじゃないか。それが、どうしたつてのさ。え、オイ、規格品。しツかりしろよ。しみツたれるな。可愛がられるなよ。憎まれるよ。だからさ。オレが憎んでやるんだ。なア。あんたには、いくらか、わかるだろうな。オレの愛情とい

うものがさ」

「自分だけ、偉いと思つてやがるな」

「チンピラはだまつてろ。オレが偉いと思つてりやア、こんな子供のところへ甘つたれに
来やしないやね。天に向つてツバを吐いてるのだぜ。お前さんなんぞは、ツバは地に吐い
てると思つてやがる。それしか知らねえのだからさ。お前なんかに可愛がられちゃ、人間
はオシマイなのさ。ひもじいパンパンや学生かなんかに、オデンを一皿めぐんでやつて、
けつこう善事をはどこしたと満足してやがら。うすぎたないぜ、この町は。しみつたれた
人情がしみついてるよ。軽蔑されたいとか、憎まれたいとか、肝心なことは忘れてやがる」
「でろ」

オヤジは店の外へまわつてきて、青木を突きだした。

「そんなことしか、知らねえな。そうだろうと思つていたのさ。なア、おツさんや。お次
は、パンパンと、ひツぱたくか。よかろう。やつてもらいたいね」

「おのぞみかい」

四ツ五ツ往復ビンタをくらわせた。青木はせせら笑つて、なぐられるままに、まかせて
いた。

オヤジはふりむいて、店へひっこんだ。青木は追わなかった。ふらふらと放二のアパートへあがりこみ、ルミ子の部屋の戸をたたいた。

「あけろ！ 千円札が来たぞ！ ここには、可愛い女の子が住んでることを知ってるんだからね。千円札で目をさまし、千円札で扉があく。千円札が、来てるよ」

放二が来て、彼のうしろに立っていた。

「なんだい。あんたかい。ここは、あんたのくるところじゃないぜ。千円札のくるところだ」

「これをお忘れなんです」

放二は青木に帽子を渡した。そして立ち去った。

十一

翌朝、青木は見知らぬ部屋で目をさました。ねているのは、彼だけだった。どうしてこんなところに居るのだから思いたすことができないうちに、襖があいて、現れたのはルミ子であった。

「千円札、目がさめてる？」

「ここは、どこ？」

「私は誰？」

青木はようやく分つてきた。ルミ子の部屋には先客がいたのだ。彼はルミ子にみちびかれて、近所の宿屋へねかされたのである。

「私の部屋へくる？」

青木はうなずいて、立上った。

ルミ子の部屋は、客を送りだしたばかりであつた。青木はそのフトンの上へころがりこんで、

「誰かの体温がのこっているよ」

「もっとタクサンのこつてるのよ。私のからだの中にね」

「君だけだな。ぼくを締めださないのは」

「千円札のあるうちはね」

「そうだっけ。そんなこと、怒鳴つたのを覚えてら。どこかで、ひッぱたかれたツけ」

「そう。八重ちゃんにね」

「ちがう。オデン屋のオヤジだろう」

「八重ちゃんにもよ。覚えていないの？」

「どこで？」

「兄さんのお部屋でさ。私にお客があつたから、八重ちゃんに世話してあげたら、お前なら百円札でタクサンだツて喚いたからさ」

「ひッぱたかれたのは、それだけかい」

「あんたが、ひッぱたいたわ」

「誰を？」

「兄さんを」

青木は驚いてルミ子を見たが、とくに非難しているような顔付でもなかった。

「北川君をぶつなんて、妙だな。なぜ、ぶつたろう？」

「酔っ払いだからさ」

「何か言ったかい？ 女のことかなんか」

「あんた、なぜ、顔をあからめるの？」

「変な観察は、よせ」

「なぜさ。あんたぐらいの年になって、そんなことを言いながら顔をあからめるなんて、スツキリしてないね。救われないから」

「救われたかないんだから、いいやな」

「あんたのことじゃないのよ。救われない顔、見せられる方が因果だから。あんたぐらいの年配の人は、たのもしいような顔をするものさ。公衆衛生だから。街路美化週間なんていうわね」

「で、女のことを、言ったかい」

「誰のことを？」

「おい。ハツキリ、言えよ」

「あんた、シツカリ、しなさいよ」

ルミ子は青木を見つめた。

「あんたぐらいの年になって、そんなことが気がかりなの？ 女のことを言ったか、言わなかったか、なんて」

「おい。割りきったようなことを云うな」

「そう。でもね。その女の人が、気の毒だと思うのよ。年配のオジサンが、こう救われな

くちやアね」

「ま、いいやな。とにかく、女のことを、何か言ったかい？」

「言わなかった」

また、ルミ子は青木を見つめた。

「それで、安心した？ あわれじゃないの」

「バカな。人間とコンクリートをまちがえちやアいけないよ。じゃア、失敬。可愛いお嬢さん」

青木はアパートをとびだした。

泣き男

穂積が京都へきて、話のついでに、青木と記代子のことを長平に語ってきかせた。記代子が長平の姪であることは百も承知のはずだが、千里距てた異邦人の噂をしているように、うっかりすると聞きもらしそうな話し方であった。

長平は記代子することに驚くよりも、穂積の悠長な話しぶりに心をひかれて、

「君、わざと気をつかつてくれたのかい？」

「え？」

「ぼくをビックリさせないために、わざと悠長な話し方をしたのかと訊いているのさ」

「ハッハア」

穂積は雲をつかむような笑い方をした。わざととぼけているのかと思うと、苦りきって、

「当節、人のことで気をつかっちゃいられませんよ」

「へえ。なぜだい？」

「ハッハア」

また、雲をつかむような笑い方をした。

「ですが、人生は、事もなく、また、若干、多忙ですな」

「なんのことだい」

「とにかく、人間というものは人の噂をしたがるものですよ。他人の身の上は多事多端ですな。そして当人だけは、事もなく、わが身に限って何一つ面白いことが起らぬような氣でいるものですよ。そのくせ、あらゆる人間が人の話題になるような奇妙な身の上をしているのですな」

「なるほど」

まったく、人生はそんなものかも知れない。彼自身にしても、梶せつ子と関係をもつに至った一夜の出来事などは、人の絶好な話題になるものであろう。しかし当人には、さしたる事ではない。今後せつ子と同様な機会が起らなければ、あの一夜は、単に過去という無の流れに没し去っているにすぎない。似た機会が起るにしても、二つの夜は、その時に限って継続しているにすぎないのだ。せつ子のように多事多端な毎日をすごす人でも、当人の身には事もない一生であるかも知れない。

「すると、君自身の特に最近の実感だね。事もなく、又、多忙をきわめているらしいな」

「多忙を自覚する人と、自覚しない人に分類して、ぼくはやや自覚派に属していますよ」

「君がかねえ。そんなにとぼけてねえ」

「とぼけているのは顔だけですな」

「青木君と記代子の二人はどうですか。自覚派かも知れないな」

穂積はちよつとうつむいて考えこんでいたが、ちよいととがめだてるように、

「ひどいねえ」

「なにが？」

「記代子さんは、先生の姪ですよ。まるで赤の他人の話のように」

「へえ。そうかい。ほくが君に訊きたかったのが、それなんだぜ。当人が姪の身の上を他人同様きき流すのは当人の自由なんだぜ。ところが、それをぼくに語ってきかせる君の場合は、世間なみの礼義みたいな気兼ねがありそうなものじゃないか。御愁傷様というような、ね。ぼくの目からは、君の方がトーチカのように見えるんだがね」

「ハツハア」

穂積は明るく笑って、

「だから、人のことで気をつかっちゃいられないんです。その代り、自分のことじゃア、慟哭しますよ」

「バカに都合がいいんだね。それで安心してゐるわけじゃアなからうね」

二

「しかし、これに就ては、どうですか。五十がらみの男と二十の娘が恋仲になってですな。まア、一般的な感情として、男に好感がもてないのが自然だろうじゃありませんか。ところが案外にも、男の方は、なんとなく引き立ってみえるんですな」

穂積はハッハアと笑って、

「しおれた野草のような青木さんが、一輪ぎしの花のように生き生きと、ハッハ、まア、それぐらいに見える瞬間もなきにしもあらずです。それにひきかえて、二十の娘は徹底的にウスノロに見えるんですな。けだし、ぼくのヤキモチのせいでしょうかね」

そして穂積は記代子の恋愛状態のウスノロぶりについて例をあげて語ってきかせた。

そのことがあつてから一月あまりすぎて、梶せつ子が京都へきた。

十一二の男の子が二人、せつ子が紙キレに書いたものを長平の住居へ持ってきた。こつちへ旅行に來たから寄つてみた。別に用があるわけでもないし、在宅かどうか分からないから、ボンヤリ外に遊んで待つてゐるが、ヒマだったら食事でもしませんか、というようなことが走り書きしてあつた。

子供の案内で、近所のお寺へ行ってみると、木立の中で、せつ子は子供たちと蟬をとっていた。

「お早う。まだ、十時半よ」

「ぼくは早起きだよ。荷物は？」

「ちよつと散歩にぬけだしてきたのよ。大阪から」

「じゃア、殿様のお供だね」

せつ子は軽くうなずいてみせた。

「京都の子供ツて、東京の言葉がわからないのかしら？」

「どうして？」

「お手紙とどけてちようだいツて頼んだんです。なかなか分つてくれないのよ」

「それは君の頼みが奇怪だから、理解できないのさ」

「いいえ。理解しようとするマジメな気持が顔にアリアリ現れているのよ。言葉が通じないらしいわ。京都にも気の短い子がいるのよ。言葉が通じなくツて、モシヤクシヤしたらしいのね。インデコ、だって。わかる？」

「インデコ？」

「もう、帰ろう、ツてことなの。さっさと逃げて行っちゃったわ」

せつ子は板チョコを折って長平にくれた。子供たちがチョコレートをかじっていると、ろをみると彼女が配給したのに相違ない。せつ子が手をふってサヨナラと叫ぶと、古都の子供たちは、サヨナラ、バイバイと言った。

「浩然の気を養うという大人の風格があるよ」

と、感心したのか、ひやかしたのか、わけのわからないことを長平が言うと、せつ子はなさけなそうに苦笑して、

「ゴキゲンとりむすぶの、つらい。息苦しくなるのよ。でも、こんな、息ぬきに散歩にでたりして、とても一流じゃないわね」

そして、道ばたの犬に、じれったそうに口笛をふいた。

「記代子と青木はどうしてる？ まさか、死にもしないだろうね」

せつ子は驚いて長平を見つめた。

「どうして、知ってらっしゃるの？」

「穂積君がきかせてくれたのさ」

「知られぬ先に、処分しようと思っていたのに」

「処分て？」

せつ子はボンヤリ口をつぐんでいた。

三

「処分とは、おだやかならんね」

重ねて、こう問いかけると、せつ子はものうそうに目をうごかして、

「誰にも知られないうちにと思っていたのよ」

「だって、ぼくは叔父じゃないか」

「だから、尚さらのことよ。こんなこと、肉親は知る必要のないことよ」

「そういうもんかね」

「わかつてるくせに」

せつ子は悠々と歩いていった。

「記代子さんは見かけによらぬアマノジャクよ。ダタイなさいとすすめても、フンという顔よ。私を嘲けるような薄笑いを浮べるだけなの」

「じゃア、記代子はニンシンしたのかね」

せつ子はうなずいて、

「私のほかには知られていないと思うけど」

「青木だろうね、男は？」

せつ子は、又、うなずいた。

考えてみたって、仕様がな。長平は観念した。人間はみんなそれぞれ一人前に動きだすのが当然なのだから。どこといって、ぬきんでたところもなく、一風変ったところも見えない記代子なのだが、お半だのお七だのと思いきったことをやらかす女は、平凡で取柄のない小娘にかぎるのかも知れない。

それまでは予想もしないことであつたが、恋をしたあとの記代子のふてぶてしさが、にわかに思い当るような気にもなつた。

「なぜダタイしないのだろうね」

「なぜでしょう」

「よほど、頭がわるいんだろうな」

「平凡な子ほど気違いじみたことをしでかすわ。女の本能が気違いじみているのね」

「静かにさとしたらどうだろう。気が立っているだけじゃないかな」

「そうでもない。私の能力でできるだけの手をつくしてみた。青木さんの子供なんか、生ませたくなかったから」

手を変え、品を変え、さしたり、すかししたりした時のことを思いだすと、腹のたつことばかりであった。

青木の口からダタイをすすめさせもしたし、青木もそれに不賛成ではなかったが、記代子はきかなかった。青木もあきらめて、

「結局ダタイをすすめることが、何よりダタイしないという決意をかたくさせるようなものさ。ねえ、社長さん。ほかに理由がありますか。ぼくには、てんで見当がつかない」

彼は力つきて、こうせつ子に報告した。

「あなたは子供を育てますか」

こうきくと、青木は決意の重さにおしつぶされそうな、蒼ざめた顔をひきしめて、激しすぎるほどキツパリ言うのだ。

「むろんですとも。ぼくの子供ですよ。考えてみると、ぼくの足跡はこれだけなんだ。そう考えてニンシンさせたわけではありませんがね。みじめな男は、足跡がのこるまでは、

それを欲してやしませんからさ」

カラカラと、目まいでもしているような笑いをたてるのであった。せつ子は顔をそむけた。思いだしても悪感がすると思うのだ。

「放二さんと記代子さんを、結婚おさせなさろうとお思いじゃないこと？」
せつ子は長平をみつめて、

「先生のお考えはどうなの？ 先生がそれを希望なさるなら、私、必ず記代子さんをダイさせます。いいえ、むかしの処女にもどしてあげるわ」

四

「近いうち、上京しよう。それまで、記代子のことは、そツとしておきましょうや」
食事しながら、長平は言った。

「なに、ぼくが上京したからって、人の心をうごかすような力がそなわってるわけじゃない、新しい希望や打開策が生れる見込みは有りやしないさ。それでいいと思ってるのさ。色恋の世界には、先輩後輩はなさそうだ。子供はとっぜん大人になるし、大人になったと

きは、もう同列のもですよ。この道ばかりは、何十年かかったって、ムダはムダ、当人のことは当人だけしか分りやしない」

「私はそれほど悟れないけど」

「それは、そうさ。ぼくは講壇派、ニセ達人だが、あなたは生活派の達人だ」

「私は常識的に考えているだけ。記代子さんが結婚前に子供を生むなんて、変だから。青木さんの子供なら、なお奇ツ怪でしょう。それだけのことなの。そうオセツカイでもないのよ。ただ目のふれるところで行われているから。目ざわりなのよ」

久しぶりの対面であつたが、せつ子の心はこだわりなく打ちとけて、のびのびしていた。それが長平に快やかだった。こんなにこだわりなく、のびのび打ちとけてみせることができるのは、とにかく、すぐれたことだ。肉慾にこだわりがなく、それを没したようなスガスガしさがあつた。

「記代子の話は、もう、よそう」

長平は言った。百里離れて人の色恋を案じてみてもムダなことだ。

長平は珍しく眼前の事実に充足するよろこびを味っていた。

「今日は珍しく、たのしいよ。風に乗って、たのしいことが運ばれてきたようなものさ」

炎天の樹間をくぐつて、いくらか涼風が通ってくるが、杯をあげているから、汗の量をへらすだけのタシにもならない。しかし、かがやく葉が草が、目にしみる。炎天の光も、時には、美しいものだ。

「君の気持は、わかるんだ。時々、風になりたくなるからね。ぼくら、風になると、むやみに酔つ払う。下賤なる風なんだね。誰も風の訪れをよろこんでくれないよ。女はお酒をのまないから、綺麗な風になるらしいや。自分が風になるよりも、よその微風が訪れてくれた方が、健康にもいいんだな。こんなソヨ風の訪れはめつたに有るもんじやないんだね」

せつ子は長平のように浮いた気持にはなれなかった。

「お供はつらいのよ。社でアクセクしてるときは、なんともしてお金が欲しいと思うけど、ダメなのね。でも、つとめるのよ。今日までは、おッぽりだして来たことなんかなかったのだけど、ふらふら、とびだしちゃった。もつと娼婦になりきれる方が、立派なんでしょうね」

「そんなことは、クヨクヨ考えることじやアないね」

「そう。立派だなんて、おかしいわね。誰かに、ほめられたいみたい。でも、そんな気持も、あるのよ」

「社長だものな」

「そうなのよ。社長でなければ、乞食になるのよ。そして、生きてるわ。今日は乞食の方の気持よ。微風の訪れでもなかったの」

せつ子は胃が悪いから、酒をのむといけないのだと云いながら、かなり飲んだ。そしてテキメンに苦しみはじめた。長平が知人の医者へつれこむと、医者は顔をくもらせて、酒をのむと、ひどいことになるかも知れない、とせつ子を叱責するようにつぶやいた。

せつ子は黙って、医者を見つめていた。顔色を微動もさせずに。そして、自動車をよんで大阪へ戻った。

五

長平は上京した。

その日の夜中に長平の住む茶室の戸をたたいたのは青木であつた。

「そろそろ隠れ家を変えなきゃいけないぜ。ここは拙者につきとめられているんだから、アイビキなどには不都合だし、第一、タカリが怖いやね」

青木は遠慮なく上りこんで、

「とんだ合がっほう邦さね。やってきたのは娘じゃなくて、ジジイなんだとき。や、コンバンハ」
いくらか酔っているようであつた。どつかとアグラをかいて、

「いずれ呼びだしをうけて、お叱りを蒙るんだろうから、手間を省きにきたのさ。え？」
長平の顔をのぞきこんだ。

長平はウイスキーをとりだした。彼は夜中や暁方にウイスキーをのんで、うたたねする習慣であつた。一日に何回もうたたねするが、まとめてねむるのは一週に一回ぐらいのものであつた。

「君に会う必要もないと思つていたのだが」

青木にウイスキーをつぎ、自分ものんでから、言つた。その落付きが癪にさわつたらしく、青木はジリジリして、

「ハア。そうですか。何等親だか知らないが、君の何かに当ろうというこのオジサンにね。会いたくないのかい？」

青木は自分の言葉に含まれた毒氣に興奮して、目をギラギラ光らせた。長平はそれをそらして、

「君は何かぼくに言いたいことがあるのじゃないか。言うだけ、言ってしまうよ」

「言うだけ言ったら、どうするのさ」

「ねむるよ」

「相変らず、自分の都合だけ考えている人だね。なんと言ったら、気がすむのかね。ワタクシが記代子嬢を誘惑しました、と言ったらいいのかい？」

「おい、よせよ。法廷とちがうのだ。だから、なにも、きいてやしないじゃないか。言いたいことだけ、言うがいいや。さもなきや、帰れたまえ」

「なア、長さんや。君は、ぼくがどうしたらいいと思う。子供が生れるんだぜ。ぼくは、どうしたら、いいのさ」

「君はどうしたいのだ」

「それが分らないんだよ。なア、長さん。オレをあわれんでくれよ。どうしていいのか、わからん男を。なア。いい年をして」

記代子が青木にニンシンをうちあげたのは、伊豆の温泉宿だった。

「あなた、まだ、本当に、子供なかったの」

「本当になかったよ」

「子供、ほしい？」

青木は答えることができなかった。自分の都合は問題ではない。自分のために子を生む記代子をあわれんだのだ。

「君は、欲しいのかい？」

「あなたは？」

青木は記代子が後悔していないことを知った。どこに拠りどころがあるのだろうか。人生の敗残者、五十のおいぼれの子を宿して。その無邪気さが、あわれであつた。

しかし、青木が答えに窮していると、記代子は青木の顔を見つめて、

「殺しちゃう？」

彼は記代子の目に追いつめられて、うろたえたのだ。あの目を青木は忘れることができないのだ。何を語っている目だろうか。

子を殺す、生む、それだけのことではないのだ。暗い一生をあゆむたった一つの小さい窓。あんな目にさせたのが自分だと思うと、たまらなかつた。

「なア、長さんや。恋愛だの、結婚だのツて、太平楽なもんだと思うよ。記代子さんて人は、その太平楽な身分に似合った人なんだね。ところが、ぼくとのことで、そうじゃない立場に落ちたわけだね。それを記代子さんは知ってるんだよ。本能的にね。恋愛だの結婚だのという太平楽なものと戦争状態の立場になってしまったという現実をさ。彼女は襟首をつかまえられているよ。運命というものにね。そして、ただ決意を要求されているんだ。それがあの人の目にでているのさ。ほかにでやしないや。だって、どこにもギリギリの決意なんて、ありやしないものな。あるのは特攻隊みたいな切なさだけなんだ。それを見るぼくは、うろたえますよ。ねえ。だって、悲しくなるじゃないか」

「気分的なことは、どうだって、いいじゃないか。もっと实际的にさばく手段をさがしたらどうだろうね」

「大人ぶったことを言いなさんな。实际的にさばくツたつて、根は気分が心棒じゃないか」「ほんとかい？ とつぜん行動するとき、気分をふりすてるもんじやないのか。まるで気分と似つかぬことをやるもんじやないのか。気分屋は、特にそうだぜ」

「それは、まるで、愛情にひきずられるな、というみたいだね。あわれんでも、いとしが

つても、ムダなのかな」

青木はつぶやいた。そして、全身に敵意がこもった。

「わかったよ。長平さん。そして、ぼくは安心したよ。大庭長平という人は、自分勝手すぎるぜ。あなたは、自分の姪が、どうなっても構わない自分だけの人なんだ。たとえば、子をだいて、男にすてられようと、どうなろうとね。ねえ、長平さんや。ぼくはあなたにヒケメを感じていたんだ。記代子さんのようなウブで世間知らずの可愛い娘を、ぼくのようないやなオイボレ敗残者がいつまでも自分のものにしておくというイタマシサについてね。しかし、今はそうじゃない。あなたのような冷めたい人にくらべれば、ぼくの方がどれくらいあの人の親身の友であるか知れないんだ。ぼくはもう、安心して、あの人を誰の手にもやらないよ。愛すことも、すてることも、ぼくの自由だ。いずれにせよあなたにくらべて、ぼくの胸に愛情がこもっているのだから」

長平は返事をしなかった。ウイスキーを青木にさした。

「まア、のめよ」

「そろそろ、帰るとしよう」

「オレがどういう人間であろうと、オレのことが記代子を愛す愛さないの標準になるてえ

のは、どういうわけだね。君は、まるで落付いていないな」

「だからさ。全然、とりみだしているんだよ」

「オレは、まったく、記代子がどうなろうと構わないと思っているよ。君にすてられようと、愛されようと、それで記代子の一生が終るわけではなしね。どっちへどうなろうと、その又次にも、何かがあるものだよ。事がなければ幸せだというわけでもなしさ。亭主が立身しようと、貧乏しようと、そこに女の幸福の鍵があるわけでもなし、さ。幸福の鍵なんてものは、もし有るとすれば、一つしかないものだ。いつも現実の傷を手当てしろ。傷口をできるだけ小さく食いとめ、痛みを早く治せ。それだけの対症療法があるだけさ。君は、何か、手当てについて、考えたり、やってみたり、したかい？」

七

「君は太平楽な人さ」

青木はしみじみ呟いた。

「対症療法だって、人間はみんな患者さ。すくなくとも、ぼくたちは、そうだぜ。みんな、

とりみだしているだけなんだ。医者じゃないんだから、手当の仕様が分りやしないじゃないか。この夜更けに君に会いにきたのだって、いわば手当の法を教えてもらいたいと思っただけだ。自分流儀じゃ、化膿してゆくばかりだからな」

青木は涙をまぎらすような力のない笑い声をたてた。

青木は今度のことについて、事の起りはどうあろうとも、責任を感じていた。それは年齢を考えてみれば、当然のことだ。

一つにはヤケクソの気持があつた。自分と長平との行きがかりから、こっちだつて構うものかという気持がはたらいていたことは否めない。それをつとめて自制してきたことに多少の誇りはあるけれども、結局それがはたらいているのである。

長平がそこを怒っているだろうと青木は考えていたのである。そこを怒られるのは、つらくもあるし、いくらか気のはれることでもあつた。そして、怒られることによって、心が洗われ、二人の魂がふれ合うこともできるような、ひそかな愛情を感じてもいたのである。恩讐の彼方に、という甘い友情に飢えていたのである。

長年の仇敵がすべてを忘れて粗茶をくみ交し、四方山話にひたる。いかにも世捨人の慾のない交情を空想しているような甘さもあつた。

すべての空想は当て外れだ。長平は内々怒っているかも知れないが、彼が怒られるだろうと思つたところは、問題にしていけないのだ。それは淡々として心が枯れているから、というようなせいではないのだ。

なんて毒々しい男だろうと青木は思つた。人間の毒気という毒気をすべて身につけているための、そして、あらゆる毒の上にアグラをかいているための落付きであり無上の寛容さであつた。

世捨人などとは以ての外の話である。およそ慾念のかたまりで、人生を毒と見ている鬼畜なのだ。

青木は自分と長平との余り大きな距りに組み伏せられたようであつた。共に通じ合う余地はなかつた。避けて遠ざかるか、縋つて甘えるか、どちらかしかないようだ。

なんて傲慢な悪党だろう。青木はそう思う一方に、わが罪の切なさ、涙があふれてくるのであつた。

「ねえ、長さんよ。どうしたら、いいのよ」

青木はむせる涙に苦しんで、ころがつて、頭をかかえた。涙のかわくのを待つて、身を起して、

「ぼくは野たれ死んでも構わないし、自殺すりや、すむことなんだ。記代子さんを助けてやってくれよ。オレなんか、どうなったって、いいんだから。な。たのむよ」

「助かるって、どうなることなんだい」

静かな返事に、青木は目をまるくしたが、はげしい絶望に盲いて、

「なに言ってるんだ、君は！ 君はハラワタからの悪党だね！」

「君の善意は分るんだよ。ぼくが悪党であることも、まちがいはないね。ただ、泣くのは止した方がいいぜ。涙から結論をかりてくるのも良くない。もつと静かな方がいいぜ。他人のことを処理するように、自分のことだって処理できるものだよ」

八

青木はしばらく考えていたが、首を横にふって、

「いや、ダメだ。ぼくは、いつも、それでやられるんだ。君はいかにも、ぼくの心を言い当てたり、それに同感してみせるようなことを言うね。それは易者が妄者の迷いを言い当てるのに良く似ているね。迷いの最大公約数みたいなものを、言いきるわけさ。そして輪

をちぐめていくんだ。もつとも、易者との相似は君だけじゃアないがね。日本のインテリ一般の会話のコツかも知れないな。まるで謎々の遊戲みたいなものさね。ねえ。長さんや。易者ごっこはよしましようや。なア。あなた。ハッキリ、答えてくれたまえよ。ぼくは記代子さんと結婚するぜ。それで、いいのかね」

「ぼくの返答をかりて、やる必要はなからうさ」

「そうかい。わかった」

「まア、のみたまえ」

「もう、帰るよ」

「乗物がないぜ」

「夏はどこでも野宿ができるものさ」

「記代子も変な子だね。なんだって、君なんかが好きになったんだろうね。変な夢を見る奴さ」

「ふん。夢を、ね」

「ぼくは、ねるぜ。君、勝手にのんで、勝手に、ねたまえ」

長平はタタミの上へころがって枕を当てた。

「君はフトンをしないのか」

「そう。夏はね。たまに、グッスリねむるときだけ、フトンをしくのさ」

「じゃア、失敬するよ」

「そうかい」

「君とねたかアないからな。目がさめて、大坊主のねぼけ顔を見るなんざア、やりきれやしないからな。君は、今日、記代子さんに会ったろうね」

「会わん」

「なぜ」

「ぼくが上京するてんで、会社を休んだそうじゃないか」

「……」

青木は顔色を変えた。思い直して、

「じゃア、帰ろう。このウイスキー、くれないかね。夜明けまで、どこかの焼跡でのんでるんだよ」

「もってきたまえ」

「記代子さんもオレみたいなことをやってるんじゃないかね。会社を休んで、行くところ

なんか、ありやしないと思うんだがな」

「心配することはないだろう」

「そうかい。じゃア、失敬」

青木はウイスキーのビンをぶらさげて、茶室をはなれた。

その日、記代子が会社を休んだことは知っていた。長平の上京の日だから、迎えに行つたのだろうと思つていたのだ。

どこをさまよっているのだろう。

しかし、みんなバカげていると青木は思い直した。長平なんかが、もっともらしく悪党ぶるのは滑稽でもある。オレの本心は全然動揺してやしないのだ。ただオレの影がゆれているだけ。甘えてみせたり、苦しんでみせたり。みんな影法師の念仏踊りのようなものだ。まさしく演技者には相違ないが、そう考えてみたところで、とりわけユトリがあるわけでもなし、優越を納得することができるわけでもない。

「今に、なんとかなる。何かに、ぶつかるだろう。そして、ぶちのめされてみたいのさ」
彼は苦笑して自分に言いきかせた。

失踪

一

記代子は長平の上京した金曜日から、会社にも姿を見せなかったし、下宿している遠縁の人の家にも戻らなかった。

失踪がハッキリしたのは月曜日である。すねるのも程々だと、せつ子が宿先へ使いの者をやってみると、金曜以来、宿にも戻らぬことがわかった。

記代子の外泊がめつきりふえて、宿先ではなれていたし、ちようど土日曜にかかつていたので、不審を起さなかったのである。

放二は社長室へよびつけられて、せつ子から記代子の失踪をしらされた。長平が部屋に来合わせていた。

「あなたの独力で、かならず探しだしていращやい。誰に負けてもいけません。たとえ、

警察にも、探偵にも。かならず、あなたが見つけなければいけないのよ」

と、せつ子は命令した。

「このことは私たちのほかに、穂積さん、青木さんが知ってるだけです。ですから、行方を探すにしても、記代子さんの行方不明を人に気付かせてはいけません。たとえば、記代子さんのお友だちのところへ訊きに行つたとしますね。記代子さんが行方不明ですけど、なんて言っちゃダメなのよ。記代子さんに急用がきたんですけど、記代子さんがあいにく会社をサボッてとか、定休日とか、そんな風に言うのよ。わかりましたね」

かんで、ふくめるようである。

「それから」

と、せつ子は放二をジツと見つめて、

「なぜ記代子さんが失踪したか、それを考えてはいけません。あなたの役目は記代子さんを探しだすことなんです。失踪の原因を探索するのは、あなたの役目ではないのです。妙な噂がありましたから、あなたも薄々きき知って、いろいろ推量していらッしやるかも知れませんが、あなたの推量は、全部まちがいよ。噂は全部デタラメなんです。あなたは人の噂など気にかけませんね？」

放二はかるくうなずいた。

「人間て、どうして人のことを、あれこれと、憶測したがるのでしょうか。自分のことだけ考えていればいいのに」

せつ子は退屈しきった様子で、そう呟いたが、机上から一通の封書を取りあげて、

「これは大庭先生が記代さんの下宿の人に差上げるお手紙。この中には、あなたのことが書いてあるのです。記代子さんのお部屋の捜査をあなたに命じたから、部屋へあげて自由に探させてあげて下さい、ということが書いてあります。あなたは記代子さんのお部屋に行先を知らせるような何かがないか探すのです。又、お友だちの住所とか、捜査の手がかりになりそうなものを見つけてらっしゃい。意外な事実を発見しても、捜査がすんだら、忘れなくてはいけません。記代子さんが失踪したことも、忘れなくてはいけません」

放二はアツサリうなずいた。長平は笑いだした。

「ずいぶん器用なことを命令したり、ひきうけたりするもんじやないか」

放二も笑ったが、

「むしろ、もっと簡単なことなんです」

「ふ。君はそんな器用な特技があるのかい」

放二はそれには答えなかった。

「では、行つて参ります」

「手がかりになりそうなものがあつたら、明日、会社へ持つてらしてね。記代子さんが見つかるまでは、会社の仕事はよろしいのです。穂積さんに言つてありますから。記代子さんを探すが、あなたのお仕事よ」

放二はうなずいて去つた。

二

放二は記代子の部屋をさがした。

室内を一目見たとき、記代子の覚悟のようなものが感じられてハツとした。部屋がキレイに整頓されていたからである。

「イエ、私がお掃除しましたの」

と、下宿の人は、事もなげに云つた。

「おでかけのあとは、毎日々々、それは大変な散らかしですよ。おフトンだけは自分

で押入へ投げこんでいらっしやいますけどね。ホラ」

押入をあけてみせた。くずれて下へ落ちそうだ。よくたたみもせずに投げこんである。放二は自分の万年床を思いだして、男女の差の尺度はこの程度かと、おかしくなった。

一目見たときは整頓されていたようでも、しらべていくと、乱雑そのものである。ヒキダシの中も本箱も。

日記帳を見出したとき、彼はいくらか安心した。覚悟の失踪なら、こういうものは焼きすてていくはずだ。たしかに今年の日記帳に相違ない。彼は中を見なかった。安心して、本棚の奥へ押しこんだ。

社をでるとき、穂積のところへ挨拶にいくと、穂積は彼にささやいた。

「青木さんが悲愴な顔で出かけたがね。たぶん心当りへ探しにでたんだな。ぼくはさつき社長に呼びつけられてさ。噂をまいた張本人みたいにこッぴどく叱られたんだが、社長が君に独力で探してこいという気持は分るけど、ムリだな。青木さんは彼女の私事にも通じてるだろうし、君が先に見つかりッこないぜ。ぼくが青木さんに話しておいてあげるよ。彼女を見つけても、その功を君にゆずるように、とね。まア、あんまりキチョウメンに探しまわらずに、遊びがてらの気持で、ゆつくりやりたまえ」

放二の健康を気づかってくれたのである。

青木と記代子のこととは、もとより放二も知っていた。当然なことであるから、穂積はせつ子のように見えすいた隠し立てはしなかった。

「ええ、一通り探してみようと思います」

こう答えると、穂積は苦笑して、

「なに、生きてるものなら、探すこたアないよ。君のからだが大事だぜ。死んでるものなら、警察の領分さ。とびまわるのは、青木さんだけで、タクサンだ」

哲学科出身のこの男は、日本式のプラグマチズムを身につけて、煩瑣なことには一向に動じなかった。

死んでるものなら、たしかに手の下しようがない。しかし、生きていると、いつ死ぬかわからない。又、どう転落するかわからない。放二はこの部屋の中から記代子の足跡をどうしても見つけだそうと思った。

捜査の手がかりになりそうなものを一つ一つとりだした。

友だちからの手紙。みんな親しい女友だちからである。男からの手紙はなかった。

手紙を一つ一つ読んでみても、手がかりになりそうなものはない、暢気な手紙ばかりで

あつた。放二は差出人の住所を書きとつた。

「やっぱし、日記かな」

最後の日付の日記だけカンベンして見せてもらおう、と放二は思った。最後だけじゃア、まにあわないかな。あるいは、最後の一週間分ぐらい。

放二は押しこんだ日記帳をとりだした。そして、頁をパラパラめくつて最後の日付をさがした。最後の日が、どこにもない。ないわけだ。全部、白紙であつた。元旦すらも。

三

しばらく笑いがとまらなかつた。放二は再び日記帳を本棚へ押しこんで、ヒタイやクビ筋の脂汗をふいた。

「これで一応さがしたわけだが」

ほかに探す場所はなさそうだ。手紙の束をしまうついでにヒキダシをかきまわしてみると、ガラクタにまじつてマッチ箱がタクサンあつた。

「タバコを吸うのかしら？」

ふだん吸ってるのを見たことはない。しかし机の上に小さなピンク色の灰皿があった。マッチ箱は軸がつまっついていて、ほとんど新品だ。三ツ四ツ例外はあるが、大部分が同じ店のマッチであつた。

「ノクタンビュール」

たしか青木前夫人の働いているバーである。店の名だけはきいていたが、彼はそこへ行ったことがなかった。あんまり数が多すぎるのでザツと数えると、二十いくつあつた。いつも青木と一しよだから、その店へ行くことがあるのにフシギはない。しかし、ずいぶん通つたものだ。それとも、まとめて貰つてきたのだろうか。放二はマッチ箱を手にとってボンヤリ見つめて考えた。しかし、思いつくことは何もない。

「とにかく、マッチ箱の店へ行つた事実はあるのだから」

と、放二はマッチ箱の店名を手帳に書きとつた。箱根や伊豆の温泉旅館のマッチが三ツ。彼の知らない銀座のバーが一つであつた。箱根、伊豆、そんなところをブラブラしてるんじゃないだろうか。なんとなく、そう考えておきたいような気持であつた。

捜し終つて、放二は宿の人たちの話をきいた。

「金曜の朝は、いつもの出勤時刻に、おでかけでしたでしょうか」

「ええ、時刻にも態度やその他にも、いつもと違うところはちツともなかったですよ。朝は忙しいので、特におかまいもしませんでしたけど、御食事中の御様子やなどでも、ね」

「特に親しくしてらした女友だちは？」

「そう。たまにね。遊びにいらした方もあるし、お噂をうかがうこともありましたが……」

主婦が思いだした名は、放二の手帳に控えたものをでなかった。

「別に、それまで、変った様子はなかったのでしょうか」

「いえ。毎日変った様子でしたよ」

主婦は大ゲサに身ぶりした。

「つまりね。金曜の朝はいつもと変りがなかったのですよ。ですけど、そのいつもがね、決して普通じゃないんですよ」

放二が世間知らずに見えるので、主婦はコクメイな話し方をした。そして、言つてよいのか、どうか、と迷う様子であつたが、

「もちろん、皆さん御承知でしょうが、ニンシンなさっていましたからね。いろいろと、そうでしょうね。思い悩んでいらしたんでしょうよ。とにかく、普通じゃなかったですよ」

「どんな風に、でしょうか」

「話の途中で知らんぷりして立っちやったり、自分で話しかけといてプイと行っちやったり、そうかと思うと、こっちで話しかけないのに、なアにイなんてね。そして時々高笑いしていましたね。今日は自動車にひかれるところだったなんて仰有ってましたが、そんなことも有ったでしょうよ。あれじゃアね」

四

女友だちは四人しか分らなかった。

最初に訪ねた克子は、まだ海水浴から戻らなかった。往復している手紙からでは、克子が特に親しいようであった。

二人目の修子の住所は学校の寄宿舎だ。記代子は罹災して京都へ疎開し、その学校をでたから、友だちは京都の娘たちなのだ。学校は夏休みだから、修子は寄宿舎にいる筈がなかった。

「ひよツとすると、京都へ戻っているのかも知れない」

そう考えて、修子の本籍を調べようかと思いたったが、失踪の動機が、長平の上京を煙

たがってのせいらしいと思われるのに、京都へ行くとは考えられない。

「京都なら安心だから」

そう結論して、京都はほつとくことにした。

三人目も京都。これも学生で、帰省中であつた。

四人目の敏子はまだ勤め先から戻らなかつた。文化住宅街の中でもやや目立つ洋館であるが、居住者の標札だけでも違つた姓のが五ツ六ツ並んでいて、内部はアパートの入口のように乱雑だつた。

敏子の母は神経質でイライラしていた。彼女は放二の言葉をウワの空できいていたが、

「まだ勤めから戻りませんよ」

つめたい返事であつた。ちょうど勤め人の帰宅する時刻であつた。

「もうじきお帰りでしょうか」

と、きくと、敏子の母は益々冷淡に、

「毎晩おそいですよ」

「幾時ごろですか」

「人の寝しずまるころですよ」

そうおそくまで遊んでくるのでは、夜は会えない。

「ではお勤め先でお目にかかりたいと思いますが、お勤め先はどこでしょうか」
敏子の母はとうとう怒りだした。

「女の子のあとを追いまわしてどうするの。いやらしい。お帰り。相手にしていられやしない。忙しいのに」

ブツクサ呟きながら、さっさと振向いて去ってしまった。

放二はそれ以上どうすることもできなかった。もう一度、克子を訪ねるほかに手段がない。社線、省線、社線と、又、一時間半ほど廻らなければならない。

克子はまだ海から戻らなかった。

克子の父母はフビンがつて、彼を室内へ招じてくれた。

「こちらのお嬢さんも京都の女学校の御出身ですか」

「どうして？」

「今まで廻ったお友だちが、そうですから」

「克子は疎開前のお友だち。たしか、二年まで、ご一しよでしたわね」
しばらく世間話をしているうちに、克子が疲れて、もどってきた。

克子は、茶の間の青年が、記代子の行方をさがして、彼女の帰りを待っていたときいて、不キゲンであった。

彼女は黙りこくツて、考えこんでいたが、

「ねえ。会社の御用なんて、嘘でしょう」

「いいえ。なぜですか」

克子は薄笑いをうかべた。

「嘘にきまつてるわ。記代子さんがサボツたのに、急用だなんて。昼間だったら、それで人をだませるけど、もう夜よ。会社はひけてるでしょう。サボツた記代子さんも家へ帰ってるわ。なぜ記代子さんちへ行かないの。家に居ないからでしょう。行方不明だからでしょう」

五

「ずいぶん御心配らしいわね」

克子の冷笑はするどかった。

「とうとう家出したのね。無軌道ね。記代子さんらしい結末だわ。ニンシンしていたんですものね」

目をあげて、放二を嘲笑した。

「そんな失礼なことを」

母親はハラハラして、

「あなた、記代子さんの行先に心当りはないのですか」

「知らないわ。十日ほど前に、会ったけど、お茶ものまずに別れたわ。最近ほ、そう親しくしていかないのよ」

これ以上きいてもムダだと放二は思った。

「ほかに記代子さんの親しいお友だちは、どなたでしょうか」

「どこを搜したんですの？」

放二は今までの経過を説明して、

「京都へ帰省中の方が二人で、在京中の方はこちらと、木田敏子さんと仰有る方、お二人だけなんです。木田さんはお帰りがおそいそうで、お目にかかれなかったのですが、勤め先をおききしたのですが、教えていただけなかったのです。木田敏子さん御存知でしょう

か」

克子は冷淡にうなずいた。

「勤め先を御存知でしょうか」

克子はプツとふきだして、

「あなたは、ダメね。とても、捜しだせないわ。私の部屋へいらっしゃい。説明してあげるわ」

克子は放二を自分の部屋へ案内し、自分は茶の間で食事をしてから、お茶と菓子皿を持つて上ってきた。

「家出したんでしょう？」

「ええ」

「なぜ、なんとかして、あげなかったの。無責任な方ね」

「ぼくは、会社の同僚にすぎないのです。あの方の愛人ではありません」

克子は疑って、

「嘘つきには、教えてあげない。私、あなたの名、記代子さんにきいたことあるわ」

「ぼくはお友だちにすぎないのです」

克子は疑わしげであつたが、放二のマジメさを認めたようでもあつた。

「じゃア、本当なのね。五十ぐらいの人だつて。十日ほど前に会ったとき、ダタイのお医者知らないツて、きくんですよ。教えてあげたの。お友だちにきいて」

「その病院は、どこですか」

「忘れました」

克子は鋭い目をした。

「あなた、病院へ行くつもり？　そして、どうなさるのよ。ダタイなら、もう、退院してるわ。すべてが、終了したんです。なくなつたの。過去が」

放二はうなずいた。

ダタイして入院中なら、心配することはない。しかし、そうなら、青木が知っていそうなものである。

克子も考えていたが、

「金曜日からなのね。三日、四日目。ダタイにしては長すぎるわ」

克子はいかぬ顔だったが、氣をとり直して、

「私の知ってるの、それだけだわ。最近は親しくしていなかったから。敏子さんにきいて

「ごらんなさい。勤め先、教えてくれなかったの、当り前だわ。新宿でダンサーしてるんですもの。大胆不敵なのよ。会社とダンサーかけもちだったんですもの。今は会社クビになつて、ダンサー専門らしいけど」

と、ホールの名を教えてくれた。

六

新宿はごつたがえしていたが、もう二十二時であつた。

ダンスホールの切符売場で訊ねると、

「木田敏子？　ダンサーですか？　誰かしら。本名じやアわからないわ。まつて下さい」

美青年の一得であつた。女の子の一人は、イヤがる風もなく、気軽に奥へ走りこんだ。

相当の時間またされたが、その償いのように、女の子は息をきらして戻ってきて、

「わかんない筈だわ。キツピイさんのことじゃないの」

先ず同僚に向つてこう報告すると、キツピイさんは有名人とみえて、女の子たちは顔を見合せて笑いだした。そして、意味ありげに、放二の顔を見た。あらためて、放二に興味

をもちだしたようである。

駈け戻った女の子は窓口に首をのばして、

「その方はもう二ヶ月も前から居ないんです。もつと前になるかしら？」

「メーデーの翌日から」

「そう。忘れ得ぬ夜の出来事」

彼女らは声をそろえて笑った。

「何かあつたんですか」

と、放二がきくと、駈け戻った子は目をふせて答えなかったが、ほかの一人はノドがムズムズする様子で、しかし直接放二には答えず、同僚に向つて、

「あの人、共産党なのかしら？」

「うそよ。はじめはイタズラだったのよ。笑いながらデモ演説のマネしてたのよ。マダムが叱つてから、怒つちやつて、闘争演説はじめたのよ」

「そうでもないようよ」

「そんなことなくツてよ。ただの酔ッ払ッたアゲクよ。だけど、マスター行状記、バクロ演説、痛快だったわ」

「キツピイにとびかかったのね。あのときのマスター、ゴリラだわね。キツピイのクビ両手でつかんで、ふりまわしたのよ。フロアへ叩きつけちゃったわ」

「そのときサブちゃん飛びだしたのね。ダブルの上衣グツとぬいでね。見栄をきったわね。ただの一撃。それから入りみだれて、敵味方わかりやしないのよ。てんやわんや」

「サブちゃん、凄いのよ。女を狙うと、あれですツて。キツピイ、もう捨てられたつて話」
話に一段落がついて、一同は口をつぐんだ。要をつくしたのである。あとは放二の質問は一つしかなかった。

「今でてらツしやるホール、わからないでしょうか」

「ええ。それなんですけど」

女の子は分別くさげに目をふせながら、

「それをききだすのに時間くツちやツたんですけど」

女は又、口をつぐんだ。それから、

「よした方がいいですわ」

と、言った。

「どうしてですか」

女はわざと困った顔をして、

「だってねえ。よくないことなの。きかない方がいいわ」

「ぼく、御迷惑はおかけしなと思います」

女の子は思いきった顔をした。

「キツパイには悪いヒモがあるんですって。グレン隊の中でも特別のダニ。とても悪性よ。ノサレちゃうわ」

放二は笑って、

「ノサれるような用件ではないのです。あの方のお友だちの住所をきくだけですから」
女の子は喫茶店の名と図をかいて、投げだすように放二にわたした。

七

放二は地図をたよりに喫茶店をつきとめた。同じような店が露路の両側にならんでいて、まよいこんだ放二を見ると、どの店からも女がでてきて、よびとめたり、手を握って引きこもうとした。

めざす喫茶店で、よびとめた女に、放二はきいた。

「お店に、木田敏子さんという方、働いていらっしやいますか」

「木田敏子？ 誰のことかしら。ええ。探してあげるから、遊んでらっしやいよ。私じゃ、いけないの？」

同じ店から、三人の女がでてきて、放二をとりまいていた。一人がこう云つて、敏子のことなど問題にしていなかったのを、他の二人も氣にかけなかった。

「ビール一本、のんでよ。すると、あなたの恋人が出てくるわよ」

「木田敏子さんは、ぼくの知り合いではないのです。どんな方か、お目にかかったこともない方なんです」

「いいわよ。そんなこと。あなた、アプレゲールでしょう。わけの分らないこと、云うもんじやないわ。ビール一本のんでるうちに、いろんな話ができるじやないの。その人も、出てくるわよ」

三人は放二のからだに手をかけて、つれこもうとした。放二はふと氣がついて、

「その方は、ダンスホールにいらしたときは、キツピイさんと仰有ったそうですけど」

それをきくと、三人は目を見合わせた。放二のからだにかけた手も、自然に力がゆるん

だ。

「じゃア、よんできてあげるわ」

一人が、こういつて店へはいると、他の二人も放二から離れて、戸口の陰へ身をひいた。背の高い娘がズカズカと出てきた。気色ばんでいたが、放二の顔をみると、意外な面持であつた。

「誰よ。あんたは？」

放二は名刺をさし出した。

「大庭記代子さんと同じ社のものですが、社で、大庭さんに急用ができたのです。あいにく、大庭さんは休暇中で、家にも居られず、居どころが知れないのです。明日の朝までに、捜しださないと、困ることがあるんですけど、こちらへ立ち寄られなかったかと思ひまして」

キツピイは、さえぎつて、

「ここ、どうして分つたのよ」

「樋口克子さんにおききしたのです。大庭さんのお友だちのみなさんに訊いてまわっているのです。どこにも立ち寄っておられません。ここでおききしてごらんなさい、という樋

口さんのお話でした」

「あの人、ここ、知らないわよ」

「ええ。以前いらしたダンスホールで、ここをおききしたのです」

キツピイは納得したようだった。記代子や克子にくらべれば大人びていたが、荒れ果てた感じの奥に、同じぐらいの幼いものは、まだ残っていた。

キツピイは心持、一步、放二に近づいた。

「どこを、探しまわったの？」

放二に、ふと、疑いが閃いた。彼女は記代子の失踪を知っているのではないかと。

「大庭さんの宿の方から、お友だちの名を四人おききして、きいて廻ったのですけど」

キツピイは、よそよそしく、

「私も知らないわ。それじゃア、四人とも、知らないのよ。たぶん、五人目をさがすといわ」

そう呟いて、

「帰ってよ」

小犬を追い出すような、無情な様子で睨みつけた。

八

放二はアパートへ戻ってきて、まだ考えつづけていた。キツパイが記代子の行方を知っているのではあるまいか、と。

彼女の態度は、放二が記代子をさがしている理由について、あまり無関心でありすぎるように見うけられる。それは失踪という事実を知っているためのように思われた。

克子は放二の言葉を疑って、記代子の失踪をかぎあてたが、キツパイは放二の言葉を問題にしなかった。

彼はキツパイの言葉を一つずつ思い起した。彼女はこんなことを言ったのだ。「五人目の女が知っているかも知れない」と。

本当にそんな女がいるのだろうか？ キツパイはその人を知っているのだろうか？ 冗談めいたところもあった。

まさか、礼子のことではないだろう。しかし？……放二は一山のマッチを思いだして、キツパイの五人目の女が礼子のことではないにしても、彼女も何か知っているかも知れな

いと思った。ほかの人々が知らないような何かを。

放二は疲れきっていた。そして、疲れすぎると、尚さら寝つかれなくなる今日このごろを考えて、あるいは、死期とまではいかなくとも、再起不能の状態に近づいているのではないかと思われるのであった。

記代子の行方をさがしまわることは、さらに急速にその状態に近づくことを明確に示していたが、放二はむしろ搜しまわって疲れる方が楽だと思った。何もせずにジリジリ衰弱するのを見てわきまえている腹立たしさにくらべれば、何かのために物思うヒマもなく疲れる方が、かえって安らかなのだ。

放二は明け方になって、よく眠った。

おそく目をさまして、社へでる前に、キッピイの自宅を訪れてみようかと考えたが、一応報告を先にしようと思い直した。せつ子の非凡な目が、同じ材料から何かを見つけてくれるかも知れない、と思ったからだ。

しかし、せつ子も彼のもたらしただけでは、手の施しようがないようだった。

「お友だちに、ダタイの病院、きいたということ、まちがないことなのね？」

「まちがないと思います」

「いつごろのことなの？」

「十日か、二週間ほど前。一度は十日前ぐらいと言ひ、一度は二週間前ぐらいと言つたのです。確かめて訊きませんでした」

「あんなにダタイはいやだと言つておきながらねえ……」

せつ子は記代子の心理を考えているようであつた。放二にも、記代子の心理はいろいろに考えられた。

礼子に会つて訊いたら、記代子の意外な心理を辿ることができるかも知れないと放二は思つた。キツピイにもう一度会うことを急ぐよりも、礼子に会うことが先のようにだ。すくなくとも「青木の子供」の問題にふれた何かが掴めそうな気がした。

「今度は、どこを捜すつもり？」

案外にも、せつ子はおびただしく抛りどころない様子であつた。

「ダタイの病院をさがす必要はないでしょうか」

せつ子はクビをふつて、

「それでしたら、捜す必要はないの。人間の過去は実在しないものなんです。あなた、それを信じられる？」

放二はうなずいた。

「じゃア、さがしてらっしゃい。是が非でも、あなたが捜し出さなければ、ダメよ。大庭記代子という過去のない新しい女をね」

九

礼子のバーがひらくまでには間があつた。キツピイの自宅を訪ねてみるには適した時間であつたが、それをやめて、記代子の宿をもう一度訪ねることにした。

キツピイが何かを知っているにしても、それを語らせるには、一度の足労では間に合ひそうもない。あるいは、何も知らないのかも知れないのだ。複雑な私生活をもつらしい彼女の特殊な態度や言葉の表現が、たまたま思わせぶりに見えたのかも知れなかった。

それよりも、記代子の宿から、捜査を出直してみようと思つた。昨日は、記代子の足跡を直接さがしだす材料ばかり心がけていたが、一日の捜査の結果は、記代子の心理を知ることが重大なものに見えてきた。そして、心理を辿ると、足跡の方角を推量しうるかも知れないように思われた。

宿の主婦は、記代子の態度がちかごろ変ったことばかりだと言った。懊悩する娘の混乱した状態などを根掘り葉掘り聞きたくはなかったので、すぐ打ちきって辞去したが、会社では誰にも見せなかつた心の秘密を宿では思いあまつて漏れているかも知れず、主婦の世なれた観察眼が、何かを嗅ぎ当てているかも知れない。放二はそこから出直そうと思つたのである。

しかし、宿の主婦の観察からは、期待したものを得られなかつた。

「あの方は、男の方に不満だつたんですよ。五十ぐらいの年配だそうですね。訪ねていらしたお友だちの方などと争論なさるんですよ。五十ぐらいの年配でなきや男はつまらないなんてね。ええ。ええ。私などにも、そんなことを仰有ることがありましたよ。それは、あなた、意地なく、ヤケで力んでいらッしやることですよ。そうですとも。そうでなきやならないことですものね。どこに五十の年寄を好く娘があるものですか」

まったく主婦の希望的観測にすぎなかつた。自分の希望に当てはめようとしているだけで、個性というものを見ていないのだ。その観察を自分に合せてゆがめてあるので、多く訊いてもムダであるし、むしろ観点を狂わせる害があつた。

放二は主婦との対話を打ちきつて、もう一度、記代子の部屋を捜させてもらった。心理

を辿る何かが、どこかにひそんでいないかと思つたのだ。

放二はヒキダシをあけたり、本箱の戸をひらいて何となく一冊の本をとりだして見たりして、彼女の心理について、何か今に思い当りはしないかと漠然と期待していた。しかし何一つ思い当るものはなかった。

第一、何かを思い当て得るような根拠ある思考力を自覚することすらもできない。なんとなく空転し、いつまでも空虚なものを自覚しうるだけである。

もしも、何か思い当ることがあるとすれば、一山のマッチが昨日から思い当たっているだけなのだ。それに限定されているだけで、それ以外へ関く思考の自由すらも失っているかのようなだ。

「なんのために灰皿を買つたんだろう。タバコをすうようになったのかしら？ それとも、来客のためだろうか？」

マッチに限定された思考力は、そんなことだけ考えていた。彼はピンクの小さな灰皿を手にとつて、空転する頭をもてあましていた。

「とにかく、礼子さんに会つてみよう」

彼はあきらめて立ち上つた。

十

バーで礼子に会った。放二の来意をきくと、皆まで言わせず、礼子は彼を近所の喫茶店へさそった。

「なんですツて？ 一山のウチのマツチ？」

礼子は笑った。

「そうね。いらッしやるたび、テーブルのマツチはきツと持ってお帰りですよ。あのお店は各テーブルに必ず二ツずつのマツチを置いとく習慣なんです。なんとなく持ち帰ってお使いにならなかったのね」

「使わないマツチを、なぜ持つて帰ったのでしょうかね」

放二の思考はずツとマツチにこだわりすぎて、彼自身にもバカらしいと思われた。礼子は返事にこまつて、

「いろんな場合がありうるわ。あの年配のお嬢さんには、どんな突飛なことも、御自分だけの歴れっきとした理由がありうるわ。あのバーでも、あの年配のお嬢さん女給がまとめて三人

ぐらい揃うときがあると、バーのシキタリが狂っちゃって、お店全体が狂うんです。それが理窟は合ってるんですよ」

「一回に二ツのマツチですと、一つも使わなかったものとして、十二三回、遊びに行かれたわけですね」

礼子のはかるくうなずいただけで答えなかった。そして、考えこんでいたが、

「私、どちらかと云えば、青木に同情していたのです。ですが、失踪なさツたときいて、記代子さんがお気の毒ですわ」

「奥さんは、記代子さんの失踪を御存知のようでしたね」

「青木にきいたのです」

さつきから放二はそこにこだわっていたが、礼子の答えは簡潔だった。

「北川さんは、このこと、どう思いますか。記代子さんは、十日間ほど、毎日欠かさずウチのバーへいらしたことがあるんです。失踪は金曜日だそうですね。すると、その十日ほど前までです」

放二はあやしんで、

「青木さんとご一しよではなかったのですか」

「いいえ。青木と一しよは一回だけ。それから一ヶ月あまりたって、つづけさまに十日ほど、いらしたのです。いつも一人で。で、たいがい、とツツきの長椅子へお坐りなの。私にここへおかけなさいって、隣へ並んで坐るように命令なさるのよ。そして私が坐りますとね。あなた、おもしろい？　つままないわね、ツて、挨拶代りに仰有る言葉が必ずそれなんです。私はほかのテーブルにも回らなければならぬでしょう。代りにほかの女給さんが行って話しかけても、ご返事なさったことないの。誰も行く人なくなっちゃったわ。私だって、あの方のテーブルへ行つて、たのしいってこと、ないんですもの。時々、あの方のそばへ行くことがあつても、せいぜい一分間と居たことがなかったんです。いつ、行つても、仰有ることは同じよ。おもしろいの？　つままないでしょ？　それだけなのよ。一日に何度でも。私があの方のそばへ行くたびに。そして、ほかの話らしいことはほとんど話し合わなかったわ。その機会はあるんですけどね。一分間ぐらいは、坐っていましたから。二人とも黙りこくツているだけでした。そんな風にして、およそ、三四十分ぐらいね。カクテル一つのみをのこして、お帰りでしたの」

そして、シミジミと、つけ加えた。

「敵意じゃなかったと思うのよ。青木と一しよの時は、敵意満々のようでしたけどね。」

敵意があるなら、他のことを言わなくとも、必ず言わなければならない言葉があつたはずです。私は昨日まで、あの方がニンシンしていらしたと、知りませんでした」

十一

ともかく、心理の足跡が、うかびでてきた。失踪の十日ほど前までの約十日間、記代子は毎日ただ一人で礼子のバーへ現れているのである。そして、礼子に向つて、あなた、おもしろいの？ つまんないでしょう、と言いかけるほかには押し黙っていた。そして、ニンシンについては、一言も、もらさなかった。

失踪の十日前。……

記代子が克子に会ったところだ。そしてその時はアベコベにニンシンを主に語っているのだ。克子からダタイの医者を教えてもらっているのである。

そのころ、記代子と青木との仲は、どうだったろう？ 二人の間に何かあつたのだろうか？ それを青木にたしかめることは、いけないことだろうか、と、せつ子の言葉を思いだしながら、放二は考えた。

社のひけは、規則はないが、サンマータイムの六時ごろだ。編集部とちがって、作家まわりが少いから、ひけ時まで部員の顔はあらかた揃っている。青木と記代子も例外ではない。二人はそろって、姿を消す。

放二が記代子と一しよのころは映画を見たり、ビンゴをやったり、喫茶で休んだり、歩いたり、ごく月並な二三時間をすごしたにすぎない。放二自身はお酒をのまなかったが、二人のほかに飲み助のつれがあつて、お酒をのむようなときには、たいがい駅にちかいマ―ケットのカストリ屋へ行つた。フトコロのせいだけではなく、記代子がそこへ行きたがるのだ。人間の本性をムキダシにしたような猥雑な場所が珍しくて、又、酔漢にジロジロみられたり、話しかけられるのが愉しうであつた。すると記代子はいつも放二に寄り添つて、放二以外の誰れのものでもないようにふるまうのが、うれしいようであつた。

放二は踊れなかったが、青木のダンスはステツプが美しいので、社内でも有名だった。彼が留学中に覚えたダンスで、リズムにのる姿勢や特に肩の角度やうごきがヨーロッパ風に古風で典雅であつた。記代子もダンスが好きであつた。二人がホールで踊っているという噂は、放二もかねて聞いたものだ。退社後の青木と記代子の行動は、そのへんまでは見当がつくが、あとは分らない。

「ノクタンビュールへは、たいがい、幾時ごろ行かれたのでしょうか？」

「八時か、八時半ごろでしょうね。ノクタンビュールは九時か九時半ごろ、一時にドツとはやるのよ。まるでお客さん方が申し合せていらッしやるように。そうなんです。記代子さんのいらッしやるのは、その前、いつもお客さんが一組か二組のころでしたわ」

サンマータイムでは、明るい時刻だ。青木とそんなに早い時刻に別れていたのだろうか？　すると、礼子が言った。

「ほかの女給さんと一言も話さなかったり、まれに酔っぱらったお客さんが、一しよに飲みましよう、こツちへいらッしやい、なんて誘っても、見向きもなさらなかったんですけどね。北川さんは、お分りになるかしら？　女ツて、変なものなのよ。ことに、娘さんは複雑ですよ。ですけどね。女の本性には、規矩があるから、男の方には変に見えても、女にはたいがい分るものなのよ。私は思うんです。アベコベじゃないかしら？　誰ともお話しなかったのは、本当は、とてもお話したい気持の逆の表現じゃないかしら。みんな逆だと思うんです。おもしろくないでしょう？　つままないわね、というのは、おもしろいでしょう、おもしろそうね、ということだと思つたわ。昨日今日、そう思いついたんです」

十二

礼子の観察は当っているかも知れない、と放二は思った。自分の経験にてらして、マーケットのカストリ屋で男たちにとりまかれている時の記代子は、酔漢にからかわれるのも愉しそうであつたし、酔漢にジロジロ見られても、心ゆたかであつたようだ。カストリ屋の主婦や女給と語らうことも、けつしてキライではなかつたのである。

しかし、記代子の新たな境遇、ニンシンと孤独、小娘の身にあまる煩悶の日々を思いやると、心境の激変も当然ななければならないし、たのしいこと、明るく賑やかなことには、ついて行けなくなっていたかも知れない。虚無にもなるう。軽蔑もしたかろう。

しかし、そのへんのことは、放二にはシカと見当はつげがたかつた。

「すると、記代子さんは、皆さんとお友だちになりたくて、遊びに行かれたのでしょうか」「お友だちになりたいツてわけではないでしょうけど、男のお客さん方のように、バカ騒ぎしたいような気持——女ですから、バカ騒ぎはないでしょうけど、小説などにありますでしょう。気持のふさいだ時や、失恋だの、悩みだのというときに、バーでヤケ酒のむななんてことが。そんなこと、伝説にすぎないようなものですけど、知らない方は、真にうけ

るかも知れないわ。記代子さんは、まだ子供ですもの、バーツてそんなところかと思つてらッしやるかも知れなくツてよ。そして、男のお客さん方のように、バーへ行つて、氣をまぎらしたかつたのか知れないわ。バーで、お客さんや私たちのやつてることが、つままないんじゃないかと、同じようなことを、したかつたんじやないかしら。のんで、酔つ払つて、お喋りして、乾杯したり、踊つたり……」

放二は、なるほど、と思つた。

しかし、それだけの理由だとしてみると、記代子がうわべでは虚勢をはつていても、実は深く悩んでいて、バーで鬱を散じたいような、よるべない氣持であつたということが分るだけだ。礼子にニンシンをうちあけなかつたことも、克子にはそれを打ちあけたことも、そして、二つが同じ頃であることも、特別の意味はなくなつてしもう。

「ほかに、お氣づきのことはありませんでしたか？」

と、きくと、礼子は放二がミレンを起す余地がないほどハッキリと否定して、

「有れば、私もうれしいわ。私、お力になつてあげたくて仕方がないの。御心配でしょうねえ。大庭先生は、どうしてらッしやるかしら？」

放二がだまつていると、

「私、先生にお目にかかりたいわ。いま、上京してらっしゃるんですってね。でも記代子さんがこんなで御忙しいでしょうし、遊びにきていただけないでしょうね」

「記代子さんのことでお忙しくはありませんが、お仕事でお忙しいと思います。上京中、外出なさることは殆どありません」

「私がお訪ねしてはいけないの？」

「その御返事は、ぼくにはできませんが、宿を知らされた特定の人が訪ねる以外はお会いにならないのが普通です」

礼子も思いきりよくあきらめて、

「時々、遊びにいらしてよ。遊びにきてらしたら、記代子さんにも会えたのよ。はやく、行方、見つけてあげてね。そして、記代子さんを幸福にしてあげて」

礼子はそれを心から期待しているようだった。

青木の場合

一

記代子の失踪をきいたとき、青木が直感したのは死であった。

しかし、記代子に、死を選ぶような素振りがあったわけではない。むしろ、怪しい挙動のなさすぎるのがフシギなほどであった。

悲しくて、怪しいのは、青木の方であった。罪悪感にさいなまれ、行末を案じ、一人だと、絶叫したくなり、胸をかきむしりたくなることがあった。記代子と会うと、逆上のものはおさまって、平静で柔和になるが、骨がらみの暗さ悲しさはどうにもならない。記代子の気持をひきたて、力をつけてやろうとして、いつとなく悲しい思いに走っているのは彼自身であった。

男の方がそんな風にダラシないから、記代子が逆に、青木の前ではノンビリしていたのかも知れないが、案外シンは頑固で、一人ぎめで、それで楽天的なようにも見えた。

青木は、記代子の将来を考えてダタイをすすめたいのであるが、記代子の反対は強く、青木は再々云いだすことができなかった。

失踪前も、特別な挙動があつたとは考えられない。二人の仲はいつもと変りがなく、ちよつとしたイサカイもなかった。いつまでも捨てないでくれ、とか、いつまでも愛してくれ、というようなことを言つたこともない。青木がたよりない思いをさせられるほど、淡々と、ノンビリしていたのである。

しかし、死というものが、どこに宿るかは見当がつかない。ノンビリと、鈍感な田舎者の魂にも、だしぬけの死が宿りやすいことは、チエホフが書いていることだ。これぐらい妙な友だちはない。めつたに訪ねてこないけれども、訪ねてきた時は親友で、とびぬけて親友なのかも知れないのである。

日々が平凡で平和な子守女でもふと自殺する理由がありうるのだ。記代子が死にみられるのはフシギではない。むしろ当然すぎるといえよう。

青木は彼女の失踪をきいて、死のほかを考えることができなかった。彼女に不幸の訪れを怖れていたのも、最悪の場合を想定せざるを得なかった。

「まだ、生きていてくれ！」

青木はちよつとした当てをたよりに走りまわった。

「死んでいるなら、死んだ場所へ案内して下さいよ。記代子さん」

誰の目にもふれない先に、記代子の屍体を埋葬して、同じ場所で死のうと思った。

礼子に会って、十日あまり毎日一人でバーへ通った話をきくと、ぶちのめされたように思った。やっぱし！ 記代子は彼の前ではノンビリしていたが、内心はやりきれなかったのだ！ 切なさ、一人じや処置がつかないものだ。親しい人には隠して、行きずりの人の合力にすぎるのだ。切なさ、というものは、そんなものだ。

「いよいよ、ダメか！」

青木は落胆して溜息をついた。

「どこで死んでいるのだろう？」

しかし、礼子の意見はちがつていた。

「生きていますよ。私たちのように平凡な女は、生きることを考えて、悩むものです。あなたのように、力みすぎたり、諦めすぎたりしないのよ。案外ノンビリと、お友だちと水泳にでもいつているのかも知れません」

青木は、とてもそんな風に思うことができなかった。

青木は玉川上水に沿うて、さまよった。記代子の宿から、歩いて四十五分ぐらい。死ぬとすれば、まずここを考えるのが自然であつた。濁つた早い流れを見つめて歩いていると、その下に記代子がいるように思われて仕方がなかつた。

「よびかけてくれないかな」

と、青木は思つた。自然林に、おびただしい小鳥が啼いていた。

「あんな風に、よびかけてくれないかな」

青木は、しかし、自分がどうかしている、と考えた。どうして、玉川上水なんかへ、来たのだろう？ 五十の男が人の行方を探すにしては、論理的なところがなさすぎる。まるで女学生のように直感的でセンチである。

「だらしない！」

まったくだ。泣きべそかいているじゃないか。ともかく学問を身につけた人間が、論理的なところを皆目失つて行動しているようでは、身の終りというものだ。

「死にたいのはオレ自身じゃないのか」

もしそうだとすると、いよいよセンチで、助からない。彼は苦笑して、歩きだした。

記代子は、どこにいるか？ それを解く鍵が一つある。金曜日に、記代子の姿を見た人を探すことだ。宿をでて電車にのつたか、玉川上水の方へ歩いて行ったか、誰かが見ている筈である。しかし、その誰かを探す手段がわからない。

彼は記代子の宿を訪ねた。はじめての訪問だった。彼の名をきくと、主婦は身をかくひきしめて、警戒の色をみせた。青木の癪にグツときたので、彼は苦笑して、

「わかつています。歓迎されないお客さんだということは、どこへ行っても、こうなんですよ。で、皆さんのお気持ちを尊重していたぶんには、出家遁世あるのみですから、時々こうして、歓迎せられざる訪問もしなければならぬのですよ。まゝ外交員なみに、ちよつとの辛抱、おねがいますよ」

青木はドッコイショとカマチに腰を下して、

「失礼します。これが外交員、イヤ、一般に歓迎せられざる客人の礼義でして、つまり、ここから上へはあがらない、即ち、歓迎せられざる身の程をわきまえています、という自粛自虚の表現なんですな」

青木は、もつと、ふざけなくなつた。

「カバンの中から鉛筆かなんかととりだして、並べたくなるもんですなア。こうして、入り

口へ腰かけますとね。昔、やったことがあるような気持になるから、妙なものですよ」

先方がタニシのように口をあける見込みがないのを見てとって、青木は益々、ふざけた気持になった。

「さて、鉛筆の代りに、とりいだします品物は、ハツハ」

青木は主婦を見つめた。

「記代子さんは、金曜日に、どんな服装で、できましたか？」

主婦は意表をつかれた。青木にしてみれば当然な質問だったが、主婦はこれまでに放二から様々の質問をうけて、しかし、この質問はうけなかったからである。

「それを、きいて、どうなさるのです」

敵意がこもったので、青木は嘲笑で応じた。

「人相書をまわすんですよ。探ね人。家出娘。二十歳」

「大庭さんのお指図で、北川さんが捜査に当たっておられます。あなたのことは、なんのお指図もありませんから、お帰り下さい」

ピシヤリと障子をしめてしまった。

三

青木は熱海をぶらぶらした。

記代子は熱海に通じていた。長平が上京のたび熱海に立ち寄る習慣で、迎える記代子や放二らと数日すごしたからである。

青木は記代子の案内で、いくらか熱海に通じた。観音教の本殿や、来宮神社の大楠や、重箱という鰻屋なども教えてもらった。

錦ヶ浦へ案内したのも記代子であった。トンネルをでた崖のコンクリートに、ちょっと待て、と書いてあるのも指し示した。

「投身自殺ツて、とてもスポーツの要領でやるもんですツて。ナムアミダブツ、なんてんじゃないそうだわ」

「どんなふうにするの？」

「たいがい、助走してくるのよ。エイ、エイ、エイッて、掛け声をかけて助走する人も、あるんですツて。茶店で休んでいた人が、とつぜん駆けだして飛びこむこともあるそうよ。走り幅飛の助走路よりも長そうだわ」

「なるほど。岩にぶつかるのがイヤなんだな。ぼくも、ここで死ぬんなら、助走するな。痛い目を見たくないからね」

「痛い目？」

記代子は不審そうに、

「足が折れたり、顔がつぶれたり、醜い姿になるのがイヤなのよ。助走しない人だって、いるのよ。その人はダイヴィングの要領ですって。こう手をあげて、後にそって、かぐんで、ハズミをつけてダイヴするんですって。私だったら、ダイヴィングでやるなア」

二人はそんな話をしたことがあった。

又、記代子がニンシンをうちあげたのも、熱海の宿であった。

青木は錦ヶ浦の茶店で休んだ。断崖の柵にそうて、若い人たちがむれていた。空も、海も、あかるい。

「あそこで、ダイヴしたのかな」

しかし、そう考えたり、それを突きとめるために来たわけではなかった。彼は目当てがないのだ。ただ、感傷旅行をたのしんでいるのであった。

熱海の道々に記代子の匂いがしみていような気がする。そう考えてもいいのだ。なん

となく、センチな気分を追って、漫然と感傷的な旅にひたりたかったのだ。彼の身を取りまいて感じられる見えない敵意の数々から逃げだしたくもあつた。

「ここ一週間ぐらいのうちに、誰か投身した人がありましたか」

彼は茶店の人にきいた。

「投身は下火になりました。今は、アドルムですね」

「なるほど。めつたに投身はないのですか」

「いゝえ。下火といつても、かなり、あるんですよ。三四日前にも泳ぎの達者な学生がとびこんで、助かりましたね」

茶店の前に十名ぐらいの若い男女の団体がむれていた。

「誰か、とびこむ勇士はいないか」

「よし」

小柄な男が声に応じて群から離れた。彼は肩のリュックを下した。

「諸君。サヨナラ」

彼は左手をあげて挨拶した。にわかに顔がひきしまつて真剣になった。彼は一散に走りだした。

残された団体は、わけのわからぬどよめきをたてた。断崖の近くで、男は野球のスライディングをやった。そして、スレスレのところで止った。団体は拍手した。

青木は思わず立ち上って首をのぼしていたが、顔は蒼白になっていた。メマイで、クラした。

「ひどいイタズラをしやがる」

しかし、すばらしくキレイな空が目にした。

四

熱海から戻つてみると、記代子の行方は依然わからなかった。

もう生きている見込みはない、と青木は思った。生きているなら、ハガキぐらいはくれるだろうと思われた。失踪の日から一週間すぎて、次の金曜日になっていた。

青木はせつ子によびつけられて、まるで彼が記代子を隠して、ひそかに逢っているかのような不快な疑惑を露骨に浴せかけられた。

青木は苦笑して否定したが、怒らなかった。そう疑られても仕方がないと思っていたか

らである。

「しかし、そこまで疑る人の本性というものは、残忍無慙、血も涙も綺麗サツパリないんだな。見事ですよ」

青木は皮肉ったが、せつ子は蠅がとまったほどにも気にとめなかった。

彼女が耳目をこらしているのは、青木の言葉が真実かどうか、それを見分けるためだけである。

「三日間、どこにいたのですか」

「第一日目は東京に、二日目と三日目は熱海に。そして三日目の夜、つまり昨夜ね。哀れにも悄然と東京へ戻ってきましたよ」

「誰と、ですか」

「二人です。ぼくの影と。ねえ、あなた。影は悲しく生きていますよ。広島のかんとか銀行の石段をごろんなさい。あれは誰の影でもない私の影ですよ。あらゆる悲しい人間の影なんだな。ぼくは原子バクダンを祝福するですよ。なぜなら、も一人の自分を見ることができたから。悲しめる人は、広島で、ありのままの自分を見ることができるとですよ。口ダシだって、あんな切ない像を創りやしなかった……」

「熱海の旅館は？」

「実に、見事です、あなたは」

と、青木はくさりきつて、

「そんなことまで一々きく品性もあれば、答える必要をもたない品性もあるですよ。ねえ、あなた。あなたという人は、女ながらも、仕事師としては偉い人です。しかし、あなたの品性は、失礼ながら、戦国時代ですな。人をギロチンにかけるか、あなたがギロチンにかかるか、たぶん、二つながら、あなたのものだ」

話の途中に、せつ子はベルをおして、秘書をよんだ。

「アレ、とどいてますか。タキシードは？」

「きております」

「持ってきて下さい」

秘書はカサばった包みをぶらさげてきた。中から、タキシード、シルクハット、靴、その他付属品、ステッキに白い手袋まで一揃い現れた。

「あなた、きてごらんなさい」

せつ子は青木に命じた。

「なにごとですか。これは？」

「社員は連日宣伝に総動員ですよ。あなたのように、休んで遊んでいる人はおりません。あなたは、明日から三日間、この服装で、都内の盛り場の辻々でビラをくぼるのです。ヒゲのある中年紳士は、あなただけです。デコレーションを施したトラックに、蓄音機と拡声機をつみこんで、お供させます。あなたは、演説が上手でした。立候補なさるのですものね」

青木は泣きそうな顔をしたが、

「ええ。演説はね。うまいもんですわ。なんなら、シャンソンぐらい、おまけに、唄ってあげますアね。タキシードも似合うでしょうよ。着てみなくツても分りませア。紳士はなんでも似合うにきまつているのだから」

サヨナラも言わないで、立ち去った。

五

青木は、たそがれの街を歩いていたが、ふと、キツパイを思いだした。記代子と二度ほ

ど踊りに行ったことがあった。

尖った顔が、出来の悪い観音様に似て、南洋の娘のような甘ったるい腰つきをしている。なんとなく中年男をそそりたてる杏のような娘である。

「フン。杏娘に拝顔しようや」

ほかに行き場がなかった。どこにも、親しいものがない。多少、つきあってくれそうなのは、ルミ子ぐらいのものだ。そこは時間が早すぎた。

目的がきまると、やるせない気持も落付いてくれる。彼は新宿のマーケットで安焼酎をのんだ。一パイ三十円。三杯以上は命の方が、という説もあるから、ギリギリ三杯できりあげる。

杏娘はあんまり親切じゃないようだ。人ツキのわるい娘である。しかし、記代子の友だちではあるから、赤の他人よりは身をいれて、失踪の話をきいてくれるだろう。それだけでよかった。

「アクビをかみ殺しているような顔さえしなきゃアたくさんなのさ」

杏娘の甘ったるい腰をだいて、踊りながら喋りまくっているうちは、太平楽というものである。

しかし、杏娘はホールにいなかった。一曲ごとにダンサーをかえてキツピイの居場所をきくうちに、十人目ぐらいで突きとめた。

こんなちよつとの困難に突き当たると、青木の勇氣はわき立つのである。キツピイに会ったところで、どうせ、たいしたこともない。むしろ居場所を突きとめるという事業に熱中する方が、氣持がまぎれるというものだ。

踊るうちに、酔いが沸騰していた。

「ここだな。ヤ。こんばんは。お嬢さん」

めざす店の女給にからみつかれて、青木はキゲンよく挨拶した。

「キツピイさん、いるかい？」

女は返事をしなかったが、その顔色で居ることを見てとると、それで青木は充分であった。カンの閃きに身をひるがえして応じる時が、彼の人生で最も順調な時間なのである。わずかに一分足らずであるが。彼はそれを心得ていた。わが人生の最良の一分間。

「ヤ。ドッコイシヨ」

彼はイスに腰を下して、たちまち彼をとりまいた女たちを一人一人ギンミした。キツピイはいなかった。

「コンバンハ。麗人ぞろいだなア。ビールをいただきますよう。ときに、キツパイさんをよんで下さい。陰ながらお慕い申上げているオトツチャンが、一夜の憐れみを乞いにあがつたとお伝えして、ね。イノチぐらい捧げますと、ね。ねては夢、さめてはうつつき。わかつていただけるだろうね。この気持は。年のことは、言いなさんな」

他の女の陰から、キツパイがヌツと現れた。彼女は青木を睨みつけた。

「ヤ。キツパイさん。待つてました。そうでしょうとも。分つてましたよ。あんたが笑顔じゃ迎えてくれないだろうということはね」

キツパイは立つたままだった。

「まア、かけなさいよ。はるばるお慕いして訪ねてきた男を、ジャケンに扱うもんじゃありませんよ。な。笑つてみせてくれよ。一秒でもいいや。ぼくを忘れたかな。大庭記代子嬢のカバン持ちさ。覚えているだろうね」

キツパイはイスにかけて頼杖をついて、ジロジロ青木を見つめた。

「どうして笑つてみせなきやいけないのさ」

「難問だね」

青木はキツパイを観察したが、酔っているようでもなかった。

六

「言葉が足りなかったんだな。あなたが笑ったら、さぞ可愛いくて、ぼくはうれしい気持ちだろうと云いたかったのさ。あなたは観音様に似てるんだ。ちょつとリンカクが尖っているのは、職人が南蛮渡来なんだな。腰の線が、又、そっくり南洋の観音様さ。な。南蛮渡来だつて、日本なみに、笑ってくれたつていいだろうね」

彼はビールをのみほした。そして、益々、好機嫌であつた。

「こんなことを言いに来たんじゃなかったんだがな。ま、いいや。何から喋らなきゃいけないという規則があるわけじゃアないんだからな。ねえ。キツピイさん。そうだろう。ぼくはあなたに会えて、うれしいのだ。ぼくは、あなたの頬ツペタを、ちょつと突ツついてみたいね。普通、そんな気持ちには、ならないもんだね。接吻したいとか、肩をだきよせたいとか、そういう気持ちになるもんですよ。一般に、女というものに対してはね。ところが、キツピイさんは、ちがうね。ぼくは頬ツペタを突ツつきたいんだ。チベットの女の子は、コンニチハの挨拶にベロをだすそうだね。べつに頬ツペタを突ツつかなくとも出すんだと

さ。だけどさ。南洋の観音様は、こっちの方から頬ツペタを突ツついてあげて、コンニチハの挨拶がわりにしたいんだなア。ペロをだせというんじゃないんだぜ。最もインギン、又、愛情こまやかに焚きしめた礼節としてですよ」

青木はビールをのもうとした。頬杖をついてジロジロ目を光らしていたキツパイが、片手をのばして、青木が口に当てたコップを横に払った。コップは壁に当って、落ちて、割れた。キツパイは睨みつけて、

「じゃア、私の頬ツペタ、突ツついてごらんよ。タダは、帰さないよ」

青木は酔っていたので、むしろ興にかられた。

「さすがに、あなたは、ぼくの考えた通りの人さ。そのトンチンカンなところがね。ほかの観音様は、みんなツジツマが合つてらア。神秘的というものはタカの知れたものさ。あなたは神秘じゃないんだな。要するに南洋と日本の言語風習の差あるのみ。ねえ。あなた我々はその差に於て交りを深めましょう」

青木は腕をつかまれた。そして、ひき起こされた。身ナリのよいアンちゃんであった。「勘定を払えよ。そして、出る。いくらだい。このオトツチャンは」

二千円であつた。青木のがまぐち口には、千八百円と小銭があるだけであつた。アンちゃん

は千八百円を女に渡した。

「二百円、まけてやってよ。仕方がねえや。おい。出ろ。足りないところは、カンベンしてくれるとよ」

「や、アンちゃん。コンバンハ。しかしお前さんが出ることはなからうぜ。ねえ、アンちゃんや。ぼくの話し相手はジャカルタの観音様さ」

アンちゃんは、もはや物を言わなかった。彼の片腕をかかえて、グイグイつれだした。露路をまがると、ちよつとした暗闇の空地があつた。男の腕がとけたと思うと、往復ビンタを五ツ六ツくらつた。と、顔に一撃をくらつて、意識を失ってしまった。

気がついたとき、男の代りに、立っていたのはキツパイであつた。

「血をふけよ。紙をまるめて、鼻につめこむんだよ。鼻血の始末もできないくせに、この土地で大きな口をきくんじやないよ」

空地の隅の水道で、手と顔を洗わせた。

「利巧ぶるんじゃないよ。大バカでなきや、こんな目にあいやしないんだから」

廻り道して大通りの近くまで一しよにきて、キツパイはさっきと戻って行つた。

五人目の人

一

放二は午ごろキツピイの自宅を訪ねた。これで四度目であつた。キツピイはどこかへ泊りこんで、三日、家へ戻らなかつたのである。

四度目に、キツピイはいた。

彼女は放二の根氣にあきらめたようであつた。

「あなた、何回でも、来るつもりなのね」

「ええ。お目にかかつて、お話をうけたまわるまでは、何回でも」

キツピイは有り合せの下駄をつツかけると、放二をうながして、外へでた。人通りのすくない道へ歩きこんでから、

「あなたはこういう人なのよ。記代子さんの何よ。ハッキリ言つて」

「同じ社の同じ部に机をならべている同僚です」

「それから？」

「同じ仕事をしています」

「それから？」

「それだけです。そして、社長の命令で、記代子さんの行方を捜しているのです」

放二は思った。こういう女には、洗いざらい言ってしまう方がいいのだ、と。キツピイは何かを打ちあけてもいらいらしい気持になつていようだ。彼が隠しだてをしなければ、たぶん、打ちあけてくれるだろう。キツピイの関心は、彼と記代子との恋愛関係にあるようであつた。

「あなたは、記代子さんがニンシンしていらッしやることを御存じでしょうね」
キツピイはうなずいた。

「記代子さんの恋人は、青木さんと仰有る年配の方です。ぼくとあの方とは、お友だち以外の関係はありません。ただ、ぼくが大庭長平先生の掛りですから、仕事の上で、特別密接な関係にあるというだけです」

「あなた方は、以前はフィアンセだったのでしょう」

キツピイの目は険しかった。嘘をとがめているのである。

「ちがいます。ぼくには、女の方を幸福にする資格がないのです」

放二は、ザック balan にうちあけた。

「ぼくは胸が悪いのです。元々悪かったのですが、この夏以来、特別にいけないのです。ぼくの予感が正しければ、記代子さんの行方を突きとめるまで倒れないのが精一ぱいです。人なみの生活を考えないことにしているのです」

キツピイは放二をジロジロ見廻した。放二は疲れきっている。目のまわりに青い隈がしみついていて、しかしキツピイは同情した様子もなかった。

「私は、なにも知らないわ」

キツピイはすてるように呟いた。

「ですが、五人目の女の方を御存じではないのですか」

「五人目の女？」

「ええ。先日、そう仰有ったと覚えているのですが」

「五人目か」

キツピイはつまらなそうに呟いて、やがて、早口につけくわえた。

「五人目の人は知っています。だけど、言うわけには、いかないわ。言うことが、できないの。これだけのことを教えてあげるのだって、一分前まで、考えていなかったことなのよ。あとは勝手に捜しなさいよ。どこかに、いるでしょうよ。なくならないものらしいから。もう、会いに来て、ダメ。さよなら。肺病さん。だけど、五人目は女じゃないかも知れないわ」

キツピイは走り去った。

二

放二が社へでみると、穂積が汗をふきふき外出から戻ってきた。

「ゆうべ青木さんが新宿で愚連隊にやられたのさ。記代子さんの友だちの喫茶店でインネンをつけられたんだそうだね。欠勤届を持たせてよこしてね。皮肉な先生さ。タキシードにシルクハットの晴れの日にあいにく美貌に傷をつけてまして相すみません。アハハ。あの人は、めぐりあわせまで皮肉に回転するらしいや。しかし、ひどいぜ。鬼瓦みたいな顔さ。喋るのも不自由なのさ。見舞いに行つて、気の毒したよ」

「どんなことでインネンつけられたのですか」

「わけがわからんそうだがね。とにかく一撃のもとにノビたんで、かえって良かったんだそう。悪酒の酔いは、ノビたぐらいじや醒めないそうだけ」

放二の頭には、キツピイの謎の言葉がからみついていた。青木のなぐられたのはキツピイの店らしいが、彼女はそれを言わなかった。言う必要がないことも確かであるが。

しかし、キツピイに会う前に、そのことを知っていたら、と、放二は残念がった。五人目の人物の多少の手掛りにはなったであろう。放二は、ダンスホールでキツピイの居場所をきいたとき、切符売りの女が彼に云った忠告も忘れていなかった。キツピイには悪いヒモがついているらしい。ヒモと五人目の人物は、たぶんツナガリがあるようである。

放二はせつ子に報告した。

「とにかく、生きておられることだけは確実のようです」

たったそれだけであるが、最初で、全部の聞きこみであった。とにかく、はじめて足跡らしいものを突きとめたのだが、そこでとぎれで、あとがない。

しかし、せつ子はよろこんだ。

「きつと突きとめて下さると信じていたわ。私の信じた通りです。こんなうれしいこと、

ないわ。あと一步です」

放二は、こまりきって、

「このさがが雲をつかむようなんです」

「いゝえ。ハッキリしています」

「誰でしょうか。五人目の男は？」

「それは問題ではないのです。キツパイが知っています。男の名ではありませんよ。記代子さんの居場所を。あなたはそれを突きとめればよろしいのです。五人目の男のことは、どうだって、かまいません」

理窟はそうにちがひなかった。たしかにキツパイは知っている。放二にはいろいろのことが考えられた。記代子には青木のほかにも男の友だちがあつたのかも知れない。あるいは青木は社内だけの恋人で、本当の恋人は五人目の男かも知れなかった。青木がなぐられたのは、そのせいかも知れないし、キツパイが、放二と記代子との関係を気にしていたのも、彼女がヒントを与えたのは二人の関係がなんでもないと分つてからであつたのも、それを裏書きしているように思われた。

しかし、キツパイの口からは、もうあれ以上きくことができないだろうと放二は思った。

一筋縄ではいかないらしいが、とにかく、やってみるだけだ。

彼は、せつ子が自分に与えた忠告を、そっくり、せつ子に返しておくのが何よりだと思った。せつ子は何も知らない方がいいのだ。記代子の過去も、現在も。青木にも知らせない方がいいのだ。彼ひとり突きとめて、自分の胸に隠しておけばすむことだ。

三

放二は早版の夕刊新聞を買いこんで、電車にのった。一般の退社時刻には早すぎる時間であった。キツパイのところへ立ち寄って、思いきって訊いてみようかと思案したが、新宿の喫茶街の開店時刻には間があるし、キツパイの自宅へ行けば、行き違いになる時刻であった。

キツパイが五人目の名を言うことができないのは、なぜだろう？ 人生の裏街では、どんなことでも有りうるのだ。どんな考えられないことでも、それが実在するときには、なんでもない顔をしているのだ。そして、全てが在りうるのである。

青木のほかにも記代子の恋人がいたかも知れぬ、ということも、放二にとっては、なん

でもなく実在しうることであった。それは記代子の値打に関するものではなかった。人間が元々そういうものなのだ。しかし、同時に、万人がいたましくもあり、高くもあるのだ。夕刊を読んでいると、映画欄の下段に、キッピイの店の広告がでていた。麗人を求む、とある。記代子が酒場で働く意志があるとすれば、あの店はよろこんで使うだろう。しかし、あの店にいないにしても、他の店にもいない理由にはならない。礼子の観察によれば、記代子は女給の生手が、つまらなくなかった、おもしろかった、というのである。

放二の部屋には、ルミ子や八重子や数人の女たちが、生菓子と果物をたべていた。ほかの女たちはシュミーズひとつであったが、ルミ子は服をつけていた。いつもルミ子はそうであった。

「記代子さんて方の屍体、まだ、あがないんですか」

八重子が放二にきいた。

「え？ 記代子さんが自殺したんですか」

放二はおどろいて訊きかえしたが、彼女らが記代子のことを知るわけがないことに気がついた。今よんできた新聞にも、そんな記事はでていなかったはずである。

「誰かそんなことを言った人があるんですか」

八重子は笑った。

「青木さんがルミちゃんちへ遊びにきて、今しがた帰ったばかりなんです。ゆうべ新宿でブンなぐられたんですって。三十分ぐらいルミちゃんに泣き言いって、千円くれてツタンですって。そのお金で、目下、宴会中」

ルミ子は何も言わなかった。

放二は穂積の話を思いだして、意外であつた。

「青木さんの顔の怪我はひどいようにきいたけど。話もよくできないぐらい」

「ええ。腐爛した水屍体のデスマスクに似ていたわ」

ルミ子は珍らしくもなさそうな顔だった。

「痛さをこらえれば、話すこともできるの。ポロポロ泣きながら。それを見せにきたんです。腐った顔と、泣きながらしぼりだす声とを、ね」

「そのくせ、私には見せないのよ。出て行け、なんて。キザなんだ、あのジジイ」

八重子は吐きすてるように、

「やること、なすこと、ニヤケているのよ。ツバひっかけてやりたいよ。だけど、ルミちゃんには、いいお客さ。腐った顔と泣き声みせて、千円くれて帰るんだもの。キザなジジ

「イに好かれてみたいや」

ルミ子は水蜜の皮をむきながら放二にたずねた。

「大庭先生の姪ですッてね。その方、自殺じゃないんですか」

四

放二は捜査のあらましを女たちに語ってきかせた。

ルミ子はきき終って、

「キツピイさん、もちろん、みんな知ってるのね。そして、何か、深い理由があるんだわ。キツピイさんに、会ってみたいな」

そしてルミ子は夕刊をとりあげて、放二の示したキツピイの店の広告を眺めていたが、
「私、この店の女給になってみましょうか。二三日いるうちに、秘密をききだすことができるでしょう」

とんでもないことを言いだしたのに気がついて、ルミ子は苦笑した。
「ちょッとしたスリルか。なにか、イタズラがしてみたいのさ」

「氣どつてやがら」

八重子がやりかえした。ルミ子の言葉に意外に反感をいだいた様子である。

ルミ子は苦笑して、

「フン。ヒステリイ」

「チェツ。しょつてやがら、あんたは、美人だよ。麗人でございますよ。美人女給にお似合いですよ。この町内へ二度と戻つてきなさんな」

「どうも相すみません。パンパンアパートの姐御さま」

「よしやがれ。パンパンでわるかつたわね」

八重子がなぜ腹をたてたか、ルミ子には一から十まで分つていた。何よりも嫉妬であつた。誰が放二を恋しているというわけではないのだ。ゴミ屑のような生活のなかで、美しい恋なんてものは、ありやしない。しかし、又、あるといえ、生活の全部が恋だけなのかも知れなかった。

ルミ子は自分の心を考えてみた。彼女は放二を恋してはいなかったが、世界で一番放二の偉さを知っている者があるとすれば、それは自分だろうと思つた。彼女は放二に自分の魂をゆるしていたが、放二も彼女のためにその魂をゆるしていると信じていることができるの

だ。この上の何物をもとめることもないではないか。放二はそういう人なのだ。己れの魂を彼にゆるす者は、彼の魂を己れにもゆるさされていることを見ることができるのである。

キツピイの店へ女給にでて秘密をききだしてあげたいというのは、深い動機からではない。八重子はそれを恋のせいであるかのように腹を立てゝいるけれども、そう思われるものがもしも自分にあるとすれば、それは自分の大きな罪だと言わなければならなかった。

放二を恋するというようなことが、他の人々への義理からではなく、自分の正しい生き方として、許さるべきことではないのだ。放二の偉大な魂を知りつつあることの満足よりも大きなものが有り得べきではないのだから。

彼女は人々に、恋のせいだと見られたことが羞しかったし、放二にはすまないことだと意外に深く気に病んだ。

「なんだか差出がましくって、私だって、キザッぽくって気がひけるのよ。あんまり羞しがらせないでね。でも、私が女給にすみこめば、秘密をききだすこともできるし、そうでもしなければ、キツピイさんはタシみたいに口をつぐんでいるだけだ。兄さんのために何かしてあげたいというんじゃないわ。私には出来ることらしいから、その義務を果すのさ。そして、それが私には面白そうに見えるからのことさ。私が、そうしちゃ、いけない

の？」

ルミ子は珍しくムキになっていた。そして、ふいに、涙ぐんだ。

五

その晩から、ルミ子はキツピイの店で働いていた。

この店の主人夫婦は、この商売の主人にしては、ちょつと柄が変わっていた。男の方は五十がらみの年配であるが、昔は手堅い会社かなにかに実直な事務をとっていたような、グズで気のきかないノンダクレという感じである。女はわりに若くて三十三四と見うけられるが、いくらかこんな商売をしていたように思われる程度のおとなしそうな女であった。ルミ子を雇い入れるとき、男主人がなんとなく真剣な顔付で、

「このへんの流儀で、ヒツパリをやらなきや競争ができないから、ぼくとしちゃアしたかないが、身を入れてつとめて下さい。あなたに客がついて繁昌してくれるなら、それに応じるだけのことはします」

命令らしいことを言ったのは、それだけだった。真剣のようで、なげやりであった。来

たばツかりの女に、何を言つたつて仕様がな。氣にいらなきやア、その日のうちによその店へ行つちまうのがこの商売の女だから、身を入れて話をするのは居つてからの相談だというような悟りきつた様子である。悟り方が諦め的で、なんとなく哀れに見えた。

ほかに男はいなかつた。

お客は幾組もきやしない。お客のもとめに応じて、二階の小部屋で遊ぶことができるようになっていた。なんだ、そんなのか、とルミ子は思ったが、表向きがそうでないだけバカバカしくて、奥へ消えたカップルが妙な顔付で再び現れてくると、笑いたくなるのであつた。

ルミ子はお客にさそわれたが、

「はじめてだから、ダメ」

「はじめてだって、ここはそういうウチじゃないか。はずかしがることはないぜ」

「あんたに会うのが、はじめてだから、ダメなのさ」

再び戻ってくるという仕掛が妙であつた。女の中でも利のきいた子は、ここで遊ぶことには応じなかつた。

ルミ子の様子がまだ子供っぽくて可愛いのに、おめずおくせず悠々としているから、女

たちは興味をもつものも、好意を示すものもいた。無関心なのはキツパイ一人であつたが、彼女は他の誰に対しても、友情を示さなかつた。そして一同から腫れ物にさわるような扱いをうけていた。

ルミ子はキツパイの人物にはなはだしく愛想をつかしてしまつた。女の中で一番くだらぬタイプである。自分を一段偉い女だと思つてゐるらしい。このへんで睨みのきくアンチャンがついてゐるせいだ。お客に対しても傲慢だつた。それもアンチャンのせいだ。

「ルミ子！」

とつぜんキツパイがよびつけた。店にお客がいなくなつた時である。はなれたテーブルにいたルミ子は、アクビでもするように、

「なアにい？」

「ルミ子」

ここへ来い、という命令の意味はわかつていたが、ルミ子は顔だけうごかして、

「なんの用？」

キツパイがズカズカ歩いてきた。ルミ子は有がたくな御来意をさとして身をひこうとしたが、戦闘訓練には全然なれていなかったから、身をひくことを考えてだけゐるうちに、

十か十五、つづけざまにひっぱたかれた。ルミ子は腕力に自信がないから、腹も立たない
たちで、痛さをのぞけば、蠅がとまったぐらいにしか考えていなかった。

六

ルミ子がボンヤリしていると、もう七ツ八ツ、おまけにひっぱたかれた。

ほかの女なら、口惜しまぎれに何とか言いたくなるところだが、ルミ子は睨みつけもし
なかった。手応えがなさすぎるせいかな、又、三ツ四ツ、おまけをもらった。

キツピイは凄んだタン力で睨みをきかせるヒマがなく、ひっぱただけひっぱたいて、
手が痛くなってしまった。

ルミ子がコック場で顔をなおして戻ってくると、キツピイは帰り仕度して出てしまった
あとだった。

「ボン中よ」

一人が教えてくれた。ヒロポンの話はきいていたが、ルミ子の周囲には愛用者がいなか
ったので、ボン中毒の正体がのみこめなかった。

「それで、凶暴なの？」

「そうでもないよ。根がヤキモチヤキなのよ。ルミちゃんが可愛い顔してるから、癪にさわるのよ」

その言葉が気に入らなかつたと見えて、ちよつと可愛い大柄な女が訂正した。

「エンゼルに女ができたから、ヒステリーなのさ。その女ツてのが、キツピイの学校友だちじゃないの。ここへ遊びにきたじゃないの。あの子さ。あんどきエンゼルが来ていたでしょう。女をつれてツて、そのまま同棲してるんだつてさ」

簡単に秘密がほぐれてきたが、ルミ子は驚きもしなかつた。ただ、エンゼル（天使）という、女らしい名が妙であつた。

「エンゼルツて、女性？」

「男も男、凄いのさ。今日は来なかつたけど時々くるよ」

一人のわりに年配なのが、不快そうに口をはさんだ。

「エンゼルがあの子と同棲するのは、キツピイも承知だったのよ。むしろ、キツピイがすすめたのさ。キツピイは、悪党よ。ねえ。あんたも、あのととき、話きいてたわね」

話しかけられた子は、軽くうなずいたが、答えなかつた。年配の女は語りつづけた。

「キツパイはテルミに負けない気なの。そして、エンゼルに気に入られようとしているのよ。だけど、問題になりやしない。顔だって、貫禄だって、キツパイにいいところ有りやしないよ。エンゼルがテルミを可愛がるのは、当たり前さ。キツパイはエンゼルにとりいるために、あの子を世話しちゃったのよ」

そして、不快そうに、つけ加えた。

「世話しちゃってから、ヤキモチやいてるのさ」

「惚れてる男に、女を世話するって、そんなの、あるかしら」

一人がフシギそうであつた。ひとしきり、それで議論がわいたが、言うだけ言わせておいて、年配の女はこう結論した。

「あの娘はね。良家の娘なんだってさ。お金持ちの娘らしいのよ。そして、ニンシンして家出中かなんかだつて。それで、子供を生ませて、養育料かなんか、ゆすらせようってことなの。それがキツパイの発案なのよ。だから、キツパイのツモリじゃア、女の世話じゃなくって、もうけ口の世話のツモリだったんでしょね。とにかく悪党よ。いいところ、一つもない奴ねえ」

ルミ子はキツパイやエンゼルの悪党ぶりには驚かなかつた。そんな奴は、どこかにタク

サンいるものだ。わけが分らないのは、記代子という娘であつた。ポツと出の田舎娘じゃあるまいし、その馬鹿ツぷりに見当がつけかねるのだ。

七

人間はいつも何かにためされているような気がするとルミ子は思った。

放二のような稀有な人が、せつ子だの記代子のような女とばかり交渉をもつということがその証しだが、人間万事、そんなものでもあるらしい。

両々その処をうるといふのは愚人の夢か諦めである。不均衡、不安定、ガサツなのが人間関係の定めであろう。それに対処することによつて、いつも何かにためされているのが人間だ。

利巧だけがためされているわけではない。バカはバカなりにためされている。自分の位置や身の程を知らないから、バカは得だという理窟もない。記代子のような女を相手にさせられて放二が損してるわけでもなくて、ただ、ためしに応じて生きるのが人間の定めのように思われた。

そして、尊大なせつ子や、バカな記代子のお相手をさせられるのは、放二が稀有な人だから、ためしが大きいのだろうとルミ子は思った。

ルミ子は、ともかく、自分の義務を果たしたことで満足した。意外にも早く、一夜のうちに。それというのも、キツパイにぶんなぐられたせいである。それがキツカケでもあったし、又、ぶんなぐられたルミ子である故、彼女がキツパイに興味をもったり、こまかく質問することを人々は怪しまなかった。

ルミ子はおそくアパートへ戻って、放二に報告した。

「エンゼルの住所は、女給さんたち、知らなかったわ。知らないのが当然だから、一々きいてもみなかったけど」

放二は驚きもしなかった。キツパイの様子から相当ケンノンな事情が想像されたからである。エンゼルが記代子のかねてからの愛人でなかったことが多少意外であっただけだ。

しかし、キツパイが根からの悪党だとも思われない。エンゼルが街のダニであるにしても、それだけが彼の全部ではないはずだ。キツパイがエンゼルにとりいるために級友を売ったにしても、人間というものは多かれ少かれ人を売っているものだ。人間には、めいめに、やむにやまれぬ悲しい立場があるのだから。

「どうしたら、エンゼルの住所がつきとめられるんだろうね」

カズ子が分別ぶって言った。ヤエ子は大根足の股をひろげて投げだして、ひっくりかえって、ウチワで胸をバタバタやりながら、

「ルミちゃん、ジユクでパンパンやるのさ。エンゼルの子分が遊びにくらア。そのうちに、なんとかなるよ」

「フン。それぐらいのことだったら、あんたで間に合うよ。やってきな」

カズ子にこう言われて、ヤエ子はプツとふきだした。

「まったくだ。エンゼルの子分と遊ぶぐらいだったらね。チエツ！ つまらねえところで、間に合いやがら」

エンゼルの住所を探すということは必ずしも彼の仕事の領分ではない。エンゼルのもとに居ると分れば、せつ子や長平や、又は、警察が探しだしてくれるだろう。

しかし、放二は、そうしなくなかった。記代子の過去も現在も、誰にも知らせたくなかったのである。

どうしても、彼自身の手で、記代子を元の位置へ置き戻さなければ、と、思った。しかし、そのとき、ルミ子がこう言った。

「記代子さんを探しだしてあげるのが、その方に親切なことでしょうか？」
ルミ子は思い惑っていた。

八

「エンゼルに手下が多いたって、監禁してやしないでしよう。監禁されているにしても、逃げられないことないはずだわ。ポツとでの田舎娘じゃないもの。都会のオフィスで働く女性だものね」

ルミ子は表現の言葉を選ぶのに苦しんだ。

記代子をバカな女だと思うけれども、自分や自分の周囲の女と同じようにバカなだけだ。彼女らがこんな暮しをしているのも、バカのせい。それを悔いてもいないし、世間体よく暮す人を羨んでもいないが、記代子をハッキリとパンパンなみだと言いきって、寝ざめが良くもない。

「その気持があれば逃げだせるのに、逃げないとしたら。……世間で思うのと、本人が思うのと、ちがうんじゃないかなア。泥沼から助けられて、迷惑する人もいないかなア。泥

沼なんて、心境の問題だ。お金をウントコサもって鬼のように生きている人もいるし、働くよりも乞食がいいという人もいるし」

「男を死なせて、増長してるパンパンもいるし」

「奥さんになりたいパンパンもいるしね」

「フン」

ヤエ子は半身を起して、ルミ子を睨みつけた。

「余計なお世話だよ。利いたふうなことを言いなさんな。今さら、弱音をはこうツてのかい。キツと見つけてきますツて、大きなタン力をきつたのは、どこのドイツさ。探しておいでよ、エンゼルのウチをさ。色仕掛でも、腕ツ節でも、キツパイにかなわないというんだろう。チェツ！ ハッキリ言えよ。さもないや、エンゼルのウチをつきとめてきやがれ」

ルミ子はニヤリと笑って、

「すみませんね。色仕掛でも、腕ツ節でも、とてもキツパイにかなわないのよ。助けてちょうだい。姐さん。ワアーン」

掌に顔をおおい膝にうつぶして泣きマネをした。

「えい。コイツ」

ヤエ子はルミ子の髪の毛へ指を突ツこんでゴシヤ／＼やったが、あきらめて、ゴロンとひっくりかえった。

ルミ子の言葉にも一理はあつた。人間はどこで何をしている方が幸福だという定まった場所があるわけではない。同じ場所について幸福な人も、そうでない人も、無限の個人差があるだけのものだ。

しかし、記代子が逃げだしてこないから、というだけの理由で、場所の適合性を信じるわけにはいかない。エンゼルの住居をつきとめて、記代子に会うことが何よりの急務であろう。

「ルミちゃん、ありがとう。おかげで、記代子さんの行方が知れて、ひと安心しました。エンゼルの住居をつきとめるのは、男の方が適していますね。女だけがエンゼルの手下と仲良くなれるわけじゃないから」

放二は笑った。なんでもないことだ。今までの雲をつかむような捜査のマヌケさ加減にくらべれば。ホシはハッキリしたのだから。気がかりなのは、いつまで持つか分らない健康だけだが、愚連隊の一撃を避けることができれば、記代子と会うまで持たせる見込みはあるだろう。

「そう」

ルミ子はなんでもない風にうなずいた。しかし心中では、明日中には是が非でも自分がつきとめなければ、と思った。放二を捜しにやることが気がかりでたまらなかつたからである。

九

放二は新宿の街に出ている靴ミガキの中から、知り合いのジイサンをさがしだした。このジイサンは放二の付近から通っているらしく、例のオデン屋で時々一しよになる仲間であつた。

「私や愚連隊のことは知らないが、仲間いきいてみたら分るでしょう。なんてましたツけ？ エンゼル。へ。ちょツと、お待ちなさい」

ジイサンは靴ミガキ仲間のいかにもアンチャンらしいのとヒソヒソ話し合っていたが、やがて、雑沓の中へ消えてしまった。

四五人分も靴をみがけるぐらいの時間をかけて汗をふきふき戻ってきた。

「へエ。これなんです」

なんでもないように渡された紙片に、二ツの所番地と、野中幸吉という姓名が記されていた。

「この野中がエンゼルの本名なんです。百万円もかけて普請した立派なウチに住んでるそうですね。千坪からの花園をもってるそうですア。花束を卸してるんだそうですねア。商魂抜群のアンチャンだそうです」

甚だ意外な話であつた。

「それじゃア、愚連隊どころか、立派な商人じゃありませんか」

「私だつて、そう思いましたよ。きいてみると、そうでもないねえ。屋敷や花園の敷地だつて、焼跡を勝手に拝借したもの、花売りだつて因業な商売してるんだそうです。商魂があつて、金ができるし、隆々と、いい顔だそうですよ」

ジイサンは他の所番地を示した。そこはアパートであつた。

「このアパートがね。新築するまで住んでたところで、今でもここにいくつか部屋を持つてるんだそうですがね」

住所はいたつて簡単にわかつてしまった。百万もかけて新築して、千坪からの花園をつ

くつて商売しているからには、世を忍ぶ必要はないのだろう。

放二はジイサンにムリにお金をにぎらせて別れた。記代子の居るのはアパートだろうと思つたが、先ず本宅へ伺うのが礼義であるから、そう遠くないお屋敷町の焼跡へでかけた。誰の屋敷跡だか、二千坪ぐらいの焼跡をそっくり拝借したものらしい。表側だけコンクリートの塀が焼け残っているが、三方には二間ぐらいの厚板の高塀をめぐらしている。木材だけでも相当の金がかつたであろう。しかし、そのほかには、家をのぞいて、金のかつたものがない。一本の樹木もなかった。裏は一面の花園らしい。門をはいると、隅の方で犬が吠えた。見ると、吠えている一匹のほかに、シェパードが二匹、雑種の猛犬らしいのが一匹、こつちを睨んでいた。家は花園の片隅に、小さな一隅を占めているにすぎなかった。二階屋の七八間ぐらいの小ザツパリした普請であつた。

取次にでたのは、若いアンチャンであつた。そんなのが、幾人もゴロゴロしているようであつた。

放二はいつさい隠さなかつた。名刺を渡して、

「大庭先生と社長の言いつけで、大庭記代子とおツしやる方を探している者ですが、当家にかくまっていただいてるとききましたので、お目にかかせていただきに上りました。

御主人にお目にかかつて、くわしい事情を申し上げたく存じますが、野中さんは御在宅でしょうか」

アンチャンは黙ってスツとひツこんだ。

十

別のアンチャンがでてきたが、返事にきたのかと思うと、下駄を突っかけて、放二をすりぬけて、門に鍵をかけに行つた。戻ってきて、凄い笑いをチラリと見せて、

「いつも、こうして鍵をかけておくんだけど、今日はどうしたとか、あんたが迷いこんできたから、泡をくつたのさ」

そう言いすてて姿を消した。それから、実に卅分間ぐらい、音沙汰がなかった。

記代子が現にここに居たのを移動させているのだろうか、と放二は想像をめぐらした。

あるいは放二を料理するための準備中かも知れない。そして、こんな場合に彼が蒙りそうないろんな料理のされ方を考えて、ジタバタしてもはじまらないから、とにかく身にふりかかる宿命をそっくりうけることにしようと思を決めた。身にふりかかる危険を払いおと

す器用な才覚もなければ、鷺鳥の半分ぐらいの早さで逃げる体力もなかった。

三人のアンチャンが彼の目の前を素通りした。隣室でガタガタ何かやっていたが、また、素通りして姿を消した。彼が返事をうけたのは、ようやく、その後であつた。

彼は、さつき四人がガタガタやつた隣室へ招じられた。大きな丸テーブルに四ツの肘掛イスという応接間だが、造りは和風で、格子戸がはまつている。

「ちよつと、待つて、チョーダイナア」

アンチャンは変テコな女の声色で、目の玉をギロリとむいて笑いながらひっこんだ。

入れ代つて、無造作に現れたのは、色のまツしろな好男子である。ギリシヤ型の鼻筋が通り、目は深く、すんでいる。水もしたたるような、西洋型の明るい美貌で、どこにも凄味というものがない。ただ肩幅ひろく、胸は厚く張り、腕は逞しく隆々としていた。年は二十四五であろう。

「ぼくが野中です。どうぞ、お楽に」

と、気楽に言つてイスにかけたが、その顔は明るい。青木のなぐられたのも好男子の愚連隊だというが、この男たは、そんなことをしそうな風が見うけられなかった。

「あなたは、どこの戦地へいらしたのですか」

エンゼルは、卓上のタバコをとって火をつけて、そんなことから話しはじめた。

「ぼくは病弱ですから、兵隊にとられなかったのです」

「ぼくは四国にいたのですが、隊長の命令で、花キチガイのオジイサンのところへ調査に行ったことがありました。このジイサンはお花畑の一部分をどうしても野菜畑にしないのです。二段歩ぐらいでしたが、当時二段の畑と言えば、財宝ですよ。土地で大問題となっていたんですが、ジイサン、頑固でどうしても承知しないんです。そのうちに、お花畑の赤い色が敵機を誘導する目標だ、スパイだという密告です。すてておけませんからぼくが調査に行ったんですが、場合によっては、花をひっこぬいて掘りかえしてしまえ、というような命令だったんです。ところがキチガイジイサンのお説教をくらいましてね。コンコンと一時間、アベコベですよ。花にうちこむ愛情は至高なものです。そこで、ぼくは隊長に復命しましたよ。ジイサンがあんまり頑固だから不満の住民からスパイの噂がただけで、ジイサンの花に対する無垢の愛情は、天を感動せしむるものあり、とですね。あのお花畑はカンベンしてやって下さい、とたのんでやったんです。終戦後、このジイサンに十日間ほどもてなされて、花つくりの要領を教えてもらいました」

エンゼルの話しツぷりには、なんの下心もないようだった。

十一

放二は自分からきりだした。

「なんの紹介もなしに、とつぜんあがりましたのに、お会いさせていただけて、ありがとうございます。よく存じております。よくと同じ社で、同じ部に勤めていらっしやる大庭記代子さんという方が、先週の金曜以来、行方不明なのです。この方は大庭長平先生の姪で、ぼくは社で先生の係りですから、大庭先生と社長から、記代子さんの行方を捜すようにと命令をうけたのです。記代子さんは大庭先生のお友だちで、青木とおっしゃる方と恋仲で、ニンシンしていらしたそうです。青木さんは大庭先生と同年配のお年寄のことですし、それまでに、ちよつとした行きがかりがありまして、先生も社長もこの恋愛には御賛成でなかったようです。で、煩悶されたようですが、会社での態度は明朗で、家出後に、社外の方からお話をうけたまわるまでは、我々一同不覚にも記代子さんの御心中を察することができなかつたのです。自殺の怖れもありますが、世間に知れて記代子さんに傷のつかぬようにとの社長の配慮で、密々にぼくが捜査を一任されたのでした。方々をききまわるうちに、記代子

さんが、こちらのお世話を受けているらしい、という噂をきいたのです。このことは、大庭先生にも社長にも、まだ申上げておりません。ぼくの一存で、真疑をたしかめに伺ったのですが、記代子さんについて御心当りがありましたら、教えていただきたいのです」

エンゼルはちよつと間をもたせたが、いとも簡単に答えた。

「ええ、よく知っております」

彼は無邪気な笑顔を見せた。

「しかし、このように御返事すべきか、どうか。まだその時期ではないんじゃないか、ということで、あなたを大そうお待たせしましたが、ぼくたちは相談していたのですよ」

「記代予さんは二階にいらつしやるんですか」

「そうです。そして、この家の主婦ですよ。野中の妻、記代子なんです。ぼくたちは、愛し合っています。ぼくが花を愛すように、記代子も花を愛します。しかし、ぼくたち同志は、花以上に愛しあっているのです。四国のジイサンに面目ない話ですが」

そして、エンゼルは高笑いした。

放二はうなずいた。

「そうなることに、フシギはありません。記代子さんは、御元気でしうか」

「むろん、大変、元気です。そして、毎日、好キゲンですよ。もっとも、あなたの来訪で、ちょッと憂鬱でしたがね。実は、二三日中に、お腹の子をおろすはずです。記代子は、ぼくの子が生みたいのです。そして、ぼくも、記代子とぼくの子が欲しいのです」

キツピイがエンゼルにすすめたという企みの話を思いだして、放二はちょッと警戒したが、エンゼルの顔色から何も読みだすことができなかった。

顔だちから、人を判断することはできないものだ。澄んだ目や、無邪気な明るい顔から、額面通りの素行をうけとるのは考えものである。どんな人間も根は同じものだ。自分も人も変りがないというのが放二の考え方である。世の中に悪党はいないし、みんな悪党でもある。そして、放二は、人間の裏の心を考えずに、表に見せているものを信用すればタクサンだと思うようにしていた。どんなに裏切られてもかまわない。警戒しても、裏切られるものである。

「命令をうけておりますので、記代子さんに会わせていただけませんか」

こう、たのむと、

「ええ。彼女の返事をきいてきます」

エンゼルはあつさり立去った。

十二

エンゼルは記代子をつれて現れた。

記代子の顔は晴れていた。一礼して、

「いらっしやいませ」

と言ったが、それは主婦が来客に対する態度であり、言葉であつた。

「ごらの通りですよ。どうぞ御安心下さいと叔父さんや社長におつたえ下さい。記代子はぼくに同席してくれと言いますが、ぼくは遠慮しますよ。どうぞ、御二人で腹藏なく話し合つて下さい」

そして、記代子に、

「話がすんだら、知らせてね」

と、やさしく言いかけて、姿を消した。

エンゼルが去ると、記代子の態度は硬化した。

「私、幸福よ」

まるで宣言であつた。

「ハア。ぼくも、野中さんからのお話で、だいたい、そのように思っていました」

放二はやわらかく受けて、

「ですが、先生も社長も御心配ですから、一度、戻っていただけませんか」

記代子は苦笑した。

「誰も私のことなんか心配してやしないわ」

放二はうなずいて、

「そうお思ひになるのも当然です。利己的な場合のほかに、本当に心配している関係は、有りえないかと思ひます」

「野中はエンジェルと言うのよ。そして、私の本当のエンジェルだわ。本当に私を心配してくれるのはあの人だけ」

「そうです。恋愛は利己的ですから。そして、青木さんも本当に心配しています」
記代子は苦笑した。

「あなた、私の居場所つきとめて、どうするツモリなの？」

「いちど戻つてきて、先生や社長に会っていただきたいのです。ぼくの報告だけでは、納

得して下さいから。そのとき、御意志に反するようなことは決していたしません。もしも先生方がそのような処置をおとりの際には、ぼくが責任をもって、あなたの意志をまもります」

記代子は軽蔑しきつて、白い目をした。

「責任をとるツて、どんなこと？　できもしないこと、おツしやるわね。あなたは何も実行したことないじゃないの。あなたは人をだますのが商売でしょう」

「ぼくの誠意が足らなかったのです。努力も足らなかったと思います。ですが、今度は、約束を裏切るようなことは致しません。ここへ戻りたいと仰有るのに、先生方が戻さないと仰有ったら、命に賭けて、おつれ戻しいたします」

「命に賭けて、なんて、そんなに安ッぽく、生意気なことを言うから、人格ゼロなのよ。エンジェルは若い人がそんな軽薄なことを云うと、怒るわ。できもしないこと、言うな、ツて。千万人の若者が戦地で苦勞してるとき、たった一人、戦争もできなかったあなたは、そのことだけでも人間失格よ。口はばつたいこと、言えない義理よ」

記代子の言葉にこもっているのはエンゼル家の思想であった。それは記代子がエンゼル家に同化しつつあることを示していた。放二が捜査しはじめて、ちょうど一週間。彼女が

失踪してたった十日間のうちに。

放二は感動した。

「ぼくの生涯は至らないことばかりです。目をすまして、いつも曇っていました。精いつぱいやつて、それだけでした」

「そう。無能者。あなたはそれよ」

十三

記代子にくらべれば、自分の生涯などは、まったく無内容なものだったと放二は思った。記代子は彼と語らっていたころは、彼に同化していたし、いわば彼を食事のように摂取していたと言えるかも知れない。青木と共にあるときも、そうだった。青木に同化し、青木の中に移り住んでいた。そして、今は、エンゼルと共に、そうなのである。

放二から、青木へ、エンゼルへ。彼女の遍歴は孤独者の足跡そのものだ。彼女のために、誰一人、本当に親切な友だちはいなかった。親切な肉親もいなかった。彼女はいつも、自分の全部のものを投げだして訴えていたのだが、それをうけとめるに足る男がいなかった

のだ。放二がそうであつたし、青木もたぶん、そうだったのだろう。そして、エンゼルが、そうであるのか、そうでないかは分らないが、記代子の辿つた今までの遍歴が、誰の手にも縫らず、彼女の必死の全力で為しとげられていることだけは、変りがなかった。せつ子がいつもそうであつたのと同じことだと放二は思った。

自分が記代子に見すてられたのは、当り前だと放二は思った。記代子に、どのように罵られても仕方がない。自分の生涯は、ただ至らない生涯にすぎなかったのだから。

「ぼくの至らなかつた生涯については、一言の言訳の余地がありません。そして、まったく、無能力そのものでした。ですが、先生や社長は、ぼくのようなバカな人間とは違つた方々です。ぼくにとつても、ひそかに師とたのむ方々です。先生方は、孤独者の人生の遍歴について、誰よりも理解の深い方々です。あなたが会つて話をされて、理解して下さらぬはずはありません。もしも理解なさらぬとすれば、それはちよつとした俗な誤解によつて、先生方の目に曇りができているせいなんです。どんな傑れた人の目もつまらない世俗的な感情で曇りをおびることはあるものです。ですが、その曇りは、先生方の場合には、長くつづくものではないのです。あの方々の内に曇りを払うすぐれた力が具っているのですから」

記代子は言葉をさえぎった。

「私は叔父さまや社長に理解していただく必要はないのです。あなたは、変ね。叔父さまや社長の許しを乞わなければ、何をしてもいけない私だと仰有るようね。叔父さまや社長にそんな権利があるのですか。私に、カリがあるとでも仰有るの？」

「カリではないのです。人生にカリがあることは有りうべきことではないと思います。ただ、心にツナガリのある人々同志は、そのツナガリを尊敬する義務があると思うのです。一般人は博愛や慈悲に身をささげる有徳の行者とはちがいます。人間を愛し、生まれたことを愛する表現としては、ツナガリを尊敬するという義務を果すぐらいで充分なのではないでしょうか」

「理窟屋！ 無能力者は、そうなのよ。いつも言葉で考えてるわ。私は、考えるのは、イエスとノオをきめる時だけだわ」

そこに再びエンゼル家の個有の思想を放二は見た。

「わかりました。それでは、私の申上げたことを、野中さんとお二人で相談して、御返事をきめて下さい。イエスとノオのどちらかで、結構です。野中さんには、ぼくが説明いたします。およびしていただだけませんか」

記代子は放二の執念深さに愛想をつかして、立ち上った。

十四

エンゼルをつれて現れた記代子には、トゲトゲしさが失われていた。エンゼルに甘え、もたれきっている安心が、包みきれぬ喜びの姿で現れているようだ。

放二は記代子にたのんだと同じ言葉で、記代子を長平とせつ子に会わせてくれるようにエンゼルにたのんだ。

「これ、また、難問だな」

エンゼルは手を後頭に組んで、イスにもたれて、微笑した。

「あなたに会うべきか否かについて、さつきあればど相談の時間を要したのだから、今度も、タダではすむまいて」

「あなたは、どう思うのよ。おツしやいよ。イエス、ノオ、どちらか一つでいいのよ」
「二つ一しよに言ってもいいと思ってるらしいな」

記代子はクツクツ笑った。

エンゼルは、ちょツと改まって、

「北川さん。ぼくはこう思いますよ。これは時期の問題ではないか、とですね。ある時期には、記代子もすんでお会いしたいと云うでしょうし、ぼくも大庭先生にはお目にかかりたいのです。しかし、今はその時期ではないようです。あなたは先生のところへ戻って、記代子のことを、ありのまま、あなたの目に映じたままに、報告して下さい。世間の噂にせよ、何にせよ、あなたの見聞はそっくり報告なさってかまいません。そして、その時期がくるまでは、あなたを両者の力ケ橋にして、ぼくたちを当分そツと放つといていただきたいと思うのです。あなたのように心あたたく、目のひろい方を、両者の力ケ橋にもつことができたのは、ぼくたちの幸せというものです。どれぐらい感謝しても、感謝しきれないほどの喜びなんです。ぼくはあなたの善良な心を、全的に信じて疑いませんよ」

エンゼルの表現は大ゲサであった。往々、大ゲサな表現には、アベコベの意志がギマンされているものだ。エンゼルの言葉にも、それが無いとは云えなかった。

ある時期とは？ 自然にまかせて、ある時期などというものが有りうるだろうか。疑えばキリがなかった。

放二は、疑うよりも、信じるのが大切なのだと思った。人の意志というものは、不変

でもなく、性格的なものでもない。自分の悪意や善意に応じて、相手の覚悟もネジ曲るものだ。人をとやかく思うよりも、結局、大切なのは、自分自身の善意だけだ、と放二は思った。そして、人間というものは、所詮、他人の心をどうしうるものでもない。自分のできることは、自分の心だけであり、自分の善意を心棒として、それに全的に頼る以外に法はないと考えた。

「わかりました。では、ぼくの目に映じたありのままを帰って報告いたします。そして、その結果、こちらへ御報告すべきことができましたら、また、参上させていただきます」
エンゼルは安堵と感謝を端的にあらわした。

「あなたという人を得たことは、ぼくらには千万の味方にまさるよろこびですよ。記代子のために、力になってあげて下さい」

放二はうなずいた。そして、立上って、記代子に言った。

「下宿の荷物をこちらへ運びましょうか。さしあたって、必要なものがありませんたら、なんなりと命じて下さい」

「ええ、こんどいらっしゃる時まで、必要なものを書きだしとくわ」

淋しそうなカゲはなかった。もう、この人になりきって、いるようであった。

裏と表

一

放二はせつ子に報告した。

予想していたことにくらべて、あまり意外千万なので、せつ子はいぶかしそうに、
「そう……」

と答えただけで、ほかに言うべき言葉すらないようであった。

せつ子は長平の宿に電話して訪問をつけ、放二をともなって、自家用車にのった。
二ヶ月前までは電車にもまれ、靴下のいたむのを気にしながら訪問記事をとって歩いて
いたせつ子であるが、自家用の高級車も板につき、衆目の指すところ、日本に於て最も傑

出した女性の一人になりきっている。

戦争の最中には、時間感覚の奇妙な崩壊が起ったものだ。勝っている時もそうであるし、負けている時もそうであつた。シンガポールを占領したのは三四年前の出来事のように思われるのに、算えてみると、実は二ヶ月半ぐらしか過ぎ去っていないのだ。ラバウルの危機、ラバウルへ飛行機を！ そんなことを新聞が叫んでいたのは五年も前の遠いことのような気がする。サイパンが敵に占領されたのも去年の話のようだが、が、実は算えてみると、サイパンが陥ちてからまだ一ヶ月を経過せず、ラバウルの危機も今年の正月ごろの話なのだ。

そういう時間感覚の喪失状態は空襲後は特に極端であつた。下町がやられたのは三四年昔の出来事のようにだが、まだ三ヶ月しか経っていない、山の手が灰になって一年も二年もの年月がたつたように思うのに、実は十日ぐらしか過ぎてやしない。

自分の住む隣の町内がやられて三日もたつと、一年前から、隣り町はそんな焼け野原であつたような気持になるのであつた。

駅前の繁華な商店街を、疎開で叩きつぶす。そこは三日前までは一パイの半ジョッキのビールのために毎日行列していたところだ。日毎の生活に何よりも親しかった街の姿がコ

ツネンと消えて三日目には、遠い昔から、そこが今のような空地でしかなかったような氣持になつてゐるのだ。

戦争が始まるまでは夢にも考えていなかった時間感覺の狂つた喪失狀態があらゆる人々に襲いかかったのである。

戦争が終つてからは、尋常な感覺をとり戻したけれども、感覺異變は、まだ多少は残つてゐる。

そして、せつ子が自家用高級車を乗りまわして二ヶ月にしかないのに、二年も前から、いや、もっと遠くて物の始まつた昔から、せつ子がそうであつたような氣がしているのだ。

戦争が人間感覺を麻痺させた詐術なのだが、うっかりすると、当人までそうとは思ひづかず、十年も廿年も前から自家用高級車をのりまわしていたと思ひこんでいるような詐術にかかつてゐるのじゃないかと放二は思つた。常の世の成金の思ひあがりとは違ふ。戦争という魔物のはたらいた詐術であり、時間の感覺の奇怪な喪失なのである。

記代子も、たった十日間で、エンゼル家の主婦になりきつてゐるようだ。

それを自分自身に当てはめると、どうなるのだろうか？ たった十日のうちに、記代子も

せつ子も、一年も二年も時間をかけたような変化を示しているが、彼はそれを見ているだけのことだ。

それが自分の役割なのだ、と放二は思った。変るといえば、やがて死ぬだけのことだろう。そして、変る人も、変らざる人も、すべてが彼には、いとしく見えた。

二

長平はエンゼルに興を覚えた。乱世というものは何が現れるか分らない。貯蓄精神と礼節に富む愚連隊の出現も乱世なればこそ。出現してみれば、ありそうなことで、怪しむに足らない。

堅気の庶民が乱世の荒波にもみまくられて、体裁ととのわず、投機的になり、その日ぐらしのヤケな気持になっているとき、裏街道で悪銭のもうかる愚連隊の中のちよつと頭のきく連中が、悪銭身につかずという古来のモラルをくつがえして、セッセと貯金し、家屋敷をかまえ、身に礼服をまとい、ヤブレカブレの堅気連中に道義も仁義もないのを嘆いているかも知れないのである。ヨタモノもモラルをくつがえす。

それにしては、選ばれた花嫁が、どうも頭がよくないようだ。エンゼルの審美眼も、当にならない。

「それほど覚悟なら、こっちで何もすることはなからう。当人が幸福なら、それに越したことはないさ。ただ、エンゼル家からお払い箱というときに、行き場に窮するということがなく、こっちへ戻ってくる才覚をつけておいたら、よろしかろう。北川君がその才覚をつけてやるのだね」

長平はこう簡単に結論したが、単純明快に合理的でありすぎて、肉親的な感情が、どこにもなかった。

せつ子は反対した。

「算術みたいにおツしやるものじゃありません。もっと、ムリヤリ、してあげなければならぬものですよ」

「当人が幸福なら、こっちでムリヤリしてやることは何もないさ」

「第一、何もしてあげなかったら、世間では、大庭長平は鬼のようだ、と言いますよ」

「遠慮なく言ってもらうさ」

「記代子さんのお姿が見えませんが、どうなさいましたか、と訊かれた時に、こまります

よ」

「こまりませんね。エンゼルという屋敷もちの花づくりのアンチャンと結婚して、花を造り、悪銭をもうけて、内助の功を果し、大そう幸福にくらしているそうだ、と答えて、不名誉なところは一つもない」

「勝手におツしやい。あなたは、もう、京都へお帰りなさるといいわ」

「左様。記代子のことで滞在がのびてしまったが、明日の特急にでも、帰りたいものですよ」

せつ子は笑った。

「あとは私が一存で致します」

「何をなさるつもりですな？」

「何ッて、相手はヨタモノですもの。記代子さんの身にシアワセのはずはありません」

「その考えは軽率すぎるようだ。世渡りと男女のことは別問題ですよ。体面のために古い恋女房を離婚して、新しい恋愛を実現した代議士もあるしね。女房を大事にするヨタモノがいてもフシギではない。男女のことは、誰にも分りやしません。銘々に独特の型があるものです」

「いいえ、世間体を怖れないヨタモノは、女房への誠意ありません。世間体を怖れない男には、それに相応する女がいて、女房になるものです。記代子さんはそれに相応した女ではありません」

「なに、結構、間に合う場合が多いものさ」

せつ子はふきだしたが、こう結論した。

「記代子さんのことは、私が一切ひきうけます。あなたは京都へ、ひっこんでらっしゃい」

三

せつ子は街のヨタモノに善意があるとは思わなかった。虫けらのようなものである。そうときまった人間だけが、ヨタモノ稼業がつとまるのである。

彼女は記代子をとりのどすことにきめていたが、円満に返してもらうことも、金を払つてとりもどすことも考えなかった。金というものは、ヨタモノや乞食やパンパンなどに呉れてやる性質のものではない。どんなバカげた浪費をしてもかまわないが、それは仕事に
関聯しての話である。

エンゼルから記代子を奪い返すだけのことだ。そういう権利があるからである。理窟はどうでもかまわないのだ。ヨタモノを相手に論争するバカはないのだ。記代子がエンゼルにほれていようが、よしんば、正式に結婚の手續をしていようが、そんなことも問題ではない。

理論的にはエンゼルに勝身があつても、ヨタモノには、良家の娘を女房にする権利などはないのである。それがせつ子の考えであつた。社会秩序に反し、不正を稼業としている人間が、たまたま一事に関して正当な理論をふりまわし、権利を要求しようたつて、そんな虫のいいことがとおるものではない。

しかし、警察の力をかりず、法律の名をかりず、極秘裡に記代子をとるもどすには、どういう手段があるだろうか、と、せつ子もこれには考えこんだ。

彼女は放二と相談して、智恵をかりようなどゝは考えていなかった。放二のようなお人好しに、ともに相談しかけても、埒があくものではない。こういう人間には、ただ、命令するのが何よりなのだ。

「ずいぶん苦心したでしょう。でも、あなただから、捜しだせたのです。青木さんをごらんなさい。煩悶の様子は深刻そのものですけど、埒があかないじゃありませんか。ずいぶ

ん疲れてらッしやるようね。しばらく涼しい土地へ行つて、ゆっくり休養してらッしやい。十日でも、二週間でも、もつと長くてもかまいません。その間に、記代子さんのことは、ハッキリ話をつけておきます」

こう云つて、せつ子は放二に多額の賞与を与えた。

「話をつけるツて、どんなふうに、でしょうか」

「それはあなたに用のないことです。あとは私が致します。秋口に、あなたが涼しい土地から戻ってきたとき、記代子さんも戻ってきています。ですが、記代子さんは、先からズツとそこにいたのですよ。あなたが、涼しい土地へ旅行していたので、しばらく会えなかっただけなのです」

放二は考えた。せつ子は行動的である。ためらわないのだ。言つた言葉は必ず実現するだろう。たとえ、街のボスが相手でも。

せつ子の手腕は非凡であるが、彼女が往々相手の力を見あやまるのも事実なのである。ヨタモノ相手にその手腕を正当にふるいうるかどうかは疑問であるし、記代子のことを考えると、せつ子の考えているらしいことが、一そう妥当でないように見える。

しかし彼がどう言つてみても、せつ子の決意をかえさせるのは不可能なのだ。

「旅行の前に、四五日東京で休養してみるつもりですが、何か御用はありませんか」

「いいえ。ひとつも」

早く山の温泉へ行けとせきたてるように、せつ子は放二をきびしく見つめた。まさかムホン人と見破った目ではないだろう。放二は心にさびしく笑った。怒られてもかまわない。エンゼルをせつ子の敵にまわさぬように、彼はひそかに暗躍する覚悟をかためていた。

四

放二は必ず面倒が起ると予期していたが、自分の力で、どうする才覚があるでもなかった。

まず出来そうなことゝ云えば、エンゼルに、自分という人間を信じてもらうことだけである。しかし、マゴコロの袋のようなものがあつて、それを開いてみせると人が信用してくれるという便利な手段はないのである。

自分を知ってもらうという手段があるだけだ。信じてくれるとは限らないが、自分の生活を見てもらつて、ありのままの自分を知ってもらうことである。

放二は夜の新宿の仕事場へエンゼルを訪ねて二度目であった。エンゼルを自宅へ誘い、オデン屋でビールとツマミモノを買って、アパートで酒宴をひらいた。

連日雨もよいの悪天候で、女たちはアブレがちであった。

新宿から飲みつゞけで、エンゼルは酔っぱらった。

「ちよつと、お忍びのアパート住い。結構ですねぇ。ハツハ」

エンゼルは醜い女たちには目もくれず、ルミ子の顔から視線をはなさず追いまわしていた。

「ぼくなんか、こうは、できませんや。腕がちがうんですな。ぼくは商売の都合で、野郎どもの面倒をみていますが、あなたは風流の志で、パンスケを養って、かしずかれていらつしやる。貴族は女中が好き。ねぇ。汚いアパートに身を落して、パンスケにかしずかれて、結構ですねぇ。お金なんざア、左ウチワでころがりこむんだ。大金持の女社長に可愛がられてね。家なんざ、わざと買ってもらわないね、この人は。この汚いパンスケ・アパートへお忍びぐらし、乙な人だなア」

エンゼルの視線は、喋りながらも、ルミ子からはなれなかった。

ルミ子には、エンゼルの薄ッペラな正体がアリアリ見えた。ただのヨタモノにすぎない

のだ。記代子にほれているわけでもない。ヨタモノのチャチな下心があつてのことだ。

およそヨタモノという連中が常にそうであるように、酔っぱらつて、そこにちよつとした女がいて、タダでモノになりそうな事情があるから、モノにしようとしているだけのことである。

エンゼルは、放二を眼中に入れていないのである。また、放二によつて代表された長平やせつ子のこと。成行きで、バツを合せているだけのことで、こんな青二才とつきあつてやるからには、酒をおごらせて、女の世話をさせるのが当り前だと思ひこんでいるだけなのである。

穩便に事が運ばなければ、放二を殴り倒しても、ルミ子とタダで遊んで、青二才にこんなところまでつきあつてやつた駄賃をかせいで帰るであらう。酔わないうちはそうでもないが、酔つたが最後、これがヨタモノの本性であり、駄賃をかせぐまでは、血を見たぐらいじやひるまない。

「あんた、好男子ね。もてるわけね。私と遊ぶ？」

ルミ子はツマミモノを食いながら、エンゼルにナガシ目をくれた。

「お嫁さんを貰いたてだって、浮気ぐらいはするもんよ。ビールを飲むだけならいいし

よう。ちょつと、つきあつてよ。ねえ。私、このビール二三本、もらつて、いいでしょう？」

ルミ子は遠慮なくビールをぶらさげて立ち上つた。エンゼルはニヤニヤ笑いながら、彼は有るツたけのビールを軽く両手にぶらさげて、立上つて、だまつて、ついてきた。

五

ルミ子はフトンを片隅へよせて、酒もりの場所をつくつた。

「ヌキ忘れちやつた。あんた、齒でぬけるでしょう」

「バカ言え。とつてこいよ」

「歩くの、ヤだなア。損しちやつた」

ルミ子はヌキをとり放二の部屋へもどつて、

「カギかけて、電燈消して、早く寝ちやつた方がいいわ。出てきちやダメよ。インネンつけられると、いけないから。親分らしいとこなんて、ありやしないよ。タダのヨタモンだわ」

ルミ子は苦笑をもらした。人殺し、強殺犯、そんなお客は見なれてきた。男にドスやピストルを突きつけられたこともあった。ヤブレカブレの男は何をするか分らない。しかし、屋敷もちのエンゼルは、たかがパンスケ相手に手が後へまわるようなことはしつこない。

ルミ子はヌキをぶらさげて部屋へもどった。

「あんた、レッキとした顔でしょう。ビールぐらい、齒でぬくもんよ。この部屋のお客さまはみんなそうするのよ。前科十二犯のオジサンは堅い物が噛めないほどボロッ齒だけど、ビールの栓は器用にぬいたわね。ヌキがなくツちや栓がぬけないようじゃ、悪い事はできないものね。泥棒に忍びこんで、ビールをみつけて、ヌキ探してちやア、フンヅカマるでしょう」

「オレを泥棒あつかいに、しようツてのか」

「似たようなもんじゃない」

「フ。相当なことを云やアがる。落ちついて、ませたことを云うじゃないか。オレの女になれよ。ジユクでいゝ顔にしてやらアな」

「荒っぽいこと、きらいだもの。パンパンに生れついてるのさ。ノンキでグズな商売が好きなのさ」

「顔がきいて、楽にくらせたら、この上なしだろう」

「威勢のいいのがキライなのさ。威張りたくもなし。パンパンがいつとう楽で、面白いや。泥棒だの、人殺しの実話物きかせてもらッてさ。兄さん、人を殺したこと、ある？」

「フ。それが、どうした」

「私はね、目の前で人が死ぬの、一人で見てたことがあるよ。三べんだか、四へんだかね。たくさんの数じゃないけど、忘れちゃった。いろんなことが、こんがらかるから」

「フ、そんなパンスケがこのへんに居るッて話はきいたことがあったが、それがお前か」

「強殺だの喧嘩傷害だの、すごい人が話させてくれるでしょう。案外なもんね。どんなふうになんか死んだか、見てる人、ないわね。私はみんな見てたわ。ちょっと思落しても悪いような気持ちだもの。なんでもないもんよ。呆気なく、死んでるものよ。ほんとかな、と疑ったのもあったわ」

エンゼルはつまらなそうにビールを呷っていたが、

「自殺なんてものは、つまらんものにきまってらアな」

ちょっと思落して泣いた。

「返り血をあびて真ッ赤にそまる果し合いのようなものは、オレがやっても、目がくらん

だ気持ちにならアな。ひどく冷静でもあるし、泡もくらつてゐるものよ」

「どんな悪いこと、してきたの？　ずいぶん、お金持ちだつてことじゃないの。なんで、もうけたのさ」

六

ルミ子は職業的に、男について階級的な区別を持たなかつた。社長と社員、ボスとチンピラ、どっちがどうという区別はない。

彼女は男を大別して、金放れのいい人とそうでない人、ウヌボレの強い男とそうでない男、執念深いのとそうでないのと、だいたいそれぐらいに区劃していた。

金銭について、金に汚い男というものは論外である。パンパンに払った金が惜しくなつて、ビールをのんだり物をたべて女に支払わせていくらかでもモトをとろうとするのなどはよい方で、脅迫し、時には本当にクビをしめても金をとり返して行こうとする。それが愚連隊などでなくて、表通りに店をもつた商人だの、工場主だの、若いサラリーマンだの、世間では虫も殺さぬ善人を通つた連中がそうなのである。

あなたが好き、だとか、又遊びにきてね、というのは、この社会で当り前の挨拶だが、通り一ぺんの挨拶をかけられただけで、恋人のように思いこみ、二度目からは刃物で追いまわすような嫉妬深いウヌボレ屋もいる。そして、刃物をおさめる代償としては、一文も使わずに、遊んで飲んで食って帰ろうというのである。

世間では堅気の善人を通つた人がこんなだから、遊びなれた悪党は弱い者にはオトコ気もあり立派な遊びをするかという、とんでもない話なのだ。

小悪党というものは階級意識の強いものだ。パンパンのような社会的地位がゼロ以下の合法的でない存在に対しては、彼らはいたわりをもつどころか、全人格を無視してかかるのが共通の考え方である。パンパンとはタダで遊んで、おごらせて、バクチのモトデをまきあげる道具にすぎないと心得て、一文も置いて行きはしないものだ。一度でもスキを見せると、つけこんできて、情婦のつもりで食い物にし、着物や装身具や鏡台や茶のみ道具まで質に入れてバクチに使い果して、それが当然だと心得ている。狡猾、卑怯、折あらば、つけこむ虫であるから、これに対するパンパンの心構えとしては、柳に風、剣術の極意に似ている。

エンゼルは片手にコップをにぎりながら、ルミ子の首をかかえて抱きよせたが、ルミ子

は、ゆつくりとスリぬけて、

「しつこいこと、しちやダメよ。暑くつて。ウチワであおいであげるから、ビールのんで、お帰り」

「約束のお客があるのか」

「お客は道にゴロゴロいるよ」

「ふざけるな。オレと遊ばないというのか」

「お金、ちょうだい。私、お客様と遊ぶのが商売よ」

エンゼルは単純に殺気立った。満座の中でも、一人の女を暴力で意にしたがわせるぐらいのことには、場数をふんでいるという様子であった。

ルミ子は、しかし、落付きはらつていた。

「いい兄さんが、金で買えるパンパンを手ごめにしたら、物笑いよ。そうじゃなくツて。もつと気のきいた女を相手にするもんよ」

なんの激するところも見えない小娘の様子であった。四方山話をしているような、屈託のない薄笑いをうかべていた。

「金次第で、どうにでもなるといふんだな」

「そうよ」

「どんな男とでも、な」

ルミ子はニツと笑った。

「パンパンだって、選り好みはあつてよ。そうじゃないと思うの」
明るくて、邪気のない答えであつた。

七

エンゼルは娘をだまして一稼ぎするには妙を得ていた。終戦後の二三年はそれで食いつないでいたのである。美貌が第一の資本であつたが、女の心理にも通じており、演技者としての才能が抜群であつた。

しかし、パンパンなどに対して演技の必要はなかつた。同じ裏街道の同志で、生地をさらけだして、不都合がある筈はない。顔の貫禄と美貌は彼女らの身にあまる偶像で、エンゼルの逞しい腕に、ムンズとひきよせられたパンパンは、あまりの羞しさに、泣きそうになり、もがいて逃げようとするのであつたが、有無を云わさず引き寄せられて厚い胸に押

しつけられると、力はずき、ただ夢を見るようにウツトリしているだけであつた。

そうでないような女に対しては、そうでないように、エンゼルは対策にこまるということとは、めつたになかつた。

エンゼルは酔つていても、ヨタモノの本能は鋭敏であつた。

放二の部屋で、ルミ子が彼に遊びましようよと誘つた言葉を、いつもと同じように、当然なことと真にうけたのが軽率だったのである。

「すると、この女は……」

と、エンゼルは思つた。

みんな、グルだ。あの若い奴は、好男子の坊ツちゃん然と、まるで世間知らずの顔をしているが、実は町内のパンパンどもをみんな情婦にしているのである。そして、この女が、情婦筆頭というわけだ。

何組のなにがしというヤクザでもない青白いインテリに、時々こういう教祖めいたヤサ男がいるものであるが、悪事の型がきまつているヤクザとちがつて、こういう奴らは何をしているか分らない。しでかすことの筋が見当がつかないのである。エンゼルは、こういう奴が苦手であつた。彼の仕事と同じ性質のことを、特別の筋と才能で楽々果しているよ

うに思われたからである。彼は対等の敵として、放二に対して激しい闘争心をもやした。

この女が自分を別室へひきたてたのは、自分が放二にからむのを避けるためだ。しかし、腕力に自信がないからインネンをつけられるのを避けたと見るのは当たらない。先方にはピストルのようなものがあつて、ただ軽率に血を見ることを好まなかったのかも知れない。あのヤサ男の静かな落付きは尋常ではない。エンゼルはそれを軽視することができなかった。世間知らずの記代子などには、あのヤサ男の正体が分るはずはないのである。

そう気がついてみると、ルミ子という女も、さすがに、ただのパンパンとはちがう。邪教の一味は、小娘のパンスケまで、ミコだか狐つきだか分らないが、老成ぶつて、得体が知れないのである。

「お前は、いくつだ」

「十九」

「フ。どうだい。オレが北川を殺したら、どうする？ お前、オレの女になるか」

エンゼルはビールをなめて、面白くもなさそうに、せせら笑った。

ルミ子の顔色は変らなかつた。

「なぜ殺すのさ」

「なに、下駄につかえた石ころをはじくようなものだ。誰かが、ちょっと、どこかの街角で、あの兄さんを眠らしてくれらア」

「全然、タダのチンピラだ」

ルミ子はガツカリして、ねころんで、片脰を枕にエンゼルを見つめて、つぶやいた。

「屋敷もちの花つくりのアンチャンも案外だな。よくお金モウケができたわね」

八

「誰か殺せば、女がウンと云うとでも思っているの？」

ルミ子は起き上って、坐り直した。彼女は次第に亢奮していた。

たかがヨタモノの脅迫ぐらい、気にするほどのこともない。それも女を口説いての凄文句にすぎないのだから、ムキになるのは、相手の術中におちこむようなものである。

しかし、放二が殺されるという事柄について考えると、凄みを並べたてるだけのコケおどしかも知れないけれども、我慢ができなくなり、全身が熱くなってしまうのだ。

ルミ子の目が吊った。ふだんと、まるで人相がちがって、赤いホツペタの童女が、怒っ

て、白くなつたように見えた。

「誰が殺されたつて、お前なんか、ウンと云うもんか。嘘か、どうか、ためしてごらんよ。私を殺してごらん。ウンと云うか、どうか。今、やってごらんよ」

自分がここで殺されれば、エンゼルは捕まるし、放二に迷惑はかからない、ということが、誰に知られなくとも、ルミ子には悔いはなかった。

彼女はムチャクチャにエンゼルが憎かった。放二をヨタモノなみにしか見ることができないうような男、たかがパンパンとの一夜のために放二を虫ケラのようにヒネリつぶそうと思うような男。彼女はどんな男にでも、金で肌をゆるしてきた。それを悔いてはいなかったが、殺されてもこの男には許してやらないということが、最後の償いのように思われた。ルミ子はむしろ殺されることを望むような気持であつた。すすんで獅子の前へ進みでる勇気がわき起つていた。

ルミ子は立つて、ネマキをぬいで、着物にきかえた。シゴキを一本、エンゼルの前へ投げだして、坐つた。

「殺してごらん。私のクビを、しめてごらんよ。人殺し、なんて、叫びたてやしないから。音をたてずに、死んでみせるから、安心して、しめてよ。ちょッとした呻きぐらい、でる

かも知れないけど、ウンと言ったわけじゃないから、まちがえないでくれ」

「フ」

エンゼルは口にくんだビールを、いきなりルミ子の顔へふきつけた。ルミ子の顔は、うしろへ一分ひく様子もなかった。

エンゼルはビンタをくらわせた。ルミ子の上体がふらついたが、倒れなかった。そこで、つづけさまに往復ビンタをくらわせた。左へふらつくと、右へ叩き返され、右へ傾くと、左へ叩き返された。

しかしルミ子は痛さというものを全然感じなかった。彼女の全身にみちあふれているものは、決意だけであつた。

エンゼルは手をやすめたので、

「卑怯者。ぶって、ごまかすつもり」

「どうしても、死にたいか」

「やってごらん」

エンゼルはシゴキをひろって横へすてて、

「よし。殺してやる。言い残すことはないか」

両手でルミ子の首のまわりを握りしめた。ルミ子はアゴを上へあげて、握りいいようにしてやった。そして、エンゼルの腕にすがつたり、もがいたりしないように、両手で自分の両腕を握りしめた。エンゼルは三度、首を持ち上げたり下したり、演習した。そして、とつぜん上へひっぱりあげられたと思うと、全身がチョウチンのようにフラフラふりまわされたように思った。そして、わけが分らなくなってしまった。

九

ふとルミ子が気がついたとき、誰かがそこにいる様な気がした。目をあけて見定めようとする、扉が閉じて、誰かが部屋の外へ立ち去ったようであった。

ルミ子は又目をとじて、できるだけ我慢して、ジツとしていた。自分が、どこで、どんな風になっているのだから、それを知りたいと思った。

そして、目をあけて起きてみると、部屋の中には誰もいなくて、彼女は全裸でフトンの上へねかされている自分を見出した。

着物は部屋の片隅に、まるめて捨てられていた。顔をなでてみた。洩^{はな}もでていない。

ルミ子は暴行されたことを知った。

彼女がフトンの上へねかされていたことや、全裸にされて身体の汚物をキレイにふきとられていたことは、エンゼルの仏心でもなければ、人工呼吸のためでもない。心ゆくまで暴行をたのしむためであつたにすぎない。

ルミ子は全身の力がぬけ落ちるような落胆を感じた。彼女が敢てしたことは、すべて徒労だったのだ。ルミ子は性戯ということに特別の感情をもたなくなっていたが、自分の知らないうちにエンゼルのいろいろの侮辱を蒙つたことを思うと、救われようもない悲しい思いに沈んだ。

「なぜ生き返つたのだろう！」

彼女は泣きだした。はりつめていたものが、際限もなくゆるんで行くようであつた。小学校の初年生のころ歩いた道々の野原の橋や、その小川のほとりのレンゲ草の咲いている河原が見える。そこに花をつんでいるのは、たしかに自分だ。小学校の一年生の自分なのである。一方はあかるい青空だし、一方の空は燃えるような夕焼だ。そして橋のタモトから、自分のすぐ手のとどくところから、一米ぐら^{メートル}いの階段のような虹が、まっすぐ夕焼の空へかかっているのである。いつのまに、こんな虹がかかったのだろうと考える。さっき

橋を渡るときまでは、あそこに、なにもなかったのに。……

気を失ったのか、眠って夢を見ていたのか、わけの分らないような状態から、ルミ子はふと我にかえった。

誰かが扉をノックしている。

「だれ？」

「私。カズ子よ。ちょつと、いい？」

「ちょつと、待つて」

ルミ子は立つて、ネマキをきて、扉をあけた。

カズ子は中をのぞいて、

「もう、あの人、帰ったの？」

それをきくと、廊下の曲り角に隠れて様子をうかがっていたヤエ子も姿を現した。

「ちょつと、心配だから、来てみたのよ。おとなしく帰ったのね」

「うん。とつくに帰ったわ」

「チエツ。じゃア、あツちの部屋へくればいいのに」

ヤエ子は苦笑して、

「色男をみると逃がしやしないんだから。オタノシミのことですよ」

「兄さんは、ねた？」

「いいえ、起きてる」

ルミ子はふと身にしむような懐しさを覚えてクラクラした。

十

その翌日、放二はエンゼルの自宅を訪ねて行った。

酒を飲みすぎれば、誰しも妙な風になるものだ。しかし、それが当人の本心というわけではない。たとえ本心にしたところで、誰の本心も汚いものだが、理性の働いている時には抑制されているのだから、酔わない時を人間の常態とみるのが当り前だ。

エンゼルは放二の生活に甚しい見当ちがいの判断を下したけれども、そう疑っている気持が酔って現れただけのことで、放二の正体を疑っているというのも、放二の本当の心を知れたがる気持があるからに相違ない。

たぶん記代子が放二の生活について疑っていることを、事実としてエンゼルにきかせた

のだろう。それをエンゼルが真にうけるのは当り前で、疑う理由は十分である。

しかし、こつちが誠意をもつてつきあううちに、やがて分つてくれるときがくるだろう。そういうものだと思いこんで、やりぬく以外には適当な手段がないようだ。放二は、あきらめなかった。

エンゼル家の表門は堅く閉されているので、呼鈴をおして案内を乞うと、アンチャンが戸の小窓をあけて、来意をきいた。

相変らず、長時間待たせたあげく、四人ものアンチャンが小窓から代り番こに隙見して、放二の服装や、その背後に人はいないかと点検しているようである。

ようやく戸が開いたので、一足はいると、放二の後足は危く閉じる戸にはさまれて、つぶされそうであつた。ピシヤリと閉じる。二人のアンチャンが戸に躍りかかつて、棧を下し、鍵をかけてしまった。

四人どころじゃない。一目では算えきれないぐらい、ざつと十人ちかいアンチャンが勢ぞろいしている。四匹の猛犬を檻からだして、めいめい一匹ずつの綱をとって、スワといえど犬を放そうと身構えているアンチャンもいる。

アンチャンの重鎮らしいのが進みで、大そうニコニコと歓迎の意を表して、握手をも

とめ、口上をのべているうちに、誰かが、腰、ズボン、胸のポケットを点検したようである。

放二は応接間へ通された。窓から見ると、四匹の犬が綱から放されて、庭を行ったり来たりしている。アンチャン連も四人ばかり、要所々に張りこんでいるが、樹木が一本もないから、折からの日で、大そう暑さにヘキエキしている様子であった。

放二はエンゼルとルミ子の昨夜の真相を知らなかった。しかし、もてなかったのだろうという想像はつく。

酔っ払いは前後忘却して、ところどころ明滅的な記憶しかなかったりするから、それを想像できなかつたりして、益々誤解しているのかも知れないと放二は思った。

エンゼルはニコニコと現れたが、顔色がすぐれなかった。

「どこをのたくって呑んで歩いたか、気がついたら屋台の土間にねていましたよ。白々と夜の明けるころにね。土間にねてごらんさい。目をさますと、カゼをひいてますぜ。体温がなくなってるね。骨のシンまで冷えきってますア」

目が濁っていた。当人もそれが分るらしく、汚い目を見せないためか、しきりにパチパチやっている。

十一

「昨夜は失礼いたしました」

と、放二が言った。どっちの挨拶だか、わからない。さてはインネンをつけなさるか、と、エンゼルは返事をせずに、内々せゝら笑って待ちかまえていると、

「自分で酒をのまないものですから、酒席の気分がわからないのです。アパートの女たちも、言い合したように酒をのまないものですから、変なところへ御案内して、至らなかつたと思っています」

彼はこれから何を言うつもりなのか、エンゼルにはまったく見当がつかない。しかし、どうも、普通じゃない。エンゼルはソツポをむくのをやめて、放二の顔を観察することにした。

「ぼくは野中さんには、ぼくのすべてを知っていただきかったのです。ありのままの生活を見ていただきかったのです。なぜかと申しますと、ぼくが野中さんに対して偽る気持をもたないこと、野中さん御夫妻へのぼくの偽りない友情を信頼していただきかった

からです。かりに、ぼくの周囲の方々が、お二方のお気にさわる態度を示す場合にも、ぼくの友情は信じていただきたいと思つたからです」

エンゼルは苦笑した。この男を買いかぶつていたようだ。酔つ払つてもいたし、パンパニアパートの雰囲氣が一風變つて異様でもあるから、買いかぶつてしまったが、この男の底が知れてみると、あの雰囲氣も別に異様ではないようだ。つまり一番グズな人間どもが、グズ同志よりあつまつて、センチなママゴトみたいなことをしているのだろう。記代子はバカそのものであるが、この男はそれに輪をかけたウスノロかも知れない。

エンゼルは大庭長平について、計算ちがいをしていた。記代子はニンシンしているし、知名人の姪であり、愚連隊と結婚させるはずはない。取り戻しにきて、なんとか挨拶があるだろうと期しているから、なんの取柄もないバカ娘をおだてあげて、本宅に鎮座させ、女房然とつけあがらせておくのである。

放二の伝えるところによると、大庭長平は全然平静で、好いた同志なら何者と一しよになつてもかまわないという考えだそうだ。そして、一安心して、京都へ帰つてしまったという。

エンゼルは事の意外に驚いたばかりでなく、大庭という奴が海千山千の強^{したた}か者で、記代

子のバカさかげんに手を焼いており、これを拾いあげたエンゼルをいいカモだと笑っているのじゃないかとヒガンだほどであった。

エンゼルは、にわかにバカらしくなっていた。奥様然とのさばっている記代子のバカ面を見るのも胸クソがわるい。

戦法を変えて、芝居気なしに、露骨な取引をすべきじゃないかと考えはじめたから、放二に対しても、演技者の気持を多分に失っている。さもなければ、酔いすぎても昨夜のようなことはやらない。

放二という男は、見る通りこれだけの、掛け値なしのグズのウスノロと見極めをつけたから、即座に新体勢をととのえた。

「実はですね。諸事金づまりの世の中。仕事を手びろくやりすぎたものですから、費用はかさむばかりですが、回収する金が十分の一もあります。流行のコゲツキという奴、どこも同じ風ですなア。花屋だけでは、損するばかり、食って行かれませんから、記代子にも働いてもらわなければならぬのです。まさか女給にだすわけにもいきませんが」

エンゼルは気をもたせて、しかし、恐縮したように笑ってみせた。

十二

エンゼルは放二をなめてしまった。もはや、こんな小物は相手ではない。記代子というバカ娘が格下げだから、それと対等にも当らないウスノロは問題ではなかった。仮面の必要がなくなったのだ。彼がケツをまくつてみせる相手は、大庭長平と、せつ子という女社長である。

彼はシャア／＼と放二の顔をうちながめて、

「どうです。あなたも、一口、やりませんか。ちょツとした商売ですよ。あのルミ子さんを女主人公にしてね。あの子は若くて、可愛いらしいですな。万人むきで、特に大学生むきだなア。記代子がちょツとそうですが、これがこの商売のコツですなア」

エンゼルは宿酔ふつかよいで頭が重くて、やりきれない。宿酔というものは、宿酔の相手をめぐって不快に思いがこもっているものだが、それはエンゼルでも同じことで、その相手が目の前にいると思えば、不快で邪魔つけなウスノロだが、いくらか気がまぎれないこともなかった。やむをえず、ムダ口をきいているだけのことだ。

「その商売というのが、秘中の秘ですが、先に取払いになったマーケットね。あれを今回

オカミの手で、まア、何々公団というところでやるんですかなア。明るく、健全な、見た目にもスマートなマーケットに再建しようというんでさあア。この店舗の契約なんですがね。これを然るべき手を通して、発表前にちゃんと予約できるんですな。本当の契約金は十万ですが、然るべき筋へ五万いる。あの新宿の一等地がそれだけでよろしいのです。ぼくは、ここである明朗な商売を記代子にやらせたいと思っていますが、さし当って、困っているのは現金なんですよ。ぼくには現金がないのです。その日その日の運転資金が精いっぱい、生活費にも事欠いてロクな物も食わせないのに、野郎どもも記代子も平気で我慢してくれますよ。時世だから、仕様がな。ね、これですよ。でも、あなた、みすみすもうけ口があるのに、私もムリな苦面を重ねてもやってみたい。記代子もやりたがっているのです。五万ぐらひは、ぼくもなんとかできそうですが、あなた、十万、かしてくれませんか。記代子のためです。記代子の商売なんです。あなたを記代子の親友とみこんで、おねがいするのですよ」

放二は思いまどった。

エンゼルの話は、なんとなく軽薄である。だまされるにしても、彼が真剣にだますつもりなら、彼に誠意のとどくまで、甘んじてだまされることに不服はなかった。誠意がつい

に届かなくとも仕方がないと諦めるのはワケがないが、彼は一生だまされてみたいような気もしていた。一生をかけてだまされたら、なんとかかなりはしないかというミレンがあった。

しかし、エンゼルの話はどことなく軽薄であるし、あいにくなことには、なんの苦勞もなくエンゼルの申出に応じうる資格があつたのである。

放二は今度の慰勞金に、旅行して疲れをやすめてこいと、せつ子から十万円もらつていた。その一部に手はつけたが、補充して十万円にするのにそう苦勞はない。

あんまり簡単に応じうることを言われたので、放二は迷った。しかし、迷うのは、結局金がおしいからだと考えると、心はきまつた。

「多少のお金でしたら、ぼくの出来る限りのことは、なんとかしたいと思います。ですが、あなたは信じてくださるでしょうか。ぼくが本心からあなた方のお友だちだということを」

十三

「それは信じていますとも。記代子も、ぼくも、あなたが二人に共通の唯一の友だちだと

いうことを忘れたことはありません」

エンゼルはこう応じたが、ウスノロの態度が真剣なので、このウスノロは本当にいくらか出すつもりじゃないのかと気がついて、おどろいた。どこまでウスノロだか分らない。先方がそのツモリだとすると、こっちも、もらって損はないから、

「イヤ。こう申上げても、あなたは本当にして下さらないでしょうね。ぼくが悪かったのです。昨夜、酔っぱらって、とりみだして、あまりと言えば、あまりの醜体です。昔の悪い習慣、三ツ子の魂です。酔っ払うと、昔の悪い男が顔をだすのです。昨夜の醜体はよく記憶していませんが、そのあさましきは、だいたい見当はついています。ぼくはジキル博士一本になりたいのですが、汚れた血は、生涯ついに、ダメですか」

「いいえ。ぼくがミレンがましく、友情を信じてくれますかなど、疑ぐりぶかい心をさらけだしたのが、あさましいのです。醜体はぼくなんです。先日から、信頼していただくことばかり考えていたものですから、不覚なグチを申上げてしまったのです。ぼくの存在がお二方のお役に立てば、それだけで満足なんです」

実にグチなことを言ったものだ、放二はすこし呆れていた。だまされることなんて、なんでもないことではないか。だまされまいとすることは、あるいは最も邪悪の念の一つ

であるかも知れない。

エンゼルを疑ぐる必要はないのである。自分の一生を通じて、記代子とエンゼルのためにマゴコロをつくせば足るのであると放二は思った。

「記代子さんはどうしていらっしやいますか。一目御挨拶いたしたいのですが」

「そうですね。ちょつとカゼをひいてねていますが、様子をきいて参りましょう」

ウスノロがすすんでカモになりたがっている様子だから、二度と記代子に会わせないつもりであつたが、ワガママを言っているわけにいかない。にわかには記代子にムネをふくめて、今度彼女の店をだすについて十万円かしてくれと頼んであるから、お前からもよろしく頼むがよい、と、つれてきた。

しかし記代子は放二にたのむ気持はないから、ツツケンドンに、放二を見下して、

「私、あなたから、お金かきようなんて思わないのよ。どうせ梶さんのお金ひきだしてくるのでしよう。汚らわしいわ。ですが、エンゼルに貸すんですたら、貸してあげなさい。きつとよ。貸しますね」

放二は赧^{あか}らんでうなずいた。

「ぼくは、ただ、お役に立ってうれしいと思っただけです」

「誰のお役にですか。エンゼルのよ。私はあなたにお役になんか立っていただきたいと思わないのよ」

「おッしやる通りです。ぼくの言葉が、ぼくの耳にも、まるでお役に立つことを押しつけているようにきこえます。そんな気持ではないつもりなのですが、ぼくの本心が結局それぐらいでしかないのだろうと思います」

記代子の目はいつも彼の欠点を鋭く見ぬいていると放二は思った。それは記代子が正しい生活をし、心が正しい位置におかれているからだ。

肉親に、友に、見すてられた記代子は、その心が正しい位置におかれているからであろう。人に愛されようとする自らの心は、ゆがんでいる。それをどうすることもできないモドカシサを放二は感じつづけた。

十四

翌日、放二は約束通りエンゼル家を訪ねて、十万円渡した。

十万円渡した瞬間から、サバサバした気持になることができた。金というものは奇妙な

生き物である。人にやるときめた金でも、フトコロにあるうちは、ミレンの去りがたいものがある。他人に所有権が移ってしまえば否も応もない。自然にサッパリしてしまう。

十萬円で人の信賴を買おうという考えがどうかしている。金額の問題ではない。金で人の心は買えない。

しかし、そのアベコベも真実であることを放二は知っていた。人間は、お金で買えるものなのだ。身体も、心も。特殊な例をあげる必要はない。早いところ、勤め人の生態がそうではないか。

だいたい、人の心を買うものが、こっちの誠意や赤心だという考えがまちがっている。誠意や赤心というアイマイなものは、売買の規準にはならないものだ。一步まちがえば、神がかり的な軍人たちや、教祖と信徒のようなものになってしまうし、まちがわなくとも、それがギリギリの正体なのかも知れないのである。

むしろ、精神的なものも、金で買うという方法が、マギレがなくて、元々チグハグな人生では、ともかく最も正常な方法なのかも知れない。人の心というものがトコトンまで買いきれないのは分りきったことであるが、一応物質に換算して、ある限界までは金銭で売買するのが、むしろ健全だ。それ以外により明確な手がないからだ。

しかし、放二は、十萬円でエンゼル夫妻の信頼を買うつもりではなかった。彼はその考え方を捨てたのである。何も買つてはいけなない。彼はただ二人のために誠意をつくそう、と自分に言いきかせていたのであった。

そのつもりで、彼らに渡す十萬円をフトコロににかけてきたが、フトコロに金があるうちは、まだ、いろいろなことを考える。その金で転地をすすめてくれたせつ子の気持も気にかかるし、せつ子の厚意が十萬円にこもっていると思えば、みすみす詐取とわかつているエンゼルの軽薄な気持を比較して、もどかしさを感じずにもいられたかつた。

エンゼルの人を小馬鹿にしたような詐欺的な申出に応じることが、正しいことだろうか、と気にかかりもする。

しかし、真剣な申出だから応じるといふ区別の立て方にはウソがある。第一、真剣と、真剣でないものとの、本当に区別を知る人があるだろうか。いったい、真剣とは何だ。そんなものに、どこに特別の値打があるのか。今日は真剣でも、明日は真剣ではなくなるかも知れない。今日は軽薄なエンゼルでも、明日はそうでなくなるかも知れない。ウソと云えば人の心は全部がウソ。どんなにバカ正直の大マジメな心でも、ウソの裏ヅケはちゃんと在るものだ。

エンゼルの申出が軽薄だから。みすみす騙されるだけだから。そういう言いがかりをつけて金を惜しむのは不当である。だまされることは問題ではない。信念の心棒になるのは、自分の心だけである。そして、二人のために誠意をつくすということを実行すればよろしいのである。

十万円という金は、たとえ騙して取った金でも、十万円である。エンゼルは、それを十万円とし使うであろう。そして、そんなことは、こっちの氣に病むことではないのである。

十五

放二は十万円をエンゼルに渡して、にわかにサッパリした氣持になったので、自分の心も、たよりなく、軽薄すぎる、と思わずにいらなかった。執念のあるべきものには、もつと執念のある方が本当のような氣がしたからであつた。

人間は金錢に対して、当然執念があるべきもののである。自分が金錢に特に淡泊な人間だとも思わないが、この十万円について案外アツサリしているのは、金の値打を知らないせいではないかと思つた。

十万円という意外な大金を自分のものとしてポケットに収めたのは今度がはじめてのことだ。その半分の金を貰ったこともない。

生活が体をなしていれば、何かと特に欲しいものもあるかも知れないが、無一物、万事にボロだらけの放二の生活には、何もかも欠けているから、特に必要なものがなかった。無ければ無いで、まにあうような生活環境がちゃんと組み上っているものだ。全部を変える以外には、それに多少つけ加えるべきものがないように見えるほどである。

十万円というまとまった金をもらってみても、放二はそれほど嬉しいとは思わなかったが、思わないわけである。身にしてみても必要な理由がなかったからである。一つだけあるとすれば、せつ子がすすめてくれたように、身体を丈夫にすることであるが、それに対して情熱が欠けていた。たつて、という情熱が、起らなかった。ストレプトマイシンも買える。入院して整形手術もできそうだ。転地して、元気を回復して戻ってくることも、可能ではないかも知れない。しかし、そうまでするハリアイが、どうしても起らないのであった。

十万円に淡白なのは、生命の蔑視から来ているのかも知れないが、それもミジメな話である。誰も好んで己れの生命を蔑視する筈はないのである。外部的な何かが、それはいろ

いろいろのからみあつた何かであるが、それがアキラメを与えているのであろう。

「お前、健康になりたいと思うか」

こう自ら問うてみる。いろいろの考えのあとで、彼はこう答えを出した。

「このまま。そして、それから、なるがままに」

病気ということは一応忘れて、他のことに目的をおき、そして病気はなるがままにまかせようと結論はだしていた。深く考えれば、自分のことは何も分らないばかりである。

「ヤ。これは、これは」

エンゼルは大そう恐縮そうに十万円を受取った。わざと一枚ずつバカ丁寧に算えて、

「たしかに拝借いたしました」

金を手にしているエンゼルは銀行員のように律儀な物腰に見えた。

すると記代子は、放二から借金するエンゼルを見るのがつらいらしく、

「北川さん。あなた、もう、帰つて下さい。私たちには、いろいろ用が多いの。毎日毎日
が忙しいのよ。あなたと、ゆっくりお話しているヒマなんてないのよ。今日だって、ムリ
して、お待ちしてあげたんです」

放二は立って、

「お邪魔いたしました。では、失礼いたします」

「ヤ。そうですか」

エンゼルはひきとめなかった。記代子は一そう威丈高になって、

「北川さん。私はもうあなたにはお目にかかりません。私に挨拶したいなんて、変なこと仰有らないで。そして、もう、二度とここへいらッしやらない方がいいわ」

睨みつけて、さっさと立ち去った。

三方損

一

エンゼルは京都の長平を訪問した。

せつ子からも、放二からも、まだ報告がなかったので、記代子のその後のことが長平に

は分らなかった。せつ子が荒っぽい処置をしたので、エンゼルが文句を言いに来たのか、などと考えた。エンゼルという男には興味をもっていたので、書斎へ通した。

「たいへん閑静なお住いですな。京都には、こんな住宅が多いようで、土地風というのでしょうか。東京でこの閑静をつくるには、庭を五十倍にしなければなりません。猫額大にして山中の如し」

ニコニコしている顔に厭味がない。ちょっと古風なことを言ってみせる芸当など、芸界の生意気ざかりのアンチャンが、こうしたものである。

「君は立派な屋敷をもっているそうだが、屋敷もちは京見物の心得が違ふようだね。人の住居が気になるかね」

「いろいろと見聞をひろめ、後日の参考に致そうと思っております。人間、焼跡のバラックでは、恒心がそなわりません。ぼくのバラックでは、庭が花園になっていますが、これは職業上の畑でして、家と職業は分離しなければ、家の落付きはありません。隠居家ということを申しますが、隠居家こそは家の建築の正常な在り方である、これがぼくの意見なのです。なぜかと申しますと、万人が家庭においては隠居である。彼は年若く、生き生きと、かつ多忙に働くが故に、家庭においては特に隠居でありたいと思う。これがぼくの意

見です。そして、今後家をつくる時の理想なんです。京都の山手の住宅は、いかにも侘び住居、隠居家の趣きを極度に研究、洗練したもののように拝見いたしました」

「建築に凝ると、調度、書画などに凝るのが自然だが、その方はどうです」

エンゼルはニコニコと考えこんだ。たしかに彼は家のことには大そう興味をもっている。こんな家をたててみたいと考えて、自然に建物に目がひかれる。調度や書画のことも、自然考えているけれども、本当に買ってみたいことがないせいか、好き嫌いまで、まだ漠然としている。世間では、こんな書画が値がいいそうだが、自分の好きというものが、まだ分らないのである。

なるほど商売人はうまいことを言う。家に凝ると、書画にこる。なるほど、うまい。こっちの気持、人間の気持をピタリと言い当てるのは、さすがに商売人である。こう感服したから、自分の至らないのをごまかして、彼はニコニコと考えてみせた。

「失礼ですが、こちらに御秘蔵の書画を、拝見させていただけましょうか」

「ナニ、君の方が風流人さ。この住居は借家。特に書画と名のつくものは、何一つ持たないのさ。君はどんなものが、好きです」

「ぼくはこの、まだ若僧で、観賞力もないものですから、閑静な隠居家がすきですが、又、

華やかな色彩、調度が好きなんです。サビとか、渋いということが分らぬわけではありませんが、どうしても華やかなものに気をひかれる。それで調和いたしません。この矛盾、これは悪いことでしょうか」

「好き好きさ。それだけ自分の好きなものが分つていれば結構さ。好きなようにやるのが道楽だろう。で、君の御用件は、なんですか」

この男が何の用できたのだろうと思うと、なんとなく早く知りたくて仕方がなかった。エンゼルは困ったという笑いを見せて、

「どうも、そちらから、きりだして下さると思っていましたが、御催促とは、どうも、ちよつと、勝手ちがいで……」

二

エンゼルはゆつくり身構えを立てなおした。彼は大人を買いかぶってもいかなかったし、世間的に知名な大人を特別な大人だとも思っていなかった。中隊長だの部隊長だのというもの、その階級によって与えられていた威厳を取り去れば、ダラシのないウスノ口にす

ぎないじゃないか。世間というものが個人に与える特別の威厳というものを、眼中に入れるな、ということをも、戦地の経験によつて身につけていたのである。対等以上の存在を考へる必要はないのである。

「女の心理というものは、妙なものですな。女というものはツマラヌ人間である、ぼくがこう判断したのがマチガイかどうか、ひとつ聴いていただきたいものですよ。しかし、ぼくも、オツチヨコチヨイには相違ありません。ぼくが記代子を好きになったのは、犬庭さんの姪であるということ、これが重大なる理由なんですな。ダンサーでも女給でもパンスケでもない。ぼくらの身边にはちよつと見かけない女性で、有名な人の姪だということで、大そう熱ツぽい思いになる。ぼくらは、そんなもんですよ。で、まア、愛した、惚れた、といえば、それにマチガイはないのです。一週間か十日のことですがね」

エンゼルは深い目を、無感動に、ジツと長平の顔を見つめていた。

エンゼルが身に現しているものは、対等ということの明確な表示である。年齢の差も、知名人という架空な尊厳も、眼中にいれていない。お前の持てるだけの力量と、オレの力量と、掛値なしの裸でテンビンにかゝつてみようじゃないか。オレの重さを対等に受けとめられたら、うけとめてみるがいいや。そう語っている。別に長平にそれを知らせようと

しているわけではないが、闘志一本に心をかためたから、彼の構えがそれを表示しているだけであつた。

エンゼルは長平の顔から、無感動な視線を瞬時も放さなかつた。

「今では記代子が好きではないのです。なんしろ、熱ッぽい思いになつた元はといえば、イカモノ食い……これもイカモノ食いの一つですな。本人よりも、本人の環境に惚れたんですから。ながく、惚れる筈がありませんや。惚れたモトがそうですから、鼻についたとなると、これは、ひどいものですなア。日増しに熱がさめる。そんなもんじやありませんぜ。一時間、いや、一分、一秒ごとでさア。自分ながら、興ざめていくのが、怖いぐらい。すさまじいものです。こツちは氣持がふさがつて、食事もまずくなる、記代子を一目見たびに、アア、ヤだなア、砂をかむような氣持。田宮伊右衛門の心境、アア、ムリもないとしみじみ思つたものですなア」

長平ははじめのうちは、エンゼルの視線をはずして、ソツポをむいて、軽い氣持できいていたが、だんだんそんな風にしていられなくなつた。嫌いになつた女が、一分一秒ごとにイヤになるという言葉にこもる実感が、軽い氣持できいていられなくさせたのである。自然にエンゼルと睨み合つていた。エンゼルの目は、相変らず、無感動であつた。

「女の心理というものが妙なものだと思つたのは、これからのことなんです。これだけ嫌われれば、当人に分らない筈はありません。知らないフリをしていても、チクリ、チクリ、一分ごとに針をさしこまれているようなもの、当人の胸には誰より鋭く響きわたっているに極つていまさア。ところが、この厳然たる事実を、信じまいとするんですな。イヤ。有りうべからざる事である、と断定すら、するのです」

三

「嫌われれば、嫌われるほど、ぼくに惚れようとするのです。いえ、本当に惚れてくるのです。まるで、それが嫌われたことの、対策だと思ひこんでいるように、ですなア」

本当にイマイマしいという表情がエンゼルの顔にあらわれた。しかし彼は自然の感情をむきだしにしているのではなかったのである。そういう顔をしてみせたのだ。

エンゼルは瞬きもせず悪いことのできる男であつた。彼は悪事をたのしんでいた。大庭長平という、ちょツと世間に名の知れた男が、彼の仕事や力量に、どんな風に乗ぜられ、どんな風に負け、どんな顔や恰好をするだろうか、ということが、興味津々たるものがあ

る。それを見つめることは、放火狂が火をみつめるように、色好みの男が女体をみつめるように、全身的な快楽を感じる。彼は話術の緩急を考え、猫が鼠をじらすように、たのしむのが好きであつた。

何か長平の一言があるかと思つていたが、何もないので、彼は言葉をつづけた。

「悪女の深情という言葉がありますが、なるほど、嫌われれば嫌われるほど、もたれてくる。ベタ惚れ、ベタベタ、見栄も外聞もなくなるのですな。高さ、品格がありません。顔はお岩ではないかも知れませんが、その人格からうける全的な感じはお岩、妖怪じみたものです。ぼくも、ついに音をあげたのですよ。これは、とても、たまらん。寸刻も、同居に堪えない。……」

エンゼルは火をふくような目をした。大いなる怒りが、こもりにこもつて、ドツと火をふいたようである。当面のものを全的に拒否している冷めたさが、みなぎつた。

すでに歴然たる悪党のエンゼルだつた。悪党が悪党らしくないうちは興味津々であつたが、悪党になつてしまえば、面白おかしくもない。エンゼルの女を嫌う実感に一時は長平もハツとしたが、相手が悪党になりきつてしまうと、その実感への感興もうすれた。長平自身が、ひどく興ざめた思ひになつた。一分は一分ごとに、一秒は一秒ごとに、一枚ずつ

紙をはがすように、興ざめた気持ちになる。エンゼルの熱演は、悪女の深情と同じことだ。もう目を見なくても分りきっている。

長平は面白くもなさそうにソツポをむいてしまった。

エンゼルは自分の凄みが相手にうち勝ったのだという風に考えた。

「ぼくは記代子を簡単に追んだすツモリでしたが、簡単に追んだしたのでは、彼女は死にますな。ただ、ベタベタでは、どうにも仕方がありません。ぼくの女の一人の列にありさえすれば、それで満足。こうあきらめてもいるのです。お岩にくらべれば長足の進歩、妾ぐるいぐらひは結構、死んでも化けて出やしませんな。それだけの甲斐性がないんです。化けて出るだけのね」

軽蔑しきった口調、たすからないほど冷めたい。演技は高潮に達している。次に大詰の一撃があるだけであった。

「ぼくは記代子を叩き売ろうと思います。因果を含めて叩きうれば、承知するにきまっています。同じ因果を含めるのでも、親元へ返すぶんには、死あるのみ。ね。叩きうる一手です。寸刻も同居をつづけていられないのですから、ほかのことをモタモタ考えていられません。とにかく、ぼくは叩き売りますから、売ったあとで、あなたが買うなり、どうす

るなり、あわててやると死にますから、死なない程度に、後々の始末をおまかせしようと思ひましてね」

四

そんなことかと長平は思つた。

ずいぶん手数をかける男だ。長平の趣味から言えば、端的に河内山式の方がよい。この男は、京の家ぼめから始まり、いろいろと演技の数をつくしているが、まだ本当の結論へは来ていないのである。花をつくるだけミソで、近代的にして、かつ退化していると判断すべきようであつた。

長平はどこかの殿様家とちがつて、話の正確な結論をたしかめないうちに、あわてて百両包みを河内山の袖の下へ突っこむようなことはできない。

「君の話は、長すぎる」

長平はエンゼルに教えてやった。

「京の隠居家ぼめが挨拶のツモリならよろしいが、前奏曲のツモリなら、ムダのムダ。そ

れからの話の運び方も遠まわしで、もっと率直でないと近代人の感覚に合わないものだ。こっちはそうとは知らずにきいているから、君の結論をきくと、オヤオヤ、あれはみんなここへくるための道中か、ムダな道を曲りくねるものだと思って、いつべんに興がさめてしまう。一秒ごとに興がさめるよ。顔を見るのも、話をきくのも、興ざめだ。寸刻といえども、同居に堪えないという気持になる」

長平はタバコに火をつけた。

「君も一本、吸いたまえ」

と、すすめると、エンゼルは憤然として、長平の手からタバコの箱をひったくつて、テーブルへ叩きつけて、

「ヤイ。寸刻といえども同居に堪えがたいと言いながら、オレにタバコをすすめるとは、いい加減なことを言いやがるな。はばかりながら、若い者には、そんなふざけたことは通用しねえや。寸刻も同居に堪えなかつたら、堪えないように、ハッキリしやがれ」

「それなら話はわかる。なんでも、そういうグアイに端的に言うものだ。しかし、ハッキリしないのはお前さんの方だろう。オレはさつきから待っているが、お前さんの本当の結論はまだのようだ。その結論をきくまでにはヒマがかかると思ったから一服すすめたが、

お前さんの結論が、さっきの言葉ですんでいるのなら、オレは返事の必要がないから、さっさと帰るがよい」

エンゼルはひらき直った。

「それじゃア、記代子売ってもよいな」

「バカめ。また同じことをモタモタ言っているのか。それが結論だったら、返事が必要がないから、さっさと帰れと言っているではないか」

エンゼルは帽子をつかむと、サツと立って、悠々と帰って行つた。

帰り際だけは、どうやら一人前だと長平は思った。良いところは、それだけだった。

花づくりの屋敷もちの若い顔役も、想像倒れで、新味もないし、人間的な偉さもない。

昔ながらのヨタモノにすぎない。

ヨタモノにエンゼルだけの美貌があれば、若い娘も年増もひっかかる筈である。浜の真砂と同じように、そういうものも種のつきることはない。あいにく陳腐な砂の一粒に自分の姪がまじってしまったが、彼にとっては、たゞつまらない出来事だと思われるだけのことであった。

エンゼルが記代子売りとばすことだけは確実だろう。どういう手段で、どこで金に換

えるかは見当がつかないが、ほッたらかしておくわけにもいかない。彼には面倒なことだけが残念千万であつた。考えると、たゞ、オックウで仕様がなない。

五

記代子はどうしてそんなことになつたか分らなかつた。

「お前の部屋は、今日から下だ」エンゼルがこう言うと、こッちだよと言って、子分の一人在ひツたてるように階下へつれて行つた。階段の下に当る、小さな格子窓が一つしかない留置場のような三畳であつた。下は板敷で、納戸であるが、使いようによつては、座敷牢である。

「ここへ、なによ？」

「はいつてゐるんだ」

「なによ。こんなところ」

子分の身体を押しきつて出ようとする、

「バカ。勝手に出るな」

中へ突きとばされた。自分は身の回りのものだけ持ってきて、中へ投げこんでくれたが、勝手に出るわけにはいかないのだから、用があつたら、声をかけろよ」

板戸に心ばり棒を下して立ち去つた。

エンゼルが急に冷淡になったのは、ここ四、五日のことである。そして旅行から帰つてくると、記代子に一言の言葉もかけずに、いきなり、閉じこめてしまったのである。

記代子はわけが分らなかつた。自分がカン違いして、部屋をまちがえたのだろう。エンゼルは、自分がこんな部屋へ入れられて、心ばり棒で閉じこめられていることを知らないに相違ない。知つていて黙っている筈はあり得ない。

記代子は戸をたたいた。

「エンジェル！ エンジェル！」

力いっぱいの声をはりあげて、叫んだ。その声は、塀の外までは届かなくとも、この家中には鳴り響いた筈である。心ばり棒を外して現れたのは、エンゼルではなくて、子分であつた。いきなり一つ、ぶんなぐつて、

「バカヤロー、兄貴はヒルネがでなくつて、怒っているぞ。ぶんなぐられないようにしろ。兄貴に愛想づかしをされたんだから」

睨みつけて、戸をしめてしまった。昼めしには、お握りを二つくれただけであつた。

格子窓の向うに、便所の手洗いの窓が見えた。ときどき、子分がその窓から、こつちをのぞいた。それを見ると、寒気がするほど不快で、思わず顔を隠したが、エンゼルもきつとそこへ姿を見せるに相違ないと思うと、窓際から動くことができなかった。

果して夕方にエンゼルの顔が見えた。彼はヒルネから目をさましたところらしく、いつも寝起きにそうであるように、はれぼったい顔をしていた。坊やが目をさましたばかりのような、記代子には、忘れることのできないなつかしい顔であつた。

記代子は思わず、とび起きて、格子にしがみついていた。

「エンジェル！ 私よ。こんなところへ、なぜ入れるの！ きこえないの！ エンジェル！ エンジェル！」

エンゼルは記代子の方を見向きもしなかった。

記代子には信じられないことであつた。

「エンジェル！ エンジェル！」

たつた二、三間の距離である。たつた一声で、ノドがつぶれてしまいそうな、この叫びがきこえない筈はない。しかしエンゼルはふりむいて、姿は見えなくなつてしまった。

エンゼルは、わざと聞えないフリをしてみせたが、身仕度して、きつと迎えにきてくれると思った。十分間も窓からのぞいていたが、次に窓から見たのは子分の顔であった。彼は記代子を睨みつけた。

記代子は気を失ったように、ふらふらと崩れこんでしまった。

六

外から心ばり棒を外す音に、記代子はハツとして飛び起きた。やっぱりエンゼルが迎えにきたと思ったのである。

しかし、姿を現わしたのは、二人の子分であった。一人は彼女の前へお握りを入れた皿と一杯の水を置いて、

「バカ。ウチが割れるような大声をだしやがる。二度とあんな声をだしやがると、腰の抜けるほど、なぐりづけるから、そう思え」

一人は窓をしめて、

「まったく、頭の悪い女さ」

そうつぶやいて、又、心ばり棒をかけて立ち去った。

日がくれると、多くの跽音がドヤドヤと入りみだれて玄関へあつまるようである。

「兄貴、行つてらっしゃい。行つてらっしゃいまし」

と口々にのべる言葉がきこえるので、エンゼルのでかけるのが分った。

記代子は、すべてを諦めかけていたが、その気配をきくと、突然とび起きて、夢中で戸を叩いていた。

「エンジェル！ エンジェル！ 記代子は、ここよ！ エンジェル！」

叩く手をとめて、耳をすましてみると、エンゼルはもう立ち去つたらしい。部屋へ戻ると、らしい子分の跽音が消えてしまうと、あとは物音がなくなつてしまつた。

疲れきつてウトウトしかけると、数名の男たちがフトンをかかえて現れた。彼らがフトンをしき終ると、一人が記代子をだきすくめた。

「兄貴は一週間ほど御旅行だ。可愛い女が待ちこがれているからな。三四人は廻つてやらなきやならないから、兄貴も忙しいやな。お前はオレたちにお下げ渡しだから、当分みんな可愛がつてやるぜ」

記代子はわけがのみこめなかつたのでボンヤリしていた。すると男の手が彼女の衣服を

ぬがせようとしているのに気がついて、おどろいて、もがいた。すると、数名の男たちにおさえつけられて、もはやどうすることもできなかった。

夜更けに、酔っぱらった男たちの一隊が戻ってきた。彼らは喚声をあげて記代子のところへ殺到して、同じことを、くりかえした。

そういうことが四日つづいた。記代子は目がくらみ、頭が霞んでいた。夜も昼もなかった。彼らがお握りをおいて行くので、そのときが夜でないことが察しられるだけであつた。どうする気力も失つて、ただボンヤリしていたが、腹が痛んできたので、便所へ行かせてもらった。便所の往復には、いつも、壁に手を当てて、身体を支えなければならなかったが、その日は腹が痛むので、時々壁にもたれて休んだ。便所から戻ると、のめるように部屋へ倒れこんでしまった。

一人の男が水と薬をもってきて、

「この妙薬をのんでみる。いっぺんに治らうな」

と置いていった。記代子はそれをのまなかったが、腹痛は自然におさまってきた。

記代子は痛みがとまると、ふと気がついた。薬をおいて行った男は心ばり棒をかけずに立ち去つたのである。その男はモヒ入りの催眠薬を与えたので、安心して心ばり棒をかけ

なかつたのである。

日がくれて、まもない時刻であつた。この時刻は、この家で最も人の少い時間であつた。戸に手を当てて静かに少しひいてみると、たしかに心ばり棒はかかつていなかった。

記代子は戸をあけた。庭へ降りた。花壇を走つた。塀をのりこえた。その大半が夢中であつた。

夜中に、青木の宿へ辿りついた。

七

記代子は青木の部屋へたどりつくくと、高熱を発して寝こんでしまった。何一つ語り合う間もなかった。

夜つびて看病して、翌朝は影のように生色を失つて、社へかけつけると、せつ子に会つて、報告した。

「二目と見られないような有様ですよ。よくも怪しまれずに、ぼくのところまで辿りつけたもんだなア。足は素足で、血をふいているし、顔も、全身もむくんで、悪臭を放つのさ。

ぼくは一目見たときに、実に「なれの果て」ということをグツと感じて、目がくらみそうな切なさでしたよ」

「なれの果てだから、どうしたって云うの」

せつ子は冷めたく、あびせた。

「記代子さんという娘の愛情が、あなたのところへ戻ってきたんじゃないのよ。一人の娘の悲劇が、あなたから出て、あなたへ戻っていったのよ。なれの果てとは何ですか」

怒りを叩きつけると、せつ子は風のように、とびだしていった。彼女はただちに穂積をつれて、記代子を病院へ移した。

せつ子は秘密探偵にたのんで、エンゼル家を見張らせていた。記代子の外出を待ちぶせ^{うち}て拉し去るつもりであったが、十日の余も日数をへて、なんの効もなかったのである。

放二はまだ休んでいた。

「北川君に来てもらって、つききつて貰いましょうかね」

穂積がこう申しでたが、

「ダメですよ。娘のあられもない姿を若い男に見せるのは、もつてのほかよ。あなたのよ^うな仙人は、そろそろ男の口にはいらなから、これが適材適所なのよ」

「ぼくの方が適材適所さ」

こう呟く声にふりむくと、いつのまに來たのか、青木がドアの横手の壁にもたれて、パイプをくゆらしていた。

「風と共にきたる」

青木はせつ子のおどろきに応じるように、皮肉なカイギャクを弄した。

「ねえ、社長さん。あなたは、こんなことを思わないかね。ここに一人の人間がいて、彼のツラの皮をひんむこうと、ふんづけようと、すべてこれ蛙の顔に小便さ。イケ、シャア、シャアですよ。彼のために病院の入口にバリケードをつくっても、彼は忍びこみますよ。

しかし、いつも彼がこうだときめるわけにはいかないね。彼は本来は怠け者ですよ。だが、しかし、ひとたび意を決するや、常にかくの如しです。この一念は、雑念がこもって妖氣がむらたっている、仙人よりも、むしろ純粹ですよ。適材適所とは、かかる一念を指名して一任すべきを最上だと思いますが、いかが？」

せつ子は色をなした。

「あなたの一念が、どんな効を奏したことがありましたか。記代子さんの行方を突きとめることもできなかったじゃないの。病院のバリケードを破るぐらいは、誰でもできます。

放二さんは人の隙をねらうような猾^{ずる}いことはできませんが、記代子さんの行方を突きとめているのです」

「そして、助けだすことができなかったでしょう」

青木は笑った。

「彼が行方をつきとめても、助けださなければ、ムダに於て、同じとき。あなたは、希望的観測によつて正当なものを見失っているのだな。ぼくは今こそ断言します。彼女はなれの果てとなりはてたから、今や彼女を愛しうるものは、ぼくのほかにありません。ぼくは彼女と結婚します」

八

青木はその晩京都へたつた。

その汽車の中で、青木はいろいろのことを考えた。

「とにかく、オレの一生で、今日がいちばん傑作のようだ」

自分という人間のバカさ加減がよく分つたが、こんなにワケのわからない存在だという

ことを、五十年ちかいあいだ身にしみて考えたことはなかった。

青木は親しみを表すかわりに挑戦的な表し方をするヒネクレた性癖のおかげで、彼が親しみをもつ人に限って、あべこべに彼をうとんじるといふ妙な喜劇に一生なやまされてきた。

相手が自分にウンザリしてしまう理由が、まことにモットモ千万であると納得することができる。

そして、そういう事柄の中に、いろいろのことがまぎれて、姿がかき消されている。たとえば、梶せつ子という親友は、現在は自分の社長である。そして、長平に対する義理であるか、または気まぐれであるかは知らないが、相当のサラリーをくれて、仕事らしい仕事もさせずに遊ばせておく。いや、遊ばせておくといふことの中に、彼女、イヤ、親友の意地のわるさがあるのかも知れない。つまり、無用の存在だということを思い知らせるといふ意地のわるさである。

けれども、時間的にその前のことを考えると、実に、彼女親友は、彼の恋人であつたのである。否、彼の金銭に従属するところの情婦的存在であつたのである。そして、彼は彼女親友に、そのとき八十万円ほどかすめとられている。

現在彼女親友が社長であるところの出版社にしても、元はといえば、彼即ち自分がかすめとられた八十万円を資金の一部としてやりはじめる計画であつたが、他に雄大なる後援者が現れて、かれこれするうちに、彼即ち自分は一介の無用な使用人に身を沈め、彼女親友は押しも押されもしない大社長になつていた。

しかし、すべてそれらの曰く因縁はあたかも地上から姿を没し去つたかのようなのである。

彼は今でも彼女に対して親友の愛情をもつが故に、あたかも挑戦するかのような妙な表現をしてしまう。それに対して彼女が彼に示すものは親友の情ではなくて、お前は無用の存在だという意地のわるさなのである。

ところが奇怪なことには、彼は彼女に挑戦し、彼女は彼に意地わるをもつて応じるといふ関係のみが現存するが、曰く因縁というものは、彼自身の意識中においてすらも、ほとんど姿を没し、消えてなくなっているではないか。

まア、しかし、そういうことは、どうでもかまわない。

妙なのは、記代子と結婚するという断々乎たる決心なのである。どこにも、そんな決心などは、ありやしない。何かしら、ちょつとでも真実らしいものがあるとすれば、彼は記代子がころがりこんだとき、あまりの哀れさに卜胸をつかれた。それだけである。

彼は夜明けまで熱心に介抱したが、彼は介抱しながらも、この女はバカな女だ、バカな女というものを端的に戯画化したのがこの女のこの現実の姿だ、というようなことを考えていた。

「よろし。京都へ行つて、長平どんにたのんで正式に女房にもらつてやろう」

そう考えたつもりで、汽車にとびのつたが、今や、どう考えても、そのとき、そう決心したと信じることは不可能だ。オレはその決心を口実にして、実は自分の氣付かない目的のために京都へ行くつもりだろうか、と考えた。ワケのわからないバカな話があるものだ。しかし、現にそうではないか。

九

問題の本尊は、記代子ではなくて、別れた女房にあるのかも知れないな、と青木は考えた。

長平に会いたいののは、礼子のことであるかも知れない。礼子は長平のふところへとびこむつもりで彼をすてたが、結局、長平は彼女を相手にしなかったし、今は礼子もあきらめ

たようである。

しかし、あきらめるツて、何をあきらめるツモリだろう。彼にもあきらめたことは、いろいろあつた。青木は立候補をあきらめたし、大実業家になることもあきらめた。

今でも青木があきらめないものがあるとすれば、あるいは礼子のことであるかも知れない。けれども礼子は、長平が彼女をてんで相手にしなかったので、それをそっくり昔の亭主に返礼して、ちかごろでは、益々冷めたく、青木を相手にしなくなっている。

そのウツプンを長平のところへ持つていこうという魂胆ではないけれども、彼の心にケイレンが起きたとすると、特效薬は長平のところへなんとなく泣きに行きたくなることである。

しかし、彼が京都市きの汽車にのりこんだのは、そのためだというわけではない。なにがなんだか分りやしない。めいめいの人間には、一生の誤差がつもりつもつてゼンマイが狂い、一時にケイレンを起すような時があつて、それかも知れないと青木は思った。

「つまりケイレンだな。病原不明のゼンソクみたいな、精神的アレルギー疾患なのさ」

人間は——すくなくとも彼自身は、年をとると、益々迷いが深くなるし、バ力になるよ
うだと青木は思わざるを得なかった。

彼は京都の長平の閑居へ早朝に辿りつくと、まるでわが家のように落ちつきはらって、「なア。長平さんや。こうして古都の静かな侘び住居で、あんたの顔を見ると、なつかしいなア。余らも老いたり、と思うよ。もつとも、あんたは、老いて益々若い気持かも知れないがね」

自ら小女にビールを命じ、自分で栓をぬき、二つのコップについて、グツと一息にのみほした。

「ヤア、うまい。これが、人生だ。なア、長さん。人生は、たった、これだけのもんだよ。オレが、三四ヶ月前に東京でようやく君をとつかまえた時にさ、別れぎわに、こう言つたのを覚えているかい。そのうち、一度、京都へ訪ねて行くぜ。なんのためだかオレも知らないけどさ、そのときは、門前払いはカンベンしておくれよな、と言つたのさ。人間は自ら予言するものさ。いや、結局、自分の予感だけの人生しか生きることができないのだな。しかし、そんなことは、どうだっていいんだ。こうやって、ビールをのむだろう。すると、ほかのことなんか、実にとるにも足らないことになってしまふのさ。なア、キミ。ぼくは、いま、一つのことを悟つたのさ。曰く、老境ですよ。老いて、益々迷い深し。しかし、老境は老境ですよ」

青木はしばらくビールをたのしんでから、ようやく記代子のことを思いだして、ひどい姿でどこからか彼のもとへ逃がれてきて、目下入院中だということを語った。

「ゆうべ、おそく、東京から電話で、そのことはきいていたよ」

まだ朝食前の長平もビールをのみはじめた。

「どんな人生だって、同じことだろうよ。聖処女が、とたんに淫売になったところで、なんでもありやしない。めいめいが自分の一生をかけがえのないものだと思えばタクサン。記代子がそんな風になったことと、女学校へ入学すること、差の違った出来事だと思えることができないよ。もう、そんな話は、よそうじやないか」

十

青木は一ねむりして目ざめると、浴衣がけで京都の街々を散歩した。しかし彼には、街や人よりも、山や川が胸にしみてくるのであった。

なりひら

業平や小町や物語の光君という人などが花やかな貴族生活をくりのべていたころでも、古都は明るいものではなかった。賀茂の河原は疫病で死んだ人の屍体でうずまり、屍臭フ

ンブンとして人の通る姿もなく、鳥の群だけが我がもの顔に舞いくるっていたものだ。

関ヶ原の畑をほると、今でも戦死者の骨がで々くるそうだが、賀茂の河原からは、何も出てきやしないだろう。いつぺん洪水が起れば、すべては海へ流れて、河原は美しい自然の姿にかえってしまう。

この古都では、山と川が、昔のままだ。山の中には七八百年来の建物があるし、川をさかのぼれば、遠い王朝のころと同じ自然の中で同じような生活をいとなんでいる農民たちがいる。

古都の自然は美しいが、それが青木には暗く切なく見えるのである。千年来の古都の庶民の暗い生活が目にしみる。山々の緑の木々の一本ごとに千年来の人骨がぶらさがったり、からまつたりしているような気がする。賀茂川が洪水ごとに山に向って逆流して、河原一面にすてられた屍体を山へ運んでまきちらし、山々だけがいつまでも変らぬ緑を悲しくとどめているような気がする。その骨の一本が自分だという気がした。

「京都の山の木の一本が、オレだったのさ。それを見てきたんだよ。なんのためにオレの心が京都へ行こう京都へ行こうと叫び立ったのかと思ったら、つまり、こんなことだったらしいや」

青木はこう長平に語って、カラカラ笑いでしたが、

「なア、長平さんや。あんたが、又、昔のように、オレとユツクリ酒をのんでくれるところを見ると、オレの心が、いくらか落ちついてきたのかなア。イヤ。こんなことを云つたつて、君にへつらつてるワケじゃアないのさ。オレはね、自分の迷いが自分だけじゃア防ぎとめられないことが分つてきたらしいのさ。だんだん、いろんなことに、あきらめるようになったのさ」

青木は一ぱいごとにたのしんで何バイも酒をかさねた。

「君はいつも、仏像みたいに、だまっているなア。なんにも返事をしてくれねえや。しかし、君の人相は、いい人相だ。オレは安心して、なんでも喋っていられるよ。昔から、君は、そうだったよ。だが、あのときに限って、どうして、そうじゃなかったのだろう？

え？　ねえ、長平さん。オレにだつて分つてるよ。決して人に愛されるようなオレの姿ではなかったことがね。しかし、オレは、真剣で、必死だったんだ。そんなことは、手前勝手なことには相違ないが、君だけは、そこを見てくれると思つたんだがなア。教えてくれよ。なぜ、怒つたのさ」

「知らないね。オレはお天気ませだよ。しかし、真剣、必死というものは、自分ひとり

でやるものだよ。だが、そんな話はよそうじやないか」

「そうか」

青木は、また、杯をかさねた。

「たしかに、いいことだ。こうして昔の友だちと静かに酒をのむことは、ね。いろんなことが、しみるように、分りかけてくるよ。まず、ひとつ、ハッキリ分ったことがあるよ。曰く、覆水盆にかえらず、ということだ。ありがたい。これで、オレは、ホツとしたなア」

十一

「これが分つただけでも、オレは安心して、東京へ帰れるよ。覆水盆にかえらず。人倫は水のように自然のものなんだ。ひっくりかえって流れた水は、どう仕様もねえや。もつとも、自然に元へ集ってくれるなら、それも良しさね。とにかく、自然でなくちゃア、ダメなんだ。しかし、人間はミレンですよ。覆水を盆にかえそうとしたり、盆にかえりうるものと希望をすてなかったり、ね。思えば、ぼくはそのミレンとナレアイの遊びをしていたようなものさ。ねえ、長平さん。ぼくは老いて益々迷いに迷う人間になりましたよ。しか

し、迷いのタネを過去に持つてはダメなんだね。白骨をさらすまで、水のように、迷いはただ盲メツポウ先へと流れるべきものですよ」

青木の苦笑は明るかった。

「ぼくはちかごろ、三方損ということを考えていたですよ。ただ今、覆水盆にかえらず、を会得するに至つて、三方損の考えが生きたものになりましたね。喧嘩両成敗はあたりまえのことですア。両成敗、両方損、両名は当事者だから、文句なしに、成敗や損をあきらめるのさ。ところが、ここに、すべて物事には当事者ではない三人目がいて、三成敗や三方損というマキゾエをくらつて、ついでに損の片棒だけがかつがされている運のわるい奴がいるものさ。まったくですよ。人生の諸事諸相には、かならずこのトンマな三人目が隅ツこでブウブウ言っているものさ。長平さんにあてつけるわけではないが、いつのまにやら、長平さんと梶せつ子がよろしく両成敗の当事者となっている隅ツこで、いつのまにやら三人目の一方損をひきうけてブウブウ言っているのがワタクシさ。御両氏を両成敗と言つては悪いが、しかし、人生、すべてはいずれ両成敗ですよ。それは分つて下さるでしよう。ヒガミではありませんやね。だが、長平さん。オレみたいに、人生の大半を三方損の三人目で暮してきた奴はいないよ。三方損の運命に、甘んじるべきや、否や、これ実に、

小生一生の大問題、面壁九年の一大事であつたです。しかし、面壁、一週間足らずで、解決したね。三方損。よろしい。ねえ、長平さん。ハッキリ、よろしいのです」

「そう簡単には、いかないだろうよ」

長平は机上から一通の封書をもってきた。

「この速達は、今、きたところだよ。北川が重病でねこんだそうだ。死ぬかも知れないらしいね。ルミ子というパンパンが知らせてくれたんだよ」

青木は手紙を読んだ。簡単な文面だった。放二が病床について、四十度の熱がつづいてゐる。入院をすすめても、きいてくれない。入院の費用で困つてゐるわけではなく、放二の頑固なのに困つてゐるだけだが、入院して充分の手当をうけるようにすすめてくれないか、という依頼であつた。

「ぼくは明朝上京するが、君は、ここにブラブラしていても、かまわないぜ」

「イヤ。ぼくも上京しよう。おもしろいことになりそうだ。君は主として北川君を見舞うらしいが、ぼくは記代子さんを見舞うとしよう。しかし、なア、長さんや。記代子さんが重病で放浪の旅から戻つてきてもビクともしないという心事も分るには分るが、北川君の病床には駆けつける。これも分るには分るが、一考を要するところだろうと思うね。アマ

ノジャクでもあるし、理に偏してもいる」

長平の答えはなかった。青木はやや苦笑して、

「フン。よからう。タヌキかトラか、ただのネズミか知らないが、オレは長さんの正体を見とどけるのがタノシミさ。オレが来年も生きているとしたら、ミレンのせいではなくて、長さんの正体を見とどけたい一心だと思ってくれよ」

明るい部屋

一

放二のやつれ方はひどかった。

長平は知人の医師をともなつて診てもらったが、ルミ子の部屋へしりぞいて話をきくと、彼は放二を生かそうとする情熱を起そうとしなかった。

「いますぐ入院というわけにはいきませんよ。うごかすと、死期を早めるだけのことです。三四日手当をしてみても、多少力がついたとき、病院へうつすことはできるかも知れませんが、どっちみち、長い命ではありません」

「どれぐらいの命ですか」

「うまくいって、二三週間」

「百に一ツも、望めませんか」

「百パーセントです。ここまできては、奇蹟は考えられません」

「会ったり、話を交したりしない方がよろしいですね」

「そう。ですが、どっちみち助からないイノチですから、親しい方々が心おきなく話を交しておかれることを止めるべきではないと思いますね」

ルミ子は医師の冷淡な言い方があきたらないらしく、

「十分か十五分ぐらいの診察で、どうしても助からないなんてことが、ハッキリ分るんですか。そんなにハッキリ言いきるほど、自信がおりなんですか。診たて違いということ、よくあるでしょう。百パーセント死ぬなんて、そんな自分勝手な、自分だけ絶対に偉いようなことを仰有って」

ルミ子は自分がとりのぼせているのに気がつく、自分のノドを手でおさえて、あきらめたように沈黙した。又、ふと、顔をあげて、医師を見つめて、

「先生。奇蹟は、どこにでも、あります。情熱の中にあるのですわ。先生が治してあげようと思えば、奇蹟はあるかも知れないのです」

「そう。ぼくの言いすぎでした。毎日きて、できるだけの手当をつくしますから、安心なさい」

長平一人を相手のつもりで腹藏ない意見をのべていた医師は、伏兵の爆撃におどろいたが、世なれた態度でルミ子を慰めてやることを忘れなかった。

医師を送りだしてから、長平は放二を見舞って、

「あんまりガンコに、ひとりぎめに諦めちゃアいけないぜ。ノンビリとノンキな気持ちになるがいい」

放二は童子のようにニコニコして、

「ぼくは、ノンビリと、ノンキな気持ちなんです。すべてに、満足しています」

「そうか。それに越したことはない。ぼくは東京にいるあいだ、ルミ子の部屋に泊っているから、用があつたり、話相手が欲しいときには、よびによこしたまえ」

放二は、又、童子のようにニコニコした。そして、うなずいた。

「先生、ぼくに看護婦をつけて下さるんですッて？」

「そうだよ。なれた者でなくちやア、寝たきりの病人は扱えないものだよ」

放二はうなずいて、

「それは、ありがたいのです。なれない女の子たちに、メンドウをかけるのは、気がひけていたのです。ですが、宿なしの女の子たちを、この部屋から追いださないで下さい。先生が気をきかせて下さって、あの子たちに他の部屋を世話して下さいても、こまるんです。あの子たちの身上は自由なんです。ここにいるのも、ここを去るのも、あの子たちの自由にまかせて下さい」

二

長平はルミ子の部屋へ泊りこむことになって、よいことをしたと思った。こんなに虚心坦懐に、女にもてなされたり、女を愛したりして、深間の感情というものをまじえずに、淡々とくらせるのが、ありがたい。ルミ子は魔性というものが少しもなくて、そのくせ、

生れつきの娼婦というのかも知れなかった。

ルミ子は長平から放二のよろこびそうな新刊書をきいて、それを買ってきて、一日中、放二に読んできかせていた。放二が疲れたりねむったりすると、自分の部屋へ戻ってきて、長平の邪魔にならないように、ねころんで、うたたねしたり、本を読んでいた。

「先生、童話すきですか」

「そう。すきだね」

ルミ子は、どうも困ったという顔をした。

「兄さんも好きなんです。読んでくれッておッしやるのよ。でもね。読みつづけられなくなつてね。時々ね、よむのを止してボンヤリしていることがあるのよ」

「なにを読んだね」

「風の又三郎。兄さんが、それを読んできかせてッて。童話ッて、みんな、あんなに悲しいの」

「そうかも知れない」

「変な悲しさですもの。いらだたしくなるのよ。あれじゃア、助からないわ」

「どんな風に、助からないのかね」

「ほんとに悲しいッてことは、あんなことじゃアないでしょう。私、悲しいときにはね、ウガイをしたり、手を洗ったり、そんなことをして、忘れちゃうのよ。無い時にお金のサイソクされたり、叱られたり、ね。それが悲しいことでしょう。童話と怪談は似ているわ。なんだか、ついて行かれない。いつまでも、からみついてるようで、女々しくツて、イヤなんです」

「子供の時のことを、思いだしたくないことが有るんじゃないのか」

「いゝえ。そうじゃないんです。ウガイをしたり、手を洗ったりして、忘れられないようなことは、私たちの生活にはないのです。童話の中にあるだけなのです」

「なるほど。つまり、余計ものなんだな」

「お金で物を売ったり買ったり、身体を売ったりお金をもらったりでもいいわ。それから、借金したり、お金がなかったり。恋をしたり、しなかったり。私の毎日々々のくらしには、あんな変な悲しいこと、ないんです。童話や怪談は、いけないことだと思っんです。ウソですもの」

「どうも、ぼくには分らないが、パンパンの生活をそっくり書いても、童話になるぜ」
「なるんですか！」

「風の又三郎と同じような童話ができると思うけどね。しかし、君の考えていることが、ぼくには、まだ、分らない。君は、山や川や海の景色をみてキレイだと思わないのか」

「思わないことは、ありません。でも、つまらなくも見えます」

「人間は？」

「人間には善いことと、悪いことがあるでしょう。善いことよりも、悪いことの方が、もっとタクサンあるでしょう。人間は、そうなんです。悪い人間もいます。悪い心もタクラミもあります。童話のように善いことづくめじゃないのです。怪談のように悪いことづくめでもありませんけどね。小説ツて、もつと、人が悪くなくちやア、いけないと思うんです。あんなに変に悲しい童話、助からないんです」

三

「お父さんやお母さんは、いるのかい？」

「ええ。それでパンパンは、おかしい？」

ルミ子は笑った。いつもながら、あどけない笑顔である。そのせいで、ルミ子の部屋は

いつも、明るい。長平は疲れた手を休めて、ルミ子と話を交すのがたのしかった。

「生れた家へ帰りたいと思わないかね」

「思いだすことはあるけど、帰りたいとは思わないわね」

「病気になったり、苦しいことがあってもか？」

「ええ。生れた家は、もう無いことにきめたの。私はね。街の女。街の子よ。今日があるだけよ。昨日も、明日もないわ。今のことしか考えない」

「ホウ。立派な覚悟だ」

「先生は？」

「そう見事には、いかないな。昨日のことも、明日のことも、考えるよ」

「私も、そうよ。でも、それじゃアこまるのよ。パンパンには、ね。昨日も、明日も、あると、こまる」

「なるほど」

「私だって、パンパンでなければ、昨日も明日もある方が都合がいいだろうと思うわ。その方が、自然なものね」

「そうかねえ。今のほかに、昨日も、明日もある方が、自然というものかねえ」

「冷やかしちやア、ダメだわ。そんな風にいわれると、迷ってしまうわ」

「ほう。何を迷うの？」

「だって、誰だって、自分の今のこと、今考えていること、今の生活、信じたのですもの。今のこと、後悔する日がくるなんてこと、苦しくって、とても考えられないわ」

なんとなく、まぶしそうに、笑う。思い切って切ないことを語っていても、それだけであった。

「いつか後悔する日が来そうな気がするのかい？　ヤ。そんなことをきいて、わるかったかい」

「いいえ。やだなア。先生は。そんなにクヨクヨしそうに見える？」

「そこが、ぼくにも分らないよ」

「先生は、どうなのよ。後悔が、こわい？」

「後悔は、ムダだと思うよ」

「そうなのよ。ですけどね。私は、こう言えると思うわ。後悔する日なんて、もう、来っこないの。私のところへは、ね。私は、そう信じることができるんです」

言葉が、すこし、はずんでいた。彼女としては、精いっぱい力強い言い方である。明る

い笑みの中に、瞳があくまで澄みきっていた。

すさまじい確信であつた。はずんだ言葉と、明るい微笑が長平の胸にくいこむ。この少女の心のめざましい安定というものが、正確に長平に移動して、彼の心まで安定させてくれるようだ。

長平はこの安定の静かなことと美しいのに心を洗われずにはいられなかつた。ステバチでもなければ、氣負つたところもない。十九の少女が、その毎日の生活を正しく生きて、確実につかみとつた安定なのである。そしてミジンも感傷がないのは、この少女の身边を益々清爽なものにしているのであつた。

ただ一つ、この少女がムリをしていることはと云えば、放二に対する感情であるが、それがムリなく起伏をせずして自然なものに見えるのは、パンパンという職業からくる特典のせいかも知れない。ルミ子の血が多く、多くの男によって汚れているのは、そうでない場合よりも、長平にはかえって清らかなものに見えたのである。

四

長平は上京したが、まったく外出しなかった。ある日、青木が遊びにきて、

「君も乱暴なお方だな。上京して一週間にもなるのに、記代子嬢の病室を見舞わないのは、どういうワケです。君の心境がききたくなつて、本日は、私製詰問使というわけさ」

長平は忘れていたことを理不尽に思いださせる青木の言葉がうとましく思われた。

「君は、そんなことに、どうして、こだわるのだろうね」

「これは、おそれいった。こつちがインネンをつけられることになるとは思わなかったね。上京して一週間にもなるんだから、一度ぐらいは見舞つてやりなさいよ」

「そういうもんかね。上京と云つたつて、こゝと病院には距離があるよ。京都から病院までの距離と、こゝから病院までの距離と、距離があるということじゃア、おんなじことじやないのか。記代子の病室へ行く必要があるば、京都からでかけるさ。上京したから、ついでに用のないところへ行く必要があると、君は考えているのかね」

「益々おそれいりましたね。人生には、ツイデ、ということが、ないんですかい」
ルミ子が屈託なく笑つて、

「ツイデ、ツてことは、たのしいわね」

「ホレ、ごらん。この可愛いお嬢さんが、証明してくれましたよ。ねえ、可愛いらしい

お嬢さん。しかし、ツイデは、たのしいかねえ」

「用たしに行くでしょう。ツイデに、このへん、ぶらついてみましようと思うわね。たのしいわ」

「ずいぶんジミなお嬢さんだね。そんなのが、たのしいかねえ。ほんとに」

「先生は、腰をあげるのがオツクウなんでしょう。私は、そう。腰をあげなきゃならないと思うと、たいがいのことは、その値打も魅力もないように見えてしまうわね」

「意気投合していらせられるか」

青木は苦笑して、ねころんだ。

「パンパン宿というものは、威儀を正して坐ってられない気分になるものらしいや。御免蒙って、失敬しますぜ。ところで、長さんや。重ねて、おききしますが、記代子さんの病室を見舞う必要はないのですか」

「先方が会いたがってもいなかろうよ」

「なるほど。しかし、なんとか、してあげる必要はないかねえ」

「君自身が何かの必要を痛感しているらしいな。ぼくに何をやらせようというのかね」

「君自身には、ないのか」

「ない。記代子がぼくを必要とするまでは。どうも、君は、妙にひねくれて、考えているね」

「そうかい」

青木は素直に考えこんだ。理窟は、たしかに、そうでもある。しかし、これでは、隣人というものが助からない。

「なア。長さんや。記代子さんの放浪、恋愛、愛人の裏切り、輪姦、脱走、病氣。よくもまア、これだけの困ったことを、たった一人で引きうけたものさ。隣人は不幸を分ちあうものさ。君は彼女の死んだ父母に代るべき最も近い肉親ですよ。最大の隣人ですよ。君が何かをしてやらなくて、誰が彼女の再生の支えとなる者があるのかね。え？」

青木は改まつて、起き上らずにいらなかったが、それが一そう長平に不興を与えたようであつた。

「記代子にまかしておきたまえ」

長平はソツポをむいで、つめたく答えた。

青木は長平の顔を見るのも不快な気がした。いつもながら、思いあがった冷めたさである。

理窟を云えばキリがない。どんな非行も、理窟で筋を立てることはできるものだ。

やりきれないのは、長平という男の独善的な暮しぶりだ。行い澄ました偽善者の方が、まだ、どれぐらい可愛いかわからない。姪の病室を見舞いもしないで、パンパン宿でノウとしてゐる悪どさ。その暮しぶりの独善的な構図が、あくまで逆説的だから、鼻もちならぬ毒気に当てられて、やりきれなくなってしまう。

たかが小娘のパンパンを心の友であるかのように、一ぱし深処に徹して契りを結んでゐるかのような、平静や落付きも、やりきれない。思いあがっている、という一語に全てがつきてゐる。

生活に不安のない人間が、彼によりすぎる人々を突き放して勝手に安定するぐらい、容易なことではないのである。要するに、利己主義という一番平易な一語につきる。

青木はつい皮肉の一つも言わずにはいられなかった。

「貧乏人のヒガミというものは怖いやね。ねえ、長さんや。貧乏人はあなたのことをこ

う言うよ。大庭長平という人物は高利貸しと同じ性質の利己主義者にすぎない、とね。誰から何をしてもらふ必要のない人間が、誰に何もしてやらないぐらい簡単なことはないやね。それを一ぱし尤もらしく筋を立ててみせる学の心得があるだけ、隣人の心を傷つけ、害毒を流す悪者である、とね。単純明快に、あなたは悪者であるですよ」

「そう。悪者というのかも知れないわね」

青木の言葉をひきとつて、感懷をもらしたのはルミ子であつた。青木の皮肉な心をひきつがずに、言葉だけを平静にひきついだので、青木は虚をつかれて、ルミ子を見つめた。

「そう。彼は悪者以外の何者でもありませんよ。しかし、ルミちゃんや。悪者の定義を甘やかしちゃいけませんぜ。何故に彼は悪者であるですか」

「利己主義ということは悪者ツてことじゃないでしょう」

「ア。そうですか」

「隣人に冷めたいことも、悪者ツてことにならないわ」

「そのほかにも悪者がいるのかねえ」

「私はね。沙漠へ棄てられた夢をみたことがあるわ。誰が棄てたか知らないうちに、誰かに棄てられていたのよ。みると、お母さんが歩いて行くのよ。お母さん、助けてツて、叫

んで追ッかけようとしても、足が砂にうずもれて進むことができないうちに、お母さんがズンズン歩いて行ってしまうの。とりつく島もないわね。でもね。ズンズン行ってしまうお母さんが悪者ツてことはないわ。誰も悪くはないのね。そんな夢を見ることが、悪いことなのよ」

「夢が悪者なのかい」

「私はね。大庭先生がね。人に夢を与えるようなところがあると思うのよ。だから、悪い人だと思うのよ」

ルミ子は真顔でそう言ってしまうと、ふき出して、大そう、こまりながら、

「先生、ごめんね。私はね。人に夢を与えることが、悪いことだと思うんです。怖いのです。私は人に夢を与えるような気持なんかなかったんですけど、何かしら夢をみて死んだ男の人があったんです。でも私は悪いことをしたとは思いませんでした。したツモリがないのですもの。先生も、そうかも知れません。でも、それは、キツと、悪い事かも知れません」

ルミ子は睡たそうに、目をふせた。

六

せつ子のような多忙な女は、かえってヒマがあるのである。時間を巧みに利用するからであつた。

青木と長平がとり交した「ツイデ」に関する論争などは、彼女には論議の因にならない。彼女自身は行えば足りて、他人のことはどうでもよかったからである。

そのせつ子も、放二の病床を訪ねることと、そして長平に会うことには、気が滅入つた。パンパン宿にすみついて、一向に外へも出たがらない長平がバカバカしいからであつた。

せつ子は青木から長平を訪ねてきての報告をきいて、

「そのパンパンは可愛い子？」

青木はモツタイをつけて、

「左様。戦後のプロスチチュートは、美貌と同時に学があるね。未熟な芸をひけらかして、古風な型にはまった芸者などにくらべると、身に即した独自の見解をもっていて、甚だイキのよい生物ですな。その中で特に傑出しているのがルミ子というパンパンで、美貌に於ても、独自の見解に於ても、各界の一流の女傑に比して遜色ないほど、一家をなしてい

せられるです。あの子の十九という年齢について考えると、他の女傑は、大そうムダに時間を費したものだと考えさせるところがあるね。女傑は貞操をすてることによって、頭腦的に成育する時間を甚だしく短縮すると見ましたが、どうですか？」

せつ子は顔をそむけて、青木を退散させた。

彼女は特に長平が好きだというワケではない。長平とてもそうである。長いこと会わずにいても、なんということもない。しかし、会えば楽しい時間をすごすことができ、イヤな気分というものに患わされることが殆どなかった。つまり氣質的になんとなくウマが合っていて、会うたびにあたたかい友情がよみがえるが、離れてしまふと思いださずにすむのであった。

せつ子は十九の小娘を嫉妬するイワレをもたなかったが、まったくウンザリした。親友の行跡が、あんまり下らなくて、バカバカしいからである。マジメな顔をして、そんなところへ訪問できるものではない。

今にこっちへ出向くだろうと思っていたが、青木のつたえるところによると、パンパン宿に居ることと、東京に居ることには、京都と東京と同じだけの距離があつて、パンパン宿から東京の一地点へ出向くことは、特に京都から出向くことと同じ意味合

いになるのだそうである。パンパン宿から一步もせずに、そのまま京都へひきあげてしま
いそうであつたが、長平はたしかにそれをやりかねない性癖であつた。

せつ子はバカバカしくてやりきれなかつたが、長平を訪問することにして、穂積をよん
だ。

「あなたも一しよに行きましようよ。バカバカしくて、一人じゃ行けやしないわ」

「ハッハ。ビックリ箱でも、ミヤゲに持つてらっしゃい」

しかし、せつ子は珍奇なミヤゲモノをズラリと並べて信長を呆氣にとらせた秀吉の女房
のような女であるから、放二の病床を慰めるもの、長平へのもの、ルミ子への手ミヤゲに
至るまで、しこたま買いこんで、パンパンアパートへ高級車をのりつけた。

ルミ子の部屋へ一足はいると、

「まあ、可愛いこと！ あなた、ルミ子さんね。こんなに清楚で、明るくツて、美しい
お嬢さんが、こんなアパートにねえ！ あなたは、ほんとに、サンドリヨンね」

長平には目もくれず、挨拶ぬきでルミ子をほめちぎつたが、腹の中ではバカバカしくツ
て、ウンザリしているのである。

七

接客業の女というものは、交際なれているように思われがちだが、実際はアベコベである。彼女らが自由にふるまえるのは、自分の職域においてだけで、一步出ると敵地の如く、特に同性との社交性を欠いている。女ということを売り物にしているのだから、同性に対しては、交際よりも、敵対感が先立つのはムリがない。

せつ子は彼女らを心服させるコツを心得ていた。彼女らには敵対感が尖鋭で余裕がないが、一段高く冷静にみると、甘さや盲点がよく分る。心服させるのはワケがない。

しかし、ルミ子は、ちがっていた。肩をそびやかして対するようなところもなく、狡猾な処世技術によつて鋭角をかいているのでもないようであつた。

「とても親切に看病して下さいなんですってね。放二さんが感謝していましたよ。若いちは、親切だけでは、行き届かないものだけど、あなたはお利巧なのね」

善悪いずれにもとれるような、妙に含みの多い言葉で、せつ子はルミ子をおだてたが、ルミ子は軽く笑っただけで、

「私はヒマなのよ。先生がズツと泊りのお客さんでしょう。ほかの子たちは生活しなきゃ

ならないけど、私の生活は安定。ゴルフも、ダンスもできないし、魚釣りも、ビンゴも、クライだし、パンパンでものは、人並みに遊ぶことを知らないものらしいのね。生活が安定すると、こまるのよ。病人の看病ぐらいに適しているらしい」

ルミ子の言葉には邪気がないのだが、せつ子は自身の気持ちにこだわるから、十九の女隠者の述懐を素直にうけとれないのである。

「じゃア、あなたの恋人には、病人が適しているのね」

「そうでしょうか？」

あどけない目をクルクルさせて、せつ子の瞳をのぞきこんだ。

せつ子は調子を変えて、

「あなた、学校は？」

「田舎の高等学校一年生の一学期まで。東京へとびだしてきましたの」

「あなたは利巧だから、何をやっても、成功するわね。何か、やってごらんにならない。

私、後援してあげるわ」

ルミ子は大そう困ったらしく、

「そう見えるんですか？」

「自信を持たなきゃダメよ。あなたは身に具った珍しい天分のある方だわ」

「そうですかア」

ルミ子はくすぐったそうにニコニコしていたが、やがて、哀願するように、

「そんなこと、おツしやらないで。世間には、いろんな望みをもっていて、誰かがお金を貸してくれないかなア、なんて考えてる人がタクサンいますわ。ですけどね。私は、そうじゃないんです。ほかに望みがあつて、誰かの力をかりたければ、こんなこと、していませんわ」

ルミ子の顔は平静であつた。そして静かなる微笑にも変化はなかったが、語調がやゝ改まつてきたようであつた。

「私だつて、人並みに、何かがやれるぐらいの自信はありますけどね。私は、やる気持ちがなくなっているのです」

ルミ子は自分の気持が改まっているのを羞じて、笑いだした。

「こんな話、よしましょう。面白い話、教えて。女の社長さんて、どんなお仕事なさるんですか。お仕事の話、きかせて。私もパンパンの話、きかせてあげるわ。私は商売の話、すきなんです。それしか知らないのですもの」

八

せつ子はいつまでもルミ子を相手にしていなかった。

「食事はどうしてらっしゃるの？」

長平にきいた。ルミ子の部屋には、炊事道具も、食器らしいものもなかった。コップと、小さなヤカンがあるだけであった。

「なんでも出前をするようになったからね」

長平は不自由を感じていない様子である。

せつ子は、食って生きれば足りる、という生活態度には賛成できなかった。それではミもフタもないし、生きるハリアイもない。

ルミ子の心の安定などというものも、同じように乞食の心境にすぎないのである。生れたまま、手数をかけずに、ほったらかしておけば、元々、人間はそれだけのものだ。それだけではミもフタもないから、いろいろの手間をかけ、ムダをする。人生は実用の如くであるが、ムダをたのしむことでもある。人為的なタノシミを発見すること。歴史の跡にし

るされた人間の遅しさといえ、それだけである。

ルミ子の安定が十九という年齢によつて珍しいということすらもウソである。乞食や泥棒の心境は年齢に関係のあることではないのである。ジオゲネスは学問というムダを重ねたおかげで、老いばれて乞食の心境を会得したが、ムダをしなければ、子供の時から誰でもがなれる心境だ。

長平は乞食の安定に同感している人間ではない。人生は実用の如くで、実は、最もムダを活用すべきものだ、ということ骨の髄から会得している芸術家である。人為というものを自然の上におくことを天性としている人間であつた。

しかし、人間には郷愁というものがある。たまには、炊事道具もない部屋で、乞食の心境を会得した十九の娘のモテナシをうけることは、マンザラではないかも知れない。それは休養というものである。

しかし、人生と休養をゴツチャにするのは、利巧な人間の為しうべからざることである。休養の場を、実人生の場の如くに、安定しきつていふのは、よくよくのバカのやることで、その安定が見るからにタノモシそうでも、実用の役に立つものではない。実用にならないものは、デクであり、バカバカしいの一語につきる。

「散歩もなさらないの？」

「そう云えば、このアパートから一步も出たことがないね」

デクは今さら一步もアパートから出なかつたことを発見した様子であつた。

「たまには街へでてごらんなさい。復興途上の街というものは一ヶ月に三年ぶんぐらい変わるものですよ。一夏で銀座もまるで変りましたよ。食事がてらブラついてごらんなさい」

長平はオツクウであつた。彼は散歩というような氣持にはなれなかつた。街へでるときは、街の中へ、溶けこむ時である。街へ生死をなげうつ時だ。

なにも、このアパートにいたいわけではない。しかし、とにかく、この一室にいる時はこの一室に溶けこんでいる。そして、さらに街へ溶けこむことが、今は必要でもないし、オツクウであつた。

「今は、オツクウです」

長平は氣の毒そうに、つけたした。

「ぼくが上京していることを、見て見ぬフリをしてくれないかな。街へでる時には、京都から、街のために上京します」

デクの氣持が分らぬではないが、バカバカしいことには変りがない。とにかく見切りを

つけるのが利巧だから、せつ子はこだわらなかった。

九

放二はその二三日いづらか元氣をとりもとしたように見えた。せつ子と穂積が訪ねた日は、夜になつても、人々が心配したほど疲れを見せなかった。

ルミ子が遊びに行くと、

「梶さんに会いましたか」

と、放二がきいた。

「ええ。私の部屋へいらしたわ。ハンドバッグいただいたの」

「話をした？」

「ええ」

「どんな話？」

「そうねえ。面白い話じゃないわ。お世辞の多い方ですもの」

「フフ」

放二は笑った。

放二には、梶せつ子という女の像が、いつも目にしみて映じていた。放二の目に映じているせつ子の像を、人々は、せつ子には似ても似つかぬウソの像だと云うかも知れない。それは放二には問題ではなかった。

せつ子は女らしい女でありすぎるのだ。女のもつ性質の一つ一つを、あまりに豊かに持ちすぎている。特に一つに恵まれるということがなく、全てに平均して恵まれているために、彼女は常に平凡であるが、同時に、停止することも、退くこともできないのである。家庭的でもないし、娼婦的でもない。浮気でもないが、中性でもなかった。特に何物でもない。ただ非常に平均しすぎた女。平均という畸型児であった。

彼女は家庭婦人となるにしては、男性への洞察力が鋭すぎたし、虚栄心も、名譽慾も高すぎた。しかし、事業家として成功するには、あべこべに、潔癖でありすぎたし、好き嫌いが強すぎる。人を信頼するに過不足でありすぎる。

彼女の事業も、すでにかなり衰運に傾いているのではないかと放二は思っていた。彼女は、どこへ行くだろうか？ それを思うと、放二は暗い。

「お世辞を使わずに、思うことをハッキリ言える人は、強い人ですよ」放二はルミ子に語

った。

「梶さんは、お世辞を使いすぎるし、無愛想でもありすぎるし、憎みすぎるし、愛しすぎるのです。一ツ一ツが強すぎて、めいめい、ひッぱりッこしているから、あの人の中心には、いつも穴があいているのです。一ツ一ツひッぱる糸が生きているけど、あの方には、中心がないのです。女というものを象徴した人形にすぎないのです」

ルミ子はビツクリして放二を見つめた。にわかにはウワゴトを言い出したのかと思ったのである。放二の言葉は、てんで意味がわからなかった。こんなにワケのわからないことは、今まで言ったことのない放二であった。

放二はやつれて、目が大きく、頬がこけていたので、安らかな顔ではなかった。微笑しようとしても、吐く息が大きくて、思うようにはできない様子である。しかし、ウワゴトではないのであった。

「ルミちゃんは、梶さんの妹なんです」

「え？」

「氣質のちがう姉妹があるでしょう。ルミちゃんは、氣質のちがう妹なんです」

「そうですか」

「そうです。ですが、女らしい女ということでは、二人とも、似ています。ルミちゃんは、はじめから不幸を選んだのは、賢明だったかも知れません」

「そうですか」

「不幸を選ぶ事のできない人は」

そう言いかけると、放二の目から一滴の涙がこぼれた。

十

放二の部屋には、五人の女たちが、まだ寝泊りしていた。

重病人の部屋であるから、静粛、清潔ということを医師や看護婦にくどく言い渡されていたし、時々見舞い客もあることだから、万年床をしきッ放してヒルネもしていられない。シユミーズ一つ、ネマキ姿というわけにもいかない。

以上のことを封じられると、彼女らの自由の大半は失われたようなものであるが、彼女らはこの部屋から立ち去ろうとしなかったし、日中もほとんど部屋にゴロゴロしていた。彼女らが泊りの客をつかまえるのは、困難な事業に属するものになっていた。五百円ぐ

らいでも外泊の客がひろえればよろしい方だ。すると宿へ二百円おいて手取りは三百円である。ママヨと思えば三百円でも客をひろった。すると翌朝手に残るのは百円であった。

「アア！ 自分の部屋が欲しい！」

五人の誰かが毎日そう呟いていたが、誰も真剣に部屋をもつための努力をしているものはなかった。

五人はめいめい疑り合っていた。誰かが秘密に貯金しているのではないかと。なぜなら、彼女らは貯金を持ちたいということが、何よりの念願だったからである。

「アア！ お金がほしい！」

毎日誰かが血を吐くような叫びをあげたが、すると一同ゲタゲタ笑ってしまうのである。

「いくら、たまった？ 畜生！」

ヤエ子は病人の枕元であるのもかまわず、自嘲の苦笑をうかべて、憎らしげにルミ子によびかけた。

「あの女が、ハンドバッグ、くれたんだって？ 畜生！ オレにくれろよ」

ルミ子は答えなかったが、病人の足もとをゆっくり一と回りすると、ねそべっているヤエ子のクビをおしつけて、おしかぶさって、

「お前には、アドルムあげるよ。ねな！」

「畜生！」

ヤエ子は牛のように跳ね起きた。ふりむきざま、右の拳に力いっぱいルミ子の顔に一撃をくれた。ルミ子は一枚の紙のようにフツとんだが、倒れた上へヤエ子がつびついたのは殆ど同時であつた。馬乗りになつてクビをしめたが、ウツと声をあげたのは、押しつけているヤエ子である。頬をつねつた。目のフチをつねつた。あとはメツタヤタラに顔面をなぐつた。狂気のようなものである。

他の女たちがようやくヤエ子を距てたが、ルミ子の唇がきれて血が流れている。

「殺せ！　はやく、殺せ！」

とり押えられたヤエ子は足をバタバタさせて叫んでいる。

「なにが、殺せ、さ。ルミちゃんを殺しかねないのは、あんたじゃないか」

「ヘッ。それが、どうした。お前だつて、ルミ子が死んじまえばいいと思つてやがるくせに。アタイはアイツが憎いんだ。自分だけ、部屋をもつて、羞しくないのかよ！　アタイたちが宿なしで、うれしいだろう！　畜生！」

ルミ子の顔色が変わつた。

「ここを、どこだと思うのよ」

「チエツ！　なんだと。どこだつて、かまうかい。お前が、ここの、何なのさ」

ルミ子は語るにも叫ぶにも窮して、涙があふれた。ヤエ子はそれを憎々しげに見すくめた。

「フン。結構な御身分さ。自分だけがこの部屋のヤツカイ者じゃないと思ってやがる。オレたちは貧乏だよ。金がないんだよう。金がありや、誰だつて、思うことができるんだ」

十一

「思うことができるなら、静かにしたら、どうなのね」

と、一人がたまりかねて、たしなめたが、

「よせやい。アタイ一人が悪いのかい。わるかったネ。お前たち、お金あるのかい。ヘソクリがあるなら、正直に言いなよ。アタイだけが、一文なしの、宿なしだと笑いたいのかよ。叩ツ殺してやるから、笑ってみやがれ。オイ。笑えよ！」

「勝手におしよ」

一同はウンザリしてヤエ子を突き放した。部屋にいて喚きたてられては困るから、

「オフロへ行こうよ」

「そうしましょう」

と、一同は仕度をはじめ。ヤエ子は腕ぐみをしてジロリと一同を見上げて、

「フン。アタイにオフロ銭もないのが、うれしいのか。見せつけたいのかよ」

「うるさいね。オフロ銭ぐらい、だしてやるよ。いつだって、そうしてもらってるじゃないか」

「いつも、そうで、わるかったな」

「だまって、ついてくるがいいや」

「バカヤロー。オフロ銭ぐらいで、大きなツラしやがるな」

一同はヤエ子にかまわず、オフロへでかけた。ヤエ子は目をなきはらして便所へとびこんだが、実は便所の窓から、道を行く彼女らの後姿をうかがっていた。

ルミ子が自分の部屋へもどつて、オフロ道具をかかえて、彼女らを追うて去る姿を見ると、ヤエ子はいよいよホツとした。彼女らの姿が見えなくなり、しばらくしても戻ってこないのを認めて、ヤエ子は便所をでた。そしてルミ子の部屋の戸をあけた。

「ルミちゃんの着代え、とりにきたのよ。オフロ屋の前のドブへはまっっちゃツたのさ。トシマなヤツなのさ」

ヤエ子は長平の存在などは、眼中になかった。パンパン宿へ一週間も泊りこんでいるジジイに利巧な奴がいる筈はない。助平の甘チヨロにきまっているのである。

ヤエ子は押入をかきまわした。行李が一つある。彼女はそれを、ゆっくりと、五分ぐらいも、中身をしらべていた。

「なにをしてるんだ。早く着代えを持って行ったらどうだ」

長平がジロリとふりむいて言っても、ヤエ子は平気であった。

「ちよツと中身を見ているのさ。あんまり、たくさん持つてるから、目がくらまア。コチトラは着たきり雀だから、ビックリすらアね。へ。ずいぶん派手に、買いこんでやがら。パジャマ三枚もってやがら。人をバカにしてやがるよ。コチトラ、シユミーズの着代えもありやしないよ。ズロースもね。エツへ」

最後のワイセツな言葉と笑いは、長平にあげかけたものである。

とうとう虎の子のありかを探しだした。銀行の通帳と一万円余の現金であった。彼女は行李の中のを片づけて、

「これがキモノか。これがジユバンだ。このフロシキに包んでやれ。ヘッ。ズロースと、お腰も持つてツてやろうかな」

と、又、長平に嘲笑をあびせかけて、包みをかかえて悠々と消えてしまった。

風呂から戻った一同は、これを知って、被害者のルミ子よりも顔色を失った。

ヤエ子の宿命と自分たちの宿命が、遠く離れたものでないことを、彼女らは身にしみて知っていたからである。ヤエ子は追われて立ち去ったのだ。追われる圧力を彼女らも身にみている。まだしもルミ子の物を盗んだヤエ子は賢明だ。彼女らの心にうごいたものは、羨しさであつた。

十二

長平はヤエ子の泥棒ぶりに感心した。よほど天分があるようだ。痛快になめられたものであるが、腹をたてる余地がない。

彼の存在を眼中になく、行李をあけて十分ちかく金品を物色した落付きというものは、水際立っている。このとき彼の存在というものは、地上で最もマヌケ野郎に相違ない。お

まけに、ズロースや腰巻など、適切なカイギャクを弄して、マヌケの上に怪^けしからぬ根性に至るまで心ゆくまで翻弄しつくして退散しているのである。

しかし、考えてみると、今までにこういうことが起らなかったのがフシギなのだ。ろくに稼ぎもないくせに、ムダ食いやムダ使いがやめられない五人の宿なしパンパンが、今まで泥棒しなかったのが珍しい。

放二をめぐる生活の雰囲気が、彼女らの情操を正しく優しくさせていたと見るのは当たらないようだ。盗みをしない方が、確実に生活安定の近道だったからである。雰囲気など、いうものは、その安定を見定めた上で現れてくるセンチな遊びにすぎない。

盗みをはたらく条件をそなえている人間が、雰囲気の中で妙にセンチにひたっているよりも、盗みをした方が清潔かも知れない。ヤエ子の大胆不敵な盗みツぷりから判断しても、こう判定せざるを得ないのである。雰囲気などというものは、実際は無力なものだ。

しかし、ついに雰囲気が悪くずれたこと、つまりは生活安定の見透しがくずれたということについては、それが人生の当然ではあるが、無常を感じずにもいられない。

放二の息のあるうちに、それが行われるというのは、まことに皮肉でもあるし、滑稽でもあるが、これが放二の善意に対する当然な報酬かと考えると、悲痛な思いにうたれもし

た。

彼の冷たい判断からでも、放二の善意を若氣のアヤマチと言いきれはしない。感傷とは言いきれない。しかし、たとえば彼の善意が神につぐものであったにしても、その報酬がこんな結果に終るといふのは、人間の世界では当然すぎるのだろう。そして、放二は、それにおどろくような男ではなからう。彼はほぼ全てのことを知っていた。

長平は放二のそこへイトマを告げにでかけた。

「どうだい。いつそ、御一統に自由に解散を願ったら。一葉落ちて、秋来れりさ。一葉ずつ、妙な落ち方をさせない方が、サツパリしてよからう」

こうズケズケ言うと、放二は笑って、

「先生は貧乏人の心境をお忘れですね」

「そうかい」

「宿がないということと、タヨリがないということは、やりきれないことなんです。ギリギリのところへきてしまえば、自然に何とかなるものですが、さもなければ、解散しても、結局ここを当てにすると思えます」

「なるほど」

「人間は、すすんで乞食にはなれないですね。三日やればやめられないと分つていても」
「なるほど。秋がきても、気にかからなければ結構さ。じゃア、帰るよ」

「御元気で。長らく有りがとうございました」

長平が離京するとき、ルミ子が送ってきた。

「いい加減で帰りましたまえ。別れ際の時間は短いほどよろしいものだよ」

長平が彼女を帰らせようとすると、

「セツカチね。私の方が大人だなア。一度、手紙を差しあげるから、忘れないでね」
ノンビリ手をふって、二人は別れた。

新しい風

一

せつ子は退院後の記代子をひとまず自宅へひきとった。甚だ好ましくなかったけれども、

隙あらばと記代子の病室をうかがっている青木を見ると、他に安全な保管所が見当らないから、仕方がなかった。

記代子の顔を見ることが他にたぐいる物がないほど不快なことだということを、ひきとってから気がついた。

記代子の入院中、ウワゴトの中で叫んだ言葉は「エンジェル！」という名にからむものばかりであった。

せつ子に何より不快なのは、それだった。記代子が居ると、その背後に、エンゼルという動物めいた悪者がいつも一しよに影を重ねて居るようで、動物の匂いがプンプン漂ってくる気がする。記代子が住みこんだばかりに、わが家に動物小屋の悪臭がしみついてしまったようであった。

記代子を見ると、目をそむけたくなるのをこらえようすると、冷めたくジツと見つめてしまうことになる。ある日、記代子が言った。

「憎んでらっしゃるのね」

記代子は、退院の日、なんとなく希望がわきかけたような喜びを感じた。希望というのが全て失われたように、前後左右たちふさがれた切なさに苦しめられたアゲクであった。

はじめて小さな爽やかなものに、すがりつくような喜びで、退院したが、それも再びどこかへ没してしまったようだ。この明け暮れ、人生の希望を知るのに骨が折れた。人々が、だんだん憎く見えるのである。

「私、憎まれるのは平気なんです。それが当然ですものね。ですけど、矛盾がイヤなんです。憎みながら、保護して下さるのは、なぜ？ その『なぜ』にもっと早く気がつけば、私もマシな生き方ができたでしょうに」

バカな人間に、尤も千万な言いがかりをつけられるぐらい、興ざめることはない。せつ子は自分の人生が、いつもそのことで悩まされているような気がするのである。結果の事実としては尤も千万であるけれどもツラツラ元をたずねれば本人がバカのせいだということ、全然忘れているのである。

記代子の背に青木の影が重なっているだけでもイヤだったのに、エンゼルの影も重なっている。動物臭がプンプン匂っている。それはみんなバカのせいだ。

「あなた、今になって気がついたのは、そんなことなの？ そのほかに、気づかなければならないことが、ないのかしら？」

「でも、憎んでらっしゃるでしょう。それに答えてよ」

「さア。憎んでいますか。あなたが憎まれてるんじゃないでしょうか」

「おんなじことよ」

「あなたの場合、憎まれているか、いないか、そんなことを考えるのが問題ではないのよ。人々に憎まれる原因について、考えなければならぬのよ。あなたも散々苦勞なさったでしょう。そのアゲク、私に憎まれているか、いないか、ようやくそんなことだけ気がつくようになったとしたら、ずいぶん悲しいじゃないですか。人々はあなたに期待しています。あの大きな試練の中から、あなたが何をつかみとってきたでしょうか、と。あなたの場合、私という存在は、とるにも足らぬ問題よ。あなたは男性というものに、どんな新しい考えを、つけ加えるようになりましたか。青木さんについて、エンゼルについて、あなたが新しく知り得たことは、どんなことでしたか。それについて、真剣に考えたことがありますか」

二

せつ子の言葉は利巧ではなかった。

人は誰しも忘れたいことがあるものである。特に記代子の場合などは、悪夢のたぐいで、遺恨は骨髓ふかく血みどろに絡みついているのだ。遺恨の深さというものは、バカと利巧にかかわりなく、差のあるものではない。

その経験を生かせ、というのは、理窟はそういうものではあるが、人間の実状に即したものではない。利巧でも、そうはいかない。

まして男女関係というものは、ハタの目からは割りきれても、当人にとっては永久に謎という性質のものである。人間関係というものは合理化しきれるものではない。常に個々独特である。

悪夢は忘れるにかぎる。バカは死ななきや治らない、というのはその人間の墓碑銘としては、よく生きた、という意味に当たっているかも知れない。バカでなかった人間よりは、精いっぱい生きているのだ。精いっぱい生きて利巧であつたという奴はまずいない。

しかし、人間は、人のバカさ加減まで、いたわってやるほど、親切である必要もないにきまつているだろう。

記代子はエンゼルを忘れようと思っていた。それはエンゼルを悪党と断定した意味でもないし、エンゼルを愛せなくなったという意味でもない。理論や感情を超えた一つの気配

がわかるからだ。エンゼルが自分を愛していないという気配、いくらエンゼルを思ってもムダだという気配がわかるからである。

記代子が経験から得た結論はそれだけであつた。彼女の考えも感情も、そこに突き当たて、引き返す。つまり、その壁にぶつかつて、新しく出発するのである。

そして、壁にぶつかつて引き返してきた新しい感情は、青木か、あるいは、そのほかの新しい何か、そう考えがちであつた。それは遅しく、強い考えではない。ややヤケ気味の、絶望的なものでもあつた。

しかし、絶望的な考え方は、むしろ地道なものであつた。彼女は時々空想的なことを考えた。人に使われる身から離れて、独立した職業についてみたい、という考えだ。会社員とか、ダンサーとかいうのではなく、自分がその店の主人公、というような空想であつた。そのへんまでは、まだ地道かも知れなかつたが、すると記代子はその次にこう考えている。お金持になりたい。そして、誰に気兼ねもなく、自由奔放に生きたい。

その空想には、極めて現実的な限界があつた。彼女の最も近い身边に、そういう女が実在しているのである。あまり身近かなために、感情的にせつ子を過少評価することは容易であつたが、彼女と自分との身にそなわつた位の差というものを実感的に脱けだすことは、

まず不可能なことであつた。

しかし、無理ムタイに脱出できるたつた一つの口があつた。それは、怒り、逆上である。記代子は半死半生の経験によつても、冒険や危険に怯える心を植えつけられはしなかつた。むしろ、なつかしみさえした。彼女がああ怖しい経験から教訓を得たとすれば、あのようなことを再びしたくないことではなくて、あのような場合に処する技法に対する期待であつた。それも空想の一つである。かすかな期待はあつても、勇氣はないし、自信もない。

記代子はせつ子と睨み合つた。彼女を言い負かす言葉はない。しかし、もうこんな家にいるのはイヤだ。今日かぎり、とびだすのだ、と考えた。むしろ閉じこめられていた陰気な空に青空がのぞけたような気がした。

彼女は覚悟をきめると、だまつて自分の部屋へゆつくり戻つて、カギをかけた。

三

記代子はさつそく家出の仕度にとりかかった。子女の家出に熟慮断行などということは、

めつたにない。激情的であるから、当人は一時的に悲愴であるが、同時に冷静でもある。時間を失せず、今のうちに飛びださなければ、ということに充分に知りすぎているのである。今でなければ、家出の理由がないし、大義名分がない。今を失すると、再び踏み切るときがないかも知れない。平静の時には自信がないことを知っており、激情にまかせなければ実行不可能であることを知っているのである。

それは家に甘えているせいではない。誰しも家をできれば、寄るべないのは当り前のことである。

記代子は二度目のことであるから、なれているようであるが、こういうことは馴れるというものではないようである。必需品はなんであるか、それぐらいのことには気がつくが、特にこの際に必要な、そこまで冷静な計算ができない。血迷つてもいるし、先の目算がたないせいもある。

夜の家出というものはグアイがわるい。夜中トランクをぶらさげてブラ／＼しているのは都合のわるいことが多いものだ。翌日せつ子の出勤をまって、ゆっくり脱出した方が万事によろしいけれどもそれまで待っている余裕が怖しかった。そこで記代子は、何も持たずに家をでることにきめた。

せつ子はさすがに大人であった。家出癖のついた小娘を怒らせっぱなしに放ツとくのは穩当ではない。折れたり、なだめたりするのは愉快なことではないが、対等にみたてて意地をはるのは大人げない話である。折れてみせて優しい言葉の一つもかけてやれば、その場では打ちとける色をみせなくとも、内々鋭鋒はくじけているものだ。

そこで、せつ子は程を見はからつて記代子の部屋をノックして、

「どうしてらツしやるの？ あら、カギがかかつてるのね。はいっちゃいけないこと？」

「もう、ねています」

「そう。じゃ、私も戻つてねましょう。さきほどは、ごめんなさいね。でも、あれぐらいのことで血相変えて怒るなんて、オコリンボね。もう、仲直りしましょうね。おやすみなさい」

せつ子はそれで安心して自分の部屋へひッこんだ。これだけ手を打つておけば、記代子は安心して、ねて忘れてしまうだろう。

しかし、こんな動物の匂いのプンプンする因果物のような小娘を、今後どう処置したらいいのだろうかと考えると、ウンザリしてしまう。放二も悪い時にねこんでしまった。記代子から必要以上の動物臭をかぎたてるのも、こういう間の悪るさのせいもある。

「男の方が利巧らしい」

せつ子は苦笑した。吾関せずの長平が、憎らしいが、なつかしまれる。彼の冷淡さに理があるように思われるからであつた。

「あんなことを言つて、子供だましのようなお世辞なんか使つたつて、だまされやしないわ。まるで悪るがしこい狐のよう」

記代子の鋭鋒はくじけなかつた。記代子はすでに覺悟がついてしまつていた。否、家出後の暫時の目鼻がほぼリンカクをなしていたのである。せつ子は程を見はからいすぎて、時を失したのである。

せつ子の訪れは、却つて落付きと、かたい決意を与えたようであつた。まだ九時ちよつとすぎたばかりだ。記代子は人々の氣配に耳をすまして、せつ子の家から忍びでた。

四

社がひけてから、二三ヒマをつぶして、青木はゆっくり宿へ戻つてきた。すると、一足おくれて訪ねてきたのが記代子であつた。

記代子は彼に笑顔すら見せなかった。突ツ立ったまま、

「ここにはいられないのよ。てもなく発見されてしまうわ。どこか、社の人たちに気づかれ
ない旅館へ案内して」

頭上から囁みつくようにイライラと命令する。

「慌てることはないでしょう。お茶でも召しあがれ。アツ。なるほど。どなたか、お連れ
の方が表に待たしてあるんですね。遠慮なく、よんでらっしゃい」

青木はバカに察しがよい。敗北精神が骨身に徹しているのである。心にうちしおれたり
とは言え、表には益々明るいホホエミをたたえて敵をもてなそうという志であった。

「連れなんか、ないわ」

「や。失礼。すみません。ぼくは、ダメなんだ。すべての栄^{えい}耀は人に具わるもの、そね
むなかれ、という呪文を朝晩唱えるようになったからね。しかし、あなたが丈夫になって、
ぼくも嬉しいです。世の大人物はあげてぼくを虐待するからね。陰ながら、病室の外まで
見舞いに行っていたのを知っていますか」

青木がなれなれしく話しはじめたので、記代子は苦々しくふりきって、

「つまらない話は、よして。見舞いにきたのが、どうしたツていうの。見舞いに来てほし

いなんて、思ってもいなかったわ。私、こゝにグズグズしてられないわ。梶さんのおウチから、とびだしてきたんです」

「なアンだ。社長殿の邸宅にかくまわれていたのですか」

記代子は舌うちした。

「卑しいわね。そんな興味を、いつも持つているのね。人の私生活に興味をもつなんて、卑しいわ。グズグズしないで、旅館へ案内しては、どう？」

「そうガミガミ云うことはないですよ。さっそく支度をしますけどね。人にはガミガミお金にはパイパイ、あわれなる宿命だね。しかし、あなた、社長邸をとびだして、旅館へ泊って、いかなさるのですか」

「うるさい！」

記代子はカンシャク玉をハレツさせて、一喝した。妙齢の女子が、かりそめにも男子に一喝をくらわせるとは、由々しいことである。女中や下男に向ってそんなことをするかも知れないが、同輩に対する習慣にはないことである。

しかし、青木は怒らなかつた。むしろ記代子をあわれと思った。その墓碑銘に「多難な

る生涯を終りたる娘」と書くに価する悲しい人生を経てきた娘が数多くいるはずのもではない。記代子などは例外だった。

「カンシヤクを起したくもなるだろうさ」

青木は深い愛情をもって記代子を見ていた。それは同族に対するあわれみの念でもある。記代子のようなアワレな娘には、踏んだり蹴ったりされても、トコトンまでイタワリを果すユトリを彼は身につけていたのである。

「さ。では、旅館へ御案内いたしましょう」

「あなたが泊るのではありません。案内したら、帰っていただきます」

「御意のままですよ」

「昔のことは、もう、すんだことだわ。親しい名前や言葉で話しかけるんだって、失礼だわ」

「わかりました」

「私の旅館、知ってるのは、あなただけよ。ですから、あなたにしていたく用があるから、明日の朝、来て下さるのよ」

「承知しました」

五

翌朝、青木は早めに出勤の支度をして、旅館の記代子を訪問した。

早く目をさましたものとみえ、朝食もすませ、服装も化粧もキチンとして、所在なさそうにしている。

「よく眠れましたかね」

記代子は目をけわしく光らせて、

「私を探してきた人はなかった？」

「まだ、きません。で、御用というのは、何でしょうね」

複雑なかげりが記代子の顔を走った。まだ思案がついていないのではないかと、青木は思った。しかし、記代子が漠然と志向しているものは何だろう？ それを思うと、青木は背筋を冷いもので触られたような不安を感じた。

「ねえ、記代子さん。あなたが再度の失踪に当って、ぼくを下僕として選んで下さったことを、しみじみ感謝していますよ。昨夜御命令によってお約束した通り、ぼくは最良の下

僕としてあなたに奉仕いたしますよ。決して下僕以上の位をのぞみやしません。ですから、あなたが予定していらっしやること、あるいは、まだ思案がきまらないようなことでも、みんな打ちあけて下さいませんか。むろん下僕ですから、御相談のない限り、こうなさい、あなさい、などと差出口はいたしません。ただ御言い付けに従うだけです。ですが、下僕といえども味方の一人ですから、たった一人の味方として、予定の内容をもらしていただきたいというわけです」

「あなたの前夫人に会いたいの。ここへ来ていただいてもいいわ」

「え？　礼子ですか」

「礼子さんとおっしゃい。もうあなたの奥さんじゃないでしょう」

「すみません。ですが、こまったなあ。礼子さんの住所を知りませんのでね。夕方、仕事場へでてからじゃア、おそいでしょな」

「バーできてござんなさい」

「なるほど。ですが、銀座のバーというものは、たいがい留守番の住む場所もないのが普通なんですよ。礼子さんのバーは、特に地下室のウナギの寝床のようなところで、便所以外に付属室はないだろうと思いますね」

「行つて、たしかめてみてからになさい」

記代子はいらだつて叫んだが、彼女の顔には、地下室ゆえに泊り部屋がないことを確認した狼狽がすすめて流れたのを、青木は見ている。それをムリに押しつけて、いらだつて青木を怒鳴りつけているのは、彼女のワガママである。

順境にあれば礼節をわきまえ、逆境ゆえにむしろワガママになりがちなものではあるが、おのずから限度がなければならぬ。逆境の人が、甘やかされて、いい気になっているなどとは、哀れサンタンたる戯画である。そこまで、悲しく無知な姿を捨てておくのは、見るに忍びないから、

「なア、記代子さんや。下僕はいかなる命令にも従うべきではありませんがね。しかし、銀座のバアへ行く。扉を叩く。鍵がかかっている。むろん無人にきまっています。あなたも無人だということが分つていらつしやると思いますよ。ぼくがムダ足をふむのが、何かあなたのお役に立ちますかね。かかる命令が可能であると信じる人は、すでに人間の仲間ではありません。失礼ながら、記代子さん、あなたは逆境の人ですよ。ぼくが下僕の役を奉仕するのも、その逆境に対するきわまりない共感ですよ。逆境の人は、まさに人間中の人間でなければなりませんね」

逆境のネロ皇帝なんて、道化芝居にもありませんや、と云うところをグツとおさえた。

六

青木は持ちまえの坎の良さで、いろいろのことを察しとった。

礼子に会いたいという記代子の希望は、それか彼女の本当の希望ではないのである。彼女の希望はいろいろあるが、いずれも不可能にちかいことばかりで、実際に望むものには手をだすことができないのである。

礼子に会いたいというのは窮余の策で、たまたま青木がいるために思いついた程度の、彼女自身きわめて気乗りのしない希望であるに相違ない。彼女が益々不キゲンなのは、そのためであろう。

記代子のような暗い過去をもった人間が、そして、暗い過去を生かす才能に欠けている人間が、今後の身の振り方をいかに定めるべきであるか、ハタの目からも途方にくれる問題である。

まず青木の頭にひらめくのは自分自身のことであるが、記代子はすでに物の見方がよほ

ど変化している。結婚によつて青木が記代子を幸福にする条件は、すでに失われているようであつた。

しかし、下僕として犬馬の勞をつくしてやることによつて、哀れサンタンたるこの娘を多少とも安全地帯へ誘導することができるなら、一文の得にならなくとも、思い出として決して不快なものではないだろう。

「なア、記代子さんや。何用で礼子さんに会いたいのか、ぼくには分らないが、あの人身が全然迷っている子羊で、あなたに貸す智恵は持ち合せツこないですよ。あなたとは性格もちがいすぎる。いいですか、記代子さん。礼子さんの今いる位置は、人がもつて範とすべき位置ではないです。彼女自身が、それを良く知つていまさアね。やむを得ず、あんなことをしているだけで、当人は足を洗いたくて仕様がなのですよ。あそこまで落ちて行くのは、誰だつてできまさアね。なんの苦勞もなく、誰でも、なれる。礼子さんに相談することはないですよ。ね。もしもあなたが、今後いかに生くべきかという問題で、誰かに相談したかつたら、礼子さんは相談相手として、まず第一の失格者です。もつとも、消極的な意味では、よき相談相手かも知れません。なぜなら、彼女はあなたをいさめるに相違ないからです」

いさめたって、どうにもなりやしない。記代子のような平凡な女には、身の程を知らせることが何よりだろうと青木は思った。

思わぬ多難な経験によつて、彼女は凡そふさわしからぬ異常世界を身近かに感じ、自らの生活をもそこに投入しつつあるが、この食い違いが本人自身で気付かなければ、彼女の本当の生活は生れやしない。

言葉で言つてきかせてもダメ。短期に功をねらつてもダメだ。長期の時間を覚悟して、ある特定の環境の中で、身の程を思い知るまでジリジリ待つことである。平凡な男と平凡な結婚生活をねがうようになるまで——それが彼女の性格や智能に最も適合した生活なのである。

「なア。記代子さん。京都へ帰ろうよ。ぼくがお供しますよ。なに、社長邸をとびだしたつて、家出でもなんでもありやしないよ。あなたの家は京都にあるのさ。ね。長平さんは怖いオツツアンのようでも、人間の本心にふれてくれるよ。今まではあなたに分らなかつたが、ぼくと一しよにこれから帰つてみると、よく分るです。ね。すぐ京都へ行こう。一分一秒も早く。こんな東京なんか、すてちまうのさ。ぼくは京都まで安全にお送りして、すぐ戻りますよ。旅行の支度をしてくるから、三十分だけ待つて下さい」

記代子を承諾させて、青木は大急ぎで宿へ戻った。

七

青木が宿の前までくると、せつ子の自家用車がとまっている。シマツタと思ったが、もうこうなったら、逃げ隠れはしない方がよからうと覚悟をきめた。

玄関をはいると、せつ子が宿の人たちから色々何かきいているところであつたが、青木を認めてサツと面色を改めて詰問にかかろうとするのを、そのヒマを与えず、

「や。わかつています。まさしく記代子さんは、昨夜ぼくを訪ねてきました。そして、たしかに、ぼくが保護いたしております。全部お話いたしますから、ぼくの部屋へきていただきます。実に、三人目。いやはや、目も当てられねえや。三方損の三人目。ね。あなた分つて下さらないかも知れないねえ」

穂積もせつ子と一しよであつた。せつ子は青木の部屋を見まわして、記代子の残した動物臭をかぎわけているらしい様子である。いかにも重大決意を蔵するかのような静寂な態度に、青木はウンザリして、

「ねえ、社長さん。嵐の前の静けさですか。しかしですよ。もしもあなたが、今度のことで、ぼくに向って何かの遺恨があるとしたら、そして大いにぼくを面責なさろうというお考えなら、天下の、イヤ、東京の、ハツハ、だんだん小さくなりやがら。とにかく、奇怪事であるですよ。たまたま記代子さんが僕をたよって逃げて来た、ね、ぼくたるや、大過去のインネンとはにかくとして、さしあたって何の責任がありますか。むしろ、逃げられたあなたは、あなた自身の責任を感じ、あわせて、彼女を無事保管の任を完^{まっ}うせるべくに向って感謝の意を表して然るべきではないですか。あなたの態度は常にあなた自身の感情に即してはいるが、物の当然しかるべき理に即してはいませんな。けだし、記代子嬢があなたの邸宅を逃げだしたのも、直接の原因は、そのへんにありと見たのはヒガメですか。どうもね、とかく御婦人は暖冷ただならぬものではあるが、あなたは格別だね。その冷たるや、冷血動物以下、ぼくがツラツラ案ずるに、大そう水ムシによく似ています。足にできる水ムシのことですよ。あいつは痛くもカユくもないが、実に無残に肉にくいこみ、一生涯、なんとしても治らんです。実に、一生涯ですよ。死ぬまでですよ。死んでからも、足の指のマタにハッキリいこんでまだ生きていますですよ。見たわけじゃアないがね。そうに、きまつてらア。実に、人生に最も酷薄なるものは、水ムシの如くに、痛くも

カユくもないです。そして生涯、死んでからでも、肉にくいこんで、かみついているのです。けだし、あなたは、水ムシだね。実に酷薄ムザンだね。小娘はジタバタするのが当然さ。痛くもカユくもないという生涯ムザンの酷薄なるものに、ジツとこらえていられるのは、拙者、つまり蛙、イケシヤアシヤだね。それあるのみさね」

せつ子はちつとも騒がず、

「そう。記代子さんを無事保管していただいて、ありがとう。いま、どこにいますか、記代子さんは」

「その御返事はハッキリおことわり致しますよ。彼女は、あなたとは縁なき衆生です。たぶん、ぼくと彼女とも、多かれ少なかれ縁なき間柄であるらしいようですがね。念のために、それだけはお伝えしておきます。ぼくは彼女を路傍の一人として保護いたしておるにすぎません。今や、なんの親密なる関係ありませんや。ぼくは只今より彼女を京都の叔父なる人のもとへ送りとどけてきます。その旅装のために戻ってきたのです。彼女は今夜は京都の叔父のもとに無事安着するに相違ありませんから、だまって引きとっていただきます。ましよう。言語無用。だまったり。だまったり」

八

せつ子は事の判断に於ては、感情に走ることはなかった。青木の意向が、記代子を無事長平のもとへ送りとどけることに専一であると見てとったから、

「わかりました。本当にお世話様ですね。では、御手数でも、おねがい致しますよ。大庭先生に、よろしくね」

青木は思わずホツとして、のぼせた頭に、血がクラクラと離合集散、彼は冷汗をふいて、冷汗をグツと一パイのみほした。

「ヤ。どうも、ありがとう。理解していただいて、幸福です。そういつていただくと、穴があれば、はいりたいですよ。なに、それほどでもないですか。ハツハ。あなたは処世の達人さ。女ながらもアツパレさね。ぼくもね。三方損の三人目とか、覆水盆にかえらずとか、近代イソツプ物語の原理についてウンチクをかたむけたいところがあるですが、今日は急ぎますから、失礼します。御無礼の段、平に御容赦」

青木がこう言い残して別れようとすると、せつ子はよびとめた。

「お待ちなさい。車がありますから、東京駅まで送つてあげるわ」

「ヤヤ。それは、いけませんね。無茶なことをおっしゃるなア。後で八ツ当りにやられるのが、ぼくですよ。八ツ当りならよろしいが、三たび姿がかき消えまさらね」

「その心配はありません。第一、東京生活をきりあげて帰郷なさるのに、オミヤゲも買ってあげなければいけないでしょう。その機会がなければとにかく、機会があつて、手ブラで帰せると思いますか」

一々もつともである。自分の家から失踪したまま京都へ戻ってしまうのを黙って見過すということは、後味の悪い話である。せつ子に、記代子の帰郷をひきとめる意志のないのが分っているから、青木は彼女の気持も尊重してやる必要があると思つた。

「わかりました。おっしゃることは、ごもつともです。ですが、くれぐれも御手ヤワラカにねがいますよ」

記代子の宿へ案内した。二人をどんなふうにひきあわしたものと青木が思案していると、せつ子は委細かまわずズカズカと先頭に部屋へ通つて、

「アラ。記代子さん。御無事でよかつたわ。京都へお帰りですつてね。ほんとに、それが何よりよ。何をプレゼントしましょうね。銀座の商店は、ちょつと開店に間があるから、デパートから廻りましょうよ」

デパートをまわり、銀座を廻り、出来合いではあるが最新型の高級服を買って、着代えさせる。帽子、靴、ハンドバッグに、その中の品々まで一式。トランクも買いこんで、身の廻りの品々。フランスの香水に至るまで。右往左往、ひきずりまわされる青木は、アア、大変な買物だ、この支払いだけでも、わが社の会計係は月末に一苦労だなア、桑原々々、とついで行く。

最後に二人を大阪行特急の二等車へ送りこんで、

「じゃア、お気をつけて。大庭先生によろしくね」

こうして二人は京都へたつた。

「ねえ、記代子さん。彼女は敬服すべき手腕家だよ。しかし、金のかかる手腕だなア」

記代子もつりこまれてニツコリして、

「ほんとね。私のようなチンピラにまでこんなことして、叔父様なんかにはどんなプレゼントするのかしら」

「ナニ、長平さんにはお金いらすのプレゼントがあるのさ」

と青木が皮肉ると、

「ヤキモチヤキね」

横目で睨んだ。記代子のキゲンは直っていた。

九

青木は半日の汽車旅行で、女の一生ということを變にシミジミと考えさせられた。子供をもたない彼は、そういうことを身にしみて考えたことがなかったのである。

記代子の多難な経験は、彼女に多少の惡變化を与えたが、三文の得にもならなかったようである。目立つた變化といえ、彼女は頑固になつていた。過去のアヤマチを後悔せず、むしろアヤマチとして見ていなかった。自分の過去を客觀的に省察してその結論を得たのではなく、人々への敵意によつてアヤマチと見ることをテンから拒否しているのである。人の批判もうけつけない。人の言葉を感情的に反ばつする完全な城壁をかまえたが考えることを失つてしまつたのである。過去のいかなる経験も、生きるはずがないのである。一そうバカになつたようなものだ。

しかし、記代子一人のことではないだろう。日本の多くの娘たちが、似たり寄つたりに相違ない。要するに、日本の女というものは、家庭の虫のようなものだ。物質的、精神的

にも、義理人情を食餌にして一生を終るように仕込まれている。義理人情にとつては、批判というものは無用の長物、あつては困るものである。記代子のように、一見、義理人情にも突き放され、世間から孤立させられた立場に立たされたようでも、義理人情から解放されたわけではない。義理人情を省察し、自己を省察することを知ったわけではない。むしろ、義理人情に縋ることしか知らない魂が、その義理人情にも見放されたことに対する呪咀じゆそと、益々依怙地な敵意と、自己保存慾があるだけのことである。

こういう女でも、男に愛される資格はある。青木が悲しく結論し得たことは、それだけであつた。経済的に独立し得たところで、彼女の幸福はあり得ないだろう。なぜなら、彼女は義理人情の外には安住できない女だからである。

男の愛情を当にするということは、まったく偶然相手である。競輪以上のバクチである。男に当ればいいけれども、外れれば、それまでだ。日本の女には、そのアトがない。外れれば、一生が外れたことになるのである。不幸に忍従し、それが日本の自然であり、同情もしてくれないし、ほめてもくれない。そして、男に当るか当たらないか、ということとは、親がしらべたぐらいで分るものではないのである。サラブレッドと同じように、血統や教育の道程などを調べたあげく、外れればそれまで。復をかうわけにもいかないし、二度目

三度目の勝負でとりかえすわけにもいかない。

しかし、記代子の場合には、とにかく、男に愛される資格はある、ということに頼む以外に仕方がなからうと青木は思った。どんな男が彼女を愛してくれるだろうか。時間的に彼女を愛す男は少なくなるとも、彼女の一生を、ともかく大過なく安泰にすごさせてくれる男が多くあろうとは思われなかった。なぜなら、彼女は可憐さを失いながら、それに相応する知性を得ていないからである。むしろ愚を得ているからである。

京都へつくと、記代子は疲れきっていたので、はやくねた。青木と長平はおそくまで酒をくみ交したが、長平は相変らず、一向に親身の心配をしなかった。

「なに人間は似たものさ。特に幸福な人間も、特に不幸な人間も、いるものか。境遇なんざ、どう変っていたって、根は同じことだよ。ほつとくのが、いちばん、いいのだ。しかし、本当に、ほつとく奴が、いないだけのことなのさ」

十

「本当にほつとくなんてことが、できるものかね」

青木がいささか色をなして長平の無責任な放言を問いつめると、長平は笑って、

「そりゃア、できないな。しかし、大まかに、要点をつかんで、やるのだね。家出本能のようなものもあれば、帰巢本能のようなものもあるんだね。飛びだす方をほっとく以上は、戻ってくるのも自由にはっとく必要があるだろう。要は、それだけだね。何べん飛びだして、何べん戻ってきたって、かまわねえや。それで人間が不幸だってことは、ありやしねえな。人間は、それ以上に幸福ではあり得ないものなんだね」

至極要領をつくしている。一人の男を選んで与えて、それで片づけてしまうのに比べると、この方が理にかなってはいる。この方が本質的に、あたたかい方法ではある。帰る家があるというのは一生の救いかも知れない。二度と帰らぬ覚悟で嫁ぐという精神は、そもそも幸福を約束する出発ではない。特にそれを強いられでは、特攻隊のようなものだ。

長平の言葉にも一理はあるが、チョイチョイ戻られては、困るであろう。青木は苦笑して、

「君のは、禅問答だね。一般家庭じゃ、禅坊主にはなりきれないさ」

「君まで、そんな風に思うかね。オレはハッキリしていると思うな。女には、家が二つあるんだね。生れた家と、子供を生んだ家とだね。子供を生まなくツてもかまわないが、と

にかく、この二ツのうち、どツちかを選ぶ自由を与えておくのさ。娘の親は、それだけ覚悟しておくんだね。生んだ義務だよ。オレは記代子に愛情なんぞもってやしない。義務をもつてただだね。義務というほどでもないが、勝手にしやがれということさ。戻つてきたら、仕方がない。こりやア、奴めに権利があるのさ。そう心得ておきやアいいと思うんだね」

長平流の筋は立っていた。おまけに、彼のしたことは、まったく言葉の通りであつた。青木自身、身にしみている。彼自身、勝手にしやがれ、という対象だつたことがあるからである。理からいえば甚だあたかいようなことではあるが、その時、彼が身にしてみたのは、長平の冷めたさである。それは、今となつても、理によつてあたたく生れ變つて感ぜられる底の底のものではなかつた。理窟だけでは納得できない性質のものである。

「君の云うことは、ツジツマが合いすぎて、気味が悪いね。そうツジツマが合いすぎちゃア、いけねえな」

「なに、ツジツマが合うもんかよ。大要をつかんで、要領だけを云つてゐるんだよ。要所要所は、いつもツジツマの合つたものさ。枝葉末節に至ると、必ずツジツマが合わなくなるのさ。人生は大方枝葉末節で暮しているから、万事ツジツマが合わねえや。こりやア、仕

方がないじゃないか」

「そういうもんかね。しかし、要所要所に於て、君は大そうあたたかいようだが、実はひどく冷めたいのも、枝葉末節のせいかね」

「そうだろう」

「なア、長さんや。思うに、君も水ムシだね。むしろ、君こそ水ムシの張本人だね。生涯人をむしばんで痛くもカユくもねえや。実に酷薄ムザンですよ。最も酷薄なるものは、痛くもカユくもないものだ。それは、君に於て、まさに最も適切だね」

長平はてんでとりあわなかった。それは全く水ムシと同じ呪わしいものに見えたが、水ムシに悩む自分の方を考えると、青木はクサらざるを得なかった。

十一

記代子は京都の土をふむと、新しい気持が生れた。東京では四囲がみな敵地のような気持で、どこにいても気持が荒^{すさ}み、息苦しく、安息もできなかったが、京都へ着くと、自然に気持がおだやかになっていた。誰がむかえてくれたわけでもなく、古い都の街や自然が

彼女によびかけているわけでもなかった。いつも傷口にさわられているようなイライラしたもののから、遠く離れた安心を覚えた。なにかキレイにぬぐわれたような清爽感をも覚えた。

東京にいたって、あの広い東京のことだもの、彼女の傷口にふれる人間にめつたにぶつかるものではない。京都に來たからって、傷口にふれる男にどこでぶつかるか分つたものではないのである。しかし、京都へ來たという実感の中には、そういう理窟を超越した安心感があつた。

「旅をすると氣持が變るといふのは、こんなことを云うのかしら」

自分でも異様な思ひがするのであつた。なぜだか分らない。たつた五百キロの距離。傷口の現場からそれだけ離れたというだけのこと、傷口が治つたわけではないのに。

しかし、このホツとした安らぎ。久しく忘れていた、このなつかしい安らぎ。フシギではあるが、まぎれもない現実であつた。

「こゝが生れ故郷でもないのに」

記代子は笑いたくなるのであつた。

そして、記代子の胸に吹きつけてくるのは、新しい風だ。東京にいた時は、無性に腹が

立ち、身をかきむしって投げ捨てたいような息苦しきで、未来の希望などは人がそれをく
れるといっても欲しくないような気持であつたが、こゝではまるで生れ変わったようだった。

記代子の胸は未来の希望にふくらんでいた。いかにすべきかという未来の設計を考えて
いるわけではない。今までは、未来を思うと暗さと絶望があるだけであつたが、こゝでは
未来が明るいものに感じられた。唐突で新鮮な感動だった。記代子はそれに酔った。

「京都へ戻つてきて、よかつたわ。なんてすばらしいことだろう！　まるで世界の景色が変
つてしまったように見えるわ」

もうマチガイを起きないようにしよう、と記代子は自ら誓った。身にあまることを夢想
したり、行きすぎたりしないように。自分は平凡な女なんだ、とふと考えた。その考えす
ら、素直にシミジミと心を傾けていきいれることができた。すると心は洗われて、過去を
消し去ることができたようなサツパリした気持にもなれた。

過去の姿を今に伝えていることがイノチのようなこの古都へきて、過去を忘れた気持に
なれるなんて、フシギなものだ、と記代子は思った。覇氣のない古い都。乙女心には、灰
色の街のように魅力のない土地であつたが、今はただ生き生きと明るい。新鮮だ。

そして、青木に対しても、その親切に感謝する素直な気持が生れていた。彼女は家路を

走る自動車の中で青木に云った。

「京都はすばらしいわ。もう東京へ行きたいと思わないわ」

ウツトリと甘い夢を見ているようだ。青木は夜氣が一そう身にしむような膚寒い思いがした。肚の中で、こまった子供だと舌打ちした。

「京都は落付いた町ですよ。しかし」

「しかし、なによ」

「京都に甘えてもいけないし、東京を怖れてもいけませんや。そして……」

青木は悲しくなった。自分だって、記代子と同じことじゃないか。五十にもなって。

「そして、私は生れ変わったと思うのよ」

記代子の独語は生き生きとしていた。

十二

翌朝、新たな第一日の目ざめをむかえても、記代子の胸のふくらみはつづいていた。冷静な考え方も、かなりチミツな計算力もとりもどしたが、希望の明るさを消す力にはなら

なかった。むろん、いろいろな不安がないことはない。しかし、それをムリに押し殺す必要はなかった。希望がそれにたちまざっていたからである。

「ホウ。顔色がさえているね」

朝の第一の挨拶に、青木はすかさずこう呼びかけた。青木はそれを喜びもしたが、それがいつまで続くことか、という暗い思いが、同時にひらめいているのであった。

こうして記代子の顔色がにわかには安直に冴えるのを見ると、青木がつくづく感じるのは自分と記代子の距離であった。ひところ二人がママゴトめいた関係をもったこと、記代子がニンシンしたこと。夢のようだ。

「ひどいことをしたもんだなア」

青木はいくらか羞じて、間のわるい気持ちになるのであった。なぜなら、二人の距離の距たりがひどすぎるからだ。今になって、どうしてこんなに目立つのだろう、青木はそれをフシギに思った。

「なア。記代子さん。ぼくの云った通りだろう。京都へ戻って、よかったろうがね」

「そうよ。だけど、どうして今朝になって、そう云うのよ。ゆうべ、京都へ戻って良かったと云ったとき、あなた、なんと云った？」

「そうか。魔が掠めたんだね」

「あら、おもしろい。ゆうべは私に魔がついていたの」

「いいえ。ワタシにさ」

「なんだ。つまんない。いつもじやないの」

「ホウ。ぼくにいつも魔がついていますか」

「そうよ」

「見えますか」

「見えるわ。貧乏神がついているのよ。それも変に見栄坊で気位の高い貧乏神なのよ。自分の貧乏性もよく分るけど、ほかの人の方がもつと貧乏性に見えるらしいのね。で、いたわったり、同情したり、泣いてあげたりするのよ。気位が高くツて、センチなのね。あなたの貧乏神は」

「やれやれ」

青木はガツカリした。当らずといえども遠からずである。

しかし、貧乏性とは、この際、適切な言葉だと青木は思った。これを気取って云えば、知性と云えないこともない。彼の場合は、そうなのである。彼の性格をめぐる理が、そう

なのだから。

それに対して、記代子は貧乏性ではないのかも知れない。そうだとすれば、そのことは彼女の無智をおぎなつて余りある美德なのかも知れない。それが二人の大きな距離の一つかも知れなかった。

「ぼくは貧乏性だとき。このお嬢さんがそう仰有つたのさ。見栄坊でセンチな貧乏神がついてるのだそうですよ」

三人集つた席で青木が云うと、長平は笑いもしないで、

「で、記代子は、どうなんだ？」

「あら、私は……」

「ぼくは、こう思うよ。英雄、帝王のＡクラスにも貧乏性はあるもんだよ。秀吉だの、ヒットラアでも、そう見えないかね。そして、誰だつて、そうじゃないかね。それに気がつくど、みんなそうなのさ。知らない奴が一番幸福なんだ。だから幸福なんてものは願う必要がないし、それにも拘らず、知らない奴はたしかに幸福に相違ないよ」

そして、記代子に云つた。

「お前さんは進んで不幸を愛すな。苦しいことには背中をむけなよ。そうこうするうちに、

なんとか、ならア」

十三

放二が死んだという報らせがきたのは、青木がまだ京都に在るうちだった。せつ子からの電話であつた。長平は葬儀万端彼女に託して、上京を見合せた。青木が京都にいてくれたのは便利であつた。電話では足りない用を彼に託して帰京してもらうことにした。

「彼は若年にして陋巷ろうこうに窮死するのが、むしろ幸福なのさ」

と、青木は放二の死を批評した。彼は元来、放二の生き方を高く評価していなかった。

「彼はアプレゲールの逆説派にすぎんですよ。ロシヤ的ストイズム、特にドストエフスキーの安直な申し子さ。白痴的善意主義の亡魂、悪霊というもんですよ。彼の夢とセンチメンタリズムに安直に合致するような現実が、焼跡の日本にはやたらに有りやがったんだね。それがそもそも、マチガイのもとさ。彼をして安直に英雄的自尊心を満足せしめるに至つたのですよ。それにしても、チンピラ、アンチャンの英雄主義にはまさるけれども、戦後続出のイミテーションの一つには相違ないですよ」

彼の評価は残酷であつた。

「あんまり、口はばつたいことは言えないがね。ぼくとて何かしらのイミテーションかも知れないが、とにかく、長さんや、ぼくは**はし**迸つたですよ。時に停滞しても、時に迸つたです。北川君の一生は迸つたことがないね。激発をひそめた静寂でもなかったね。読書と、読書の裏返しの静かさにすぎないやね。彼にくらべれば、ぼくの生涯はマシですよ。彼は幸福に死んだ。これをぼくはこの上もない道化芝居フアルスと見るが、いかがですか」

青木は放二がキライではなかった。心あたたく、あくまでマジメな青年であつた。珍しい好青年と云えるであろう。

しかし彼の生き方の甘さにはついて行けない。それを許容することは、わが生き方の必死なものを、自らヤユするようなものだ。青木はてんから反撥せずにはいらなかった。

記代子は青木に千円渡して、

「放二さんにお花あげて下さいね」

「ヤ。ありがとう。どんな花？」

「なんでもいいわ。花束なら」

記代子は長平のいないとき、青木にささやいた。

「私、ホツとしたわ」

「なにが、ですか」

「放二さんが死んだから。私のために死んでくれたような気がするのよ」

青木はちよつと呑みこめなくて、いぶかしげに彼女の顔をさぐった。

「え？　なんだって？」

「私はね。放二さんの生きているのが、何よりイヤだったの。願いごとをかなえてくれる魔物がいるなら、私の未来の時間を半分わけてやっても、放二さんを殺してもらいたかったわ」

「なぜさ」

「目の上のタンコブなの。なぜだか分らないけど、タンコブなのよ。まだ生きてる、まだ生きてるって、いつも私を苦しめていたのよ」

「そうかい。それは、おめでとう」

そして、いよいよ別れるときに、青木は記代子にささやいた。

「なア、記代子さん。オレはタンコブじゃアないだろうな？」

「フフ。あなたなんか、空気みたい。ゼロだわ」

「そうだろう。祈り殺されちゃ困るからな」

「カメのように長生きなさい」

「平凡に。幸福に。ね」

そして握手して別れを告げた。

よく晴れた日に

一

数日すぎて、長平はルミ子から速達の手紙をもらった。ひらいてみると、遺書であつた。長平はおどろいて、東京へ電話をかけて問い合してみると、ルミ子はやっぱり自殺していった。放二の葬儀が終えてのち、自分の部屋には一行の遺書も残さず、アツサリ自殺していったのである。

長平は電話口で青木に云った。

「すぐ上京するから、あの子の屍体が行路病人みたいに扱われないように、かけあっておいてもらいたいね」

「え？　上京する？」

「左様。半日後には東京につく」

「オイ。笑わせるな。オレは今、ムシ歯が痛んでいるんだよ。今朝から下痢もしているぜ。何大公殿下の気まぐれか知れないが、いい加減にしてくれろよ。行路病人なみに扱わないようにしろって、そもそもルミ子なるものは大公殿下の妃殿下ですかね」

「北川放二の女房だと云つとけばいいのさ。そのつもりで葬儀の支度をしといてもらいたいね。ナニ、葬儀たつて、誰に来てもらう必要もないが、形だけのことをしてやりたいのさ」

「ハイ。ハイ。かしこまりました。ぼくも多少は縁につながる意味があるから、因果とあきらめて、やりますよ。どうだい。親類一同に焼香をねがったら。親類一同の住所姓名がわからないから、新聞広告はいかがですか。親類代表、大庭長平。ルミ子儀かねて博愛の精神をもって、男子一切同胞の悲願をたて、よくその重責の一端を果し候も、身に限りあ

り……」

長平は上京した。東京と京都は遠いようだが、青木と穂積が警察でゴテついている時間の方が、東海道の距離に負けない長さであった。まだ棺桶の用意もできてやしない。二人は屍体と差しむかいで、ヤケ酒をのみながら、シヨンポリお通夜をしていた。

「ヤ。おいでなすツたな。大公殿下。二人の哀れな葬儀人夫の悲しき様を、とくと見てくれよ。ついでに、自殺した妃殿下の太平楽な寝姿も見てやってくれ。オレたちが足すりへらして三拝九拝、ヘドモドしながら諸方を駈け歩いているのに、妃殿下は寝たツきり身うごきもしねえや。ありがとうとも言わないけど、太平楽がすぎると思うがね」

駈け歩いて疲れきった二人は、酒の酔いがよくまわって、舌のスベリがよかった。秋の夜寒であるのに、それが癖の青木はハンカチで鼻の頭やヒタイをこすっている。いつも真白のハンカチを身につけている筈であるのに、黒々と垢にまみれているのを見ると、葬儀屋の足労というものが甚大だったと知れるのである。

「御足労をかけてすまなかつたが、一刻も早く手をうつてもらわないと、行路病人の墓地へ埋められても気の毒だからさ。第一、それからじゃア、尚さら手間がかかるだろうよ。しかし、御両氏が死人と差しむかいの酒モリも、沈々、ちょッと見かけないオモムキだね。」

酒が、うまかう」

「まずくはないがね。ところで、君が電話で云ってきたときは、この子の自殺が発見されて二三時間直後のことだそうだよ。遺書を電報で送ったわけじゃあるまいな」

「速達だが」

長平はポケットからルミ子の遺書を取りだして示した。

「明日の朝にでも、読みたまえ。今夜は、ねむくなるまで、酒をのもうや」

「こんなものが、シラフで読めるかい」

青木は無造作に遺書をひらいて、

「しかし、心ききたることをするよ。遺書を速達で届けるなんてね。屍体にだかれた遺書なんてのは、まったく下の下というもんだよ」

二

ルミ子の遺書は次のようであつた。

ゴキゲンいかがですか。

先日お別れするとき、そのうちに一度だけお手紙しますとお約束しましたが、覚えていて下さいますでしょうか。これが約束のお手紙です。

昨日、梶さんのお宅で兄さんの告別式がありましたが、先生は上京なさらないそうですね。青木さんから、おききました。私も告別式には行きませんでした。

野良猫のようにこの町にうろつくようになってからの短い月日は、私の一生にこの上もなく楽しい毎日でした。人のさげすむパンパンという境遇も、自分でみじめとも悲しいとも思いませんでした。むしろパンパンに安住していたのです。どこの奥さんがその家庭に安住するよりも、私はパンパンに安住していたと申せます。心にかかる小さな雲すらも、まずなかったと言いきれます。

子供の私は、不平家で、ねたみ強くて、いつも人にたてついていましたが、この町へ辿りついて野良猫生活をはじめてからは、人が変ったように素直でした。どんな小さな不平も、忘れてしまったのです。

先生はわかっていらっしやると思います。私の心には、いつも兄さんがいて下さるので、私はどんな不平も忘れることができたのでした。好きになれないお客さんと枕を並べてね

て目をさました朝でも、兄さんがいて下さると思うだけで、明るいキゲンになることができました。いいえ、かえって、キラйнаお客さんほど大切にしてあげようと思いました。きめたお金を朝になつて半分にねぎられても、我慢することができましたし、ぶんぐられて、貰ったお金を取り戻されても、苦笑しただけで忘れることができました。くる朝も、くる日も、微笑して迎えましようと思っていました。

こう申し上げたとて、私は兄さんを恋していたわけではありません。兄さんを恋すなんてセンエツなこと、どうしてできませんでした。ヤエちゃんなどが、私がそれでもあるように皮肉なことを言うとき、兄さんに申訳なく思う気持で、そのときだけはヤエちゃんを殺したくなることはありません。私のようなものが兄さんを恋することは、兄さんを傷つけることです。兄さんを侮辱することです。私はどんな大罪人とよばれてもかまいませんが、兄さんを傷つけた罪に服することは我慢ができません。

兄さんは、私の心にもる灯でした。私の航路をてらして下さる燈台でした。兄さんが同じ屋根の下にいて下さると思うと、兄さんのお顔を見なくても、なんの心配もなかったのです。どんなときでも、一瞬の休みもなく、私のそばについていて下さることを信じることができました。いいえ、信じる必要などはありません。いつもいて下さいました。

朝目をさますと、きつと私の前には、兄さんがいて下さるのです。私は兄さんにお早うを言います。私の心は晴れ晴れとします。私は明るく、働かなければなりません。パンパンという職業がどんな卑しいものであるかということも、考える必要はありません。兄さんがついていて、見まもっていて下さるのですもの、なんの不平がありません。私は、毎日々々が、たのしかったのです。どんなに苦しいとき悲しいときでも、自分が幸福な人間だということを疑ったことはありませんでした。

三

先日ヤエちゃんにお金をとられたとき、預金の方は手配をすれば人手にひきだされずにすむはずでした。いくらでもないから、私はそう云ってうツちやらかしておきましたが、私はむしろ人に盗られてホツとした気持もあつたのです。預金は卅六万円ほどありました。野良猫が預金していたことをおかしいとお思になるでしょう。私もはずかしかったのです。

野良猫にも、夢があつたのです。ですが、どんな夢だか、おききにならないで下さい。

自分でも知らないことなんです。夢というよりも、もつと実際的な不安だったかも知れませんが。いつまでもこうしていられないということ、いつか兄さんにお別れる時がくるだろうということ、そのときを考えてのことでしたが、兄さんとお別れたあとでも、何やかやして生きるつもりは夢はあったのが今はフシギでございます。

私が何より怖れていたことは、兄さんがおなくなりになる前に、私の今後の生き方について指図なさりはしないかということでした。めったになかったことですが、まれに兄さんが私の名をおよびになると、その怖しさで、私の胸はドキドキするのです。私はいつも何食わぬ顔でニコニコと兄さんのお側についていましたが、ただその一つの怖れのためにいつも胸をいためていたのです。ですが兄さんは、やっぱり何のお指図もなさらずに、ねむるよりも安らかに、息をおひきとりでした。かすかに笑いながら——ウソではありません。きつと生きている私たちのことがおかしかったのでしょうか。いつも、そうでしたもの。

私の部屋に先生がお泊りのころから、兄さんが死んだら自殺しようと覚悟していました。自殺のフミキりに兄さんの死を使うことを咎めないで下さい。死ぬってこと、私にはなんでもないことなんです。生きていることがなんでもなかったように。たゞ私にとっては、

兄さんがいて下さること、いつもほほえんで私の生活を見守っていて下さることの喜びが全部でした。

私はこの世になんの不平もありますが、兄さんが生きていて下さらなければ、ムリに生きてることはないような気持なのです。兄さんが死んだから、私も死にたいのです。センエツかも知れませんが、兄さんと同じことがしたいだけです。兄さんが地の下へおはいりなら、私も地の下へ入れてもらいたいです。けつして恋というものではありません。ただ兄さんのお側かくへ行かれるということ、これからもしよに見守っていただけることを信じていただけます。そして、生れてきたことを胸いっぱい感謝して、一人のパンパンが死んだことを信じて下さい。

お叱りをうけると困るんですけど、先生におねがいがあるのです。私、お線香一本たてていただきたいとも申しません。ですが、兄さんのお墓にいくらかでも近いところへ、埋めていただきたいのです。埋めていただくだけで結構です。お墓も葬式も欲しいと思いません。慾を云わせていただければ、よく晴れた日に私が背のびすると兄さんのお墓が見えるぐらいのところまで近づかせて下さいませ。怒らないで下さい。この希いをききとどけていただけたら、どんなにうれしいでしょうか。なぜって、私、これからお薬をのんで死ぬ

までの短い時間、よく晴れた日に背のびして兄さんのお墓を見ていることを目に描きながら死にたいのですもの。おねがいです。

先生の御多幸をいのります。

四

青木はルミ子の遺書を読み終えて、長平に返した。

「可憐だよ」

彼はつぶやいた。しかし、すぐ苦笑して、

「あなた、これを読んで、とる物もとりあえず、上京したのかねえ。長平さんともあろう水ムシがさ。水ムシは、時に、妙なことで慌てるのかねえ。人間はたかが白骨ではないですか。なにも、こんなバカなことを云いたくはないが、相手が長さんじゃア、小人はケツをまくりたくなるんだねえ。長さんや。ぼくら小人にとっては、人間はなかなかもって白骨じゃありませんや。だが、長さんほどの水ムシともなれば、片言隻句、人生すべてこれ白骨ではありませんか。ねえ。長さん。あなた、なんのために、なぜ、上京したのさ。」

え？ よく晴れた日に、か。やれやれ。雨の降る日、風の吹く日は、どうしてようてんだろうなア、この幽霊は」

その幽霊の本体はすぐそこに横たわっていた。特に正装とも思われないが、見苦しくない和服を身につけ、お化粧もし、今は解かれているが、紐で二ヶ所膝をむすんでいたそうである。流行の毒薬や催眠薬ではなくて、かなり特殊な薬を用いたらしいということであった。死に方について用意をきわめるだけの落付いた心構えがあつたのである。ねているような顔だつた。ふだんと変りなく、虚心で、可愛く見えた。

湯呑みに灰を入れ線香をたてた人があつたらしい。

「君たちかい。線香を供えてやつたのは」

「そうはコマメにいかないねえ。センチな気分^{えんじう}にひたるヒマがなかったほど、労働が苛烈をきわめたんだなア。二三、^{えんじう}回向の方々があつたらしいや」

青木は腕時計をのぞいて、

「もう十二時すぎてやがら。帰る電車がなくなつたわけではないが、ひとつお通夜をしてやるか。完全なるお通夜をね。オールナイトさ。二千元、包まなきやアいけねえや」

しかし青木はフツと溜息でももらしそうな、ベソをかきそうに沈みこんだ。

「なア。長さんや。彼女はたしかに、可憐ですよ。だけどなア。オレは同情できねえや。オイ、長さんや。これ、本当かい？ 彼女は、なぜ、死んだのさ。彼女の遺書たるや、何物ですか。ただ、死にやア、まだ、わかるよ。兄さんが死んだから、生きていてもつまらないツて？ しかし、毎日々々が幸福で、たのしく、不平を忘れていられたとネ。甘えてやがら。元々、自殺ぐらい甘ツたるいことはないがさ。あたりまえだ。一番人生の甘えん坊が、自殺するのさ。だから、彼女が妙テコレンな夢をえがいて、それに甘えて死ぬことはまた可なりかも知れないが、甘え方が気に食わないんだよ。ねえ、長さん。パンパンが、精神的な愛情なんて、笑わせやがるよ。それはね、パンパンが精神的な何かにするのとは当然あつて然るべきかも知れないが、こと恋愛的な雰囲気について、精神的とは笑わせらアね。人をバカにしてるじゃないか。ぼくはパンパンを軽蔑してやしませんよ。むしろ、尊敬してるんだ。パンパンたる者は、精神的など、いう怪しげなものを、ハッキリ土足にかけてくれなきやア、こまるじゃないか。彼女はぼくを、泣き男だと云いましたよ。それでこそパンパンなんだ。パンパンでなくちやア至り得ざる境地によつて、泣き男を土足にかけてくれなくちやア、ダメじゃないか。甘ツチヨイ死に方なんぞしやがって、ざまアねえや」

青木は押入からルミ子のフトンをひっぱりだして、くるまって、ねてしまった。

五

郊外の墓地の一隅に二人を一しよに埋めることになった。せつ子の家へ放二の遺骨をとりに行くと、せつ子は笑って、

「なんだか、変ね。御当人たち、生きてるときには、死んでこうなるなんてこと、考えたことがないのにねえ」

「生きてるうちは、人間みんなデタラメさ。死んでも、デタラメでも仕方がないよ。なんとなく恰好がつけば、花なのさ」

長平は無責任なことを放言して、二ツの骨壺をぶらさげた。青木はニヤリとして、

「オレは持つてやらないぜ。長さんの心事には甚しく同情を感じていないからさ。一人で重い目をするがいいよ」

「私も同感できないのよ。お供しませんから、ごめんなさい」

せつ子は門前まで見送って戻ってしまった。

「悪縁だなア」

青木はつぶやいた。

「君とこうして歩いていると、しみじみ感じるのは、悪縁ということだね。まったく、人生は悪縁だけさ。だから意地ずくで生きのびてやらアね。死んじまうと負けだというのが実にハッキリしていやがるなア。今にこうして君の骨を埋葬してやる日のことを考えると、いくらか生きがいを感じるな」

青木はうまそうにパイプをくゆらした。

しかし、いよいよ墓地に至り、埋葬の段になると、青木は甚しく労力をおしまず、又、親切であつた。長平は何もすることがなかった。青木が一人で汗水たらしているからである。かつ、遺骨にたいする取扱いのいたわりは丁重をきわめ、ミジンも手をぬくような粗略なフルマイがなかった。その人相も一途に真剣である。埋葬し終えてホツと一息、それから、気になるところをコマメに手を加えて、外観をととのえた。

「実に親切テイネイなもんだねえ」

「これが武士道さ」

青木は皮肉な笑いをとりもどした。

「よく晴れた日じゃないか。やつぱり、ちょっと離れたところへ埋めてやって、背延びをさせた方がよかつたらしいや。しよっちゆう鼻をつきあわしてちやア、やりきれませんやね。長さんも、不粹な人さ。過ぎたるは及ばずと云うじゃないか」

青木は口の中でクチャ／＼と経文か何かせつかちに呟いて、ペコンと頭を下げた。そして二人の埋葬は終った。

「どう？ 水ムシの御感想は？ 意はみたされましたか」

青木は皮肉な目をクルクルさせた。長平は答えなかった。

「フン。勝手に黙ってるがいいや。ぼくの感想は、たった一つあるだけですやね。え。長さんや。たった一ツ。ね。オレは長さんを憎む、憎む、憎む。それだけだよ」

青木はベツとツバをはいた。

「骨の髄から、憎んでるんだ。恨み、骨髄に徹す、かね。だんだん、それが分ってくるよ。生きるにしたがつて、それが分ってくるだけなのさ。明日はもつと憎むんだ。そして、来年は、その分だけ憎さがハッキリ増してるのさ。なんて、まア、なつかしい人だろう。イヤハヤ、実に、おなつかしい」

青木は墓地をでるとたんに、ニツコリ立ち止って握手をもとめ、強く長平の手を握りし

めた。

「殺していいか、抱きついていいか、分りやしねえや。オレは、長さんが、心から、なつかしいよ。ともかく、生きているからね」

青木の目にこもった微笑は、素直で、善良であつた。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 09」筑摩書房

1998（平成10）年10月20日初版第1刷発行

底本の親本：「読売新聞 第二六三六七号〜第二六五二〇号」

1950（昭和25）年5月19日〜10月18日

初出：「読売新聞 第二六三六七号〜第二六五二〇号」

1950（昭和25）年5月19日〜10月18日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2006年3月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

街はふるさと

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>